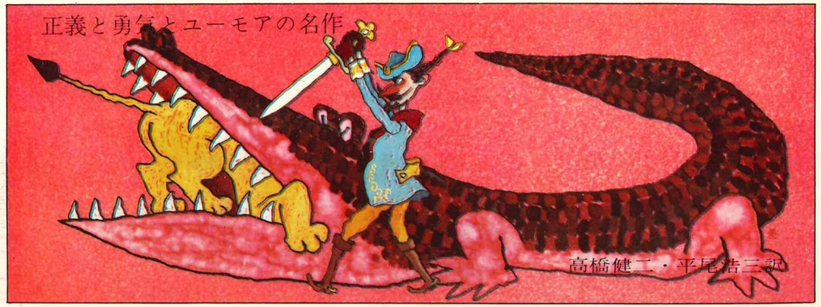
飛ぶ教室　エーミールと軽わざ師ほか



●「飛ぶ教室」「エーミールと軽わざ師」の作者

「飛ぶ教室」と「エーミールと軽わざ師」の作者は、エーリヒ・ケストナーです。ケストナーは、「エーミールと少年探偵」や「ふたりのロッテ」などが映画になりましたので、世界てきに有名です。一八九九年、ドレスデンに生まれ、大戦後は、南ドイツのミュンヘンに住んでいます。はじめは学校の先生になるつもりでしたが、新聞や雑誌の記者になりました。ケストナーにはたくさんの少年少女小説があります。どの小説も、人生とは、正義とは、ほんとうの喜び、かなしみとは、どういうものか、ふかくつっこんでえがきました。ケストナーは、じぶんの少年時代をふりかえり、みなさんに、大きくなっても、「少年時代」を忘れないようにとかたっています。

●空想男爵の冒険の作者

ビュルガーは一七四八年に生まれました。この物語はミュンヒハウゼン男爵の話に新しい話をくわえ、一七八六年に出版されたものです。

つぎに出る本

赤毛のアン／若草物語

いままでに出た本

小公子・小公女／宝島・ロビンソン・クルーソー
ガリバー旅行記　ふしぎの国のアリス他

アンデルセン童話集

●おたより　お友だちから

きょう、おかあさんから「アンデルセン童話集」を買っていただきました。絵本や雑誌でよんだこともありましたが、こんど、りっぱな本で、ゆっくりと味わいながらよむつもりです。本が大きく、ちょっとたいへんですが、美しい色ずりの絵をみていると、童話の国にひき入れられます。

（東京　田辺愛子様）

●へんしゅう部から

夏休みもおわって、げんきいっぱい、学校へ通学しているみなさんのたくましい顔をうかべて、いま、おたよりを書いています。しかし、なかには、あそびつかれて、勉強が手につかない人はいませんか。べんきょう、しゅくだいで、青白い人はいませんか。読書の秋、ともかく新学期、読書の秋です。ためになる世界の名作を、したしいお友だちの中に入れて、かわいがってください。読書感想画コンクールのしめきりも今月です。おとなのマネでない、すばらしい絵をお待ちしています。

●ケストナーの思い出

植田敏郎

ケストナーとミュンヘンではじめて会ったのは六年前です。電話でうちあわせた宮廷公園の入口の「アーナスト」というカフェで待っていると、ドイツ人にしてはあまり背が高くなく、眉毛が濃くて長いので人目をひくケストナーが入ってきました。ペンクラブの関係で、ドイツ人にも日本人にも共通の友人がいるので、はなしはスムーズにすすみました。

ケストナーは、日本が外国の児童文学を広くまたはやく紹介することに感心して、「日本人は勤勉です」といっていました。

戦争中ケストナーは、自由主義者だということで、本も出版できず、ペンをとることさえ禁じられていました。また、思想や、人種などの理由で、何人もの友だちが国外へ逃げなければなりませんでした。これにくらべると、戦争中の日本はまだよかったともいっていました。

ケストナーはまた、自分の著作が国内ばかりか、各国語に翻訳されて読まれているのは幸福だ、自分ほど幸福な作家は数えるほどしかいない、他の作家は相当生活に困っている、としみじみ語っていました。

日本へ一度来られてはどうですかといいますと、当時ペンクラブの会長であり、芸術院のメンバーでもあり、その他いくつもの出版社の顧問などをしていましたので、とても忙しく、長い旅行などできない、ということでした。ケストナーの話は作品でもそうですが、とてもユーモアにあふれているので、ふたりの話はまったくの談笑でした。

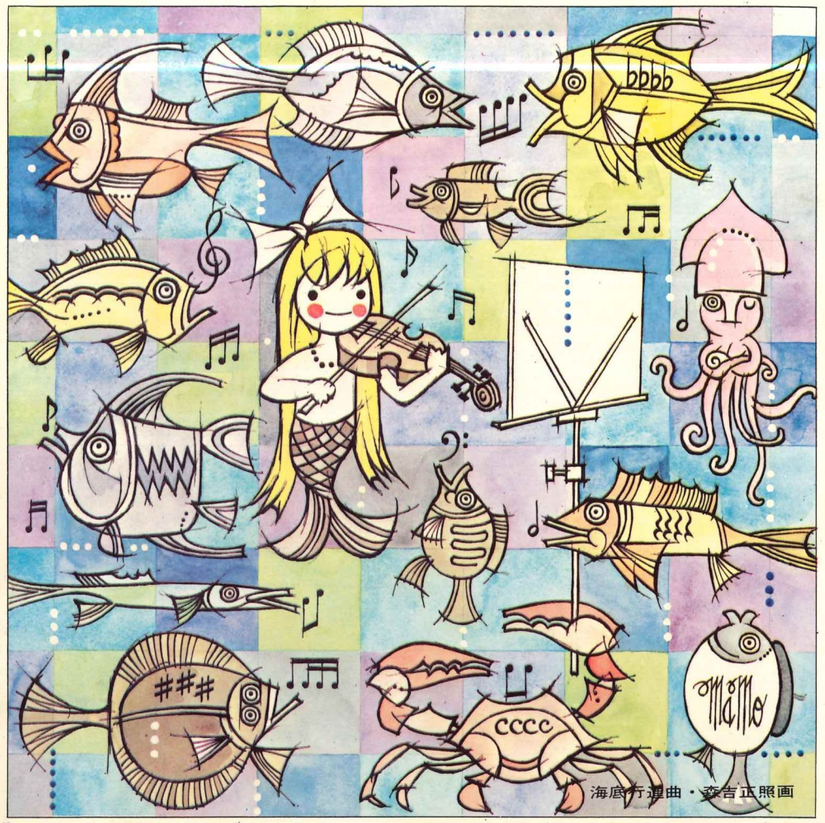
もう一度は、ドイツペンクラブの本部のあるダルムシュタットで会いました。ダルムシュタットの市長が町はずれのむかしの城にまねいてくれたときに、いっしょにいったのです。ケストナーはわたしのことを、みんなに、「自分の作品を日本語に訳す人」として紹介してくれました。ここでもケストナーは　やっぱり、ユーモアのある話ばかりしていました。

海の向こうの少年少女〈ドイツ〉

上川　洋

ドイツの子どもたちは、りっぱな社会人となるため、二、三歳の頃からきびしくしつけられます。家庭では年令におうじて靴みがきやお皿洗いやおつかいなど、家事のおてつだいをします。また公園、道路、乗物の中など、おおやけの場所における作法を、両親や幼稚園・学校の先生から教えられ、それを守らない子どもがいたら、大人はそれがよその子どもでも注意します。このようにして、家庭、学校、社会全体が、自分たちの宝である子どもたちを、よい社会人にふさわしいように教育しています。

ドイツの子どもたちには、楽しみもたくさんあります。カーニバル、復活祭、お誕生パーティー、夏休みの家族いっしょの旅行など。しかしなによりもクリスマスの楽しみがいちばんでしょう。十一月になると、ヒイラギの葉で作った輪飾りに四本ろうそくを立て、日曜ごとに一本ずつ火をつけ、クリスマスには四本ともともします。子どもたちの部屋には、二十四個の小さな窓のついた美しいカレンダーが掛けられ、朝、目が覚めると、その小さい窓を一つあけ、今朝は窓の中にどんな絵があるかしら？　お星様かな、それともクリスマスクッキーかな？　とのぞいて見るのも、二十四日の朝までの楽しい日課の一つです。十二月六日はニコラウスのおじいさんが〝天国の本〟と杖を持って子どもたちの家庭をおとずれます。天国の本には、ニコラウスさんが、こっそり子どものお母さんから聞いておいた、子どもたちの一年間の良い行ない、悪い行ないが記録されていて、おじいさんは、良い子はほめてやり、悪かった子は杖でおしりをたたきます。でも、どの子どもにもお菓子と果物をおじいさんからもらい、クリスマスにはどんなプレゼントがほしいとたのむと、ニコラウスはそれを天国の本に書きこんで帰っていくのです。小さい子どもは、ニコラウスが本当に天国から来たと思い、大きい子どもは、あれは誰かがふん装していると思いながらも、やはりこの日を楽しみにしているのです。そして待望のクリスマスの日は、家族全員静かに家の中でお祝いをし、プレゼントの交換をするのです。



読書指導

滑川道夫

五人の少年と先生の物語です。孤児で文才のあるヨーニー、貧しい家に育ったマルチンは、絵がうまく、いつも首席の成績、じぶんを臆病ものと思いこんでいる貴族出身のウリー、力が強く勇気ある行動をするマチアス、とっぴな考えをうちだして変わりものといわれるゼバスチアン、みんなそれぞれ個性のはっきりしているなかまが活躍します。この五人が中心になってクリスマスに、ヨーニー作ならびに演出の劇「飛ぶ教室」を上演することになります。その練習中に実業学校の生徒との事件が起って、この物語は、愉快な場面を連続させてもりあがっていきます。おもしろくなって作品の世界にひきいれられていくのに気がつかないほどです。

思わずくすくす笑ってしまうようないくつかの場面を縫って、少年たちの苦しみやなやみやよろこびを、じぶんのことのように感じて読みすすむでしょう。そのなかであなたは、正しく生きるための考えを深くすることができるでしょう。「エーミールと軽わざ師」でもそうです。ケストナーの作品に興味をもったら、他の作品「エーミールと少年探偵」などもぜひ読んでみてください。

「空想男爵の冒険」は「ミュンヒハウゼン男爵の水陸におけるおどろくべき旅行と出征と愉快な冒険」――男爵が酒もりの席で友だちなかまにいつも語ったまま――という長い書名からも想像されるようなそこぬけに愉快なほら物語です。ほら吹きは人にきらわれるのがつねですが、この作品には悪意のまったくないむじゃ気なほがらかな笑いがあるため、人びとにもてはやされるのです。

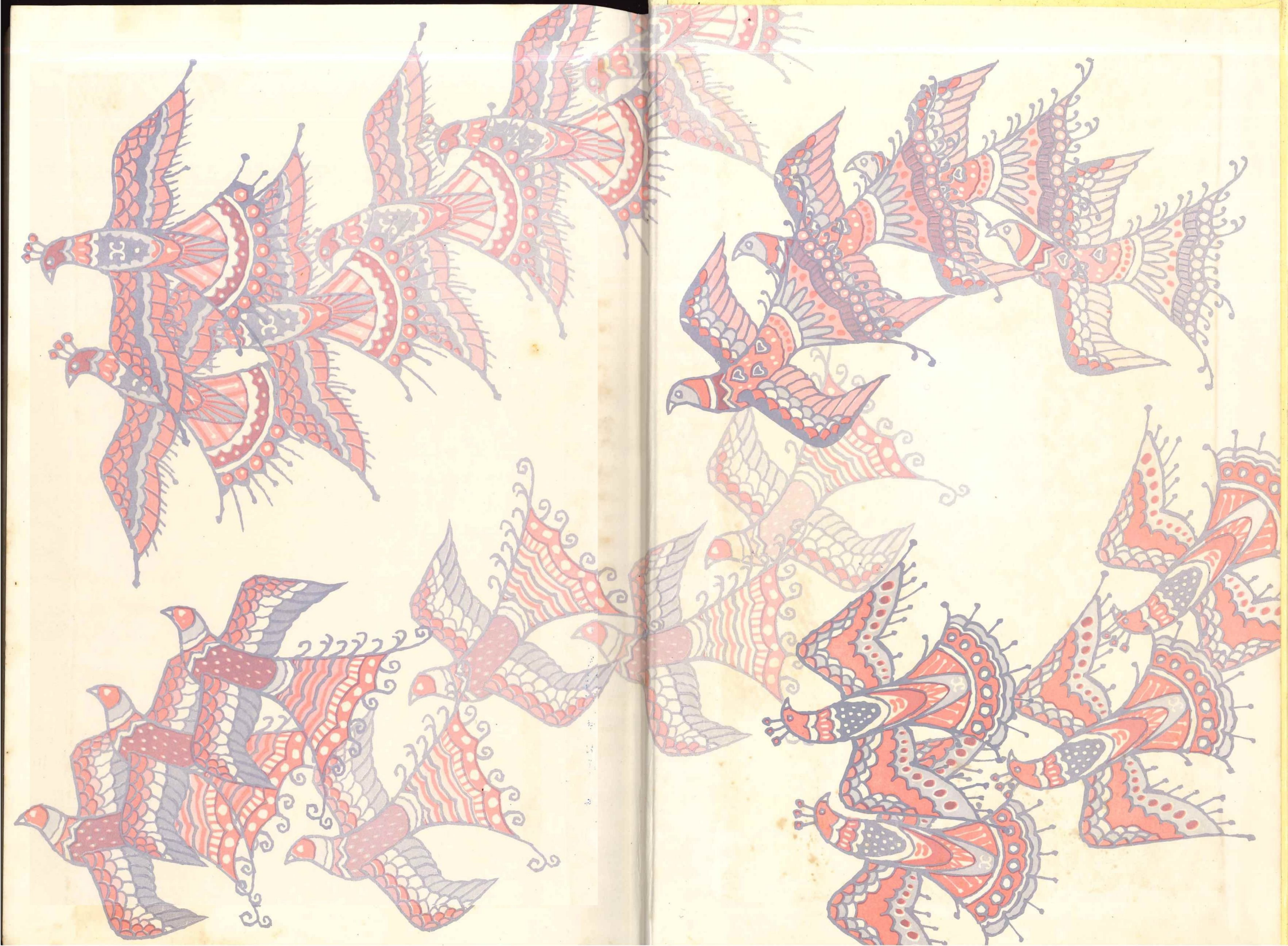
ケストナーの作品はふかく生活を考えさせるおもしろさをふくんでいますが、これは奇抜な笑いを誘う空想のおもしろさです。この性質のちがう興味をよく読みとって、くらべてみると、読書のおもしろさのさまざまがわかるでしょう。読書のおもしろさについて考えてみてください。

少年少女
世界の文学

飛ぶ教室
エーミールと軽わざ師
空想男爵の冒険

20

河出書房



少年少女世界の文学

20

飛ぶ教室
エーミールと軽わざ師
空想男爵の冒険

E・ケストナー
高橋健二訳

G・ビュルガー
平尾浩三訳

河出書房

少年少女世界の文学 20

もくじ

責任編集

福原麟太郎
川端康成
阿部知二
桑原武夫
犬養道子

装幀
沢田弘

飛ぶ教室

E・ケストナー
高橋健二訳

第一のまえがき　ケストナー夫人とそのむすこの議論――ツークシュピッツェ山をのぞむ――ゴットフリートという名まえのチョウチョ――黒と白のぶちのネコ――きえない雪――なごやかなしごとじまいと、小牛が雄牛になるかもしれないということ……11
第二のまえがき　緑色の鉛筆をなくす――子どものなみだの大きさについて――小さいヨナタン・トロッツの大洋渡航――おじいさんとおばあさんが、かれをむかえにいかなかったわけ――人間の不死身をほめたたえ、勇気とかしこさとが一致しなければならないとおしえる……15
第一章　四階の窓わたり――ダンスをならう数人の生徒――大いに憤慨する首席生徒――大きな白いつけひげ――「飛ぶ教室」の冒険に関する報告――詩のある舞台げいこ、おもわぬ中断……21
第二章　禁煙先生に関する詳細――三つの正書法のあやまり――不安にたいするウリーの不安――客車のなかの作戦会議――フリドリンをていさつにだす――クロイツカムがおそわれた原因と五人のマラソン……33
第三章　フリドリンの報告――ヨーロッパきっての愉快な秀才に関する対話――エーガーラント夫人のあらたな腹だち――徒歩の軍使――うけいれられない条件――役にたつ作戦計画と、もっと役にたつ禁煙先生の提案……40
第四章　技倒におわる一騎うち――実業学校生の違約――エーガーラントの精神的な苦しみ――マルチンのなぞの作戦計画――地下室でいくつもはりとばす――ひとかたまりの灰――勝ってもよいというゆるしと、エーガーラントの退陣……47
第五章　美少年テオドルとでくわす――寄宿舎の規則に関する討論――思いがけぬほめことば――ふさわしい罰――舎監の長い物語――少年たちがあとでいったこと……61
第六章　六頭だての馬車の絵――古いしゃれを大いによろこぶ――ずぶぬれにおどろく――幽霊の行列――かゆくなる粉をまく動物――窓ぶちのヨーニーと未来の計画……71
第七章　クロイツカム教授を語る――ぞっとするできごと――少年たちが五ど書かされる文章――幕あいにふしぎな予告――ベク先生との散歩――菜園内の再会と、かきねのそばのあく手……79
第八章　たくさんのお菓子――「飛ぶ教室」のつぎのけいこ――ウリーがかさをもってきた理由――体操場と校舎内のこうふん――ベク先生のなぐさめと第三ピアノ室……90
第九章　不安についてのゼバスチアンの原則的な説明――役わりの変更――病室をそっとたずねる――「されこうべ」料理店とあたたかい夕食――郵便集配人にであう――マルチンの家への手紙……99
第十章　休暇まえのさいごの授業日――キルヒベルクの散歩といろいろ

なめぐりあい——マチアスに、もう一まいの板チョコ——体育館のクリスマス祭り——思いがけぬ見物人——贈りものにたいするあいさつ——マルチンのベッドのそばのいっしゅんかん …… 110

第十一章 陽気な停車場——生徒のいない学校——九柱戯場で発見——そっとかきねをこす先生——ウリーの見舞い——両親をえらぶことはできないというヨーニーの主張——二どおなじいいのがれ …… 120

第十二章 たくさんの美しいクリスマス・ツリーと小さい松——一個二キロもあるネーブル——たくさんのなみだ——くりかえし鳴るベル——泣きわらい——新しい色鉛筆とそのつかいぞめ——ヘルムスドルフの夜間ポストと流れ星 …… 131

あとがき バスと市電——クジャクチョウ・ゴットフリートと、エドアルトという名の小牛との、悲しい思い出——ヨーニー・トロッツと船長にあう——正義先生と禁煙先生にくれぐれもよろしく——本のおわり …… 138

エーミールと軽わざ師 …… E・ケストナー 高橋健二訳 …… 143

十まいの絵がまず説明する …… 145

第一章 イェシュケ警部さんのたのみごと …… 157

第二章 ベルリンとの手紙の往復 …… 163

第三章 エーミールの出発 …… 172

第四章 海べの別荘 …… 179

第五章 バルト海でのめぐりあい …… 187

第六章 グスタフと物理学 …… 199

第七章 コールスピュッテルの寄席 …… 207

第八章 第三のふたごの出現 …… 217

第九章 少年探偵たち …… 226

第十章 海と陸の冒険 …… 236

第十一章 旅券検査 …… 246

第十二章 船長かえる …… 258

第十三章 応急処置 …… 266

第十四章 まじめな話 …… 274

第十五章 上映のおわり …… 283

空想男爵の冒険 …… G・ビュルガー 平尾浩三訳 …… 295

● 解説

ケストナーと少年たち …… 生野幸吉 …… 354

飛ぶ教室

E・ケストナー
高橋健二訳

さし絵

飛ぶ教室
風間　完

エーミールと軽わざ師
難波淳郎

空想男爵の冒険
赤坂三好

●まえがき

『飛ぶ教室』というのは、きみょうな題ですが、その名のとおり、飛行機で実地見学をしながら勉強するという、しゃれた思いつきなのです。もっとも、それは、中学生がクリスマスの余興に考えた芝居なのです。でも、飛ぶ教室がほんとのことになったら、ずいぶんすばらしいでしょう。ケストナーは、三十年もまえに、そういうすばらしいことを思いついたのです。

これはクリスマスの芝居の話になっていますが、いつのできごとであってもよい話です。苦しいけれど生きがいのある人生の話だからです。

この話には作者ケストナー自身の身のうえが織りこまれています。寄宿舎にいた少年が、病気のおかあさんを看病するため、こっそりにげだしたという話は、ケストナー自身にあったことです。しかし、これは、みなさんのだれにでも自分のことのようにあてはまる話です。悲しみにたえとおして、正しく強くあたたかく生きようとする少年たちの話だからです。

この話には、それぞれなやみと悲しみをもった少年たちがでてきますが、友だちと先生たちが、いたわり助けあって、なみだのうちにふかいよろこびを味わいます。先生の愛情と生徒の信頼、友情は、なんと美しいものでしょう。

作者は、子どもたちが勇気と愛と知恵をもって力強く生きていくように、かぎりない声援をみなさんにおくっております。

高橋健二

第一のまえがき

ケストナー夫人とそのむすこの議論——ツークシュピッツェ山をのぞむ——ゴットフリートという名まえのチョウチョ——黒と白のぶちのネコ——きえない雪——なごやかなしごとじまいと、小牛が雄牛になるかもしれないということ

こんどは、本式のクリスマスの物語です。ほんとうは、わたしはこれをもう二年まえに、いや、去年は、ぜひとも書くつもりでした。ところが、そうしようとしますと、いつも、なにかじゃまがおこりました。とうとうわたしの母は、このあいだ、「おまえ、今年こそあれを書かなければ、クリスマスになにもあげませんよ！」といいました。

それで、すっかり心がきまりました。わたしは大いそぎで、トランクを荷づくりしました。ラケットと水泳着と緑色の鉛筆と、おそろしくたくさんの原稿紙をいれました。そして、汗をながしながら、あわただしく停車場のなかにはいると、わたしは、「さて、どこへいったものか。」と首をひねりました。いちばん暑いま夏のさかりに、クリスマスの物語を書くのは、どんなにたいへんなことか、わかりきっていたか

らです。「身をきるように寒く、雪がどんどんふっていました。アイゼンマイヤー先生は、窓から外を見ると、思わずぶるっとしました。両方の耳たぶは……」などと、腰をおちつけて、うまく書くことはできません——どんなに書こうと思っても、八月にはそんなことはできません。おふろにはいって、シチュー肉のようにあぶられる思いで、日射病になるにちがいないなどと考えているのでは、ね！　それとも？

そこへいくと女の人は、じっさい家です。わたしの母はうまいことを思いつきました。母はきっぷ売り場へいって、係の人に親しそうにうなずいて、たずねました。

「失礼でございますが、どちらへいきましたら、八月にも雪があるでしょうか。」

「北極なら。」と、係の人はすぐいおうとしました。けれども、わたしの母だということに気がつくと、失礼な文句をおさえて、ていねいにいいました。

「ツークシュピッツェ山なら、ケストナーおくさま。」

そこでわたしは、さっそく上バイエルンいきのきっぷを買わなければなりませんでした。

母は、「クリスマスの物語を書かないでかえってきてはいけませんよ。」といいそえました。「あんまり暑かったら、ツークシュピッツェ山の美しいつめたい雪を見さえすればいいよ！　わかったかい？」

ちょうどそのとき、汽車がでました。

「下着類をおくりかえすのをわすれないようにね！」と、母はうしろからさけびました。

わたしは母をすこしおこらしてやろうと思って、「花に水をやって！」とどなりました。それから、ハンケチをふりあっているうちに、見えなくなりました。

さて、わたしは二週間というもの、ツークシュピッツェ山のふもとの、こい緑色の大きな湖のほとりで、暮らしています。およいだり、体操をしたり、テニスをしたり、あるいはカーリンヘンにボートをこいでもらったりするときのほかは、広い草原のまんなかの小さい木のベンチに腰かけています。前には、たえずぐらぐらする机がおいてあります。その上でわたしは、クリスマスの物語を書いているのです。

わたしのまわりには、色とりどりの花が咲いています。風がふくと、スズカヤがうやうやしくおじぎをします。チョウチョは、ぶらぶらと飛びまわっています。そのなかの一ぴき、大きなクジャクチョウが、ときどきわたしをたずねてくれます。わたしはゴットフリートという名まえをつけてやり、なかよしになっています。ひらひらと飛んできては、親しそうにわたしの原稿紙の上に羽をやすめない日は一日もないくらいです。

すると、「いかがです、ゴットフリートさん？」と、わたしはたずねます。「あいかわらず元気ですか？」

チョウチョは飛びたって、返事のかわりに、そっと羽をたれてから、満足そうに飛びさっていきます。

むこうの、暗いモミの森のはずれに、材木がたくさんつんであります。その上に、黒と白のぶちのネコがうずくまって、わたしのほうをじっと見つめています。このネコは、魔法をかけられていて、しゃべろうと思えば、しゃべることができるのではないかと思われるくらいです。ただ、しゃべろうとしないだけなのです。わたしがタバコに火をつけるごとに、ネコは背なかをまるくします。

午後は、あまり暑いので、ネコはにげてしまいます。わたしだって暑いのですが、わたしはがんばっています。しかし、暑さのため、にえくりかえる思いで、うずくまりながら、たとえば雪合戦の光景を書くなんて、まったくたいへんなことです。

そういうとき、わたしは木のベンチにぐっともたれて、ツークシュピッツェ山を見あげます。その大きな岩のわれめには、きえることのない、つめたい雪が、きらきらかがやいています。——それを見ると、さきが書けるのです。もちろん、日によっては、湖のすみから雲がわいてきて、空を横ぎります。そして、ツークシュピッツェ山のほうにただよっていき、山の前に高くもりあがって、そのすがたを見えなくしてしまうことも、めずらしくありません。

もちろん、そうなると、雪合戦とか、そのほか冬のできごとと思われる場面をえがくのは、もうおしまいです。だが、それでもさしつかえありません。そういう日には、室内の場面を書くだけです。わたしたちは、なんとかきりぬけるようにしなければなりません！

夕がたには、エドアルトが、ちゃんとおむかえにきてくれるのです。エドアルトは、小さな角のある、きれいな、あめ色の小牛です。鈴をさげているので、遠くから聞こえ、エドアルトがきたなとわかるのです。はじめは、はるか遠くのほうから音がします。小牛は、高い山の草地で草を食べているからです。それから、音がだんだん近づいてきて、ついにエドアルトが見えてくるのです。高いこい緑のモミの木のあいだから、あらわれるのです。まるでとくべつにわたしのため

につんできてくれでもしたように、数本のヒナギクをくわえ、草原をとことこと、ベンチまで歩いてくるのです。

「やあエドアルト、もうしごとはおしまいかい？」と、わたしはたずねます。かれは、大きな目でわたしを見つめて、うなずきます。すると、鈴が鳴ります。ここには、みごとなタンポポとアネモネがあるので、かれはなおしばらくのあいだ、食べています。わたしもあと何行か書きつづけます。空高くワシがまい、輪をえがきながら、だんだん、上へ上へとのぼっていきます。

ついにわたしは、緑色の鉛筆を紙からはなして、エドアルトのあたたかいなめらかな毛皮を、こつこつとたたきます。すると、かれはわたしに、「たて」といって、小さい角でわたしをつつきます。それから、わたしたちはつれだってぶらぶらと、美しい色とりどりの草原を家路につくのです。

わたしたちは、ホテルの前でわかれます。エドアルトはホテルにとまっているのではなく、かどの農家に住んでいるのですから。

ちかごろわたしは、そのお百姓さんにたずねたところ、エドアルトはやがて、きっと、大きな雄牛になるだろう、ということでした。

第二のまえがき

緑色の鉛筆をなくす——子どものなみだの大きさについて——小さいヨナタン・トロッツの大洋渡航——おじいさんとおばあさんが、かれをむかえにいかなかったわけ——人間の不死身をほめたたえ、勇気とかしこさとが一致しなければならないとおしえる

ほんとうは昨晩、食事をすまして、へやでのんびりすわっていたとき、すぐにさきを書くつもりでした。アルプスの夕焼けは、きえていました。ツークシュピッツェ山の絶壁は、せまってくる夜のかげのなかにしずんでしまいました。湖のむこう岸では、まるい月がほほえみながら、黒い森の上にのぞいていました。

ちょうどそのとき、わたしは緑色の鉛筆をなくしたことに気がつきました。うちにかえるとちゅう、ポケットからおとしたにちがいありません。あのきれいな小牛のエドアルトが、草の茎かと思って、飲みこんでしまったのかもしれません。いずれにしても、わたしはへやにすわってみたものの、どうしても、書くことができません。とびきりハイカラなホテルでしたけれど、ホテルのどこにも、かりられるような、緑色の小さい鉛筆はありませんでした！　ああ、なんとしたことでしょう！

とうとうわたしは、ある著者からおくられた子どもの本を、手にとって読みはじめました。けれども、すぐにわきへおいてしまいました。ひどく、腹がたったからです！　なぜだか、いいましょう。その著者は、自分の書いた本を読む子どもたちをだまして、はじめからおわりまで、おもしろがらせ、たのしくてやめられないようにさせようとしていたからです。このずるい著者は、子どもというものが、ごく上等なこね粉のお菓子のように、どうにでもあつかえると考えているのです。

どうしておとなは、そんなに自分の子どものころのことを、すっかりわすれてしまうのでしょうか？　そのうえ、子

どもはときには、ずいぶん悲しく不幸になるものだということが、どうしてわからなくなってしまうのでしょうか？

（ちょうどよい機会ですから、わたしはみなさんに、心の底からおねがいします。みなさんは、みなさんの子どものころのことをけっしてわすれないように！　と。それを約束してくれますか、ちかって？）

つまり、人形をこわしたからといって泣くか、すこし大きくなってから友だちをなくしたからといって泣くか、それはどっちでもおなじことです。この人生では、なんで悲しむかということがたいせつなのではなく、どんなに悲しむかということだけがたいせつなのです。子どものなみだは、けっして、おとなのなみだより小さいものではありません。おとなのなみだよりもおもいことだって、めずらしくありません。誤解しないでください。みなさん！　わたしたちは必要もないのになみだをこぼすことはありません。わたしはただ、つらいときでも、正直でなければならないといっているのです。骨のずいまで正直であれ、といっているのです。

わたしがつぎの章からお話しするクリスマスの物語には、ヨナタン・トロッツという名まえで、なかまの少年たちからはヨーニーとよばれている少年があらわれます。この小さい高等中学高等科一年生がこのお話の主人公ではありませんが、その身のうえは、少年のなみだが小さいものでないことをじゅうぶんにしめしていると思います。ヨーニーはニューヨーク生まれで、おとうさんはドイツ人、おかあさんはアメリカ人でした。おとうさんとおかあさんとは、たいへんなかがわるく、とうとう、おかあさんは家出をしてしまいました。ヨーニーが四つになったとき、おとうさんは、かれをニューヨークの港につれていって、ドイツいきの汽船にのせました。おとうさんは船のきっぷを買い、十ドル紙幣を子どもの茶色の財布にいれ、ヨーニーの名まえを書いた厚紙の札を、ヨーニーの首につるしてやったのでした。それから、ふたりは船長のところへいきました。

「どうか、この子をドイツにつれていってやってください。ハンブルクには、おじいさんとおばあさんがむかえにでていますから。」と、おとうさんはいいました。

「よろしい、ひきうけました。」と、船長はこたえました。それっきり、おとうさんはもうどこかへいってしまいました。

それで、小さい男の子は、ひとりぼっちで大西洋をわたることになりました。船客たちはたいへん親切にしてくれ、チョコレートをくれたり、厚紙に書いてある名まえを読んで、「いや、こんな小さいときから、大洋をわたるなんて、おまえはしあわせ者だよ。」といったりしました。

一週間の船旅ののち、ハンブルクにつきました。船長は、乗り降りするはしごのそばで、ヨーニーのおじいさんとおばあさんをまちうけていました。船客たちはおりるとき、もう一ど、子どものほおをなでました。あるラテン語の先生はいたいたしげに、「よいまわりあわせになるようにな、ぼうや！」といいました。上陸する水夫たちは、「ヨーニー、元気をだすんだぜ。」と大声でよびかけました。やがて、ペンキ屋さんたちがきて、つぎのアメリカいきにそなえるため、汽船をぴかぴかにぬりかえはじめました。

船長は波止場に立って、小さいヨーニーの手をひき、ときどき、腕時計を見、まちかねていました。けれど、ヨーニーのおじいさんとおばあさんは、やってきませんでした。いや、こられなかったのです。ふたりはもう、何年もまえに死んでしまっていたのですから！　おとうさんは、ただ子どもを手ばなそうと思って、ドイツへやったのでした。そのさきのことは、考えようとしなかったのです。

その当時、ヨーニーは、自分がどんなめにあわされたのか、まだよくわかりませんでしたが、大きくなってからは、夜、まんじりともしないで泣きあかすことが、いくどもありました。四つのときにうけたこの悲しみを、かれは一生のあいだ、わすれることができないでしょう。かれは気の強い少年ではあるのですけれど！

話はまだおわったのではありません。船長には、お嫁にいっている妹さんがありましたので、そこへヨーニーをつれていきました。そしてドイツへいくたびに、ヨーニーをたずねました。ヨーニーが十歳になると、船長はかれをキルヒベルクのヨハン・ジギスムント高等中学の寄宿舎にいれました。（この寄宿舎が、わたしたちのクリスマスの物語の舞台なのです。）

ヨナタン・トロッツは、今でも、休暇になると、ときどき船長の妹さんのところへいきます。そこの人たちは、たいへん親切にしてくれますが、かれは、たいていは休暇中でも学校にのこっています。そして、しきりに本を読み、こっそり物語を書いているのです。

たぶん、かれは文学者になるでしょう。だが、そんなことはまだわかりません。かれはよく、半日も広い校庭ですごし、シジュウカラと話しあいます。シジュウカラは、かれの

手の上に飛んできて、話をするかれの顔を小さい目で、ふしぎそうに見つめます。かれはときどき、小さい茶色の財布と、そのなかにはいっている十ドルの札をだして見せます。

昨晩、ホテルのへやでわたしが読んだ、子どもの本を書いたずるい著者は、子どもはいつも元気で、ただもうたのしくてたのしくてたまらないのだといっていますから、わたしはみなさんに、ヨーニーの身のうえ話をしたまでです。あの人は、気がついているでしょうか！

人生はしんけんでなければなりません。お金のためにはたらくようになってからはじまるというものではありません。また、そこではじまり、それでおわるというものではありません。こんなわかりきったことを、みなさんが、大げさに考えるようにと思って、わたしが今とりたてていうのではありません。また、みなさんをおどすためにいうのでもありません。いえ、いえ、みなさんは、できるだけ幸福になってください！　愉快にやって、小さいおなかがいたくなるほど、わらってください！

ただ、なにごともごまかしてはいけません。また、ごまかされてもいけません。不幸なめにあっても、それをしんけんに見つめるようにしてください。なにかうまくいかないことがあっても、おそれてはいけません。不幸なめにあっても、がっかりしてはいけません。元気をだしなさい！　不死身になるようにしなければいけません！

みなさんは、拳闘でうけ身になったばあいにも、がんばらなければなりません。うたれてもがまんして、こなしていく修業がたいせつなのです。そうでないと、世のなかにでて、さいしょの一撃をほっぺたにくらうと、グロッキーになります。世のなかというものは、とほうもなく大きなグローブをはめていますよ、みなさん！　それにたいする覚悟ができていないで一発くらうと、小さいイエバエがせきをしただけで、もうばったりとうつむきにのびてしまいます。

そこで、元気をだし、不死身になるんですね！　わかりましたか。それをまず第一に知った者は、もう半ぶん勝ったようなものです。そういう人は、たとえ顔をうたれても、おちつきをうしなわず、あの二つのたいせつな性質、つまり勇気とかしこさをあらわすことができるのです。わたしが今いうことを、よく頭にたたみこんでおきなさい。かしこさをともなわない勇気は、不法です！　勇気をともなわないかしこさは、くだらんものです！　世界の歴史を見ると、ばかな人びとが勇ましかったり、かしこい人びとが臆病だったりしたときが、いくらもあります。しかし、それは正しいことではありませんでした！

勇気のある人びとがかしこく、かしこい人びとが勇気をもったとき、これまでよくまちがって考えられていたこと――人類の進歩がみとめられるでしょう。

それはそうとわたしは、この哲学的といいたいようなことを書いているあいだ、れいの美しい広い草原のまんなかで、ぐらぐらする机にむかい、木のベンチに腰かけています。午前中、雑貨屋で緑色の鉛筆を手にいれました。今はもう、午後もおそくなりました。ツークシュピッツェ山では、新雪がきらきらかがやいています。むこうの材木の上では、黒と白のぶちのネコがうずくまって、じいっとこちらを見つめています。ネコは魔法にかけられたにちがいありません！　山のほうからは、わたしの友だちのエドアルトのつるしている鈴の音が、ひびいてきます。かれはまもなくわたしをむかえにきて、小さい角でつつくでしょう。クジャクチョウのゴットフリートは、きょうは飛んできませんでした。どうかしたのでなければいいんですが。

そうです。いよいよあすは、クリスマスの物語を書きはじめようと思います。そのお話のなかで、勇気のある者と臆病な者、かしこい者とおろかな者についてお話しできるでしょう。寄宿学校には、いろいろな子どもがおりますから。

ちょっと思いつきましたが、寄宿学校ってなにか、みなさんごぞんじですか？　それは、そこに生徒たちが住んでいる学校です。生徒の兵営といってもいいでしょう。少年たちは、大きな食堂で、長い食卓にむかって食事をします。食卓の用意は自分たちの手でしなければなりません。かれらは、大きな寝室で眠ります。朝早く番人がきて、ひどくやかましい音のする鐘を鳴らします。数人の最上級生が、寝室監督です。かれらは、下級生たちが、電光のようにベッドからとびだすかどうかを、ポインター犬のように見はっています。少年たちのなかには、ベッドをせいとんすることを、おしまいまでおぼえない者もたくさんおります。かれらは、ほかの少年たちが土曜日と日曜日に外出するときにも、自分のへやにのこって、罰のしごとをさせられるのです。（しかし、それでベッドのせいとんをおぼえるわけではありません。）

生徒たちの両親は、へんぴな町か、上級の学校のない、いなかに住んでおります。子どもたちは、休暇にだけかえってきます。休暇がおわっても、そのままうちにいたがる少年も少なくありません。しかし、両親がゆるしさえすれば、休

暇中でも、やはり学校にのこっている者もあります。
それから、通学生というのもおります。それは、学校のある町の者で、学校ではなく、自分の家に住んでいるのです。

ちょうど、わたしの友だちであるエドアルト、れいのきれいな小牛が、こい緑のモミの林のなかからでてきました。ひょいととんで、草原を横ぎり、わたしのベンチのほうにかけてきます。わたしをむかえにやってきたのです。わたしもしごとをおしまいにしなければなりません。

かれはわたしのそばにたって、やさしくわたしを見つめます。ではここで、うちきるのをゆるしてください！　あすは早くおきて、いよいよクリスマスの物語をお話ししましょう。きのう、母が手紙をよこして、どのくらいしごとがはかどったか、たずねてきました。

第一章

四階の窓わたり――ダンスをならう数人の生徒――大いに憤慨する首席生徒――大きな白いつけひげ――「飛ぶ教室」の冒険に関する報告――詩のある舞台げいこと、おもわぬ中断

二百のいすが食卓におしつけられました。二百人の生徒がそうぞうしく立ちあがって、食堂の出入口におしよせました。キルヒベルクの高等中学の寄宿舎の昼食がおわったのです。

「たまらん、たまらん。」と、高等科一年生のマチアス・ゼルブマンが食卓なかまのひとりにいいました。「腹がすいてたまらん。お菓子のくずをひとふくろ買うために、どうしても二十ペニヒいるんだ。きみ、お金ある？」

金髪の小さい貴族生まれの少年ウリー・フォン・ジンメルンは、ポケットから財布をだして、いつもおなかをすかしている友だちに、二グロッシェンやって、「さあ、マッツ！でも、つかまらないようにしたまえ。美少年のテオドルが校庭で見はりをしているぜ。門からかけだすところを、あいつに見つかると、つきだされるぜ。」

「とりこし苦労をするやつだな。いくら最上級生だって、あんなうすっとぼけのやつにゃあ、心配ごむようさ。」

と、マチアスはえらそうにいって、お金をしまいました。

「体育館にくるのをわすれないようにね。また、舞台げいこがあるんだよ。」

「だいじょうぶ。」

といって、マッツはうなずきました。そして大いそぎで北通りのシェルフ・パン屋に、お菓子のくずを買いにいきました。

外では、雪がふっていました。クリスマスが、まぢかにせまっていました。もうそのにおいがはっきり感じられるほどでした。大多数の生徒は校庭にかけだして、雪合戦をしたり、考えこみながらやってくる人があれば、力いっぱい木をゆさぶって、重たい雪を、ばらばらと頭の上におとしたりし

ました。校庭は、わらいさざめく声でにぎわっていました。数人の高等科上級生は、タバコをすいながら、がいとうのえりを高くたてて、もったいぶった足どりで、オリンプにのぼっていきました。（校庭のはずれにあるきみのわるい丘のことを、みなは数十年このかた、そうよんでいました。そこにのぼれるのは、最上級生だけで、うわさによると、古いドイツのいけにえの石がおかれていて、まい年復活祭のまえに、試胆会がおこなわれることになっていました。ぶるぶるっ！）

ほかの生徒たちは校舎にのこり、それぞれ自分たちのへやにあがっていき、本を読んだり、手紙を書いたり、昼寝をしたり、勉強をしたりしました。ピアノ室からは高い音の音楽がひびいてきました。

体操場は一週間まえ、小使いさんの手でスケート場にかえられたので、スケートをやっている者がありました。とつぜん、めちゃくちゃなぐりあいがはじまりました。アイス・ホッケーのチームが練習をしようと思ったのですが、スケートをやっている連中が、場所をゆずろうとしなかったからです。数人の中学一年生と二年生が、雪かきとほうきをもって、氷をきれいにするようにいいつけられ、手をこごえさせながら、ひどいしかめっつらをしました。

校舎の前では、こうふんした少年が、大ぜいかさなりあって、上のほうを見つめていました。というのは、高等科二年のゲーブラーが、四階のせまい窓のふちの上で、あぶなくからだの平均をとりながら、壁にそって、へやからへやへと、うつっていったからです。ハエのように壁にへばりつきながら、かれは一歩一歩ゆっくり横にすすんでいきました。見物している少年たちは、息をこらしました。

とうとうゲーブラーは終点までくると、広くひらかれた窓のなかへひょいととびこみました。

「すごい、すごい！」と、見物人は、こうふんして、はく手かっさいしました。

「いったい、なにごとがおきたんだい？」と、すこしおくれてとおりかかった最上級生がたずねました。

「いや、たいしたことじゃないよ。」と、ゼバスチアン・フランクがこたえました。

「ぼくたちは鳴き鳥先生に、窓から首をだすようにってたのんだだけなんだ。このハリイのやつが、鳴き鳥先生はやぶにらみだってことを、信じようとしないのでね。」

みんなはふきだしてしまいました。

「きさま、おれをかつぐつもりか。」と、最上級生はたずねました。

「どういたしまして。あなたのように大きくちゃ、こっちの腕があっさりおれてしまいますよ。」

と、ゼバスチアンは、腰を低くしてこたえました。

最上級生は、こいつはいかんと、いそぎ足でいってしまいました。

そこへウリーがかけてきました。

「ゼバスチアン、舞台げいこだよ！」

「王は語りぬ。わらべは走りぬ。」と、ゼバスチアンはやけくそに朗誦しながら、だんだん足をはやめました。

体育館の前には、もう少年が三人立っていました。「飛ぶ教室」という、おもしろい題のクリスマス劇の作者であるヨーニー・トロッツと、首席で舞台画家をかねるマルチン・タラーと、マチアス・ゼルプマン。かれはいつもおなかをすかしていますが、食後にはとくに腹をすかしています。かれは拳闘家志望です。かれはお菓子のくずをかんでいましたが、ゼバスチアンといっしょにやってきた小さいウリーに、お菓子のくずを二きれ三きれさしだして、「さあ、きみも食えよ。もっと大きく強くなるように。」といいました。

「きみがそんなにばかでなかったら、」と、ゼバスチアンはマッツにいいました。「かしこい人間が、どうしてそんなに大食漢になれるのか、と、どなりたいところだがなあ。」

マチアスは、おこりもせずに肩をすくめながら、口をうごかしつづけていました。

ゼバスチアンはつまさきで立って、窓からなかをのぞき、頭をふりました。

「最上級の連中が、またタンゴをおどってやがる。」

「はいれ！」と、マルチンが命令しました。五人の少年は体育館にはいりました。かれらの目にうつった光景は、あきらかに気にくわなかったのです。最上級生が十人、ふたりずつくんでおどっていました。ダンスの時間のため、けいこをしていたのです。のっぽのチールバッハは、すいじのおばさんからかりてきたらしい婦人帽をななめに頭にのせ、若いご婦人でもあるかのように、あいての腕に、しゃなりしゃなりとだかれてうごいていました。

美少年のテオドルがピアノにむかって、でたらめにキーをたたいているところへ、マルチンはすすんでいきました。

「このとんちきめ。」と、マチアスはあざけりをこめて、う

なるようにいいました。ウリーはマチアスのうしろにかくれました。

「おねがいします。やめてください。」と、マルチンはていねいにいいました。「ぼくたちは、ヨーニー・トロッツの芝居のけいこをつづけなければならないのです。」

おどっている連中は、おどりをやめました。美少年のテオドルは、ピアノをひくのをやめて、えらぶって、「ぼくたちが体育館の使用をおえるまで、どうかまってくれたまえ！」といい、またピアノをひきつづけました。最上級生たちはおどりはじめました。

高等科一年の首席のマルチン・ターラーは、知らぬ者のない、名物のかんしゃくだまをはれつさせて、「たのむ、どうかやめてくれ！」と大声をはりあげました。「ベク先生がまい日、昼ま二時から三時まで体育館でけいこするのを、ぼくたちにゆるしてくださったのだ。それはきみたちだって、知っているじゃないか。」

美少年のテオドルはピアノのいすの上で、ぐるりとむきなおりました。

「きみは室長にむかって、いったいなんという口のききようをするんだ？　ええ？」

ウリーは、こっそりにげだそうとしました。かれはあぶないことはまっぴらだったのです。けれども、マチアスはかれのそでをしっかりとつかまえたまま、最上級生たちを憤激のまなざしで見つめ、「ちくしょうめ、あののっぽの胸いたに一発くらわしてやるかな。」とつぶやきました。

「しずかにしたまえ！　マルチンがうまくまとめるから。」と、ヨーニーがいいました。

最上級生たちは、小さいターラーをぐるりととりかこんで、いまにも食いつかんばかりのけはいでした。美少年のテオドルは、またタンゴをひきはじめました。するとマルチンは、自分をとりかこんでいる者をおしのけ、ピアノのそばによっていって、パタンと、ふたをしめました。上級生たちはおどろいて、口をきくこともできませんでした。マチアスとヨーニーが助け舟にかけつけました。

けれどもマルチンは、ふたりの助けをかりるまでもなく話をつけました。

「きみたちだって、きめられた規則はまもらなければならないことは、ぼくたちとちっともかわらないんだ。」と、おこってさけびました。「きみたちがぼくらよりたまたま二つ三つ年うえだってことで、思いあがらないでもらいたい。ぼく

のことで、ベク先生に苦情をもちこむのはかまわないが、今はすぐ体育館をでていってくれたまえ、だんぜん！」

美少年テオドルは指の上にピアノのふたをおとされ、写真にとりたいようにきれいな顔が、いきどおりのあまりひきつっていました。

「おい、おぼえていろ。」とおどすようにいってから、かれは席をはなれました。

ゼバスチアンは戸をあけてやり、立ちさる上級生たちにむかって、いともていねいにおじぎをしました。かれらがでていってしまうと、かれはあざけるようにいいました。

「あの連中は、ダンスを商売にしてるんで、ダンスの時間にはおけしょうしたお嬢さんとおどり、有頂天になってるんだ。哲学者のショーペンハウワーが、女について、なんて書いてるか、一ど読んでみるがいい。」

「あのむすめさんたち、なかなか、かわいいと思うな。」と、ヨーニーがいいました。

「ぼくには、拳闘のできる伯母さんがあるぜ。」と、マチアスは得意そうにいいました。

「はじまり、はじまり！」と、マルチンがさけびました。

「ヨナタン、けいこをはじめるぜ。」

「よしきた。じゃ、きょうはさいごの場をもう一どやろう。あすこがまださっぱりいかんぜ。マッツ、きみの役者ぶりはなってないぞ。」と、ヨーニーがいいました。

「ぼくがここで、芝居なんかやってることを、もしおやじが知ったら、すぐに学校からつれだすだろうな。」と、マチアスはいいました。「ぼくはただ、きみたちへの義理でやってるんだ。だって、ぼくのほかにペテロの役をやれるものがいるかい？　ええ？」

かれは、ズボンのポケットから大きな白いひげをとりだして、顔にぶらさげました。

クリスマスのお祝いに、体育館でやろうとしている、ヨーニー作の戯曲は、いまもいったように「飛ぶ教室」という五幕の劇でした。それは、学校というものが、これからさきどんなふうに運営されるかということをえがいたもので、いわば予言的な作品でした。

第一幕では、中学校の先生が――それはゼバスチアン・フランクがつけひげで、ほんものそっくりに演じるのです――受持ちのクラスの生徒をつれて、飛行機で地理の現地授業をおこなうためにでかけるはずでした。「授業が現地検証となる」ということばが、第一幕にありました。それは、ヨーニーではなく、おそろしく頭のはたらくゼバスチアンの書いたものでした。かれは、そのせりふを話すとき、先生たちをわらわせるつもりでした。首席のマルチンは、絵がたいへんじょうずでしたから、背景をかきました。白い厚紙にかかれた飛行機が、一本の横木にうちつけられました。それには、プロペラと発動機が三つずつと、あけたてできる戸がついていました。それをとおって、飛行機に（ほんとうは横木に）のるのでした。

ウリーは遍歴学生の妹の役をやるので、いとこのウルゼルからむすめのきものをおくってもらいました。それから、床屋のクリューガーから、あんだ長い金髪のおさげのかつらをかりるはずでした。みんなは、まえの土曜日に外出したとき、そこにいって、ウリーにかつらをかぶらせてみたら、もう見わけがつかないくらいでした。それをかぶると、まったく少女と見ちがえられるようになりました。かり賃は五マークでしたが、床屋のクリューガーは、生徒たちが今後自分のところで散髪するなら、かつらを半値でかしてもよいといいました。かれらは、それをかたく約束しました。

さて、第一幕でみんなでかけました。第二幕で飛行機はベズビオ火山の火口に着陸しました。火をふく山を、マルチンは大きな厚紙に、おどろくほどみごとにかきました。火山がたおれないようにするには、厚紙を高い横木におしつけさえすればよかったのです。――ゼバスチアンの演ずる先生は、火山というものを韻文で講義しました。生徒たちは、溶岩にうずまったローマの町ヘルクラヌムやポンペイについて、いろいろ質問しました。さいごに先生は、マルチンのかいたふきあげるほのおで、葉まきに火をつけ、ふたたび飛行をつづけました。

第三幕で、かれらはギゼーのピラミッドの付近におり、色どられたつぎの厚紙の壁の前を散歩しながら、大きな王さまの墓の建設について、ゼバスチアンの説明を聞きました。そこへ、ミイラのように青白く顔をぬったヨーニーが、ラムセス二世となって、ひとつのピラミッドのなかからあらわれました。厚紙が小さすぎたので、かれはでてくるとき、むろんかがまなければなりませんでした。ラムセス二世はまず、ナイル河のめぐみゆたかなことをほめ、水の恩恵をたたえました。そのあとでかれは、かれの星うらない師が予言した、世界の破滅の経過をたずねましたが、地球はやはりなくならないということを知ると、たいへん腹をたてて、星うらない師

を永久に免職するぞ、とおどかしました。少女になっているウリーは、エジプトの老王さまのことばに、おもわずふきだし、星うらない師はとっくに死んでしまったと、いわなければなりませんでした。すると、王さまは、ふしぎな合図をしました。とたんに、ウリーは、すっかり魔法にかけられ、しずしずととじるピラミッドのなかに、ひきずりこまれました。あとにのこった者たちは、悲しみながらも、しかたなくでかけました。

第四幕で「飛ぶ教室」は北極に着陸しました。かれらは、地軸が雪のなかからそびえているのを見て、地球は極地においても、たいらであることをたしかめました。それを電送写真にして、キルヒベルク日報におくりました。皮をかぶったマチアスの演ずるホッキョクグマ、氷と雪のなかのさびしさをたたえる真にせまった文句を聞いてから、かれらは、クマとわかれのあく手をかわして、飛びさりました。

先生の過失と昇降かじの故障のため、さいごの第五幕でかれらは天国にきました。そこでは、ペテロがモミの木の前にすわってキルヒベルク日報を読み、クリスマスを祝っていました。かれは、かれらの校長グリューンケルン博士をよく知っている、先生は元気か、それはそうと、天国は透明だから、たいして見るものはない、写真をとってもいけない、といいました。

先生はペテロに、ラムセス二世のためピラミッドのなかへつれこまれた少女を、とりもどしてもらえまいか、とたずねました。ペテロはうなずいて、まじないの文句をとなえると、たちまちウリーが、かかれた雲のなかからおりてきました。生徒たちは、たいへんよろこんで、讃美歌「きよしこの夜」をうたいました。この歌は、クリスマスには、見物人、つまり先生も生徒もみんないっしょにうたうはずで、それで芝居は、めでたくおわることになっていました。

きょうはさいごの幕のけいこでした。ペテロを演ずるマチアスが、色どられていてあかりのつくクリスマス・ツリーの前に腰かけていました。ほかの者はみな——ピラミッドのなかにつれこまれたウリーのほかは——ペテロをうやうやしくとりかこんでいました。マチアスのペテロは白いつけひげをしごきながら、つとめて低い調子でいいました。

天国はなんじらには
到達できそうに見えるだけだ。
なんじらは飛行機で飛びあがってき、

望遠鏡でなかをのぞく。
だが、思え、そんなことで、
天国は見えるようになりはしない。
天国はなんじらには壁でふさがれている。
なんじらに見えるのはわたしだけだ。
そのほかのものにたいしてはめくらだ。

マルチン
それは残念しごく。

ゼバスチアン
それは悲しまない。
われわれはあるがままでいたい。

ペテロ
ありのままの天国は、死人にしか見えない。

ヨーニー
あなたの写真を二、三まいとってもいいでしょうか。

ペテロ
ここで写真をとることはかたく禁じる。
われわれはそんなものには無関心だ。
探究さるべきものは探究せよ。
探究しえざるものは、……

マチアスはさいごのことばにつまずきました。それはかれにはむずかしすぎ、文句もわすれていました。かれは無言であやまりながら、文豪ヨーニーのほうを見つめました。ヨーニーはかれにあゆみより、小声でせりふをつけてやりました。

「そうだ。そのとおりだ。だが、ぼくはひどくおなかがへったよ。それがひどく記憶にこたえるんでね。」

と、マチアスはいいましたが、気をとりなおし、せきばらいしてから、つづけました。

探究すべきものは探究せよ、
探究しえざるものをさぐるをやめよ。
なんじらはなにか禁止されると、
腹をたてる。それはしょうちしている。
なんじらはなんでも知ってるようにふるまう。
なんじらは、十分の一を知るためにも、
まだたくさん知らなければならぬのに。

ヨーニー

聖ペテロはだんぜん誇張されます。
わたしたちはそんなに知りたがりはしません。
それにおおくのものにはむずかしすぎるでしょう。

マルチン

おろかなほうが満足をあたえられます。

ゼバスチアン

ペテロはすべてを知ると聞きました。
わたしたちがひとりの少女をうしなったことを
あなたは知っていらっしゃるでしょう。
少女はラムセスにしたがってきえうせました。
今はピラミッドの迷路を
さまよっています。

ペテロ

かわいそうに！
きえうせた少女を
よびもどすまじないをいおう。
わたしのことばをさえぎってはならない！
たぶん試みは成功するだろう。……
きえたものはのこり、
道は足あとをとどめ、
ひきさかれたものはしるされてのこる。
きたれ、あゆみて——

このしゅんかんに体育館の戸が乱暴におしひらかれました。マチアスは文句がのどにつまりました。ほかの者はおどろいてふりむきました。舞台にでるのをまっていたウリーは、雲のなかからなにごとかとのぞきました。

入口にひとりの少年が立ちはだかっていました。その顔と手からは血がたれ、服はやぶれています。かれは憤激して帽子を床になげつけて、どなりました。

「きみたちはなにごとがおきたか知っているか。」

「どうして知ってるわけがあるかい？　フリドリン。」と、マチアスはやさしくいいました。

「通学生が放課後また学校へやってきて、しかも、ぶちのめされているとしたら……。」と、ゼバスチアンがいいました。

だが、フリドリンはそのことばをさえぎって、「おしゃべりはやめてくれ！」とどなりました。

「実業学校の生徒が、ぼくとクロイツカムのかえり道をおそったのだ。クロイツカムはとりこになった。なおしてもらうためかれのおやじのところにもっていくはずのぼくらの書取帳もかれらにとられてしまった。」（クロイツカムのおとうさんは、ヨハン・ジギスムント高等中学校のドイツ語の先生でした。）

「ちくしょうめ！　書取帳もとられたのか。」と、マチアスがたずねました。「そいつはありがたい！」

マルチンは親友ヨーニーのほうを見ました。

「もうけいこはいいかい？」

ヨーニーはうなずきました。

「じゃ、いけ！」と、首席がさけびました。「垣をこえて菜園へ！　ちょっとばかりだしぬけに！　禁煙先生のところにあつまるんだ。」

みなは体育館からとびだしました。ウリーは、マチアスとならんで走りました。

「美少年のテオドルにつかまったら、おしまいだね。」

と、かれはあえぎました。

「それなら、ここにいるさ。」と、マチアスがいいました。

「きみはどうかしたのかい？」と、ちびさんはむっとしてたずねました。

六人の少年は校庭のはずれで、かきねによじのぼり、それをのりこえました。

マチアスはまだ白いつけひげを顔につけていました。

第二章

禁煙先生に関する詳細――三つの正書法のあやまり――不安にたいするウリーの不安――客車のなかの作戦会議――フリドリンをていさつにだす――クロイツカムがおそわれた原因と五人のマラソン

禁煙先生――そうよんではいましたが、その人のほんとの名まえを、みんなはまったく知らないのでした。その人がタバコをすわないから、禁煙先生とよんでいるわけでもありませんでした。それどころか、その人はたいへんよくタバコをすいました。

かれらはその人をたびたびたずねました。こっそりたずねるのでしたが、みんなその人をたいへんすいていました。舎監のヨハン・ベク先生とおなじくらいにすきでした。それはなかなかたいしたことなのです。

その人をかれらが禁煙先生とよんだのは、その人は、廃車になって菜園のなかにもちこまれた禁煙者専用の二等客車に夏も冬も住んでいたからです。かれは一年まえ、その客車を菜園のなかの貸地にひっぱりこんだとき、鉄道省からそれを百八十マークで買いとり、すこし改造して、今はそこに住んでいます。「禁煙車」という小さい白いエナメル板はそのまま車体にのこしてあります。

夏と秋には、かれのささやかな庭にすばらしい花が咲きます。植えかえたり、水をやったり、草をとったりするしごとをおえると、かれは緑の草のなかに腰をおろして、数おおい蔵書のなかの一さつを読みます。冬は、むろん、たいてい客車のなかで暮らします。小さいまるいストーブで、ふうがわりな家をあたためるのですが、屋根からのぞいている青黒い煙突は、ときどきおそろしくけむっています。

クリスマスに、ヨーニーはこの禁煙先生に贈りものをするはずでした。（ヨーニーはこんども、クリスマス休暇のあいだ、学校にのこります。それは船長さんがニューヨークへの航海中だからです。）ヨーニーたちはお金をあつめて、禁煙先生のためにもういくらか贈りものを買いいれました。あた

たかい靴下、タバコ、黒いセーターなど。このセーターがからだにあってくれればよいのですが。念のため、とりかえることができるように、店と約束しておきました。

マルチンは、両親が貧しく、半給費生だったので、お金をほとんどもっていませんでしたから、禁煙先生のために絵をかきました。それは「世すて人」という題で、菜園の色とりどりの花のなかに腰をおろしている人物をあらわしていました。その人物は、かきねのそばで手まねきしている三人の少年を、親しげに、しかも悲しげに見つめています。かれの肩と両手には、なついた小さいシジュウカラとコマドリがうずくまっています。きらきら光るチョウチョがかれの頭の上でおどりまわっています。

それはたいへんきれいな絵でした。マルチンはそれをかくのにすくなくとも四時間はかかりました。

これをもって、ヨーニーはクリスマスのまえの晩に、禁煙先生をおどろかすはずでした。かれらは、先生がひとりぼっちでいるだろうということを知っていました。それをかれらはいたましく思っていました。

禁煙先生はいつも夕がたになると、いちばんいい服を着て、町へでていくのでした。ピアノをおしえにいくのだと、みなはきかされていました。かれらはそれを否定しはしませんが、そうだと思ってはいませんでした。

通学生で町の地理にくわしいルディ・クロイツカムの主張によると、禁煙先生はまい晩おそくまで、「されこうべ」という町はずれの料理店でピアノをひき、一マーク五十ペニヒのお金とあたたかい夕食とをあてがわれているということでした。

そうだという証拠はありませんでしたが、それはありうることでした。かれらにとって、それはどうでもよいことでした。禁煙先生がりっぱなかしこい人で、さんざん不幸なめにあってきたらしいということだけはたしかでした。タバコの煙のたちこめる料理店で流行歌をむやみとたたくのが、はじめから先生の目標だったとは、思えませんでした。

これまで、もうなんども、かれらはこっそり禁煙先生の知恵をかりました。とりわけ、舎監の先生にききたくないようなばあいに、そうでした。ベク先生のあだ名は、正義先生とよばれました。それは正しい人という意味でした。ベク先生は、正しい人だったのです。それだからこそ、かれらはベク先生をあれほど尊敬していたのです。

しかし、正と不正とを区別することが困難なようなばあい、かれらは知恵をかりる必要がありました。そういうとき、かれらは正義先生のところにはいかないで、大いそぎでかきねをこえて禁煙先生をたずねていくのでした。

マルチン、ヨーニー、ゼバスチアン、それに負傷した通学生フリドリン、この四人は、木の葉はおち、雪にとざされた庭の門をはいりました。マルチンが戸をたたきました。やがて四人は客車の住まいのなかにきえました。

マチアスとウリーとは門の外に立っていました。

「また、ものすごいなぐりあいになりそうだな。」と、マチアスがひどく満足げにいいました。

すると、ウリーは「なによりもまず、書取帳をとりもどすくふうをしなきゃ。」といいました。

「まっぴらだな！」と、マチアスがこたえました。「どうも、ぼくはあの書取りでひどいへまをやってしまったらしいぞ。ちびさん、プロヴィンツ（州）という単語のおわりはｔｚだったかな？」

「いや、ｚだけだよ。」と、ウリーがこたえました。

「おやおや、またまちがえたぞ。」と、マチアスがいいました。「それから食料という単語のまんなかはｆだったかな？」

「いやｖだよ。」

「そしておわりは？」

「ｔだ。」

「いけねえ、いけねえ！」と、マチアスがいいました。「二語で三つのあやまりだ。まさにレコードやぶりだろう！実業学校のやつらはクロイツカムをひきわたすだけで、書取帳はかえさないでくれるといいがな。」

ふたりはしばらくだまっていました。ウリーは寒くてこごえるので、いっぽうの足でかたいっぽうの足をふみつけました。やがてかれはいいました。

「それでも、ぼくはきみとすぐにもかわりたいな、マッツ。なるほど、ぼくは書取りでも算術でも、そんなにたくさんのまちがいはしないけれど、きみだけの勇気がもてたら、ぼくはきみのとるわるい点数ぐらい、どんなによろこんでもらうか、わからないね。」

「それこそ、完全にばかげた話だ。」と、マチアスがいいました。「ぼくの頭のわるいのは、どうしようもないんだ。そりゃ、ぼくのおやじは、いくらでもぼくに補習時間をあてがうことはできるんだが、ぼくにはごたごたしたことはわからないんだ。ぶちまけていえば、州がｚだろうが、食料が

fだろうが、まったくどうでもいいんだ。ぼくはいまに拳闘の世界選手権をにぎるんだ。そうすりゃ、正書法なんかいらないんだ。だが、きみが臆病だというのだって、きみの意志ひとつで、かえられるじゃないか。」

「きみには察しがつかないんだ。」と、ウリーはうちしおれていい、こごえた指をさすりました。「臆病ぐせをなくすために、ぼくはこれまでどんなにいろいろなことをやってみたかわからない。——そりゃもうお話にならないんだ。いつでもぼくは、にげないぞ、いいなりにはならないぞ、と決心するんだ。岩のようにかたく決心するんだ。だが、いざとなると、もうにげだしてしまうんだ。人からぜんぜん信頼されないかと思うと、自分で自分にいやけがさすんだ。」

「そうか、それじゃ、きみはみんなに尊敬の念をおこさすようなことを、なにか一どやらなきゃならないな。」と、マチアスがいいました。「なにかまったくとほうもないことをやって、みんなに、おどろいたな、ウリーはすごいやつだ、すっかり見そこなっていたよ、と思わせるんだ。どうだ、きみはそうは思わないか。」

ウリーはうなずいて、頭をたれ、靴のさきでかきねをつつきました。

「ぼくは、こごえやすいたちでね。」と、かれはいいわけをしました。

「それもふしぎはないさ。」と、マチアスがきびしくいいました。「きみは食べかたが少なすぎる。男としてはずかしいくらいだ。はたのものも見ちゃいられない。それにきみはきっとホームシックにもかかっているんだ。どうだい？」

「ありがとう、だいじょうぶだよ。」と、ウリーは低い声でいいました。「ただ夜、寝室にいるとき、むこうの兵営で消燈ラッパがひびくとね。」かれははずかしそうにしました。

「ぼくはもう腹がへってきた。」と、マチアスはわれとわが身に腹をたてていました。「けさ書取りの時間にも、そうだった。ぼくはクロイツカム老教授に、バタパンをひときれかしてもらえませんかと、きたくてたまらなかったよ。そうもいかずに、z なのか、v なのかと、くだらん単語に頭をなやまさなけりゃならなかったのさ。」

ウリーはふきだしていいました。

「マッツ、もういいかげんに白いほおひげを顔からとりたまえよ。」

「おやおや、まだ足ふきみたいなやつをつけていたのか。」と、マチアスはたずねました。「ぼくのやりそうなことだ。」

かれはひげをポケットにつっこんでから、からだをかがめ、雪のたまをいくつもまるめて、それを禁煙先生の煙突めがけ、力いっぱいなげつけました。二発命中しました。

廃物客車のなかでほかの四人の少年が、すりきれたビロードのいすに、いらいらしながら腰かけていました。かれらのなかよしの禁煙先生は、まだ年をとってはいませんでした。たぶん三十五歳でした。かれは色のあせたジャンパーを着て、ひき戸にもたれ、小さいイギリスパイプでタバコをすいながら微笑をうかべて、フリドリンが敵の襲撃についてくわしい報告をするのに耳をかたむけていました。ようやく報告がおわりました。

ゼバスチアンはいいました。

「フリドリンが、今すぐとんでいって、クロイツカム先生のところで、ルディがかえっているかどうか、書取帳をもってかえったかどうか、それとなくたしかめることが、いちばん賢明だろうと思うね。」

フリドリンはとびあがって禁煙先生の顔を見ました。先生はうなずきました。

マルチンは「ルディがまだかえっていないばあいは、クロイツカム教授の耳にはいらないように、よく女中に話しておかなくちゃいけないぜ。」と注意しました。

「それから、きみはエーガーラントの家の前にくるんだ。」と、ゼバスチアンがいいました。「そこで、ぼくたちはきみをまちうけている。敵がルディと書取帳とをまだひきわたしていなけりゃ、ぼくたちはエーガーラントを攻撃するんだ。あいつがルディ襲撃のさしずをしたんだ。ぼくたちはあいつをつけねらわなくちゃならない。あいつを人質としてとりこにしたうえ、それで実業学校の生徒たちと談判し、ルディとこうかんすることにしよう。」

「よしきた。」と、フリドリンはいいました。「エーガーラントの住まいは知ってるね。そう、山林通り十七番地だね。じゃ、またあとで。まちがいなくあそこにきてくれよ。」

「だいじょうぶ！」と、ほかの者たちはさけびました。フリドリンは、敵にさんざんひっかかれ、ハンケチでほうたいしている手で、禁煙先生にあく手してから、いきおいよくとびだしました。ほかの少年たちも立ちあがりました。

「ところで、いったいどういうわけでエーガーラントはじめ、ほかの実業学校生徒たちは、きみたちの先生のむすこをとりこにし、勉強のノートをさしおさえるなんてことを思い

ついたのかな。かんたんに説明してくれないか。」と、禁煙先生は、もちまえの澄んだおちついた声でいいました。

少年たちは口をつぐみました。やがてマルチンが、いいました。

「それは作家むきのしごとだ。ヨーニー、きみが話せよ。」

ヨーニーは口をきりました。

「この襲撃事件には長いいきさつがあるんです。実業学校の生徒とぼくたちとのいがみあいは、いわば有史いぜんからのことです。十年まえにもこんどとおなじようなことが、あったそうです。これは、学校と学校とのあいだのあらそいで、生徒どうしのあらそいじゃありません。生徒たちは学校の記録にしめされていることを実行してるにすぎないんです。ぼくたちは、先月の外出日に運動場で、かれらの旗をうばいとりました。盗賊の旗のたぐいです。ぞっとするようなされこうべがかかれているんです。ぼくたちが、獲物のひきわたしをこばんだので、かれらは正義先生のところに電話で苦情を申しこみました。先生はぼくたちをひどくどなりつけましたが、ぼくたちはだまっていました。すると先生は、三日いないに旗を実業学校生の手にかえさないなら、二週間のあいだ、ぼくたちのあいさつをうけつけないと、おどしました。」

「みょうなおどしだな。」と、禁煙先生はいって、考えこみながら微笑しました。「それで、そのおどしはききめがあったかい？」

「てきめんでした。」と、ヨーニーがいいました。「よく日もう実業学校生は旗を見つけました。雲のあいだからおちてでもきたように、校庭に横たわっていたのです。」

ゼバスチアンはヨーニーのことばをさえぎりました。

「ただひとつ故障がありました。というのは、旗はすこしさけていました。」

「すこし、たくさんさけていました。」と、マルチンが訂正しました。

「かれらはきっと書取帳にたいして、しかえしみたいなことをするだろう。」と、ゼバスチアンはいつものとおりするどい観察で話をむすびました。

「それじゃ、きみたちのいわゆる有史いぜんからの戦争にでかけたまえ。」と、禁煙先生はいいました。「ぼくもたぶん山林通りの戦場にいき、負傷者にほうたいをしてやろう。いそいで着かえなくちゃ。きみたちの正義先生はいよいよぼくの気にいったよ。」

「そうですか。」と、マルチンは感激してさけびました。

「ベク先生はすばらしい人ですよ。」

禁煙先生のからだは、かすかにぴくっとしました。

「きみたちの正義先生のほんとうの名まえはなんというのかい？」

「ドクトル・ヨハン・ベクです。」と、ヨーニーがいいました。「ひょっとしてごぞんじなんですか。」

「いっこうに、」と、禁煙先生はいいました。「にたような名の人をいぜん知っていたが、……さあ、出陣の用意をしたまえ、ホッテントット諸くん！　だれも首をおらんようにしたまえ。きみたちも敵がわも。ぼくはストーブにれんたんをひとつだけいれておいて、着かえるよ。」

「さようなら！」と、三人の少年はさけんで、庭にかけだしました。

外でゼバスチアンが、「禁煙先生はたしかに正義先生を知ってるぞ。」といいました。

「そりゃ、ぼくたちの知ったことじゃない。たずねたければ、先生には住所はわかってるんだ。」と、マルチンがいいました。

かれらはマチアスとウリーにであいました。

「やっときたのか。」と、マチアスはつぶやきました。

「ウリーはもう半分こごえてしまったぜ。」

「マラソン競走をすりゃ、あったかくなるさ。さあ、いこう！」と、マルチンがいいました。かれらは町のほうへかけだしました。

第三章

フリドリンの報告――ヨーロッパきっての愉快な秀才に関する対話――エーガーラント夫人のあらたな腹だち――徒歩の軍使――うけいれられない条件――役にたつ作戦計画と、もっと役にたつ禁煙先生の提案

あいかわらず雪がふっていました。走っていく少年たちの息は、まるで太い葉まきでもすっているように、煙をたてていました。バルバロッサ広場の、エデン映画館の前には、通学組の中等科三年生が数人立っていました。かれらは映画を見ようとして、あくのをまっているのでした。

「すこしゆっくり走っていてくれ！　すぐおいつくから。」

マルチンは、なかまにそういってから、三年級の生徒のほうにむかっていきました。

「きみたちにおねがいがあるんだがな」と、かれはいいました。「映画はやめにしないか。実業学校の生徒がクロイツカムをとりこにしてしまったのだ。おれたちは、かれを腕ずくでとりかえさなくちゃならないんだ。」

「すぐいっしょにいくんですか。」と、三年生のシュミッツがたずねました。かれは小さくて、まんまるなので、小だるくんと呼ばれていました。

「いいや、」と、マルチンがいいました。「まだ間がある。十五分たったら、外濠通りと山林通りのかどのところにきてくれ。もう五、六人、なかまをつれてくるんだ。だが、前進してくるときは、わかれわかれになってくるように。そして帽子はかくして！　そうしないと、実業学校のやつらにおれたちの計画をいちはやく感づかれてしまうから。」

「いいよ、マルチン。」と、小だるくんがいいました。

「よし、それじゃ、きみたちをあてにしてるぜ。」

「だいじょうぶ。」と、三年生たちはさけびました。マルチンは息をきらしながら走りました。かれはなかまにおいつき、まわり道をして山林通りにみんなをみちびきました。敵に気づかれたくなかったからです。外濠通りのかどのところでかれらはとまりました。

すこしおくれてフリドリンがあたふたとやってきました。

「どうだった？」と、みんなが声をそろえてたずねました。

「ルディはまだかえっていない。」と、かれは息をきらしていいました。「さいわい、女中さんは見かけほどばかじゃない。先生に、ルディは？　と、きかれたら、ぼくのところに食事によばれていったって、よくいいくるめておくっていうんだ。」

「いよいよしんけんだぞ。」と、マチアスが満足げにいいました。「それじゃ、ぼくはいそいで十七番地にいき、エーガーラントを原子くらいにこっぱみじんにしてやろう。」

「きみはここにのこっているんだ。」と、マルチンが命令しました。「腕っぷしだけじゃ、だめだよ。きみがエーガーラントの首をひっこぬいたところで、クロイツカムが書取帳をもってどこにいるかは、わかりゃしないんだ。ちょっとまってくれ。きみを必要とするときがきっとくるよ。」

「こいつはひとつ、ぼくの役めにしてくれ。」と、ゼバスチアン・フランクがいいました。かれの言うことはもっともでした。「ぼくが軍使になっていく。交渉という手段でうまくいくだろうと思うよ。」

「おまえのがらにあってるよ。」と、マチアスがさげすむようにわらいました。

「すくなくとも、ルディがどこにいるか発見してくるよ。」と、ゼバスチアンがいいました。「それだけでも、むだじゃないさ。」

かれはでかけました。マルチンがすこしのあいだついていきました。

マチアスは街燈にもたれ、ポケットから手帳をだして、計算でもするかのように、くちびるをうごかしました。

ウリーはもうこごえていました。

「なにをかぞえているんだい？　マッツ。」と、かれはたずねました。「かりた金の勘定さ。」と、マチアスは悲しそうに白状しました。「ぼくはおやじをすっからかんに食いつぶしてしまうな。」

そういって、手帳をパタッととじ、ポケットにしまいました。

「フリドリン、一グロッシェンかしてくれないか。正義のためだ。おそくもあさってにはかえすよ。旅費のほかに二十マークおくったって、おやじから手紙がきてるんだ。今、なに

か食べないと、あとで腕をふるうことができないんだ。」
「そりゃ、ていのいい脅迫だよ。」と、フリドリンはいって、十ペニヒをわたしました。
マチアスは矢のようにてぢかのパン屋にとんでいきました。もどってくると、かれは幸福そうに口をうごかしながら、なかまにもふくろを見せて、食べるようにすすめました。それはまきパンでした。ほかの者は食べようとしませんでした。
フリドリンは緊張して町かどを見はっていました。ヨーニー・トロッツは海外物産商店のかざり窓に、古いベルー王族の宝が陳列されてでもいるように、それに見いっていました。それはいつものことでした。かれはなんでも見るものにつけ、まだ見たことがないかのように、目を見はるのでした。それで口かずも少なく、たえず見たり聞いたりに熱中するのでした。
そのときマルチンがかどをまがって、かれらにうなずきかけ、外濠通りのかどの家のなかにすがたをけしました。ウリーはマチアスの食欲をおもしろがりながらいいました。
「マルチンはすばらしいな、そう思わないかい？　さっき最上級生をどやし、体育館からおっぱらったところなんかどうだい！」
「マルチンは、まったく文句なしにヨーロッパきっての愉快な秀才だ。」と、マチアスは口をうごかしながらいいました。
「あいつは、いやけがさすほど勉強家だが、けっしてくそ勉強家じゃないな。入学いらい、いつも首席だが、どんなはげしいなぐりあいにも欠けたことがない。半給費生で補助金をもらっているが、人に物をねだったことは、ただの一どもない。あいてが最上級生だろうが、教師だろうが、東洋の王さまだろうが——あいつは自分が正しけりゃ、野生のサルのむれにでもたいするようなふるまいかただ。」
「かれは正義先生を手本にしているんだと思うね。」と、たいした秘密でももらすような口ぶりでウリーがいいました。
「正義を愛する点、まさに正義先生そっくりだ。きっとああいうすばらしい人になるよ。」
ゼバスチアンは、山林通り十七番地、四階のエーガーラントの家のベルを鳴らしました。ひとりの婦人が戸をあけて、ぶあいそうにかれを見つめました。
「ぼくはお宅のむすこさんと同級生です。ちょっとむすこさんにあいたいんですが、」と、ゼバスチアンがいいました。
「きょうは、まるで千客万来だね。」と、その婦人はつぶやきました。「あんたたちのなかまには、いったいなにごとがおきたのよ？　そりをしまうために地下室のかぎをもっていく者があるかと思うと、せんたくものを干すアサなわをぜひかしてくれという。ほかの者たちは家のなかにはいってきて、じゅうたんをどろだらけにしてしまうんですよ。」
ゼバスチアンは、靴ぬぐいできれいに靴をこすってから、「エーガーラントくんは今ひとりでいますか？」とたずねました。
エーガーラント夫人はうるさそうにうなずいて、はいらせました。
「あそこがむすこのへやです。」
かの女は廊下のおくの戸を指さしました。
「ああ、わすれないうちにうかがっておきますが、」と、ゼバスチアンはいいました。「地下室のかぎはもうお手もとにもどりましたか。」
「あんたも、そりを地下室にしまおうというの？」と、夫人はふきげんにいいました。
ゼバスチアンは頭をふりました。
「ぜひ必要だというわけじゃありません、おくさま。」
そういって、ノックもせずに敵の首領のへやにはいりました。実業学校生エーガーラントはびっくりして、いすからとびあがりました。
「これはいったいどうしたというんだ？　高等中学の生徒がはいってくるなんて？」
「ぼくはいわば騎馬の使者なんだ。」と、ゼバスチアンがいいました。「ぼくは軍使だ。そのつもりでいてもらいたい。」
エーガーラントはひたいにしわをよせました。
「それじゃ、せめて腕に白いハンケチでもまきたまえ。そうしないと、ぼくたちのなかまにつかまったら、ひどいめにあうぞ。」
ゼバスチアンはハンケチをとりだして、微笑しながらいいました。
「もうひどく白くはないがね。」
かれは左手と口でハンケチを右腕にまきつけました。
「それで、用件は？」と、エーガーラントがたずねました。
「高等中学の生徒クロイツカムと、書取帳の、ひきわたしをもとめるんだ。」
「それにたいして、きみたちはなにを提供する？」
「なにも！」と、ゼバスチアンはひややかにいいました。「ぼくたちのなかまは進軍中だ。きみたちが捕虜をすすんで

ひきわたさなければ、つれていくまでだ。」

エーガーラントはわらいました。

「まず第一に、きみたちはかれのいどころを知らなきゃなるまい。つぎにかれを救いださなきゃなるまい。この二つは、それぞれ時間がうんとかかるんだぜ。わが親愛なる友よ。」

「うちとけた応対は、いっさいおことわりだ。」と、ゼバスチアンはきっぱりこたえました。「ぼくはきみの親愛なる友なんかじゃない。いいかい？　それから、ルディ・クロイツカムに一指もそめることはできないぜ。これはあえてはっきりいっておく。きみたちはかれを数日間かくしておくつもりか。そんなことをすると、きみたちにとってひどくわるいことになるぜ。だが、用件にはいろう。きみたちはどういう条件をだすんだ？」

「たったひとつの条件をみたせばいいんだ。きみたちはすぐに一本の手紙をぼくたちにあてて書き、ぼくたちの旗をひきさいたことをあやまり、捕虜と書取帳をかえしてもらいたいとねがいでるんだ。」

「そうしなかったら？」

「そうしなかったら、ぼくたちは書取帳を焼きすて、クロイツカムをいぜんとして捕虜にしておく。ぼくは今から約束しておくぜ。きみたちが手紙を書かないというんなら、クロイツカムは、腰がまがるまでぼくたちのところにいなきゃならんぞ。おまけに、横っつらをはられるんだ。十分ごとに、六つ、ぶたれるんだ。」

「そんな条件は、むろんうけいれられない。クロイツカムとノートを無条件でひきわたすよう、ぼくはきみにさいごに要求する。」と、ゼバスチアンがいいました。

「そんなことは思いもよらん。」と、エーガーラントはきっぱりこたえました。

「それじゃ、ここにきたぼくの役めはおしまいだ。」と、ゼバスチアンはいいました。「ぼくらは十分いないに捕虜を救いにくるぜ。」

エーガーラントは机から黒い布をとりあげて、窓をひらき、布を窓の外にたらし、中庭にむかって「アホイ。」と、どなりました。そして窓をとじ、あざわらって、「どうぞ捕虜をおつれください。」と、いいました。

ふたりは、敵意にみちたえしゃくをしあいました。ゼバスチアンは大いそぎで家をでました。

なかまのところにもどると、小だるくんの指揮のもとにちょうど中等科三年生がやってきたところでした。二十人ほど

の少年が外濠通りに立って、足のさきをこごえさせながら緊張して軍使をまっていました。

「謝罪の手紙を書けというんだよ、旗をやぶいたことについてね。」と、ゼバスチアンが報告しました。「そのうえ、捕虜とノートのひきわたしをねがう文句を書けというんだ。」

「わらわせやがる！」と、マチアスがさけびました。「おい、いこう！　あいつらをかたっぱしからやっつけてしまえ！」

「マルチンはどこへいったんだ？」と、ウリーが心配してたずねました。

「クロイツカムは、いったいどこだ？」と、ヨーニー・トロッツはたずねました。

「クロイツカムはエーガーラントの地下室にとじこめられて、しばられていると思うんだ。」と、ゼバスチアンがいいました。「エーガーラントの老夫人がそんなふうにいっていたよ。やつらは地下室のかぎと、せんたくものを干すアサなわをかしてくれ、といったらしいんだ。」

「じゃ、うさばらしにいこうじゃないか。」と、小だるくんがさけびました。ほかの者たちもまちきれずにいました。

そこへマルチンがかけつけてきました。

「突進だ！　敵はもう中庭にあつまってるぞ！」

ゼバスチアンは首席に報告をしました。

「きみはさっきからずっとどこにいたんだ？」と、ウリーがたずねました。

マルチンは外濠通りのかどの家を指さしました。

「あすこから、エーガーラントの家の中庭が見わたせるんだ。あいつは黒い布をふって、アホイとどなった。すると、まわりの家から一味のやつらがぞろぞろでてきた。」

マルチンは左右を見まわし、人数をかぞえて、「これでじゅうぶんだ。」と安心していいました。

「それから、クロイツカムがどこにいるか知ってるかい？」と、ゼバスチアンはねっしんにたずねました。

「知ってる。エーガーラントの地下室だ。実業学校の生徒が数人、見はりをしている。ぼくたちはすぐにおどりこまなくちゃならない。そうしないと、むこうはしだいにふえるばかりだ。中庭をおそって、地下室を占領しなくちゃならない。味方の半分は、ヨーニーの指揮のもとに、往来から家のなかに侵入し、ほかの半分は、ぼくのさしずのもとに、ぼくがいましがたまでいた、かどの家からへいをのりこえて側面攻撃をする。だが、数分おくれてだ。」

「ちょっとまった。」と、だれかがかれらのうしろでいいま

した。かれらはおどろいてむきなおりました。
禁煙先生が微笑をうかべて立っていました。
「こんにちは。」
と、かれらはいっせいに大声でいい、微笑をしかえしました。
「きみたちの計画はもちろんだめだ。」と、禁煙先生は説明しました。「エーガーラントはもう三十人の少年をあつめている。ぼくはちゃんと見てきた。そればかりでなく、きみたちのたたかいはひどいさわぎになるだろうから、特別警察の出動を見るかもしれない。」
「そしたら、両方の学校に知れて、いいはじさらしになるぜ。クリスマスまぎわになって。」と、ウリーがこごえながらいいました。マチアスはウリーをきびしく見つめました。
「だって、そうじゃないか。」と、ウリーはめんくらっていました。「ぼくは自分でこわいからいってるわけじゃないんだ、マッツ。」
「じゃ、どうしたら、いいんです?」と、マルチンがたずねました。
「あそこに普請をしてるところが見えるだろう? きみたちは実業学校の生徒たちをうながしてあすこで顔をあわせるんだ。そして、一騎うちの決闘をすりゃいい。なにもみんながなぐりあいをすることはないじゃないか。きみたちもむこうも代表者をだし、そのふたりが思いきりなぐりあえばじゅうぶんだ。きみたちの代表者が勝ったら、敵は無条件に捕虜をひきわたさなけりゃならない。」
「そしてもし実業学校の生徒が勝ったら?」と、ゼバスチアンがひにくをこめてたずねました。
「ばかなことをいうな!」と、マチアスはいいました。「きみはきゅうに気でもくるったのか。ぼくはいそいで、もひとつのまきパンを食わなくちゃ。」
かれはふくろに手をつっこみ、パンをかじりだしました。
「敵はバベルカを代表にたてるだろう。あいつなら、ぼくは左手でかたづけてやる。」
「よし!」と、マルチンがさけびました。「その手でいこう! ゼバスチアン、いそいでいって、やつらを普請場につれてこい! ぼくたちもすぐいく。」
「用心のため、雪のたまをうんとつくっておけ! まずくいったばあいのために。」と、ゼバスチアンは注意しました。
そしてかれはまっしぐらに町かどをまわっていきました。

第四章

技倒におわる一騎うち——実業学校生の違約——エーガーラントの精神的な苦しみ——マルチンのなぞの作戦計画——地下室でいくつもはりとばす——ひとかたまりの灰——勝ってもよいというゆるし
と、エーガーラントの退陣

普請場のいっぽうには高等中学の生徒が、他方には実業学校の生徒が立っていました。かれらはたがいにおこった目つきでじろじろ見あっていました。その場所のまんなかで両方の首領の正式の会見がおこなわれました。交渉員ゼバスチアンがエーガーラントをともなってきて、「敵はこちらの申し出に同意した。」と、マルチンにいいました。
「そこで決闘がおこなわれる。敵はハインリヒ・バベルカを代表にだす。」
「こちらはマチアス・ゼルプマンがでる。」と、マルチンが宣言しました。
「勝負は、両方のどちらかが試合場からにげだすか、ふせぐ力をうしなったときにきまったことにしよう、と、マチアスはいうんだ。」
エーガーラントは、大きくてがっしりしたバベルカのほうを見ました。バベルカは陰気にうなずきました。エーガーラントは「試合の条件はしょうちした。」といいました。
「こちらの代表が勝ったら、きみたちは捕虜と書取帳を無条件でひきわたす。バベルカが勝ったら、ひきわたさなくてもいい。」と、ゼバスチアンが説明しました。
「そのとき、きみたちは謝罪状を書くね?」と、エーガーラントはあざけりをこめてたずねました。
「ばんじそのときあらためて談判しよう。」と、マルチンがいいました。「最悪のばあいには手紙も書こう。まず、決闘だ。」
「両方の首領は、それぞれ味方のところまでもどってもらいます。」と、ゼバスチアンがさけびました。

いまや、あいたいする両軍のあいだには、広い場所があきました。左がわからバベルカが実業学校生の列をはなれてでてき、右がわからはマチアスが近づきました。

「アホイ！」と、実業学校生がさけびました。

「がんばれ！」と、高等中学生がどなりました。

いよいよふたりの闘士はたがいにすきをうかがいながら、むかいあいました。しいんとしずまりかえりました。みんな戦闘のはじまるのをまちうけましたが、ふたりのうちどちらも、しかけるけはいを見せませんでした。

とつぜんバベルカが電光石火のようにかがんで、敵の足をさらいました。マチアスはあおむけに雪のなかにばったりたおれました。あいてはかれの上におどりかかって、めったやたらになぐりつけました。

実業学校生は有頂天になってわめきました。高等中学生はきもをつぶしました。寒さとこうふんのあまりがたがたふるえていたウリーは、小声でつぶやきつづけました。

「マッツ、たのむからゆだんしないで！　マッツ、ほんとにゆだんしないで！　マッツ、気をつけて！」

マチアスはいきなりバベルカの右腕をつかまえて、じょじょに、しかしようしゃなくねじあげました。バベルカは御者のように、ちくしょう、ちくしょう、とののしりました。が、それはなんにもなりませんでした。かれはこらえきれなくなって、横にころがりました。こんどはマチアスがバベルカの頭をつかまえて、敵の顔を雪のなかにふかくおしつけました。バベルカは足をばたばたさせました。息が苦しくなったのです。

マチアスはふいにあいてをはなし、三歩さがって、つぎの攻撃をまちうけました。かれの左の目はふくれあがっていました。バベルカはうめきながらおきあがり、口いっぱいにつまっていた雪をはきだすと、怒りくるってマチアスめがけ、ぶつかってきました。だが、マチアスは頭をさげて敵をやりすごさせました。敵はもんどりうってマチアスの背なかをこし、また雪のなかにとびこみました。高等中学生はどっとわらい、手をこすりました。マチアスは味方のほうをふりむいて「いよいよこれからはじめるぜ。」とどなりました。

バベルカはおきあがって、げんこつをかため、敵をまちました。マチアスは近づいていき、身がまえして、打ちかかりました。あいてもなぐりかえしました。マッツはかさねて打ちました。こうしてふたりはなぐりあいをしばらくつづけ、どちらが優勢だとも見さだめがつきませんでした。やがてマ

チアスがからだをかがめたので、バベルカは防戦のため、げんこつを低くかまえました。が、マッツはぱっととびあがって、打ちかかり、むきだしになっている敵のあごに一撃をくわえました。

バベルカはよろよろとして、よっぱらったようにくるくるとまわり、腕をだらりとたらしました。完全にふらふらになっていました。

「やっつけろ、マッツ！　かたづけてしまえ！」と、ゼバスチアンがさけびかけました。

「まて、もう一ど立ちなおらしてやるんだ。」と、マチアスはどなりました。

バベルカはやっとの思いでからだをかがめ、ひとにぎりの雪を上着のえりのなかにつめこみました。それでかれは正気づき、またげんこつをかためて、マチアスめがけて突進してきました。マチアスがからだをかわしたので、あいてはもうれつないきおいでいきすぎてしまいました。実業学校の生徒たちは、「アホイ！」と、どなりました。

バベルカはふみとどまって、闘技場の雄牛のようにむきなおり、「むかってこい、このこじきやろう！」とうめきました。

「まってろ。」と、マチアスはいい、近よって敵の鼻の下にげんこつをつきつけました。バベルカはたけりくるって打ちかかりましたが、顔がむきだしになったので、はやくも耳のうしろにひどいのを食らって、しりもちをつきました。おきあがって、よろよろとマチアスのほうにむかってきたものの、大きな音がするほどのやつを数発横っつらに食らいました。だが、それはもうむようでした。かれはすっかりまいっていました。マチアスは戦闘力をうしなった敵の肩をつかまえ、ぐるりとむきをかえさせ、うしろからけとばしました。ぜんまいをまかれた人形のように、ハインリヒ・バベルカは試合場からよろめきでて、ぼかんとしている実業学校生たちのまんなかにとびこみました。みんながかれをひきとめなかったらかれはよろめきつづけたでしょう。

マチアスは熱狂的にむかえられました。みんな、かれとあく手をしました。

ウリーは顔をかがやかせていましたが、「ぼくははじめからしまいまで心配だったんだよ。目はひどくいたいかい？」といいました。

「ちっとも。」と、勝利者は感動してつぶやきました。

「それはそうと、ぼくのさいごのまきパンをしまっておいてくれたかい？」

小さいウリーは、かれに紙ぶくろをわたしました。マチアスはまたパンをかじりました。

「さあ、いそいでクロイツカムをつれだそう！」と、小だるくんがさけびました。

だが、予定どおりにはいきませんでした。エーガーラントがやってきて、こまりきった顔つきでいいました。

「まったく残念だがね、ぼくたちのなかまは捕虜をひきわたさないっていうんだよ。」

「そんなことは、ありえない！」と、マルチンがいいました。

「まえもってはっきり相談しておいたことだ！　そんなにかんたんに約束をやぶることはできないはずだ。」

「ぼくもまったくおなじ意見なんだ。」と、エーガーラントはうちしおれてこたえました。「だが、みんなはぼくのいうことをきかないんだ。それにたいして、ぼくにはどうもできないんだ。」

マルチンはかんかんになり、われをわすれてどなりました。

「そんなことは信じられん！　やつらはまったくのはじしらずなのか。」

「ちくしょう、ちくしょう！　そうと知っていたら、」と、マチアスがパンをかじりながらいいました。「バベルカのやつをきざみ肉（フリカセー）にしてやったのに。ウリー、フリカセーって単語はどう書くんだったかね？」

「Sが二つだよ。」と、ウリーがこたえました。

「Sの四つもあるフリカセーに料理してやるところだったのに。」と、マチアスがいいました。

「ぼくにとってもじつに苦痛な話なんだ。」と、エーガーラントはいいました。「ぼくはきみたちとまったくおなじ意見なんだが、なかまの者たちの味方をしなきゃならないんだよ、ね。」

「むろんそうだろう。」と、ゼバスチアンがいいました。「きみこそ気のどくだ。義務の板ばさみの適切な例だ。よくあるやつだ。」

禁煙先生が、ゆっくり普請場を横ぎってきて、マチアスにむかい、えらいぞといいたげにうなずき、なにごとがおきたのかとたずねました。ゼバスチアンが事情を説明しました。

「あきれたな！　そんならず者が今どきの少年のなかにもいるのか。マルチン、ぼくが決闘をすすめたが気のどくした

ね。決闘できめるなんてことは、紳士的な人間のあいだでしかおこなわれないことなんだね。」と、禁煙先生はいいました。

「そのとおりです。」と、エーガーラントもいいました。

「ぼくのなしうるただひとつのことは、ぼくが人質になって高等中学に身がらをまかせることだよ。マルチン・ターラーくん、ぼくはきみたちの捕虜だ！」

「すてき！」と、禁煙先生がいいました。「だが、それはむろんまったく無意味だ。何人とじこめたって。」

「よし。」と、マルチンがいいました。かれの顔はしんけんに青ざめていました。「きみは見あげた男だ。なかまのところにもどって、ぼくたちが二分間いないにかれらを攻撃すると、つたえたまえ。しかし、これがぼくらときみたちのあいだのさいごのたたかいだよ。約束をやぶるようなやつらを、ぼくらはもういくさのあいてにもしないんだ。そんなやつをぼくらはけいべつするだけだ。」

エーガーラントは無言で頭をさげてから、走りさりました。マルチンはいそいで少年たちを自分のまわりにあつめ、小声でいいました。

「さあ、よく気をつけるんだぜ。二分いないに思うぞんぶん雪合戦をはじめよう。ゼバスチアンが指揮をとる。マチアスとヨーニー・トロッツとぼくとはちょっと近所までいってきたいんだ。ぼくたちがもどらないうちにいくさに勝ってしまってはこまるんだ。きみたちの任務は、実業学校生をここに釘づけにすることなんだ。だからすこしぐらい退却してもいいんだ。敵がおってくるようにね。」

「そいつはむりな注文だな。」と、小だるくんがいい、かがんで、雪のたまをつくりました。

「すばらしい計画だ。」と、ゼバスチアンはすっかり感心していいました。「ぼくがひきうけた。ここでうまくあやつってるよ。」

ウリーは、なるたけマチアスといっしょにいたかったので、マルチンのそばにいきました。

「ぼくもいっしょにいってもいいかい？」

「だめだよ。」と、マルチンがこたえました。

「ウリー、きみはここにのこって、退却のとき、ひと役つとめるんだ。それならきみにうってつけの役だろう。」と、ゼバスチアンがいいました。

ウリーは目になみだをうかべました。

マチアスは、ゼバスチアンをなぐりたおさんばかりの身が

まえをしましたが、「こんつぎおぼえてろ。きょうは個人的な感情にはしりたくない。」といまいましそうにいいました。

むこうから雪のたまが飛んできはじめました。ゼバスチアンは命令をだしました。普請場の戦闘ははじまりました。

禁煙先生はウリーにむかって「頭をあげて、ちびさん！」といい、ほかの者たちには、「しっかりたのむよ。マルチンがいるから、ぼくなんかいなくてもいいだろう。」とうなずきかけました。

「だいじょうぶ！」と、かれらはどなりました。禁煙先生は風をきって飛ぶ雪のたまのあいだをとおって、やさしい思案顔で家のほうへ、れいの客車のなかへかえっていきました。

ゼバスチアンはひとつの分隊からほかの分隊へとせわしくうごきました。高等中学の生徒たちは、敵が約束をやぶったことにたいしてかんかんに憤慨し、実業学校の生徒たちをふみにじってやりたくてたまりませんでした。とりわけ小だるくんはがまんがなりませんでした。「もういいかげんに突撃の——命令をだせ。」とどなろうとしましたが、そのとたんに、敵の雪のたまがかれの口のなかではれつしました。かれはぽかんとしました。中等科三年生たちはどっとわらいました。

「なぜぼくたちがいま勝ってしまってはいけないか、きみにはのみこめなかっただろうが、とにかくきみは服従しなくちゃいかん。」と、ゼバスチアンはいい、ウリーをさがしました。ウリーは両手がこごえるので、ズボンのポケットにいれていましたが、ゼバスチアンのまなざしに気づくと、あわてて手をだし、砲撃にくわわりました。

そのあいだにマルチンとヨーニーとマチアスは、外濠通りにそって走り、かどの家のなかにすがたをけし、さらに中庭にかけこみ、へいをこえて、エーガーラントの家の内玄関の前に立ちました。

「あすこが地下室の入口だ。」と、マルチンがささやきました。マチアスは用心ぶかくドアのハンドルをまわしてひらき、三人で足音をしのばせて、ねばねばする階段をおりていきました。まっ暗やみのただなかへ。古いジャガイモのにおいがしました。

三人はせまい細い廊下を手さぐりしてすすみました。二、三どかどをまわりました。そこでヨーニーがマルチンのそでをひっぱりました。三人は立ちどまって、あかりのついている横廊下をみとめました。しのび足でゆっくり近づくと、聞きおぼえのない少年の声が聞こえました。

「クルト、また十分たったぞ。」と、その声はいいました。

「よし、じゃ、またつづけるかな。」と、ほかの声がいいました。「もうおれは手がいたくなっちゃった。」

それから、横っつらをたたく大きな音が、六ぺんつづけさまに聞こえました。そのあとは墓場のようなしずけさにかえりました。

「なによりも、きみたちがはずかしいと思わんのがふしぎだ。」と、だしぬけに第三の声がいいました。

「あれはクロイツカムだ。」と、ヨーニーがささやきました。三人はしのび足ですすんでいくと、真相がわかりました。半分あいているこうし戸のなかにふたりの実業学校生が立ち、古いぐらぐらする台所用のいすにルディ・クロイツカムが腰かけていました。かれはせんたくものを干すアサなわでぐるぐるまきにされ、手足はまったくうごかすことができず、異様に赤いほおをしていました。机の上でもえさしのろうそくが三本もえていました。おくのすみには、たきぎと、れんたんと、石炭とのあいだに、モミの木がたてかけてありました。それはエーガーラントの父が二日まえにクリスマスのために買ってきたものでした。

「ぼくの友だちが救いだしてくれたら、たんまりお礼のしかえしはするぞ。」と、クロイツカムが憤激していいました。

「それまでに、きさまはふやけて、かびがはえてるだろう。」と、実業学校生がいいました。

「おそくも一時間のうちに、みんなはぼくのいどころをつきとめてくれるだろう。」と、クロイツカムは確信をもってこたえました。

「そんなら、それまでにしこたま横っつらにごちそうを食らわしてやろう。」と、べつの生徒がいいました。「十分ごとに六つ。つまり一時間には三十六だ。」

「応用数学だ！」と、さいしょの生徒がどなり、地下室もふるえるほどの声でわらいました。「きさまのなかまは、そのまえにでもくるかい？」

「きっと。」と、クロイツカムはいいました。

「それじゃ、念のため、さっそくあと半ダースお見まいしておこう。いわばまえがしだ。クルト、遠慮するなよ！」

クルトとよばれた生徒は、クロイツカムのいすのまぢかにあゆみより、左手をあげて打ちかかりました。つぎに右手をあげて打ちかかり、「これで二つ。」といいました。それからまた左手をあげましたが、そのときにはもうマチアスがかれのそばにきていました。三発めを横っつらに食らったのはクルト自身でした。

クルトは、ドシンとエーガーラントのクリスマス・ツリーのなかにすっとんで、モミのとがった葉のなかにしりもちをつき、泣き声をあげながら顔の左半分をおさえました。マルチンは、もうひとりの実業学校生に、たてつづけに二発食らわしたので、そいつは目がくらみ、耳も遠くなりました。ヨーニーは、はれあがっているクロイツカムをときはなしてやりました。

「早く！」と、マルチンがさけびました。「二分間いないに普請場にもどらなくちゃ！」

ルディ・クロイツカムはからだを前後左右にのばしました。からだじゅうの骨がいたみました。ほおがひどくふくれていたので、だんごでもほおばっているように見えました。

「一時半からこのいすにかけていたんだ。」と、かれはいって、いすをけとばしました。「もう四時だぜ。十分ごとに横っつらを六つはられたんだ！」

「そいつはまったくわらい話じゃないな。」と、マチアスも同感し、アサなわをとりあげました。

かれらはふたりの実業学校生を背なかあわせにして、念いりにしばりつけました。

「これでよしと。それじゃ大いそぎでこのおなまちゃんをなぐりかえしてやれ。二時間半は百五十分だ。いくつぶたれるか勘定になるか、クルト？」と、マルチンがいいました。

「九十発。めいめい四十五発。」と、クルトが泣きながらこたえました。

「そんなに時間がありゃしない。」と、マチアスがいいました。「おれがめいめいに一発ずつ横っつらをはってやろう。それで、ルディから九十発食らうくらいのききめはある。」

すると、もうひとりの生徒はおいおい泣きだしました。

「ルディ、それはそうと、書取帳はどこにある？」と、マルチンがたずねました。

クロイツカムはかたすみを指さしました。

「見えないじゃないか。」と、マルチンがいいました。

「よく気をつけて見てみたまえ！」と、クロイツカムがこたえました。

すみっこにひとかたまりの灰がありました。いくらか炭になった紙と、青いカバーのはしっこが、それと見わけられました。

「えっ！　これがおれたちの書取帳だというのか。」と、マチアスがさけびました。

クロイツカムはうなずきました。

「あいつらはそれをぼくの目の前で焼いたんだ。」

「きみのおやじさんはよろこぶだろう。」と、マルチンはいいました。そしてハンケチをとりだし、なかに灰をいれ、ていねいにしばって、ズボンのポケットにいれました。

「ひどい話だな。」と、ヨーニーがいいました。

マチアスは満足げに両手をこすり、「おれは、灰をいれるつぼをひとつ寄付するよ。書取帳を禁煙先生の庭にうめよう。おくやみはありがたくおことわりだ。」と、大げさにいいました。

マルチンはちょっと考えてからいいました。

「ルディ、きみはすぐ家に走ってかえるんだ。おやじさんが、書取帳は？　とたずねたら、学校においてあるというんだ。ぼくがあすの朝、一時間めに先生にわたすってね。いいかい？　それいじょう、なにもいっちゃいけないぜ。ぼくたちはこれからまた普請場で、実業学校のやつらを大いそぎでやっつけなきゃならん。そしたらとんでかえる。美少年のテオドルがきっとまちうけてるだろう。さあいこう！」

かれらは地下室を立ちさりました。マチアスだけがあとにのこりました。ほかの者たちは階段をあがりながら、二どづつけさまに、パチッという大きな音を耳にしました。つづいてふたりの少年が犬のように泣きわめくのが聞こえました。中庭でマチアスは三人においつきました。

「あれでだいじょうぶだろう。やつらはもう二どと高等中学生をとじこめるようなことはしないだろう。」と、マチアスはいいました。

クロイツカムは家の戸口でいとまをつげました。

「どうもありがとう。うまくやってくれたまえ！」といって、かれはみんなとあく手しました。

「だいじょうぶ！」と、かれらはさけんで、かどをまがってかけだしました。クロイツカムはそっとほおにさわってみ、頭をふって家へかけだしました。

普請場の手まえでマルチンはみんなをひきとめ、「ヨーニー、きみは味方のところにいって、ゼバスチアンに『もう勝ってもいいぞ！』とどなるんだ。わかったかい？　きみたちはすぐ攻撃にくわわれ。きみたちが格闘にうつるやいなや、マチアスとぼくは敵の背後におそいかかる。いけ！」といいました。

ヨーニーはいっしょうけんめいにかけだしました。

マッツとマルチンは普請場の囲いのすきまから、ようすをうかがいました。ゼバスチアンと味方の者たちはわざとかたすみにおいつめられました。雪のたまが飛びました。実業学校生は「アホイ！」とさけび、もう勝った気になっていました。

「ウリーが見えるかい？」と、マチアスがたずねました。

「見えないね。」と、マルチンがいいました。「気をつけて、マッツ！　囲いをこすんだ！」ふたりは囲いをよじのぼってこし、ちょうどよいところにつきました。ゼバスチアンはうまくことをはこんでいました。高等中学生たちがまったくふいに前進してきたので、実業学校生たちは逆襲をくってしりぞいたところでした。

マチアスとマルチンは普請場を横ぎってかけつけ、しりぞく実業学校生の背後にうちかかりました。恐れをなして、雪のなかにたおれたままでいるものも、少なくありませんでした。

「がんばれ！」と四方八方からひびいてきました。マッツのすがたがあらわれるところでは、敵はうき足だち、あるいはばらばらになって、あるいはむれをなしてにげました。

エーガーラントだけがふみとどまっていました。血をながしながらも、かれは悲痛な決意をおもてにあらわし、さながら不幸な王さまの観がありました。小だるくんが、かれをめがけて突進しました。

だが、マルチンは、敵の首領の前に立ちはだかり、「われわれはかれの退却をさまたげない。かれだけが紳士らしく、さいごまで勇かんだった。」とさけびました。

エーガーラントはうしろをむいて、うちしおれ、しょんぼりと戦場をさりました。

そのとき、フリドリンがマルチンたちのところへかけよりました。

「クロイツカムは救われたか。」

マルチンはうなずきました。

「書取帳は？」と、小だるくんが好奇心をもってたずねました。

「ぼくのハンケチのなかにはいっている。」と、マルチンはいい、敬意とおどろきをあらわしている一同に焼けのこりを見せました。

「しろうとはおどろき、くろうとはあやしむか。」と、ゼバスチアンがいいました。

「ウリーはいったいどこにいった？」と、マチアスがたずねました。

小だるくんが親指でうしろのほうをさしました。マチアスは普請場のはずれまで走っていきました。そこにウリーが厚板の上に腰かけて、雪のなかを見つめていました。

「どうしたんだ？　ちびさん。」と、マチアスがたずねました。

「べつに、どうもしやしないよ。」と、ウリーは小声でこたえました。「ぼくは、またにげだしちゃったんだ。よりによってあのバベルカがぼくをめがけてやってきた。ぼくはだんぜん足をかけてたおしてやるつもりだったが、あいつの顔を見ると、おしまいだった。」

「まったく、あいつは恐ろしいつらをしている。ぼくもあいつにとびかかってこられたときは、気持ちがわるくなったよ。」と、マチアスがいいました。

「きみはぼくをなぐさめてくれるけれど、ぼくはこのままじゃだめだ。遠からずなにかおきるにちがいないよ、マッツ。」と、ウリーはいいました。

「まあ、きたまえ。みんな、ひきあげていくところだよ。」と、マチアスがいいました。

ふつりあいな二人組はみんなのうしろから走っていきました。マラソン競走で学校へかえっていくのでした。美少年のテオドルをめざして。

負けた実業学校生たちは、山林通り十七番地の中庭にあつまって、エーガーラントをまちうけていました。

かれはしんけんなおももちでみんなのあいだにはいっていき、

「捕虜をはなしてやれ。」といいました。

「そんなことは思いもよらん。」と、バベルカがさけびました。

「そんなら、きみたちのすきなようにするがいい。そしてべつの指揮者をえらびたまえ。」

かれはだれの顔も見ないで家へはいりました。

ほかの者たちはわっとどなりながら地下室に殺到しました。かれらは捕虜にたいして、腹いせをしようと思っていたのです。

ところが、ひとりの捕虜のかわりに、かれらはふたりの捕虜を見いだしました。みんな、たがいになさけない顔を見あって、ひどくはじいりました。

第五章

美少年テオドルとでくわす——寄宿舎の規則に関する討論——思いがけぬほめことば——ふさわしい罰——舎監の長い物語——少年たちがあとでいったこと

もう午後もおそくなっていました。五時ちょっとすぎでした。雪はもうふっていませんでしたが、いおう色のおもい雲が空にかかっていました。冬の夕べのとばりが町の上にたれかかりました。一年じゅうでいちばん美しい夜、神聖な夜をむかえるのに、もういく晩もないのでした。おおくの家いえの窓を見あげる人はみな、二、三日たつとクリスマス・ツリーのもえるろうそくが、暗い往来をちらちらてらすだろうと思わずにはいられませんでした。また、そのときはわが家の両親のもとで自分のクリスマス・ツリーをあおぐのだと、みな思うのでした。

あかあかとてらされた店は、モミの枝やガラスのかざりでよそわれていました。おとなは包みをかかえて店から店へといそぎ、ひどくもったいぶった顔をしていました。往来には、蜜入り菓子のにおいがただよい、道がそのお菓子でしきつめられてでもいるかと思われるほどでした。

五人の少年は、あえぎながらいそいで坂をのぼっていました。

「ぼくはクリスマスに拳闘練習用のボールをもらうんだよ。」と、マチアスがいいました。「正義先生は、ぼくがそれを体育館につるすのをきっとゆるしてくれるだろう。おい、たいしたことになるぜ。」

「きみの目は、はれあがって、いっそう小さくなったよ。」と、ウリーがいいました。

「たいしたことはない。拳闘家という職業にはありがちのことさ。」

かれらは学校に近づきました。もう学校が見えました。学校は町の上の高いところにありました。各階にあかあかとあかりがついているので、夜の海を走る大洋船に

にた感じでした。左の塔のずっと上のほうに、ぽつんと二つあかりのついている窓がありました。そこに舎監のヨハン・ベク先生が住んでいました。

「数学の宿題があったかい？」と、ヨーニー・トロッツがたずねました。

「あったよ。比例の応用問題だが、お茶の子だ。晩めしのあとでかたづけるさ。」と、マルチンがいいました。

「じゃ、ぼくはあすの朝、きみのをうつすぜ。」と、ゼバスチアンはいいました。「時間がおしいよ。ぼくはいま遺伝学の本を読んでいるところだが、そのほうがずっとおもしろいんだ。」

少年たちはあえぎながら坂をのぼっていきました。足の下で雪がザクザクと音をたてました。

学校の門の前では、だれかがいったりきたりしながらタバコをすっていました。それは美少年のテオドルでした。

「やっこさんたち、かえってきたね。」と、かれは意地悪そうにいいました。「こっそり映画にいったんだな？　さぞかしおもしろかったことだろう。罰せられても、悔いのないくらいにね。」

「すばらしい映画だったよ。」と、ゼバスチアンが負けずにうそをつきました。「主役はあんたにひどくにていたよ。もっとも、あんたほど美しくはなかったけれど。」

マチアスはわらいましたが、マルチンは「そんなばかなことをいうのはどうかやめてくれ、ゼップ！」といいました。

「むろん、おまえもまたいっしょなんだろう！」と、美少年のテオドルはいい、今はじめてマルチンに気づいたようなふうをしました。

「おまえのようになまいきなやつに、奨学金をだしているなんて、まったく合点がいかんよ！」

「あなただって絶望しないで、」と、ヨーニーがいいました。「まだお若いんですから。」

美少年のテオドルは、火をはかんばかりでした。

「よし、いっしょにこい。のらくら者めら！　ベク先生がさっきからおまちかねだ。」

かれらは、塔になっている棟のまわり階段をのぼっていきました。最上級生のテオドルは、マルチンたちがまたこっそりにげだしはしないかと、不安をいだいてでもいるかのように、警官みたいにあとからついてきました。

一分間ののち、かれらはそろって舎監室で正義先生の前に

立っていました。

「脱走者をつれてまいりました、先生。」と、美少年のテオドルがいいました。その声は蜜のようにあまくひびきました。

ベク先生は机にむかって腰かけたまま、五人の高等科一年生をじろじろ見ました。先生がなにを考えているか、顔いろにはいっこうあらわれていませんでした。五人ともそろってただならぬようすをしていました。マチアスは目をはらしており、ゼバスチアンのズボンは、ひざの上がさけていました。ウリーの顔と手は寒さのため紫色になっていました。マルチンの髪はみだれて顔にたれさがり、ヨーニーの上くちびるからは血がでていました。かれにあたった雪のたまのひとつには石がはいっていたのです。雪が五足のあみあげ靴からとけて、五つの小さい水たまりをつくりました。

ベク先生は立ちあがって、告発された五人の生徒のまぢかにあゆみよりました。

「この点について寄宿の規則にはなんとある、ウリー？」

「寄宿生は、外出時間いがいに校舎をはなれることを禁じられています。」

小さいウリーはびくびくしながらこたえました。

「なんらかの例外のばあいがあるか、マチアス？」と、ベク先生がたずねました。

「はい、先生、先生がたのひとりが学校をはなれるように命令、あるいは許可したばあいです。」と、マチアスがのべました。

「どの先生がきみたちに町へいくひまをだしたか。」と、先生はたずねました。

「だれもだしません。」と、ヨーニーがこたえました。

「だれの許可できみたちは外にでた？」

「ぼくたちは許可をうけずにぬけだしました。」と、マチアスが説明しました。

「そうじゃありません。」と、マルチンがいいました。「ぼくがみんなに、ぼくについてこいと命令したんです。それについてはぼくにだけ責任があります。」

「きみがこのんで責任をおうことはよくわかっている、マルチン。」と、ベク先生はきびしくいいました。「きみはその権利を濫用しちゃいけない！」

「マルチンは権利を濫用したわけじゃありません。」と、ゼバスチアンがさけびました。「ぼくたちは町へいかなきゃならなかったのです。まったく、のっぴきならなかったので

す。」

「なぜきみたちは、係の舎監たるわたしに許可をもとめなかったのか？」

「先生は、寄宿舎の規則にしたがって許可を拒絶されたでしょう。」と、マルチンがいいました。

「そしてそのばあいでも、ぼくたちはやはり町へかけつけなければならなかったでしょう！　そうしたら、いっそうまずいことになっただろうと思います。」

「なに？　きみたちは、わたしの厳重な禁止にそむいてでも行動しただろうっていうのか。」と、正義先生がたずねました。

「そうです！」と、五人がいっせいにこたえました。

「残念ながら。」と、ウリーが低い声でつけくわえました。

「まったくあきれはてますよ、先生！」と、美少年のテオドルはいい、頭をふりました。

「わたしは、きみ独自の見解をきいたおぼえはないよ。」と、ベク先生がいうと、テオドルはシチメンチョウのように赤くなりました。

「なぜ、きみたちは町へいかなければならなかったのだ？」と、先生はたずねました。

「こんども実業学校生のためです。」と、マルチンがのべました。「かれらがわれわれの通学生のひとりをおそったのです。その通学生と、クロイツカム教授のところへ採点のためとどけられるはずの書取帳とが、ゆくえ不明になったのです。ほかの通学生がそのことをわれわれに報告しました。そこで、捕虜を救うために町へいかなければならないことはまったく明らかでした。」

「捕虜を救いだしたか？」と、先生がききました。

「はい。」と、四人がさけびました。ウリーはだまっていました。かれは、はいとこたえる資格が自分にはない、と思ったのです。

ベク先生はヨーニーのさけた上くちびるとマチアスのはれた目を見つめたのち、「だれか、けがをしたか？」とたずねました。

「ちっとも。」と、マチアスがいいました。「だれも。」

「書取帳だけが……。」と、ゼバスチアンがいいました。

マルチンがひどく腹をたててゼバスチアンをにらみつけたので、かれのことばはとぎれてしまいました。

「書取帳はどうなったのか？」と、正義先生がたずねました。

「地下室で、しばられた捕虜の目の前で焼かれました。見つかったのは灰だけです。」と、マルチンがいいました。

「その灰はマルチンのハンケチのなかにはいっています。」と、マチアスはほがらかに説明しました。「ぼくはその灰をいれるために骨つぼを寄付します。」

ベク先生はかすかに顔をほころばせましたが、微笑したのはほんの十分の一秒のことで、すぐまたまじめな顔にかえりました。

「それでどうしたらいいのだ？」と、先生はたずねました。

「ぼくはあすの朝、点数表をつくります。」と、マルチンがいいました。「そしてクラスの者は、めいめい九月いらい書取帳にもらった点数をぼくに知らせます。ぼくは点数をのこらず書きこんで、完全な表を授業のはじめにクロイツカム先生に提出します。まだ採点されていないさいごの書取りはもう一どやりなおさなければなりません。」

「くわばら、くわばら。」と、マチアスはつぶやき、頭をふりました。

「クロイツカム教授がそれでしょうちなさるかどうか、わたしにはわからない。」と、正義先生がいいました。「きみたちは点数をぜんぶおぼえてもいまい。それにもかかわらず、わたしはきみたちの行動を承認するといわなければならない。きみたちは腕白者なりといえ、そのふるまいには非のうちどころがない。」

五人の少年の顔は、五つの小さい満月のようにかがやきました。美少年のテオドルも微笑しようとしましたが、微笑にはなりませんでした。

「しかし、どっちみち、規則違反だ、許可をえないで学校をはなれたのは。」と、ベク先生がいいました。「長いすにかけたまえ！　きみたちはつかれている。どうすべきか、よく考えよう。」

五人の少年は長いすに腰をおろし、正義先生を信頼こめて見つめました。最上級生のテオドルは立ったままでいました。かれはできることなら、でていきたかったのですが。

ベク先生はへやのなかをいったりきたりしていましたが、しまいにいいました。

「このできごとをまったくありのままに批判すると、きみたちは許可なくして外にでた、ということがみとめられるだけだ。これにたいしては、ふつうどういう罰がおこなわれるか、ゼバスチアン？」

「二週間の外出禁止。」と、ゼバスチアンはこたえました。

「だが、情状をくみとることはできる。」と、正義先生はつづけました。「そうすると、きみたちが信頼すべき級友として万難をはいして、町にいかなければならなかったということは、さしずめ、議論の余地がない。きみたちのあやまちは、許可をうることをわすれたという点にのみある。」

かれは窓のそばにあゆみより、ガラスごしに外を見、顔をそむけたままいいました。

「なぜきみたちはわたしにきかなかったのか？　それほどわたしを信頼していないのか？」

先生は正面をむきました。

「それじゃ、わたし自身も罰をうけるべきだろう。わたしもきみたちのおちどに責任があるわけだから。」

「とんでもない、正義さん。」と、マチアスはむちゅうになってさけびました。それからすぐわれにかえってまごつきながら訂正していいました。「先生、とんでもない。だって先生はごぞんじでしょう。ぼくたちがどんなに先生を……」

かれは口にはだせませんでした。かれは、窓のそばに立っているその人を、自分たちがどんなに愛しているかを、あらわにいうことをはじめました。

マルチンはいいました。

「ぼくたちがとびだすまえ、まず先生にきくべきかどうか、短時間ながらぼくはよく考えましたが、それはまちがってると感じました。信頼がどうのこうのというわけじゃありません。ぼくにはなぜ先生にきかなかったのか、自分にもはっきりわかりません。」

それは、おそろしく頭のはたらくゼバスチアンお得意のところでした。

「そのことがらは、まったくすじみちがとおっています。」と、かれは説明しました。「二つのばあいしかありませんでした。先生がぼくたちのねがいを拒絶するか、ぼくたちの外出をゆるすか、どっちかでした。第一のばあい、ぼくたちは先生の禁止命令にさからって行動しなければならなかったでしょう。第二のばあい、だれかになにごとかおきたら、先生は責任を問われたでしょう。ほかの先生たちや父兄は、先生に、なんだかだ、と文句をいったでしょう！」

「まずそういったところです。」と、マルチンがいいました。

「きみたちはよくよく責任ずきだな。」先生はこたえました。

「つまり、きみたちはわたしにいやな思いをさせたくないというので、きかなかったまでだね。いや、けっこう。きみたちはまちのぞんでいた罰をうけなきゃならん。それではわたしは、休暇後さいしょの午後の外出をきみたちに禁止する。寄宿舎の規則はそれでまもられる。それとも！」

ベク先生はテオドルの顔をうかがいました。

「むろんけっこうです、先生。」と、美少年テオドルはあわてていいました。

「その罰にあたる午後、きみたち五人は、わたしのお客としてこのへやにまねかれる。そしてコーヒーを飲みながらだべろう。それは寄宿舎の規則にはないが、べつに文句はおきまいと思う。それとも？」と、先生はまたテオドルの顔を見ました。

「ちっとも、先生。」と、美少年テオドルはフリュートをふくような声をだしました。できることなら、きえてしまいたかったでしょう。

「きみたちは罰をうけるか。」と、ベク先生はたずねました。

少年たちはうれしそうにうなずき、たがいにひじでわき腹をつつきあいました。

「すてきです。お菓子もですか。」と、マチアスがさけびました。

「ぜひそうしよう。」と、正義先生はいいました。「きみたちをおいだすまえに、ささやかな物語をしてきかせよう。わたしにたいするきみたちの信頼は、まだきみたちに役だつほどに、またわたしののぞむほどに大きくないような気がするからね。」

美少年テオドルはまわれ右して、つまさきで立ちさろうとしました。

「いやいや、きみもここにいたまえ。」と、ベク先生はよび、机にむかって腰をおろし、窓ごしに外が、冬の夕べが見えるように、いすをまわしました。そして物語りました。

「かれこれ二十年もまえのことだ。そのころもここにはきみたちのような少年がいた。きわめて厳格な最上級生もいた。ひとりの舎監もいた。その先生は、今われわれがいるこのへやに住んでいた。二十年まえ、きみたちの鉄のベッドに眠り、教室や食堂できみたちの席に腰かけていた、小さい高等科一年生の話なんだよ。かれは、けなげな勤勉な少年だったが、マルチン・ターラーのように不正なことにたいして憤慨したもんだ。いざとなると、マチアス・ゼルプマンのようにげんこつをふりまわした。ときどき、夜なかに寝室の窓ぶちに腰かけて、ウリー・フォン・ジンメルンのように家をこいしがった。ゼバスチアン・フランクのようにおそろしく理屈っぽい本を読んだ。そしてかれはヨナタン・トロッツの

ようにおりおり公園のなかにすがたをけした。」

少年たちは長いすにならんで無言のまま腰かけ、ねっしんに耳をかたむけました。

ベク先生はつづけました。

「ある日、この少年のおかあさんがひどい病気になった。おかあさんは、生まれた小さい村からキルヒベルクの病院にはこばれてきた。そうしないと、死んでしまっただろうから。その場所は、きみたちも知っている。町のむこうのはずれにある大きな赤れんが建てで、うしろの庭のなかにバラック隔離病舎がある。

小さい少年はひどくこうふんしていた。一分間も心の休まるひまがなかった。ある日、おかあさんのぐあいがひどくわるかったので、ことわりもせずに学校からぬけだし、町を横ぎって病院にいき、病人のベッドのそばに腰かけ、おかあさんのあつい手をにぎっていた。そして、あすは外出日だから、またくると、おかあさんにいい、遠い道を走ってかえった。学校の門のところにひとりの最上級生がかれをまちうけていた。それは、かれらにゆだねられた権力を、よく考えて寛大につかうだけの分別のまだできていない少年のひとりだった。かれは小さい少年に、どこにいっていたと、たずねた。少年は病気のおかあさんのところからかえってきたと、この上級生にいうくらいなら、自分の舌をかみきっただろう。最上級生は、罰としてよく日の外出許可をとりけしてしまった。

それでもよく日、少年はとびだした。おかあさんがかれをまっていたから！　かれは町を横ぎって走った。そして一時間おかあさんのまくらもとにいた。おかあさんのぐあいは、まえの日よりいっそうわるかった。おかあさんは少年に、あすまたきておくれ、とたのんだ。かれは、そう約束して、学校へ走ってかえった。

最上級生はもう、舎監に、少年が外出を禁止されていたにもかかわらず、またにげだした、と報告していた。少年は舎監のところへいかねばならなかった。それはこのへやだった。かれは、二十年まえだが、ちょうどさっききみたちが立っていたところに立った。舎監はきびしい人だった。少年がなにもかもうちあけることのできるような先生ではなかった！　少年はだまっていた。それで、かれは一か月間、学校をはなれてはならない、といいわたされた。

しかしかれはよく日もまたでかけた。かえってくると、かれは校長のところへつれていかれた。校長はかれに監禁の罰をくわえた。校長がよく日少年をお祈りにつれていこうと思って、学校の番人に監禁室をあけさしたら、なかにはべつな少年がはいっていた！　それは脱走した少年の友だちで、小さい少年がおかあさんのところへいけるように、身がわりに監禁されたのだった。」

「そうだ。」と、ベク先生はいいました。「ふたりは親友だったのだ。ふたりはのちのちまで、親しくしていた。いっしょに勉強し、いっしょに住んでいた。ひとりが結婚したのちも、かれらははなれなかった。だがそののち、子どもが生まれて死に、妻も死んだ。その葬式のよく日、その人はすがたをけした。その友だち、つまりいまわたしがきみたちに聞かせた話の主人公は、それっきりその人の消息を聞かなかった。」

ベク先生は頭を手でささえ、たいへん悲しいまなざしをしました。

「校長は、」と、ベク先生はようやく話をつづけました。「監禁室にはいって、かえだまのことを知ると、かんかんにおこった。そこで少年は、友だちがなぜたびたびにげてでたかを説明した。その結果はやはりよかった。そのとき母を病院に見まった少年は、心から信頼できる先生がいなかったばかりに苦しんだので、大きくなったらおなじ学校で舎監になろうと決心した。少年たちが心のなやみとすることをなんでもいえるような人になってやるために。」

正義先生は立ちあがりました。その顔はやさしくて同時にげんしゅくでした。かれは五人の少年の顔を長いあいだ見つめました。

「この少年の名まえを、きみたちは知っているかい？」

「はい。」と、マルチンが低い声でこたえました。「ヨハン・ベクという名まえです。」

正義先生はうなずきました。

「さあ、ひきさがった、山賊ども！」

そこで五人は立ちあがり、あらたまったおじぎをして、しずかにへやをでました。美少年のテオドルはうなだれてかれらのそばをとおりぬけていきました。

階段でマチアスは、「あの先生のためなら、ぼくは必要とあれば、首をくくられてもいい。」といいました。

ウリーはなみだをおさえて泣いているように見えました。

そして「ぼくも。」といいました。

五人がめいめいべつなへやにはいるまえに、ヨーニーは廊下に立ちどまってたずねました。

「先生のために監禁室にはいり、葬式のよく日、完全にすがたをけした友だちはだれだと思う？」

「見当もつかん。」と、マチアスがいいました。「いったいどうしてそれがわかる、というんだい？」

「わかるとも！」と、ヨーニー・トロッツはいいました。「ぼくたちがみんな知ってる人だ。その人はここから遠くないところに住んでいる。きょう、ベクという名を聞いたとき、その人はびくっと身ぶるいしたよ。」

「きみのいうとおりだ。まったくきみのいうとおりだ。ヨーニー！　ベク先生のゆくえ不明になった友だちをぼくらは知ってるんだ！」と、マルチンがいいました。

「じゃ、いいかげんにいってくれ。」と、マチアスはじれったそうにさけびました。

ヨーニーはいいました。

「それは、禁煙先生さ。」

第六章

六頭だての馬車の絵——古いしゃれを大いによろこぶ——ずぶぬれにおどろく——幽霊の行列——かゆくなる粉をまく動物——窓ぶちのヨーニーと未来の計画

夕食後、みんなはまた勉強べやにかえりました。マルチンはよく日の数学の宿題をかたづけ、焼けた書取帳の点数を書きこむ表をつくりました。マチアスは点数をきかれても、思いだせませんでした。

「ぼくのところには書取りごとに丁を書きこんでおいてくれ。」と、かれはしまいにいいだしました。「それでも、いいほうだからね。」

それからかれは番人のところで金づちと釘をかりてきて、大きなひびきをたてて、モミの枝を壁に打ちつけました。しまいに隣室の連中がたまりかねて、いそぎの使いをよこし、だれか頭の調子でもきゅうにくるったのか、とたずねました。第九室の室長、美少年テオドルは別人のようになりました。マルチンが、点数をあつめるためほかのへやにいってもよいかときくと、かれは「むろんいいよ。だが、あまり長くならないように。」といいました。

マチアスはめんくらって、マルチンを見つめました。正義先生のところでのできごとを知らない同室生たちは、まったくあいた口がふさがりませんでした。いあわせたもうひとりの最上級生はおどろいて「いったいきみはどうしたんだ、テオドル？　病気にでもなったのかい？」とたずねました。

マルチンはその場面が気づまりだったので、いそいでへやをかけだし、寄宿の高等科一年生をのこらずたずねて、点数を表に書きこんでから、ヨーニー・トロッツのところにいきました。そこの室長は気持ちのいい人でした。

「やあ、マルチン、もうあらたな作戦かい？」と、かれはたずねました。

「いや、こんどはちがうよ。ヨーニーとぼくはクリスマスのお祝いに、ある人をおどろかす相談をしたいんだ。」と、マ

ルチンはこたえました。それから、ふたりはささやきあい、明日の昼食後、正義先生を、菜園にひっぱっていくことにきめました。

「ぼくたちの見当ちがいでなければいいが。そうでないと、とんでもないことになるぜ。禁煙先生と正義先生とが、ぜんぜんあいてを知らないと、たがいにぶっきらぼうにいった場面を考えてみたまえ！」と、マルチンがいいました。

「そんなことは絶対にない。」と、ヨーニーがきっぱりといいました。「こういうことで、ぼくは見当ちがいはけっしてしない。ぼくを完全に信じたまえ！」

かれは考えこみました。

「きみはつぎの点をわすれてはいけない。禁煙先生が客車をもってぼくたちの学校のそばへひっこしてきたのは、けっして偶然じゃない。あの人はひとりで暮らそうと思って、何年もまえに自分の周囲をふりすてて、まったくゆくえをくらましてしまったのだが、やっぱり過去とのつながりを完全にたちきることはできなかったのだ。ぼくたちと話しあうとき、あの人は自身の子ども時代をしのんでいるのだ。ぼくにはその気持ちがいちいちとてもよくわかるよ。マルチン！　まるで、自分自身の身のうえのように。」

「おそらく、きみのいうとおりだ。」と、マルチンはいいました。「いやあ、ふたりともよろこぶだろうなあ！」

ヨーニーは、感動してうなずきました。

「ぼくたちの考えが正しいとしたら、ぼくたちはできるだけそっとすがたをけそう。」と、かれはいいました。

「だんぜん！」と、マルチンはつぶやいて、九号室にもどりました。かれはひきだしから、両親のためにかいた絵をとりだしました。まだすっかりできあがっていないので、かきつづけました。かれはそれを家のクリスマス・ツリーの下におこうと思いました。あす、おそくとも明後日は、おかあさんのおくってくれる旅費がつくはずでした。

その絵はかなりかわっていました。画面には、緑色の湖と、雪におおわれた高い山が見られます。湖の両岸には、シュロの木と、大きな実のなっているオレンジの木がたっています。湖には金色のゴンドラと、さびた赤い色の帆をはったボートがうかんでいます。岸につうじている道には、水色の客馬車が走っています。そしてこれはネズミ色にまだらのある、六頭の馬にひかれています。馬車のなかにはマルチンの両親が晴れ着を着て腰かけています。御者台にいるのはマルチン自身ですが、今よりは年をとっており、しゃれた、こい金色の口ひげをはやしています。馬車のそばには、色とりどりの南国ふうのきものを着た人びとが立って手をふっています。マルチンの両親は親しげに八方にむかってうなずき、マルチンはあんだむちを、あいさつのしるしに下にさげています。

その絵の題は「十年後」というのでした。マルチンの考えはたぶん、十年後にはかれはうんとお金をもうけて、両親を案内し、遠いめずらしい国ぐにへ旅行しよう、というのでした。

マチアスはその絵を観察し、両眼をなかば細くしていいました。

「おどろいた、おどろいた！　きみはきっとチチアンかレンブラント級の画家になるよ。ぼくは今からもう、いつか『そうだ、マルチン・ターラーはむかしぼくのクラスの首席だった。そのうえ、かれはまったくすばらしい男だった。ぼくたちはいっしょにいろんなものを食いまくったものだ。』といえるのをたのしみにしている。」

「食いまくった。」という文句で、かれはまた腹がすいていることを思いだしました。かれはいそいで机にむかって腰かけました。なかにはいつもなにか食料がたくわえてありました。机のふたの内がわには拳闘の世界選手権保持者の写真が、のこらずびょうでとめてありました。

美少年のテオドルでさえ、マルチンの絵を見せてもらい、まぎれもない天才の試作だと思いました。

ほんとに気持ちのよい晩でした。中学一年生と二年生は頭をよせて、クリスマスの贈りものにもらいたいものとして、なにを書きたてて家に手紙をだしたかを、うちあけあいました。それから高等科二年後期のフリッチェが午前の授業中におこったできごとを話しはじめました。やがて同室のものはみんな耳をかたむけました。

「まい年グリューンケルン先生はきまりきって、おなじしゃれをいうんだよ。」と、フリッチェが報告しました。「そのしゃれは、高等科二年で月の状態を話す段どりになると、かならずでてくるんだ。まい年、しかも二十数年このかた、先生は時間のはじめに『月の話をしよう——わたしをよく見て！』というんだ。」（先生のよび名には、はげ頭という意味がありました。）

「どうしてそれがしゃれなのさ！」と、中学二年生のペーターマンがたずねました。が、ほかの者たちが「しいーっ。」といったので、ペーターマンはだまってしまいました。

ちあがっていった。『しゃれはちっともわるくありません、校長先生。でも、ぼくの父の話によると、このしゃれは、父が高等科二年にかよっていたころすでに、恩給つきで退職してしかるべきほど古かったそうです。先生、なにか新しいことを思いついたらどうでしょう！』すると、グリューンケルン先生は長い間をおいてこたえた。『たぶんきみのいうことは正しいだろう。』そして時間のさいちゅうに教室からとびだして、ぼくたちをおいてきぼりにしていった。まるで自分の葬式にでもいくように見えた。」

フリッチェはわらいました。ほかの数人もいっしょにわらいました。しかし、大多数の者には高等科二年生の態度がなっとくがいかないようすでした。

「ぼくにはよくわからないけど、あの老人をそんなにおこらせなくってもよかったんじゃないかな。」と、ひとりがいいました。

「なぜいけないんだ？」と、フリッチェがさけびました。

「教師は、いつまでも変化の能力を維持する責任と義務がだんぜんあるんだ。そうでなきゃ、生徒は朝なんかベッドに寝たまま、蓄音機のレコードに授業をとなえさせたっていいんだ。いや、いや、ぼくたちには、教師としての人間が必要なんだ。あんな人もいなけりゃ、ベク先生のいいところがわからないだろう。」

夕がたのお祈りののち、生徒たちは広い階段をかけおりて、更衣室にいき、服をぬいで、つるし、長い寝まきを着て、また階段をそうぞうしくあがりました。まず洗面所へ。それから寝室へ。

最上級生はもっと長くおきていることができました。寝室の監督をつとめているものだけは上にのこっていて、少年たちがよく顔や手足を洗い、歯をみがいて、いそいで寝台にはいるのを見はりしていなければなりませんでした。

ベッドにはいるのにはむずかしい順序がありました。まずベッドの上に立って、大きな毛布をからだにまきつけなければなりません。そこではじめて、いなびかりに打たれたように、鉄の寝台が音をたてるほど敷きぶとんの上にたおれるのでした。

二号寝室では小さな事件がおきました。だれかいたずら者が、マチアスのベッドのしきふの下に、水のいっぱいはいった金だらいをいれておきました。昼まの武勇伝でつかれきったマチアスが、丸太のようにドシンとベッドのなかにはいるんで、二本足のかんづめが必要なのじゃないんだ！　ぼくたちを発達させようというんなら、自分も発達する先生が必要なんだ。」

そのときドアがあいて、ドクトル・グリューンケルン教授が九号室にはいってきました。生徒たちはいすからすっくり立ちあがりました。

「すわったまま、勉強をつづけたまえ。」と、先生はいいました。「異状はないね？」

「はい、なにも異状ありません、先生。」

と、美少年のテオドルが報告しました。

「それならけっこう。」と、老先生はいって、だるそうにうなずき、つぎのへやにいきました。

「先生ははいってくるまえに、ドアのところで聞いていたかしら？」と、二年生が好奇心をもってたずねました。

「そんなことをするんなら、ぼくは同情できないな。」と、フリッチェは手きびしくいいました。「もしかれがまだ若いころ、役人になりたいと思ったんなら、教師になるべきじゃなかったろう。」

「あの老人をなやますのはよそう！」と、美少年のテオドルがいいました。「比較対照のために、あんな人も必要なんだ。

美少年のテオドルは「ぼくたちのところじゃ、わらうばかなんか、ひとりもいなかったぜ。」といいました。

そのしゅんかん、二年生のペーターマンは大きな声でわらいました。しゃれがわかったのでした。

「おい、お金でもおちたのかい？」と、マチアスがたずねました。フリッチェが話をつづけました。

「ぼくたちは、とてもうまくしくんでおいたのさ。ぼくたちには、きょうがしゃれのでてくる日だ、ということがわかっていたので、ばんじぬけめなくいいあわせておいた。先生がれいの有名な文句を口にだすやいなや、クラスの最後列の者がわらった。すると、先生はむろんよろこんだ。そして話しつづけようとした。だが、そのとき、第二列の者がわらった。グリューンケルン先生は、おなじようにもう一どよろこんだ。

しかしかれが話しつづけようとするとたんに、第三列の者がわらった。こんどは先生は顔をしかめた。すると、第四列がわらった。先生は青くなった。そのしゅんかん、最前列がわらった。そこで先生はすっかりまいって、気がぬけたようになってしまった。『きみたちにはしゃれが気にいらないんですか。』と先生はたずねた。すると、ミュールベルクが立

と、たちまちびしょぬれになりました。ののしりながら、歯をガタガタいわせて、かれはとびおき、金だらいをしきふの下からひきだしました。

「こりゃだれがやったんだ？」と、かれはあらっぽくどなりました。「卑劣なことをしやがる！　だれだか名のれ！　ばらしてくれるぞ！　そいつの死がいを鳥に食わしてやろう！」

みんなわらいました。ウリーが心配して、寝まきのまま、まくらをもって、やってきました。

「ひきょう者め。」と、マチアスはうなりました。

「寝ろ！　そうしないと、すっかりかぜをひくぞ！」と、だれかがどなりました。

「しずかに！　正義先生がくるぞ！」と、まただれかがさけびました。

ウリーとマチアスはそれぞれ自分のベッドにとびこみました。ベク先生がはいってくると、広間のなかは、しんとしずまりかえりました。少年たちはきちんとならべられた天使のように寝て、目をとじていました。正義先生はベッドにそって歩いていきました。

「おや」と、先生は大きな声でいいました。「なんだかへんだぞ！　少年たちがこんなにしずかにしているときは、きっとまえに、ひとさわぎあったんだ。マルチン、はっきりいってしまえ！」

マルチンは目をひらいていいました。

「かわったことはなにもありませんでした、先生。ちょっとふざけたんです。」

「それだけか。」

「はい。」

ベク先生はドアのほうにいきました。

「お休み、腕白者！」

「お休みなさい、先生。」と、みんなさけびました。そしてほんとにしずかに満足してベッドのなかに寝ていました。マチアスはライオンのようにあくびをし、ウリーのまくらを、からだとぬれたしきふのあいだにつめて、またたくまに、ぐっすり眠りこみました。それからまもなく、ほかの者たちも眠りました。

ウリーだけはまだ目をさましていました。第一に、まくらがありませんでした。第二に、かれはまたちかい将来に勇気をしめすにはどういうふうにしたらいいか、いろいろと考えました。

やがてラッパが聞こえました。むこうの兵営で、かえってくる兵隊たちに、いそげ、と知らせているのでした。ウリーは、そのうちこんどは両親や兄弟のことを思いだし、三日たったら家にかえれると思い――それで微笑しながら眠りこみました。

一時間ののち、眠っていた者たちはおどろいてはねおきました。一号寝室から熱狂的なさわぎがせまってきました。とつぜん二号寝室のドアがおばけの手でうごかされてひらきました。さわぎはいよいよがまんできなくなりました。ごく小さい少年たち数人は、毛布のなかに頭をつっこんだり、耳をふさいだりしました。

いきなり白い魔女とおばけが、暗い寝室に行進してきました。ゆらゆらともえるろうそくをもってる者が何人かいました。ほかの者はブリキのなべのふたをたたきあわせました。またほかの者は、飢えた雄牛のようにうなりました。いちばんしまいに、大きな白い怪物がよろめきながらやってきて、何人もの少年の毛布をひっぱがし、大きな紙ぶくろからあやしい粉を、ベッドのなかにまきちらしました。数人の一年生はこわがって泣きだしました。

「泣くなよ！」と、ウリーはとなりの少年にいいました。

「たかが最上級生だよ。かれらはクリスマスの数日まえには、いつもああいうふうにしてねり歩くんだ。きみは、ベッドのなかにかゆくなる粉をまかれないようにしさえすればいいんだ。」

「ぼくはとてもこわいよ。」と、その一年生はすすり泣きながらささやきました。「いちばんしまいにすすんでいった大きなけだものはいったいなんだろう？」

「ありゃ、三人の最上級生なんだ。ベッドのかけ布をいくまいもぬいあわして、そのなかにはいってるのさ。」

「それでもやっぱりこわいよ。」と、小さい少年はいいました。

「すぐなれるよ。」と、ウリーはなぐさめました。「さいしょの年はぼくも泣いたよ。」

「ほんと？」

「ほんとだよ。」と、ウリーはいいました。

おばけの仮装行列はうしろのドアからすがたをけしました。しだいにまたしずかになりました。最前列のベッドに寝ている者だけが、からだをかきながら、まだしばらくまくらのなかにぶつぶつ文句をいっていました。かゆくなる粉がきめをあらわしたのです。しかしかれらもやがてしずまって

しまいました。

マチアスはまったく目をさましませんでした。かれがひとたび目をとじると、そばで大砲をうったって、かれの目をさますことはできませんでした。

とうとうみんな眠りました、ただひとりをのぞいては。それはヨーニー・トロッツでした。かれはおきあがって、大きな窓のひとつのそばにしのび足でいきました。広い窓ぶちにとびあがると、しゃがんで、ひざを高くたて、両足を寝まきのなかにいれ、町を見おろしました。たくさんの窓に、まだあかりがついていました。映画館や踊り場のある都心の上空はわきたっているようでした。また雪がふりだしました。

ヨーニーはくわしくしらべるような目つきで町を見おろしました。かれは考えました。

「どの屋根の下にも人間が暮らしている。ひとつの町にはどんなにたくさんの屋根があることだろう！　われわれの国にはどんなにたくさんの町があることだろう！　われわれの遊星の上にはどんなにたくさんの国があることだろう！　宇宙にはどんなにたくさんの星があることだろう！　幸福はかぎりもなくいろいろにわけられている。そして不幸もおなじように……。ぼくは、いまにぜひいなかで暮らそう。大きな庭のある小さい家に。五人の子どもをもとう。だが、ぼくは子どもをすてるために、海のかなたにやってしまうなんてことはしない。ぼくのおとうさんがぼくにたいしてしたような、意地のわるいことはしない。ぼくの妻はぼくのおかあさんよりいい人だろう。今どこにいるかしらん、ぼくのおかあさんは？　まだ生きているかしら？

たぶんマルチンがぼくの家にうつってくるだろう。かれは絵をかくだろう。そしてぼくは本を書くだろう。それでも、生活が美しくないなんて、そんなばかなことはない……。」

ヨナタン・トロッツはそう考えました。

第七章

クロイツカム教授を語る――ぞっとするできごと――少年たちが五ど書かされる文章――幕あいにふしぎな予告――ベク先生との散歩――菜園内の再会と、かきねのそばのあく手

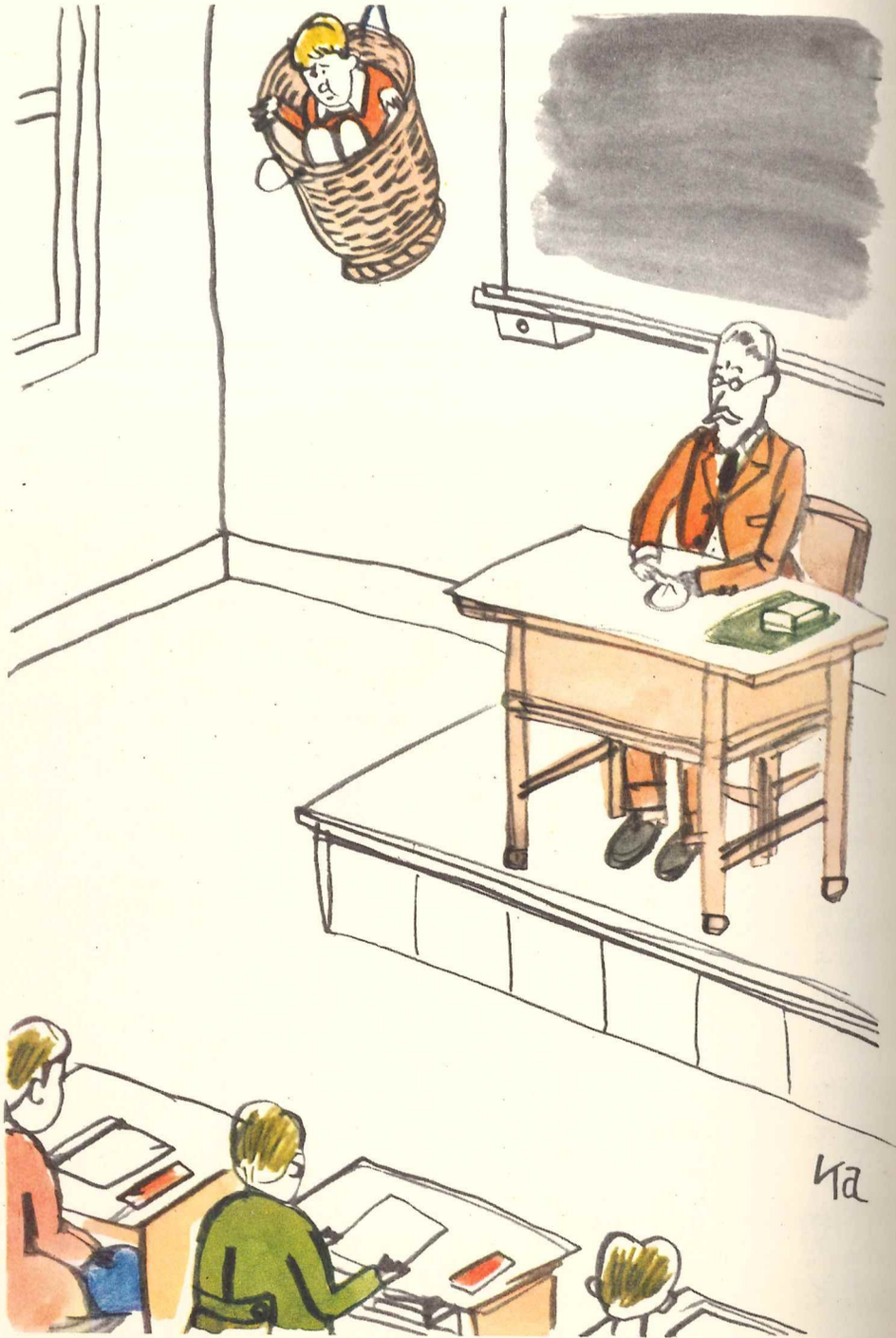
よく朝、授業のはじまるすこしまえ、マルチンは教室から廊下にでました。かれは書取りの点数表をもって、ドイツ語の先生クロイツカム教授が教室にはいるまえに、きのうの不幸な事件について報告しよう、と思いました。先生のむすこのルディ・クロイツカムがたった今話したところによると、父はまだなにも感づいていない、ということでした。

廊下にはだれもいませんでしたが、ほうぼうの教室をみたしているそうぞうしさが廊下にまであふれて、ブンブンワーッという音で、マルチンの耳をいっぱいにしました。まるで、ハエをとじこめたようなひびきでした。

そこへ先生たちが二階からおりてきました。先生たちは上きげんで、大きな声をたててわらっていました。それぞれどこかの教室にはいりました。廊下のブンブンワーッという音はしだいに低くなりました。――クロイツカム教授はさいごにあらわれました。いつものとおり、ステッキでものみこんだように、しゃちほこばって歩いていました。ベク先生がならんで歩きながら、なにかおもしろそうなことを、話していました。クロイツカム教授は注意ぶかく耳をかたむけ、いつもよりいっそう厳格な顔をしていました。

クロイツカム先生はみょうな人でした。生徒たちはいつもすこしこの先生をこわがっていました。というのは、この先生はわらうことができなかったのです。わらおうとしなかっただけだ！　ということもできます。むすこのルディが同級生に話したところによると、かれの父は家でもまったく顔かたちをくずさないそうです。

そういうことは習慣の力で、時とともになれることもできるでしょうが、先生自身はけっしてわらったことがないのに、人がわらわずにはいられないようなことをいうものです



から、わけがわからなくなるのでした。

たとえば、かれは二、三週間まえ答案をかえしたとき、マチアスに、「きみはこのまえは、いったいどうだった？」とたずねました。

「丁でした。」と、マチアスがこたえました。

「そうか。こんどはずっといいよ。」と、教授はいいました。

マッツはあやうくよろこぶところでした。すると、教授はだめをおしました。

「こんどはいい丁だよ！」

またべつなとき、教室の戸だながあけっぱなしになっていると、クロイツカム先生は、「フリドリン、戸だなをしめなさい！　風がくる！」とどなりました。

いつでもみんながわらわずにはいられないようなとき、先生自身は厳然と教壇から見おろして、おなかでもいたむような顔をしているので、みんなはからかわれているような気持ちになるのでした。みんなはどう考えてよいのか、わかりませんでした。クロイツカム先生の顔いろには、先生がなにを感じているのか、ちっともあらわれなかったからです。

だが、この先生の時間にはたくさんのことをおぼえました。それはまったくなんといってもとうといことでした。

さてマルチンは、いよいよ、書取帳が焼かれたことを白状しなければなりませんでした。正義先生は二年生の教室にはいり、クロイツカム教授だけがマルチンのほうに大またで歩いてきました。

「なにか、かわったことかい？」と、先生は厳然とたずねました。

「ええ、先生。」と、マルチンがおずおずといいました。「きのうの午後、実業学校の生徒がわたしたちの書取帳を焼いてしまいました。」

先生は立ちどまりました。

「きみたちはそうしてくれと、かれらにたのんだのか。」と、先生はたずねました。

マルチンはまた、わらったものかどうか、めんくらいました。それからかれは頭をふって、かいつまんで要領だけを話し、教授に点数表を手わたしました。

教授はドアをひらき、マルチンをさきにおしいれ、教室にはいりました。

マルチンがドアの外でまっていたあいだに、とほうもないことがおこりました！

ゲオルク・クンツェンドルフにそそのかされて、数人の通学生がウリーを紙くずかごにいれ、そのかごを地図をかけるための二本の釘に、高くつるしあげたのでした。ウリーの親友マチアスは、四人の少年によっていすに釘づけにされていました。今ウリーは、教室の天じょうにぶらさがり、ゆでダコのように赤くなって、かごのなかから見おろしていました。マルチンは気が遠くなるかと思うほどでした。

クロイツカム教授は、このとほうもない人さわがせをまるで気づかぬような態度で、おちつきはらって教卓のむこうがわに腰をおろし、教卓の上にあるマルチンのハンケチをほどいて、灰を見つめました。

「いったいこれはなんです?」と、先生はたずねました。

「それがぼくたちの書取帳です。」と、マルチンがこまりきった顔つきでこたえました。

「ああ、そうか。」と、教授はいいました。「お見それするところだった——それはそうと、きのうの正午、書取帳をあずかったのはだれだ?」

教授のむすこ、ルディ・クロイツカムが立ちあがりました。

「きみは、書取帳をもっとよくまもることはできなかったか。」

「残念ながら、できませんでした。フリドリンとぼくをおそった少年たちは約二十人でした。ノートが焼かれるまえに、ぼくはある地下室にいれられ、せんたくものを干すアサなわでしばられてしまいました。」

「いったいどのくらいのあいだ、きみは地下室にいたのか。」と、父がたずねました。

「四時ごろまで。」

「きみの両親は、なにか気づいたか。」

「いいえ。」と、ルディはこたえました。

「さりとは、まことにいい両親らしいな。」と、教授は腹だたしげにいいました。

数人の生徒がわらいました。教授が自分自身をののしったのは、じっさいおかしかったのです。

「食事のとき、きみがいないのを、両親は気づかなかったのか。」と、教授はたずねました。

「ええ。」と、ルディがこたえました。「ぼくは友だちのところに招待されているって、だれかが両親に話しました。」

教授は厳格にいいました。

「きみの父にわたしからよろしくとつたえてくれ。将来、どうかきみにもっとよく注意をはらうようにって!」

クラスぜんたいがわらいました。ウリーをのぞいて。それから先生をのぞいて。

「ぼくから父につたえておきます。」と、ルディ・クロイツカムがこたえたので、みんなはまたわらいました。

「きみのうちはしつけがいいんだな。」と教授はいいました。

「それはそうと、マルチンの点数表はいらない。わたしは自分の手帳に点数をぜんぶひかえている。だが、二つの表をくらべてみよう。だれもごまかしはしなかっただろうな。そんなことをすりゃ、すぐばれる。それからいまのうちに、もうきみたちにいっておくが、きみたちがこのつぎにまちがったことをしたら、気が遠くなるほど、書取りをするぞ。」

号令でもかけられたように、みんなウリーのほうをじっと見あげました。おもしろいことになりそうでした。

「教室の天じょうの紙くずかごは、いったいどうしたというのだ?」と、教授がたずねました。「こんなばかなまねは、いいかげんにやめてもらいたい!」

数人の少年が、紙くずかごをおろすために、とびあがりました。

「よせ!」と、教授はきびしくどなりました。「そのままぶらさげておけ! いそぐことはない。」

先生はじっさい、かごのなかにウリーがいるのに気づかなかったのでしょうか。

「さきへいくまえに、きのうの書取りのなかから、単語をすこししらべてみよう。ヴェルティコ（かざりだな）とはどうつづるか。ゼバスチアン!」

ゼバスチアン・フランクは遺伝学に関する本をいすの下におしこみ、単語のつづりをいいました。つづりは正確でした。

教授はうなずきました。

「それじゃ、グラモフォン（蓄音機）はどう書くか。ウリー!」

クラスの者はみんなおどろいて、かたくなりました。

教授はいらいらして、指で教卓をトントンとたたきました。

「さあ、早くいわないか、ジンメルン、さあ、さあ!」

すると、紙くずかごのなかから、ふるえ声がひびいてきました。

「G……r……a……m……m……。」

ウリーはそこでとまりました。魔法でひきつけられたように、教授は上のほうを見あげて、立ちあがりました。

「いったい、いつからこの教室はさかり場になったんだ？そのばかげたぶらんこのなかで、なにをさがしているんだ？きみたちは気でもくるったのか。すぐおりてこい！」

「おりられません。」と、ウリーがいいました。

「だれがやったんだ？」と、教授はたずねました。「もういい。きみたちは白状しないんだな。マチアス！」

マッツは立ちあがりました。

「なぜきみはとめなかったんだ？」

「あんまり大ぜいだったんです。」と、ウリーが空中から説明しました。

「おこなわれたいっさいの不当なことにたいして、それをおかした者に罪があるばかりでなく、それをとめなかった者にも罪がある。」と、教授は説明しました。「この文章をめいめいこのつぎの時間までに、五へんずつ書いてこい。」

「五十ぺんですか。」と、ゼバスチアンがあざけるようにたずねました。

「いや、五へんだ。」と、教授はこたえました。「ひとつの文章を五十ぺんも書けば、しまいにはまたわすれてしまう。ゼバスチアン・フランクだけは五十ぺん書け。文章はわかってるか、マルチン？」

マルチンはこたえました。

「おこなわれたいっさいの不当なことにたいして、それをおかした者に罪があるばかりでなく、それをとめなかった者にも罪があります。」

「そのとおりだということをこころえておれば！」と、教授はいい、うしろにもたれました。「これが悲劇の第一部だ。そこでちびさんをぶらんこからおろせ！」

マチアスは前のほうにかけだしました。数人の少年がそれにつづきました。ようやくウリーは床に足をつけることができました。

「さて、これから悲劇の第二部がつづく。」と、教授はいい、湯気のでるような書取りをはじめました。外来語、大文字と小文字の区別、むずかしい句読点など――まったくペンをなげだしたくなるほどでした。高等科一年生は半時間のあいだ、血の汗をながす思いでした。冬のことで、雪がふっているというのに。（みんなは数年たったのちも、この書取りのことを話すのでした。いちばんよい点が丙でした。）

「まいった、まいった。」と、マチアスはとなりの生徒にささやきました。「きょうも実業学校のやつらがルディをもう一どおそってくれるといいがな！」

だが、クロイツカム教授は書取帳を自分でもってかえることにしました。「用心にこしたことはない。」と、かれはいい、はいってきたときとおなじようにまじめに、しゃちほこばってでていきました。

休みのあいだにウリーは教壇にあがり、「しずかに！」とさけびました。しかしみんなはさわぎつづけていました。

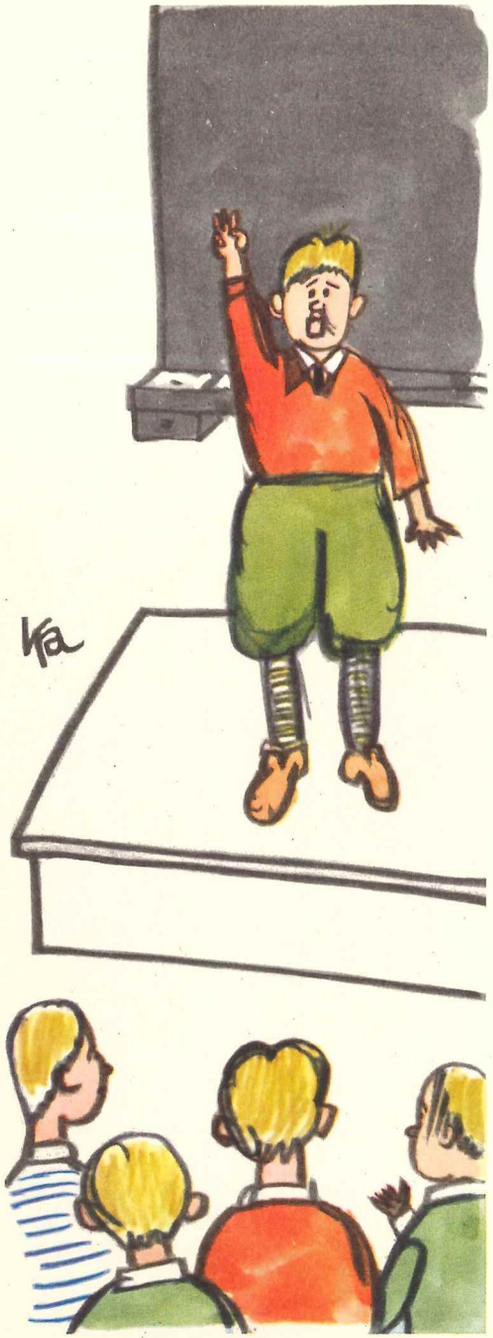
「しずかに！」と、かれは二どさけびました。それは悲鳴のようにひびきました。そこでみんなはしずかになりました。ウリーは手ぬぐいのように、血の気のない顔いろをしていました。かれは低い声でいいました。

「ぼくはきみたちにいっておくが、もうやりきれないんだ。完全に病気になりそうだ。ぼくは臆病者だと、きみたちは思ってる。そこできみたちに見てもらいたいんだ。きょうの三時に運動場にきてくれたまえ。三時に。わすれないで！」

そういって、かれは教壇からおり、自分の席に腰かけました。

「いったいどうしたというんだ、ちびさん？」と、マチアスがたずねました。マルチンとヨーニーも、そばにきて、ウリーがいったいなにを考えているのか知ろうとしました。

ウリーは敵意でもいだいているように頭をふり、「かまわ



ないでおいてくれたまえ！　きかなくても、あとできっとわかるから。」といいました。

昼食まえに食堂長が郵便をくばりました。マチアスとほかの大ぜいがかわせをうけとりました。それはみながまちうけていた旅費でした。マルチンは母からの手紙をもらいました。かれはそれをポケットにいれました。かれはもうそうとう長く寄宿舎で暮らしていますが、食卓のそうぞうしさのただなかで、まわりに腰かけている人たちの物見高いまなざしのもとで、郵便を読むことはいまだにできませんでした。手紙をひらくときは、舞台げいこののち、公園のなかを歩くか、さびしいピアノ室にはいるかして、ひとりぼっちになりたいと思いました。

かれは手紙をさすってみました。手紙はひどく厚くはありませんでした。母はかれに十マーク紙幣をおくってきたらしく思われました。旅費は八マークかかるのでした。そうすると、二マークのこるはずです。それで両親のためにいくらかのささやかな贈りものを手にいれることができます。両親のためにかいた絵は、いかにもきれいでしたが、絵だけでは両親にとって、やはりすこし少なすぎると思いました。

食事がおわると、マチアスはこれまで自分に金をかしてくれた者たちをあつめ、自分が空腹に苦しんだとき、かりただけの金をかえしました。それからかれは外へかけだしました。パン屋のシェルフさんのところへいそがねばならなかったのです。きょうはかれは金持ちだったので、クリスマスの芝居に出演する者ぜんぶのために、お菓子を買ってこようと思ったのです。自分のためにも買うのはむろんのことです。かれも出演するのですから。

食堂はからっぽになりました。マルチンとヨーニーだけが入口に立っていました。食堂のおくの小さいテーブルでは正義先生が葉まきに火をつけていました。ふたりは先生のところにいきました。先生は親しげにうなずき、ふたりをじろじろ見ました。

「いやにあらたまったかっこうだね。」と、先生はいいました。「いったいなにをたくらんでいるんだね？」

「ぼくたちといっしょに、すこし散歩していただきたいんですけど。ぜひ見ていただくものがあるので。」と、マルチンが説明しました。

「そうか。ぜひにか。」と、先生はいいました。

ふたりは強くうなずきました。そこで先生は立ちあがって、いっしょに食堂からでました。ふたりは、反対もされずに、先生を学校の門までつれてきました。

「さて、外にでるのかい？」と、先生がいいました。ふたりはまたうなずきました。

「ひどく興味をそそられるね。」と、先生がいいました。ふたりは学校の鉄のこうしにそって坂道をのぼっていきました。先生は舞台げいこのことをたずねました。

ヨーニー・トロッツはこたえました。

「ぼくたちはめいめいの役をとてもうまくやります。マチアスでさえ、あすの晩のクリスマスのお祝いには、せりふにつかえることはないでしょう。あすの午後は総ざらえです。衣装をつけて。」

正義先生は、総ざらえにでてもよいか、とたずねました。むろんです、と、ふたりはこたえました。だが、先生は、それはほんとじゃあるまい、と察しました。先生は、さいしょの公演まで、見たい気持ちをおさえることができるだろう、といいました。

「いったい、どこへわたしをはこんでいくんだね。」と、ベク先生はたずねました。

ふたりは返事をせずに、微笑し、胸をときめかせていました。

だしぬけにヨーニーがたずねました。

「先生が昨晩お話しになったお友だちは、なにを職業にしていたんですか。」

「医者だった。」と、ベク先生はいいました。「だから、妻や子を助けることができなかったのが、ひどく心にこたえたのだろう。しかも、かれはなかなかうできの医者だった。だが、運命にたいしてはどんな研究も役にたたないことが、たびたびあるもんだ。」

「その人はピアノはひけましたか。」と、ヨーニーがつづけてたずねました。

正義先生はおどろいて少年を見つめました。

「ひけたよ。」と、先生はようやくいいました。「それどころか、すばらしくうまかった。だが、君はいったい、どうしてそんなことをきくんだ？」

「ただきいてみただけです。」と、ヨーニーはいいました。

マルチンは菜園部落の入口の戸をあけました。

「このなかにはいるのかい？」と、先生はたずねました。ふたりはうなずき、雪にうずもれた小さいいくつもの菜園のそばをとおって、先生を案内しました。

「二十年まえは、ここはまだ森だったよ。」と、ベク先生が話しました。「われわれはなにかたくらむと、かきねをのりこえたものだ。」

「今でも、ぼくたち、おなじことをやってますよ。」と、マルチンがいいました。そして三人はわらいました。

やがてふたりの少年は立ちどまりました。

「ほんものの客車のなかにだれか住んでいるのだね！」と、正義先生はおどろいてさけびました。

「そうです。」と、ヨーニーがいいました。

「このなかに住んでいる人は、ぼくたちの友だちです。ぼくたちは先生とまったくおなじくらいに、その人がすきなんです。それで、先生にもその人と知りあいになっていただきたい、と思うんです。」

マルチンは庭のなかにはいり、客車の前に立ちどまり、三どノックしました。ドアがあいて、禁煙先生がでてきました。かれはマルチンの手をにぎり、ヨーニー・トロッツが先生といっしょに立っている庭の戸のほうを見ました。

とつぜん、正義先生はふかいため息を発し、こうし戸をおしあけ、禁煙先生のほうにかけよりました。

「ローベルト！」と、かれはわれをわすれてさけびました。

「ヨハン。」と、禁煙先生はいい、親友に手をさしだしました。

ふたりの少年はこっそり立ちさるのに、たいしてほねはおれませんでした。というのは、ふたりの先生は二本の石の柱のように雪のなかに立ったまま、たがいに、じっと見つめあっていたからです。

「ねえ、きみ！」と正義先生はいいました。「とうとう再会できたね！」

マルチンとヨーニーは無言のまま菜園のあいだを走りました。高等中学のかきねのところで、かれらは立ちどまって、ほっと息をつきました。かれらはひとことも口をききませんでしたがかきねをのりこえるまえに、手をにぎりあいました。

それは無言の約束をしているようでした。ことばではまったくいいあらわせない約束を。

第八章

たくさんのお菓子――「飛ぶ教室」のつぎのけいこ――ウリーがかさをもってきた理由――体操場と校舎内のこうふん――ベク先生のなぐさめと第三ピアノ室

「飛ぶ教室」の総ざらえのまえの、さいごの舞台げいこは、まず大いにお菓子を食べることではじまりました。マチアスはしこたま買いこんできましたが、ひとつものこさないようにつとめました。

ウリーはおくれてすがたを見せました。かれはわきの下に雨がさをかかえていました。

「なんだって、きみはいったい雨がさなんかひきずっているんだ？」と、ゼバスチアンはいいました。しかし、ウリーがなにもいわなかったので、かれらはそれいじょうたずねませんでした。

ゼバスチアンは考えました。

「ウリーは、けさからひどくかわっているぞ。あいつをあいてにするのは、まるで時計をあいてにするようだ。ねじをまきすぎたかな。」

ウリーはかさをすみっこにおきました。マチアスがいくらすすめても、かれはどうしてもお菓子を食べようとせず、けいこをはじめる時間だ、といいました。

それから、みんなはヨーニーのクリスマス劇のけいこをしました。第一幕から第五幕までつかえずに演じたので、みんなは大いに満足しました。

「それ、みろ！」と、マチアスは得意になっていいました。「ぼくは、たくさん食べれば食べるほど記憶がよくなる。」

それからかれらはもう一どきわめてこまかく衣装と舞台道具について相談しました。

ウリーのかぶるおさげの金髪は、きょうのうちにフリドリンが床屋のクリューガーのところにとりにいき、明朝もってくるはずでした。それで、総ざらえにさしつかえるものは、もうなにもありませんでした。クリスマス・ツリーももうたっていました。それには無数の電球がちりばめられていました。守衛さんがその枝にたくさんのわたの雪をつもらせました。

「あすの晩はうまくいくと思うが、なによりも、みんな初舞台におじ気づかないようにすることだぜ。けいこのときとまったくおなじように、体育館に自分たちだけでいるつもりでやらなくちゃいけない。」と、ヨーニーがいいました。

「きっとうまくいくよ。」と、マルチンもいいました。「だが、背景をもっと早く配置する練習をすこししなければいけない。あすの晩、ピラミッドにしろ、北極にしろ、背景がひとつでもたおれると、ぼくたちが口をひらかないうちに、見物がふきだしてしまうからね。そうなっちゃ、芝居なんかてんでやれなくなってしまう。」

ヨーニーは、マルチンのいうことはもっともだといいました。そこでみんなは、絵のかかれている大きな厚紙を、またすみっこからとりだして、いそいで横棒にたてかけました。それから、厚紙のうしろにいる少年たちが横木をおすところを見られないで、飛行機をうごかすことができるかどうか、ためしてみました。

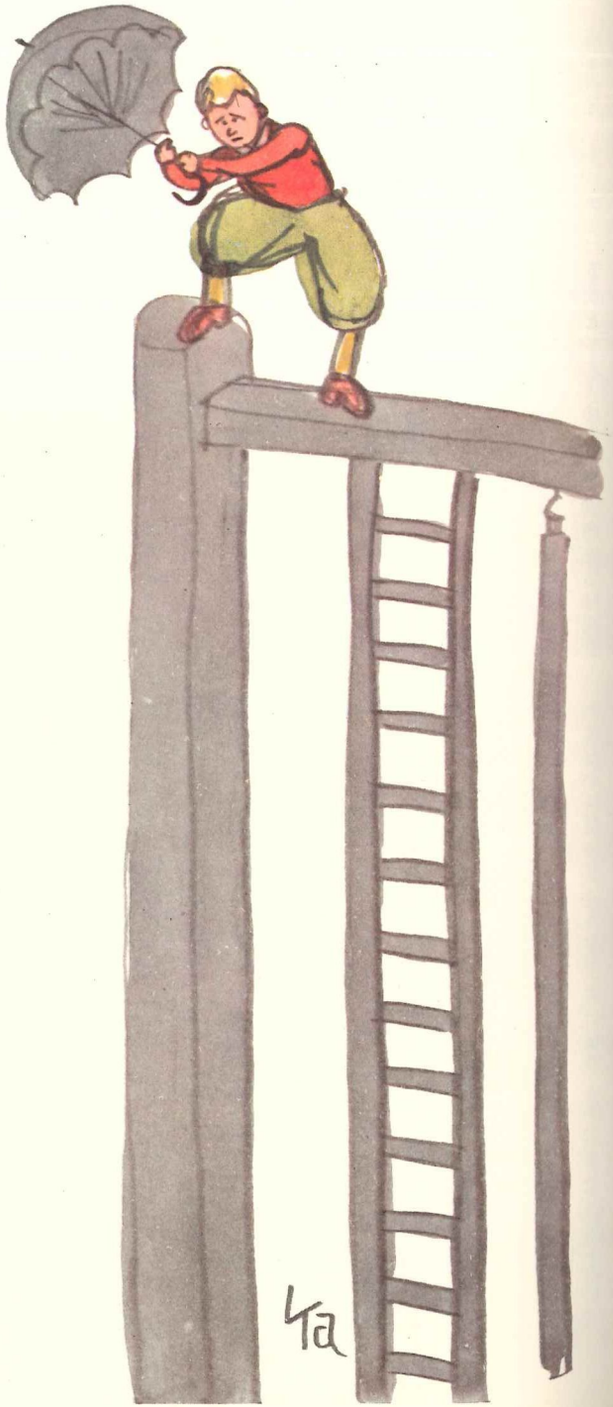
「すこしのくるいもなくいかなくちゃいけないぜ！」と、マルチンがさけびました。「舞台は一分間で、きちっとできあがらなくちゃいけない。」

かれらは背景と横木をもとのすみにおしもどし、もう一どひきだしました。かれらは、熟練した道具かたのように、立ちまわったり、どなったりしました。

ウリーは、みんなが気のつかないうちに、体育館からこっそりでていきました。かれは自分の計画がほかの者にさまたげられるのをおそれたのです。そんなことになってはならなかったのです。

五十人いじょうの少年が、雪のつもったスケート場に立って、好奇心をもってウリーをまちうけていました。それは下級生ばかりでした。上級生には話さなかったのです。少年たちは、なにかふつうでないこと、禁止されていることが、もくぜんにせまっているのだという感じをすぐにうけたのでした。かれらは両手をマントのポケットにいれて、いろいろな臆測をのべました。

「たぶんかれはきやしないぜ。」と、ひとりがいいました。だが、そこへもうウリーがやってきました。かれは無言のままかれらのそばをとおりすぎ、運動場のはずれにたってい



る鉄の棒のほうに歩いていきました。それは体操のときよじのぼる練習をするためのものでした。

「なんだってかさをもってるんだろう?」と、だれかがたずねましたが、ほかの者たちは「しっ!」といいました。

鉄の棒のそばに高いはしごがたっていました。どこの学校ででも見られるような、ありふれた体操用のはしごでした。ウリーはそのそばに歩みよって、氷のようにつめたい段だんをのぼっていきました。いちばん上からひとつ下の段のところでとまって、ふりむいて、少年たちのむれを見おろしました。めまいでもしたのか、かれはすこしふらふらしましたが、すぐきりっと立ちなおって、大きな声でいいました。

「こういうわけなんだ。ぼくは今、かさをひろげて、落下さん降下をやるんだ。きみたちの頭の上におちないように、ずっとうしろにひいてくれ!」

数人の少年は、ウリーはすっかり気がくるったのだと思いました。しかし、大多数の者は無言のままおしあって、うしろにさがりました。そして、予告された、胸のどきどきする見ものを、まちきれずにいました。

体育館ではたらいていた四人の高等科一年生は、きょうの練習をすまし、背景と横木を、すみにしまいました。ゼバスチアンはクロイツカム教授にたいしてぶつぶついいました。というのは、「不当なことにたいする責任」という文章を五十ぺん書けといわれたからです。

「クリスマスのお祝いのまえの日に、そんなことをいうなんて!」と、かれはおこっていいました。「あの先生はなさけ知らずだ。」

「きみもそうだぞ。」と、ヨーニーがいいました。

そのときマチアスはふりむいて、探しながらたずねました。

「いったいちびさんはどこにいる? いないぜ!」

ヨーニーは時計を見て、いいました。

「三時ちょっとすぎた。ウリーは三時になにかやる計画だったぜ。」

「そうだった。」と、マルチンがさけびました。「外の体操場だ。いったいなんだろう?」

かれらは体育館をでて、運動場にかけだしました。かどをまがったとき、かれらは根がはえたように立ちどまりました。運動場には生徒がいっぱいいました。みんな高い体操ばしごを見あげていました。はしごの上では、ウリーが、ひろげた雨がさを高くさしあげて、からだの平均をとるのに苦心

していました。

マルチンはささやきました。

「たいへんだ！　あいつとびおりようとしている！」

かれはいうより早く運動場をかけぬけていました。ほかの三人もあとをおいました。運動場は雪がつもっていましたが、ひどく寒く、つるつるでした。ヨーニーはころびました。

「ウリー！」と、マチアスはさけびました。「やめろ！」

だが、そのしゅんかん、ウリーはとびおりました。かさはたちまちそりかえってしまいました。そして、ウリーは、雪のつもった氷の表面にバサッとおちました。かれはズシンと地面にぶつかり、たおれたままでした。

大ぜいの少年はわめき声をあげながら、かけだして、ばらばらになりました。つぎのしゅんかんに、四人の友だちが、けがをしたウリーのそばにあつまっていました。ウリーは、死人のように青ざめ、気をうしなって、雪のなかにたおれていました。マチアスはウリーのそばにひざをついて、ひっきりなしにさすりました。

それからヨーニーが、寄宿舎の看護婦をよびに家のなかにかけこみました。マルチンは、かきねのほうにかけだし、のりこえて、禁煙先生に警報をつたえました。禁煙先生は医者だったのです。助けてもらえるにちがいありませんでした。正義先生もまだそこにいました。

マチアスは頭をふりました。

「ちびさん、きみには勇気がないって、みんながいつもいったけど！」と、かれは気絶した友だちにむかっていいました。そして未来の拳闘世界選手権保持者は子どものように大つぶのなみだをながしました。大ぶんのなみだは雪のなかにおち、二、三滴がウリーの死人のように青白い顔の上におちました。

マチアスと、マルチンと、ヨーニーと、ゼバスチアンは、寄宿舎の病室につうじるひかえ室の窓のそばに、だまって立っていました。かれらは、なかにはいることをゆるされませんでした。ウリーがどうなったか、かれらはまだ知らずにいました。禁煙先生と正義先生と看護婦さんとグリューンケルン校長とが、病室のなかにいました。校医の衛生参事官ハルトウィヒ老先生もきました。

とうとうマルチンがいいました。

「きっとわるいことはないだろうな、マッツ。」

「たしかにだいじょうぶだよ。」と、ヨーニーがいいました。

「脈をさわってみたら、まったくふつうにうっていたよ。」と、ゼバスチアンがいいました。かれは三どおなじことをいったのでした。

「たしかに右足をおっただけだ。」

それから三人はまた口をつぐんで、窓ごしに白い庭をじっと見おろしました。しかし、なにも見えませんでした。悲しい思いが、かれらのまなざしをくもらしたのです。こうしてまっている時間が永遠のように長くつづきました。

やがてしずかにドアがあきました。正義先生がでてきて、かれらのほうにいそぎ足で近よりました。

「ひどくわるくはない。足の骨折もかんたんだ。そのほか、胸郭にかるい打ぼく傷をうけている。脳しんとうはみとめられない。元気をだせ！」

四人の友だちはほっと息をつきました。マッツは顔を窓ガラスにあてていました。かれの肩はかすかにふるえていました。正義先生は、この大きな腕白者をなでてやりたそうなようすでしたが、ほんとにそうはしませんでした。

「一か月で回復する。」と、ベク先生はいいました。「ウリーはクリスマスのあいだ、ここにのこっていなければならないと、両親にさっそく電話をかけよう。」

先生はもうでかけようとして、少年たちにたずねました。

「いったいウリーはなんだって、かさをもってはしごからとびおりるなんて、ばかなことを思いついたのか、説明できるかい？」

「みんながかれをしょっちゅう憤慨させたんです。」と、マチアスがすすり泣きながら話しました。「おまえは臆病者だとか、なんとか、そんなことをいったんです。」

マチアスはハンケチをだして、鼻をふきました。

「とんまなぼくは、きのう、きみはほかの者をおどろかすようなことをなにかして見せなくちゃだめだって、忠告したんです。」

「それなら、それは成功したわけだ。」と、正義先生はいいました。「気をおちつけるがいい！　あのくらいの骨折なら、ちびさんが一生のあいだ、ほかの者から一人まえだと思われないという不安をもちつづけているよりは、いいんだということを、わすれるな。こんどの落下さん降下は、わたしがはじめ考えたほど、ばかなことじゃないと、わたしは思っている。」

それから先生は、ウリーの両親に電話で知らせるために階段のほうにいそぎました。

禁煙先生がでてきて、ウリーは一か月たてば、すっかり元

気になると、ちかってうけあったので、四人の少年はやっと立ちさりました。マチアスはさいごまでねばりました。かれはウリーのところにいってよいか、とたずねました。が、禁煙先生は、それは厳格にとめられているといいました。あすまでは、そんなことはまったく考えられないということでした。それでマチアスも自分のへやにかえりました。

マルチンは階段をおりるとき、母の手紙がポケットのなかでガサガサいっているのに気づきました。

かれは第三ピアノ室にはいりました。そこで、かれは窓ぶちに腰かけて、手紙の封をきりました。まっさきに目にはいったのは、ひとつづりの郵便切手でした。かれはそれをとりだして、手早くかぞえました。二十五ペニヒ切手が二十まいありました。つまり五マークしかなかったのです！

マルチンの心臓はとまってしまいそうでした。それから手紙をとり、うらがえしにしてみました。ふうとうのなかに手をいれました。床板の上をさがしました。だが、なにもありませんでした。やっぱり五マークの郵便切手だけでした。

マルチンのひざは力がぬけて、ふるえました。かれは手紙に目をそそいで読みました。

「愛するマルチン！

ほんとに悲しい手紙になります。なんと書きはじめてよいかわかりません。ねえ、マルチン、こんどはおまえに旅費として八マークおくることができないからです。どう工面してもたりないのです。おとうさんに収入のないことは、おまえも知ってるとおりです。クリスマスにおまえが学校にのこっていなければならないことを考えると、おかあさんはまったくみじめな気持ちになります。わたしはいろいろと考えぬきました。エンマ伯母さんのところにもいきましたが、だめでした。おとうさんはむかしの同僚のところにかけつけましたが、よぶんのお金は一ペニヒもありませんでした。

なんの手だてもないのです。こんどは寄宿舎にのこっていてもらわなければなりません。復活祭まではあえないでしょう。それを考えると——だが、それはむだなことですから、そんなことは考えてはなりません。

それどころか、わたしたちは、なみはずれた勇気をだして、歯をくいしばらなければなりません。そうでしょう？わたしがかきあつめることのできたのは、五マークだけでした。仕立屋のロックシュトローさんからかりたのです。大みそかまで。大みそかには、かえしてくれというのです。

マルチン、どこかのコーヒー店でチョコレートをわかしてもらい、お菓子を三、四個買いなさい。学校や自分のへやにばかりいないようにしなさい。わかったかい？　どこかにそり遊びをするところがあるだろうね。おまえはきっと外にでなければなりません。わたしに約束しますね？

あす、郵便で小包がひとつとどきます。なかには、おまえがうちでクリスマス・ツリーの下で贈りものとしてもらうはずのものがはいっています。たぶんわたしたちは、クリスマス・ツリーもたてないでしょう。おまえがいなければ、そんなものをたてても、なんの意味もありませんから。

わたしたちがおまえにおくるものはたくさんではありませんが、おまえも知ってのとおり、わたしはこれいじょうお金をもっていません。ほんとに悲しいことですけれど、どうにもしようがありません。愛するマルチンよ、クリスマスにはわたしたち、ほんとに元気をだし、けっして泣いたりなんかしないことにしましょう。わたしはおまえにそう約束します。おまえもわたしに約束してくれますか。で

は、くれぐれも元気で。おかあさんのキスをうけてください。

おまえの愛する母から

おとうさんからもよろしく。よく聞きわけてくれるようにって、おっしゃいます。そんなことをいわれなくても、おまえはだいじょうぶですね？　お金は郵便切手でおくります。とりかえてもらいなさい。」

マルチン・ターラーは手紙をじっと見つめました。目の前で、文字がぼやけました。母は泣いたのです。手紙を見れば、それがわかります。インキがいく個所もにじんで、よごれていました。

マルチンは窓のかんぬきにつかまって、つかれたような灰色の十二月の空を見あげ、

「おかあさん！　やさしい、やさしいおかあさん。」

と、ささやきました。

そうしていると、かれは泣かずにはいられませんでした。泣いてはならないはずでしたけれど。

第九章

不安についてのゼバスチアンの原則的な説明――役わりの変更――病室をそっとたずねる――「されこうべ」料理店とあたたかい夕食――郵便集配人にであう――マルチンの家への手紙

ウリーの落下さん降下はどの自習室でも、もちきりの話題になりました。たったひとつの意見が圧倒的でした。それは、「ちびのジンメルンは、どえらいやつだ。あいつにいつか、あんな大胆きわまることができようとは、だれにも思いもよらなかった。」というのでした。

ゼバスチアンだけがそれに反対しました。

「こんどウリーがとびおりたことは、大胆さとはまったく関係がない。」と、かれは拒絶的な態度でいいました。「はしごから飛びおりたとき、かれはそれいぜんより勇かんだったわけではない。かれは絶望にかりたてられてとびおりたのだ。」

「だが、絶望の勇気だ！」と、高等科二年のひとりがさけびました。「そこにちがいがある。はしごからとびおりるなんてことは、夢のなかでだって考えられないような臆病者がいくらもある。たとえ、ひどく絶望していたって。」

ゼバスチアンは好意をもってうなずきました。

「それがきっとあたっている。」と、かれはいいました。「だが、そういう臆病者とウリーとのあいだのちがいは、勇かんさの範囲にあるのじゃない。」

「じゃ、どこにある？」

「ちがいは、ウリーがほかの臆病者よりいじょうにはじを知るという点だ。ウリーは、つまり一本気で単純な少年なんだ。勇気のかけている点がかれ自身をなによりもなやましたんだ！」

ゼバスチアンはちょっと考えてからいいつづけました。

「ぼくが今いおうとすることは、じっさいはきみたちにはまったく関係がない。だが、きみたちは、ぼくに勇気があるかどうか、いつか考えてみたことがあるかい？　ぼくが小心だということに気づいたことがあるかい？　きみたちはぜんぜ

ん気づいたことがない！　だから内証でうちあけるが、ぼくはなみはずれて小心なんだ。ぼくはりこう者だから、それを気づかせないのだ。勇気のかけていることは、とくにぼくをなやましはしない。ぼくはそれをはじない。それがまた、ぼくのりこうなところからきているのだ。だれにでも欠点と弱点があることは、ぼくだって知っている。その欠点をおもてにださないということだけが問題なんだ。」

むろん、かれのいうことが、みんなに理解されたわけではありません。とりわけ、年したの少年たちにはのみこめませんでした。

「ぼくは、はじを知るほうがいいと思うな。」と、れいの高等科二年生がいいました。

「ぼくも同様だ。」と、ゼバスチアンが小声でこたえました。かれはきょうは、みょうにおしゃべりでした。それはおそらくウリーの事故のせいでした。ふだんかれはいつも人をあざけるようなきみょうなことばかりいうのでした。かれには友だちがありませんでした。かれは友だちがいらないんだ、とみんないつも思っていました。ところが、かれらは今、かれもやはり孤独になやんでいたのだということに気づきました。かれはたしかにひじょうに幸福な人間ではありませんでした。

「それはそうと、」と、かれはだしぬけにひややかにいいました。「それはそうと、ぼくに勇気のかけていることをばかにすることはゆるさないぞ。そんなことをするものがあったら、ぼくはただ自分のめんぼくをたもつために、はりたおさずにはおかない。そのくらいの勇気は、ぼくももちあわしている。」

「しずかに！」と、室長がどなりました。室長はすこしいねむりして、目をさましたところでした。

ゼバスチアンは、不当なことについての文章を五十ぺん書きました。

しばらくたって、ゼバスチアンはヨーニーの自習室にいきました。

「あすの晩、だれがいったいウリーの役を演ずるんだい？」と、かれはたずねました。

ヨーニーはすっかりあわてました。「飛ぶ教室」の上演がウリーの事故であやうくなっていることを、まだまったく考えていないのでした。

「あの役はひどく大役じゃない。」と、ゼバスチアンはいいました。

ました。「あすの昼までにあの役をおぼえるものを、だれかさがしさえすればいい。ただ、この気のどくな役者は、小さな金髪の少女のように見えなくちゃならないんだ。」

ついにかれらは中等科三年生のシュテッカーに思いあたりました。シュテッカーがひきうけてくれるかどうか、たずねるまえに、かれはマルチンと相談するため、九号室にはいりました。

九号室は喪中の家のようでした。マチアスは正義先生のところにいって、クリスマスの休暇のあいだ学校にのこっていてもよいかどうか、たずねたのでした。というのは、そうしなければ、ウリーはまったくひとりぼっちになったでしょうから。しかし、正義先生は、それはだんじてゆるさないとこたえたのでした。マチアスは、かれのかえってくるのをたのしみにしている両親のところへ、おとなしくいけ、といわれたのです。それに、ヨーニーが学校にのこるはずですし、ウリーの両親がクリスマスの前夜には二、三日の予定でキルヒベルクにくる、とさっき電話でいった、ということです。そこで、今マチアスは前方を見つめて、クリスマスに家へかえらなければならないといわれたことにたいして、憤慨していました。

二、三台むこうの机にはマルチンが腰かけていて、クリスマスに学校にのこっていなければならないので、ひどく悲しんでいました。かれはもう一時間まえから、ウリーとヨーニーも学校にのこるんだと、いくどもいくども自分にいってきかせましたが、それはそれでまったくべつなことでした。なぜなら、ヨーニーは船長さんの妹さんのところにいってみても、しようがなかったからです。おとうさんが悪い人で、しかもアメリカにいるようなばあいなら、学校にのこることはぞうさもないことです。ウリーのほうは、両親が学校にたずねてきてくれるはずです。それなら、それでいくらかましです。それに、足をおったのなら、旅行のできないことはわかりきっています。

「ぼくは、」と、マルチンは考えました。「ぼくはぴんぴんしている！　足をおってなんかいないのに、出発できないんだ。ぼくはおとうさんやおかあさんを愛している。おとうさんやおかあさんもぼくを愛している。それだのに、ぼくたちはクリスマスの晩にいっしょになれないんだ。いったいなぜか。お金のためだ。なぜぼくたちにはお金がないのか。ぼくのおとうさんは、ほかの人たちよりはたらきがないんだろうか。そんなことはない。ぼくはほかの少年たちより勤勉でな

いだろうか。そんなことはない。ぼくたちは悪い人間なのか。そんなことはない。それなら、どこに原因があるのか。それは、世のなかが正しくないためだ。そのためひじょうにおおくの人が苦しんでいる。それをかえようとする親切な人たちもいるけれど、クリスマスの晩はもうあさってにせまっている。それまでに世のなかをかえることはできないだろう。」

マルチンは歩いて家へかえろうかということさえ考えました。それには、三日はかかるでしょう。冬のさいちゅうに。——早くてもクリスマスの二日めでなければ、家につけません。あの五マークで食費と宿泊料にたりるかどうか、休みがすめば、また学校にもどってこなければなりません！そのときは両親はまたかれのための旅費にこまるでしょう！

だめでした。どう考えてみても、こんどは学校にのこるほかありませんでした。……

ヨーニーとゼバスチアンがへやにはいってきて、三年生のシュテッカーをウリーの代役に適当だと思うかどうか、とたずねたときも、まったく聞いていませんでした。ヨーニーはかれの肩をつかんで、悲しい考えからゆさぶりさましました。ゼバスチアンが問いをくりかえしました。

マルチンはどうでもよさそうに、「そう、たしかに。」といったきりでした。

ふたりはおどろいてマルチンを見つめました。

「きみは、いったいどうしたんだ？」と、ゼバスチアンがたずねました。「ウリーの事故のためかい？　それならそんなに頭をなやますことはないよ。もっともっとひどくなるところを、たいしたことなしにすんだんだ。」

「そう、たしかに。」とマルチンはいいました。

ヨーニーはからだをかがめて、ささやきました。

「きみ、どこかわるいのかい？　病気なのかい？　それともなにかほかのことかい？」

「そう、たしかに。」と、マルチンはこたえました。まるでほかにことばはもうないかのようでした。かれは机のふたを高くいきおいよくあけて、手紙を書く紙をとりだしました。

そこで、ふたりはでていきました。

「いったいどうしたというんだろう？」と、ヨーニー・トロッツが心配そうに廊下でたずねました。

「見当がつかないな。」と、ゼバスチアンがいいました。「たぶん頭痛だろう。」

それからふたりは中等科三年生のシュテッカーと話しました。

た。少年はすっかりむちゅうになりましたが、少女の服を着ておさげのかつらをかぶらなければならないのだと聞くと、かれの熱はひどくさめました。しかしふたりの高等科一年生は、自分たちを見すてないでくれと、たのみました。ヨーニーは「飛ぶ教室」の原稿をシュテッカーの手におしつけました。そしてゼバスチアンが命令しました。

「あすの正午にはきみはその役を演じることができるように！」

そこで小さい少年は、いそいでいっしょうけんめいその役の勉強にとりかかりました。

マチアスはもうこれいじょう、がまんができなくなり、口実をつくって、外にでました。室長の美少年テオドルは、まだベク先生のきのうの話からうけた印象に支配されていたので、寛大そのものでした。マチアスは病室の近くの廊下で、柱のかげにかくれて、ようすをうかがっていました。

運よく、数分間ののちに、もう看護婦さんが病室からでてきて、なにか台所にとりにいくため、階段をおりていきました。マチアスは用心ぶかくあたりを見まわしました。

いっしゅんののち、マチアスはウリーのベッドのそばに立っていました。少年は眠っていました。薬のにおいがしました。マチアスの心臓はのどまでどきどきしました。胸をいっぱいにして小さい友だちの青ざめた顔を見つめました。

すると、ウリーが目をひらきました。つかれたかすかな微笑がその目のなかにうかびました。

マチアスはうなずきました。のどがつまりました。

「格別いたくはなかったよ。」と、ウリーはいいました。「ほんとに。おとうさんとおかあさんがあさってくるって。」

マチアスはまたうなずきました。それからいいました。

「ぼくは休みのあいだ、学校にいのこりたかったのだが、正義先生にとめられちゃった。」

「ありがとう。」と、ウリーはささやきました。「でも、どうか家にかえってくれたまえ。きみがもどってくるころには、ぼくはもうだいたいよくなっているよ。」

「むろんだ。」と、マチアスがいいました。「たしかにもういたくないね？」

「だいじょうぶ！」と、ウリーはささやきました。「ほかの者たちは、いったいなんていってる？」

「ただもうおどろいてるよ。」と、マチアスが知らせました。

「そしてきみにたいして、おそろしく尊敬をいだくようにな

った。」

「それ見たまえ。」と、ウリーはささやきました。「きみがいったとおりだ。臆病はなおるもんだよ。」

「だが、ウリー。ぼくはきのう、そんなつもりでいったんじゃないよ。」と、マッツがいいました。「もっとひどいことになったかも知れないんだぜ。ぼくはほんとに臆病者じゃないんだが、きみはもうはしごからとびおりなんかしないって、かたく約束してくれるね。」

ウリーの顔は、よろこびとほこりにかがやきました。

「うん。」

「だんじてしないね。」と、マチアスが、いいました。

「ぼくはどんな悪口をいわれるより、つらいんだよ。」

ウリーは自分にたいしても、ひとにたいしても満足した気持ちでした。いたくても、数週間ベッドで安静にしていなければならないにしても。

「まくらもとの台にチョコレートがのってるよ。校長先生が自分でもってきてくださったんだ。食べたまえ！」

「いや、ありがとう。」と、マチアスはこたえました。「腹がすいていないよ。」

ウリーはふきだしそうになりました。が、胸のまわりがいたくてわらえませんでした。

「腹がすいていないの？」と、かれはささやきました。

「でも、マッツ、チョコレートを食べろって、ぼくが命令するよ。そうしないと、ぼくはこうふんするよ。ところが禁煙先生はけっしてこうふんしちゃいけないっていったんだ。」

そこでマチアスはさっそくチョコレートを手にとりました。マッツが二つ三つ口におしこむまでは、ウリーはきびしい顔をしていました。それからかれはうちとけて微笑しました。

そのしゅんかんドアがあいて、看護婦さんがへやにはいってきました。

「すぐでていきなさい！」と、かの女はどなりました。「大きな腕白者が小さい病人のチョコレートをとって食べてしまうなんて、そんなことが考えられますか。」

マチアスは、すっかりまっかになりました。

「だってウリーがぼくに命令したんです。」と、かれは口をうごかしながらいいました。

「でていきなさい！」と、かの女はどなりました。

ふたりの少年はうなずきあいました。

「早くよくなるようにね、ウリー！」と、マチアスはいって、でていきました。

夕がたのお祈りにつづいて、正義先生が生徒ぜんたいの前で短い話をしました。

「小さいウリーがぜひしなければならないと思った実験は、ひとつの事故にとどまって、不幸にはならなかった。そのことをわれわれは心から感謝しよう。もっとひどいことになるかもしれなかったのだ。この種類の勇気が流行なんかになることのないように、出席のみんなにたいして、念のため厳重に注意しておく。勇気にしても、その欠乏にしても、これをおもてにあらわすときは、できるだけ目だたぬようにしてもらいたい。われわれは学校の名誉が自分自身のものであるかのように注意をはらわなければならない。足の骨をおるなんてことは、勇気をしめす手段としては、わたしが舎監としての資格においてだんぜん拒絶しなければならないところだ。それにあんなことには、たいしたねうちはみとめられない。いいか。あのことはこれでおしまい！　わたしは、今晩ビールを飲みに外出する。最上級のヘンケルが、代理をつとめる。ぎょうぎよくしなさい。きみたちが今晩けんかでもすると、わたしは、今後もう、外出できなくなるんだから、そのへんのことを考えてくれ。ビール一ぱいぐらい飲めるようにしてくれるだろうな。それでは、よし、お休み！」

「お休みなさい、先生！」と、みんなはさけびました。

ドクトル・ヨハン・ベクは町へおりていきました。料理店「されこうべ」は町はずれにあり、道はかなりあります。禁煙先生はここでピアノをひいていると、いったのです。

「音楽、ダンスあり、ブドウ酒を飲む義務なし」と、入口に書いてありました。正義先生ははいりました。料理店は上等なほうではなく、お客さんたちはかなりあつかましいようすでした。禁煙先生は、調子はずれのピアノにむかって、流行曲をつぎつぎにひいていました。

ベク先生は小さいテーブルに席をしめ、ビールを一ぱい注文して、葉まきに火をつけました。禁煙先生はかれに気づき、かれにむかって、うなずきました。正義先生は、友だちがピアノのキーをたたいているあいだ、まわりをじっくりと見わたしました。ここはじっさい、かなり調子はずれの料理店でした。男たちは、帽子をかぶったままおどっていました。なにがとびだすかわからないというところでした。

半時間ほどたって、禁煙先生はベク先生のテーブルのとこ

ろにやってきました。
「大休止！」と、かれはいって、愉快そうに微笑しました。ボーイが焼きジャガイモつきのビフテキと、小さいコップのビールをもってきました。
「あたたかい夕食か！」と、禁煙先生はいって、うまそうに食べました。
「ぼくのいうことを、ひどくわるくとらないでくれたまえ、ローベルト。」と、正義先生はいいました。「だが、これはきみのしているべき職業じゃないよ！　もう一どふつうの市民の生活をやってみる気はないかい？」
あいてがこたえないでいると、ベク先生はいいました。
「じゃ、せめて、ぼくのためにやってくれたまえ！」
禁煙先生は、頭を横にふっていいました。
「きみはどうしようというんだい？　ヨハン。ぼくは、ぼくのふうがわりな客車のなかですっかり満足している。春にはまた花がさく。たいした金はいらない。きみがぼくのために、空費した年月だと考えるこの数年間ほど、ぼくは思索と読書の時間をゆたかにもったことはない。あの当時ぼくの味わった不幸はあれとして意味があった。ぼくはかわり者になったが、こうしたかわり者もいなくちゃいけない。ぼくは医者になんかならないで、植木屋になるべきだった。だが、それには残念ながらもうおそすぎる。このそうぞうしい平凡な料理店で、ぼくはどこか森のなかにでもすわっているように、ふしぎな孤独を感じるのだ。」
「まあ聞きたまえ。」と、正義先生がいいました。「ぼくたちの校医をしている衛生参事官ハルトウィヒ先生は、もういい年だ。それに手びろく開業もしている。かれがきみをぼくたちの学校のためにかれの後任にすいせんしたところで、かれにはたいしたぎせいじゃないと思うんだ。そうすりゃ、ピアノひきとしての収入くらいはえられるだろう。きみの客車のなかに住みつづけることもできるだろう。この提案をどう思うかね？　ひとつ、ハルトウィヒ老先生にきいてみるかね？」
「どっちでも！」と、禁煙先生はこたえました。「きみがおもしろいと思ったら、きいてみたまえ。だが、いつかまたアスピリンの処方を書くことによって、ぼくが今よりたのしくなる、と思っちゃいけないよ。生活に野心をうしなってはならないなんていう、きまり文句だけは、もちださないでくれたまえ。ぼくのような暮らしかたをする人間が少なすぎるんだ。むろんぼくは、みんながみんな、あやしげな料理店のピアノひきになれ、とはいわないよ。だが、ほんとにたいせつなことを思いだす時間をもつ人が、もっとおおくいてほしい、と思うんだ。金と位と名誉なんて、子どもじみたものじゃないか！　そんなものは、たかがおもちゃにすぎないよ。ほんとにおとなはそんなものをあいてにしやしない。どうかね、ぼくのいうことは？」
かれはひと息つきました。
「だが、きみんとこの高等中学生たちが健康であるように努力する、というのは――そりゃむろん、ひどくいやなしごとじゃないだろう。病人がでたら、ぼくは、かきねをこえていきさえすりゃいい。花をつくり、本を読むひまはできるだろうね。じゃ、いいよ、老校医にひとつきいてみてくれたまえ！　かれが頭を横にふったら、ぼくはここでキーをたたきつづける。マルチンと、ヨーニーと、マチアスと、ウリーと、ゼバスチアンが卒業するまでは、ぼくはどっちみちぼくの菜園からうごかないよ。」
「そしてぼくは、ぼくの舎監室からうごかないよ。」と、正義先生はいいました。「すばらしいやつらだ！」
そして、ふたりはたがいに健康を祝して、ビールを飲みました。

アノひきになれ、とはいわないよ。だが、ほんとにたいせつなことを思いだす時間をもつ人が、もっとおおくいてほしい、と思うんだ。金と位と名誉なんて、子どもじみたものじゃないか！　そんなものは、たかがおもちゃにすぎないよ。ほんとにおとなはそんなものをあいてにしやしない。どうかね、ぼくのいうことは？」
かれはひと息つきました。
「だが、きみんとこの高等中学生たちが健康であるように努力する、というのは――そりゃむろん、ひどくいやなしごとじゃないだろう。病人がでたら、ぼくは、かきねをこえていきさえすりゃいい。花をつくり、本を読むひまはできるだろうね。じゃ、いいよ、老校医にひとつきいてみてくれたまえ！　かれが頭を横にふったら、ぼくはここでキーをたたきつづける。マルチンと、ヨーニーと、マチアスと、ウリーと、ゼバスチアンが卒業するまでは、ぼくはどっちみちぼくの菜園からうごかないよ。」
「そしてぼくは、ぼくの舎監室からうごかないよ。」と、正義先生はいいました。「すばらしいやつらだ！」
そして、ふたりはたがいに健康を祝して、ビールを飲みました。
「ちびのウリーが早くよくなると、いいがな！」と、禁煙先生が大きな声でいいました。かれらはさかずきをあわせあいました。それから実業学校生とのたたかいについて聞いたことを話しあいました。
正義先生は、友だちにむかって微笑しました。
「あの連中はぼくたちふたりをすいているんだぜ、むさいやつらだが。」と、かれがいいました。
禁煙先生はたのしげにうなずいて、いいました。
「かれらの気持ちも、もっともじゃないかしら！」
それから、かれはすぐまた調子はずれのピアノにむかわねばなりませんでした。お客さんたちがおどりたがっていました。
夜なかすぎてから、かれらふたりは町をはじからはじへ横ぎって家にかえりました。少年時代のいろいろなできごとが思いうかんできました。それはなんと古いむかしのことだったでしょう！　だが、それはここでのことでした！　今夜散歩している往来でのことでした！　二十年まえいっしょに教室に腰かけていた連中はどうなったことでしょう？　数人の者についてはいくらかの消息を知っていましたが、ほかの者はどうなったことでしょう？　頭の上では星がきらめいてい

ました。それもむかしとおなじ星でした。

北通りのかどのところで郵便集配人が、ちょうどポストをあけていました。

「あのころ、なんどこのポストまで走ったことだろう！」と、正義先生がいいました。

「すくなくとも、週に二回。」と、禁煙先生がものおもわしげにいいました。「ぼくが手紙をしばらく書かないと、ぼくの身になにかあったんじゃないかと、母は考えたもんだ。」

それはそうと、郵便集配人のあけたポストのなかには、ヘルムスドルフのターラー氏夫妻あての手紙がはいっていました。うらには、

「発送人、キルヒベルク高等中学校、マルチン・ターラー」

と、書かれていました。

「ポストは、むかしのままだが、集配人はもうおなじ人じゃない。」と、正義先生がいいました。

今しがたのべた手紙の文句はつぎのとおりでした。

「愛するやさしいおかあさん！

まずぼくは、お察しのとおり、胸をつかれました。でも、どうにもかえられないことですから、しかたがありません。ぼくはすこしも泣きませんでした。ただの一滴も。それをおかあさんにも、おとうさんにも約束します。お菓子とチョコレートは、パン屋のシェルフさんのとこで買います。あすこはひどくやすい、と、マチアスがいいます。そり遊びにもいきます、もしそれで、おかあさんがよろこんでくださるのなら、きっといきます。安心していてください。お金をほんとにありがとうございました。クリスマスの前日、郵便局にいって、かえてもらいます。

こんどは、ぼくたちがいっしょになれないさいしょのクリスマスです。むろんたいへん悲しいことです。でも、おかあさんはぼくを知っています。ぼくは、ぺちゃんこになんかならないぞと思ったら、けっしてなりません。ぼくだって男ですもの！　小包はあすのたのしみにしています。モミの枝を二、三本、机の上にたてます。ろうそくもあります。ぼくのほかに、ヨーニーものこります。そのわけは、おかあさんもごぞんじです。それからウリーも。かれは右足をおりました。このほうがずっとひどいことですね？　しっかりしていれば、なにもわるいことはないって、ヨーニーはいいます。ほんとにそうですね！

こんどは、おかあさんにも、おとうさんにも、なにも贈りものができません、お察しください！　来年はたぶん新一年生のひとりに補習教授をしてやって、たくさんお金がはいります。すてきでしょう？

でも、ぼくはおかあさんたちのために、絵を一まいかきました。「十年後」という題で、ごらんになれば、きっとわかるでしょう。ぼくが水色の馬車におかあさんたちをのせて、アルプスのむこうまでいった画面です。それを手紙に同封します。二どおらなければなりません。絵がおかあさんたちの気にいりますように！　これより美しくは、まだ書けません。二週間もかかりました。おかあさん、夕食のベルが鳴っていますから、これでもうおしまいにしなければなりません。あとでぼくは、いそいでポストまでおりていかなければなりません。

クリスマスに家にかえれなくても、ぼくをほんとにかわいがってください。悲しがらないで！　ぼくも悲しみません。ぼくを信じてください。いや、ぼくはそり遊びにもいき、いつもおかあさんのことを考えています。きっととても愉快なことでしょう。おとうさんにもくれぐれもよろしく。

おふたりの、男らしいマルチンから」

ポストをからにした郵便集配人は、かれの大きなかばんのなかに、どんなにたくさんのため息がとびこんだか、気づきませんでした。ベク先生も禁煙先生も、同様に気づきませんでした。

第十章

休暇まえのさいごの授業日——キルヒベルクの散歩といろいろなめぐりあい——マチアスに、もう一まいの板チョコ——体育館のクリスマス祭り——思いがけぬ見物人——贈りものにたいするあいさつ——マルチンのベッドのそばのいっしゅんかん

よく日はさいごの授業日でした。十二月二十三日には、電気の発生とか、Nu をともなう不定法とか、利子計算とか、カノッサのハインリヒ皇帝（ドイツの皇帝ハインリヒ四世のこと）とかにたいして、必要な興味をそそげと、生徒に要求する先生はありません。世界じゅうのどの先生だって、それを要求することはできません！

じっさい、だれも要求しません。キルヒベルクのヨハン・ジギスムント高等中学でも、それにかわりはありませんでした。——大多数の寄宿生はもうかばんの荷づくりをはじめていました。かれらは体育館でおこなわれるクリスマスのお祝いを、あすの汽車旅行を、わが家でもらうはずの贈りものをたのしみにしていました。また、かれらが両親や兄弟姉妹にもってかえる贈りものをたのしんでいました。かれらはまったく有頂天で、うかれたち、よほど自制しないと、授業のさいちゅうにいすの上にあがって、そこでおどりはじめかねないありさまでした。先生たちはいやおうなしに、生徒たちに精神的な責任能力のとぼしくなっていることを頭において、話や伝説を朗読させたり、思いつくかぎり、自分で物語をして聞かせたりしました。

いちばんおしまいの時間、高等科一年生はベク先生の地理の授業でした。世界文学の、もっとも美しいたとえ話をあつめた本を先生はもってきて、そのなかの、短い意味ぶかい話のいくつかを、じゅんじゅんに朗読させました。それはほとんどどれも動物のことをあつかっていながら、どれも人間のことをふうししていました。

マルチンにも朗読の番がきました。かれは、どもりました。読みちがえました。二行もとばしても、それに気づきませんでした。きのうはじめて読みかたをおそわりでもしたような読みかたをしました。二、三の生徒がわらいました。ヨーニーは、心配そうにマルチンのほうを見ていました。

「まったく、すばらしいできばえだった。」と、正義先生はいいました。「きみの心は、おそらく、もうヘルムスドルフのクリスマス・ツリーの下にいっているのだろう。もうすこしがまんしたまえ。じゅうぶんはやく両親のところにいけるんだから。」

マルチンは頭をたれて、自分にいってきかせました。

「泣くこと厳禁！　泣くこと厳禁！　泣くこと厳禁！」

昨晩、寝つかれなかったときにも、かれはこの文句をくりかえし心のなかにつぶやいたのでした。すくなくとも百ぺん。

正義先生は、たとえ話の本を、つぎの生徒にわたしましたが、時間のおわりまで首席の生徒をしげしげとわきから見つめ、いぶかしがっているようすでした。

マルチンは自分のいすを見つめ、顔をあげることができずにいました。

お昼に、郵便屋さんが、おかあさんが手紙で知らせてきた小包をもってきました。クリスマスの贈りもののはいった小包！　マルチンはなかを見ないで、わきの下にかかえ、更衣室にもっていきました。ちょうど戸だなをあけて、小包をなかにいれたとき、マチアスがとおりかかりました。マチアスは大きなかばんをひきずっていました。荷づくりしようとしていたのです。

「おや、きみはどこから、いまごろ小包をもらったんだい？」と、かれはいいました。

「うちからさ。」と、マルチンはこたえました。

「うちにかえるまえの日になって、なんだって小包をおくってきたんだい？」

「おかあさんが新しい下着をおくってくれたんだ。」と、マルチンはうそをいいました。「一月になって学校にもどるとき、荷物が少なくてすむように。」

「そいつはまったくじっさい的だな。」と、マチアスがいいました。「さて、ぼくはかばんの荷づくりをするかな。ほんとのところ、ぼくは学校にのこっていたいんだが、正義先生がなぜだか反対なんだ。うちのものをよろこばすために、フランケンシュタインのゼルプマン家のクリスマス・ツリーの下に立てって、先生はいうんだ。ぼくはそれほどでもないん

だがね。そりゃ、クリスマスのあいだは、うちじゃいつもとてもおもしろいんだよ。きみのところもそうかい？」

「むろんさ。」と、マルチンはいいました。「まったく、とてもおもしろいよ。」

マチアスは、やつぎばやに、話しかけました。

「きみも、正午の汽車でいくかい？」

「いや、ぼくはすこしおそくいく。」

「十七時十二分のかい？」

「そうだ、十七時十二分のだ。」

「そんなこといわないで、正午の汽車にしたまえよ！」と、マチアスがたのみました。「すくなくとも、五十人の少年が、正午にぼくたちの方向にむかっていくのだ。客車を一台占領して、さわぐんだ。きっとすてきだぜ！　ね、いっしょにいくね？」

マルチンはもうがまんできなくなり、戸だなをバタンとしめて、「いやだ！」とどなり、へやからかけだしました。

マチアスは頭をふって、「あいつ気がふれてるぞ。」といいました。

午後、大多数の生徒は、いそいで買いものの追加をしたり、おもちゃ屋をのぞいたりするために、町へおりていきました。朝のうち雪がふったので、はだをさすような寒さでした。町かどでクリスマス・ツリーを売る人は、のこりのモミや松を売りきってしまおうとつとめました。ねだんもいいなりになりました。

マルチンは郵便局にいって、窓口の局員に切手を現金にかえてくださいと、たのみました。局員は、ライオンのようにうなりましたが、けっきょく二マーク銀貨を二まいと、一マークの銀貨を一まいだしました。少年はていねいにお礼をいって、お金をしまい、すこしばかり町をぶらつきました。

ウィルヘルム広場で、かれは、実業学校生の大将だったエーガーラントにあいました。ふたりは、戦争がすんでから保養地のリビエラでてくわした敵国の将軍のようにあいさつをしました。うちとけはしませんが、尊敬の念をもって。

カイゼル通りで、マルチンはゼバスチアン・フランクにばったりあいました。ゼバスチアンは、てれくさそうに、手にもっている数個の小さい包みを見せました。

「なんだってこんなことをするのかね。習慣っていうのは、こうしたもんだね。きみも買いものかい？」

「いいや。」と、マルチンはこたえました。

「ぼくはいつも、ぎりぎりまでまつんだよ。」と、ゼバスチアンがいいました。「いつだって、ぼくはやめようと思うのさ。じっさい、ずいぶん時代おくれのならわしだからね。だが、けっきょく、ぼくもとびだすのさ。みょうなもんだね。ほかの人たちになにか贈りものをするのは、やっぱりたのしいもんだね。きみはそう思わないかい？」

「そりゃそうさ。」と、マルチンはいいました。「それどころか、すばらしいならわしだよ。」

そういって、マルチンは下くちびるをかみました。もうひとこと、なにかいわれたら、かれはわっと泣きだしたでしょう。泣くこと厳禁、と思いなおし、ゼバスチアンにむかってうなずいてから、いそぎ足でいきすぎました。かれはほとんど走るようにしました。なんでもかでも、ここをはなれろ！　このクリスマス空気のなかからでろ！　北通りのかどで立ちどまって、シェルフ・パン屋のかざり窓を検分しました。

ここで、あすの午後チョコレートを飲み、お菓子をたべるはずです。やりきれないことでしょう。しかし、それはおかあさんの希望でした。そしてかれはそれをかたく約束したのでした。

「ああ！」と、かれは考えました。「二週間のあいだ、一どでも泣かないで、どうしてがまんできるだろう？」

それから学校へ走ってかえりました。ポケットのなかで二マーク銀貨二まいと一マーク銀貨一まいとが、チャリンチャリンと音をたてていました。

「飛ぶ教室」の総ざらえは、衣装をつけておこなわれました。代役の小さいシュテッカーがだめだろうと、みんな心配していました。ところが、いがいなできばえでした。この中等科三年生はずばぬけた役者ぶりでした！　床屋のクリューゲルからかりた金髪のおさげをつけ、ウリーの戸だなからだしたきものを着たところ、たいしたものでした！　変装していることを知らない人は、だれでも少女と思ったにちがいありません。

「最上級生たちはきみにほれこんで、ふらふらになるぜ。」と、ゼバスチアンがさけびました。

マチアスだけは、ウリーのほうが、すこしよかったと思いました。だが、それはわかりきったことでした。友だちにたいする責任感が、そう思わせたのです。

かれらは二どけいこをしました。いちばんむずかしかったのはマチアスでした。とりわけ、第四幕と第五幕のあいだの

短い衣装がえの休みがかれをなやましました。一分間にホッキョクグマから聖ペテロにかわるのは、子どもわざではありませんでした。だが、それもきっとうまくいくでしょう。

「よし、だいじょうぶ。」と、ヨーニー・トロッツがいいました。「今晩うまくまいりますように、トイ、トイ、トイ。」

それからかれらは、おたがいのきものに三どつばをかけあいました。役者はいつもそうすると、ゼバスチアンが、みんなに話したからです。

ヨーニーはマルチンのそばにあゆみより、「いったいきみはどうしたんだ？」とたずねました。「きみはせりふはおぼえているが、なにかほかのことを考えてでもいるように、読みくだすだけだ。」

「今晩はきっとうまくいくよ。ゆうべよく眠れなかったのだ。」と、マルチンはいいました。

着かえてしまうと、みんなは衣装とおさげの髪とひげとを戸だなのなかにいれました。それから校舎にもどり、病室にあがっていきました。ウリーを見まうことがゆるされたのです。

ウリーのぐあいをたずねたあとで、かれらは、芝居がきっとうまくいくだろうと語りました。マチアスは、三年生のシュテッカーがかれとしてはなかなか有能なこと、もちろんウリーとは、ひかくにならないが、ともかく役にたつことを話しました。ほかの者たちも、うなずきました。

「そいつはうれしいな。」と、ウリーがいいました。「あすは、きみたちみんな旅だつんだね！　ヨーニーとぼくをのぞいては。せいぜいたくさん贈りものをもらいたまえ。」

それから目くばせでマチアスをベッドのそばによび、その手にそっと板チョコをにぎらせました。

「校長がまたきたんだよ。」と、かれはささやきました。「食欲はどうかね？」

「まあどうにか。」と、マッツはいいました。

「それみたまえ。いつもかわらず大いに食べるんだね！」と、ウリーがいいました。

「うちじゃ、とてもぐあいがわるいんだよ。」と、マチアスは説明しながらチョコレートをポケットにいれました。「うちのおばあさんは目をまるくするんだ。ぼくがなんでもかんでも食べちゃうのは、まさに法律違反だっていうんだ。」

「そんなこと気にするなよ。」と、ゼバスチアンがいいました。かれはきょうはいつもよりおだやかでした。「人間が必要とするものは、どうしても必要なんだ。」

それからかれはウリーのほうをむいて、おじさんみたいに頭をふりました。

「きみはすごいよ。運動場に教会の塔がたっていなくて、ほんとにしあわせだったよ。教会の塔からだって、きみはとびおりたかもしれないからね。」

かれらは病床をかこみ、いろいろ話はしましたが、じっさいは、なんといったらよいか、わかりませんでした。寝床のなかの少年は、もはやきのうまでのちびのウリーと同一人ではありませんでした。

「今晩きみがでられないのは残念だね。」と、ヨーニーがいいました。「いいさ。あした、なにからなにまでくわしく話してやるから。」

マルチンは窓のそばに立っていました。ほんとは、かれは自分も学校にのこるのだと、みんなにいいたいと思いましたが、おもいきっていうことができませんでした。友だちといっしょにいながら、見すてられてしまったような気持ちがしました。まったく見すてられてしまったような。

クリスマスのお祝いは、みんなの期待いじょうのすばらしさでした。さいしょに、ふたりの最上級生がピアノをひきました。有名なクリスマスの歌の変奏曲でした。それから校長先生のグリューンケルン博士が、短いあいさつをのべました。それは、かれがこれまでおこなってきたクリスマスのあいさつとにたりよったりでしたが、さいごに、いままでにはなかった新しい二、三の文句をのべました。それが少年たちの心をうごかしました。先生はこういったのでした。

「わたしはよく自分がサンタクローズだという気持ちになります。黒いフロックコートを着ていますし、白いほおひげをつけてはいませんが、わたしはサンタクローズとおなじくらい年よりで、まい年やってきます。わたしは、たとえ、むちでおどすようなことをしても、微笑されるたぐいの人間です。けっきょくサンタクローズのように、わたしは子どもを愛する人間なのです。それをどうかけっしてわすれないでください。そう思ってくれれば、たいていのことはおおめに見てもらえるでしょう。」

先生は腰をおろして、ハンケチでめがねをふきました。高等科二年生は、頭をたれました。かれらはこの先生をばかにして一列ずつわらったことをはじいっていたのです。大きなクリスマス・ツリーが、無数の電球でとても美しくきらめいたので、出席者はみんなおごそかな気持ちになりました。

それからつづいて「飛ぶ教室」の初演がおこなわれまし

た。てっとりばやくいうと、上演はすばらしい成功でした。

「授業が現地検証となる」という文句では、ゼバスチアンの期待どおり、先生たちはわらいました。

マルチンはもちろん、ほんとの調子がでませんでした。それだけ中等科三年生のシュテッカーは強い印象をあたえました。三年生と高等科一年生をのぞいては、だれもシュテッカーだと気づきませんでした。みんな大まじめで、かわいらしい少女だと思い、どうして女の人がここにこられたのか、説明に苦しみました。シュテッカーは、さいごの幕で雲のなかからおりてくるのが早すぎましたが、すぐつづいてクリスマスの歌になり、みんな大きな声でいっしょにうたったので、ぼろはでませんでした。みんな感激してわれをわすれてしまいました。

グリューンケルン先生は、フロックコートのすそをひるがえし、人なみをかきわけて役者のほうにむかっていき、役者のひとりひとりとあく手しました。先生はヨーニー・トロッツに感激していいました。

「きみはまったくほんとの詩人だ。トロッツ！　いや、わたしはじつにうれしい！」

少年はおじぎをしました。マルチンのかいた背景も、たいへんほめられました。

「だが、この小さいむすめさん、あんたは、いったい、だれですね？」と、校長先生は女優にたずねました。

見物人は緊張してきき耳をたてました。とりわけ、最上級生は耳の穴を大きくしました。

すると、少女はおさげのついている金髪のかつらをはずしました。つぎのしゅんかん、二百人にあまる生徒がわらったので、壁がゆらぎました。

「シュテッカーだ！」と、みんなさけびました。どよめきはなかなかしずまりませんでした。

とつぜん、ゼバスチアンが友だちにいいました。

「おい、きみたちはなんというね？　先生たちのところにだれがいるか知ってるかい？　正義先生のとなりにさ？　禁煙先生だぜ！」

ゼバスチアンのいうとおりでした。禁煙先生は青い服を着て、先生たちのあいだに、腰かけていました。いきさつを知っているのは、マルチンとヨーニーだけでした。ヨーニーは、このときもう体育館からかけだしていました。

ベク先生は立ちあがって、会場の中央にあゆみでました。しずかになりました。

「わたしのいすのとなりに、きみたちの大多数の知らない人が腰かけている。」と、正義先生はいいました。「この人はわたしのただひとりの友だちです。二十年まえにも、わたしたちふたりは、この体育館にならんで腰かけました。むろん、先生たちのあいだではなく、きょうきみたちの腰かけているベンチに腰かけていました。だいぶまえに、わたしは友だちを見うしないましたが、きのうのようやくかれと再会しました。きみたちのなかのふたりの少年が、わたしたちをむすびつけてくれたのです。わたしの一生をつうじ、これより美しいクリスマスの贈りものをもらったことはありません。わたしの友だちはローベルト・ウトホフトという名で、お医者です。わたしは、今後、かれといっしょにいたいと思うので、きょう校医のハルトウィヒ老衛生参事官と話しあいました。」

禁煙先生は矢のようにまっすぐな姿勢で腰かけていました。正義先生は語りつづけました。

「わたしは衛生参事官ハルトウィヒ先生に、わたしの友人ドクトル・ウトホフト氏がわれわれの高等中学の校医になれるよう、キルヒベルクの市当局に、とりなしてもらえまいか、とたのみました。ウトホフト氏とわたしとは、たがいに友だちになったこの学校で、今後またいっしょに暮らすことになるでしょう。かれはきみたちの医者として、わたしは教師として。わたしたちふたりは校舎の土台のように、また雪にとざされた校庭の古い木のように、この学校のものになります。わたしたちはここのものになります。きみたちのものにもなります。わたしたちがきみたちを愛している半分だけでも、きみたちがわたしたちを愛したら、それでよいのです。それいじょうのことは、のぞみません。どうです？　ローベルトくん！」

禁煙先生は立ちあがって正義先生のほうにいき、二こと三ことなにかふさわしいことをいおうとしましたが、親友の手をにぎっただけで、それいじょうのことはできませんでした。

そこへヨーニーが、かた手に二、三の小さい包みをもって禁煙先生のもとにかけより、ふかいおじぎをしていいました。

「愛する禁煙先生、先生のお名まえはどうでもよいのですが、今晩わたしたちのクリスマスのお祝いに先生をおむかえしようとは、おもいがけませんでした。マルチンとウリーと、ゼバスチアンとマチアスとが、あすクリスマスの前夜、あなたの客車のなかで贈りものをするように、わたしにいいました。ところが、先生はおもてむきにも、わたしたちのものになったので、わたしたちの贈りものをきょうのうち

にさしあげたいと思います。」

ヨーニーは、ウトホフト先生の手に、靴下とタバコとセーターをのせました。

「セーターはあわなくても、心配いりません。とりかえる約束をしました。店のうけとりが、そえてあります。」と、少年はいいました。

禁煙先生は贈りものをわきの下にかかえました。

「ありがとう、ヨーニー。わたしの友だちでもあるきみの四人の友だちに感謝します。わたしをまだ知らないほかの諸くんも、きっとわたしになじんでくれるでしょう。その点わたしは不安をいだいていません。」

かれはまわりをぐるりと見まわしました。

「ヨハン・ベクくん、つまりきみたちの正義先生と、わたしとは、この学校のいすで、また外の人生で、いろいろのことを学びました。しかしわたしたちはなにひとつわすれていません。少年時代のことをはっきり記憶にとどめています。これがかんじんなことです。わたしがすこしなみだもろくなっているのをゆるしてください。諸くんもそれはわかってくれるでしょう。それどころか、わたしは諸くんも、すこしなみだもろくなってくれることをのぞみます。それはいちじのことです。足の骨折や肺炎には、わたしはわりにへいきです。それは諸くんも気づくでしょう。といって、これは足をおりなさい、とすすめるわけではありません、けっして！」

禁煙先生は正義先生と腕をくみました。

「かんじんなことをわすれないために、永久に心にきざみつけておきたい、このとうといひとときに、わたしは諸くんにおねがいします。諸くんの少年時代をわすれないように！諸くんがまだ子どもである現在、そういっても、まったくよけいなことに聞こえるでしょう。だが、よけいなことではありません。わたしたちのいうことを信じてください！　わたしたちは年はとりましたが、若い気持ちでいます。わたしたちふたりは、そのへんのことは、よくこころえています。」

ベク先生とウトホフト先生とはたがいに顔を見あいました。

少年たちは、心のなかで、このまなざしをけっしてわすれまいとちかいました。

正義先生が寮の寝室を見まわったのは、もうたいへんおそい時間でした。かれはつまさきで歩きましたが、床がかるくミシミシと音をたてました。ひと足ごとに、壁の小さいあかりがゆらぎました。

第二号寝室で、かれは、マルチンのベッドのそばに立ちどまりました。いったいこの少年はどうしたのだろう？　いったいなにごとがおきたのだろう？

マルチン・ターラーの眠りはやすらかでありませんでした。ベッドのなかで左右に寝がえりをうって、たえずおなじ文句をつぶやいていました。ベク先生は前にかがんで、緊張して耳をすませました。

この少年は、眠りながらなにをつぶやいているのか。

「泣くこと厳禁。」だって？

正義先生は息をとめました。

「泣くこと厳禁！　泣くこと厳禁！」

くりかえし、くりかえし、おなじことを。それはふしぎな夢にちがいありませんでした！　泣くことが厳禁されている夢でした！

ベク先生は、ゆっくり足音をしのばせ、寝室からでました。

第十一章

陽気な停車場——生徒のいない学校——九柱戯場で発見——そっとかきねをこす先生——ウリーの見舞い——両親をえらぶことはできないというヨーニーの主張——二どおなじいいのがれ

十二月二十四日は、ヨハン・ジギスムント高等中学では、地獄のふたをあけたような大さわぎで、はじまりました。少年たちはけもののようにはげしいいきおいで、階段をあがったり、おりたりしました。ある生徒はあわてて歯ブラシを洗面所におきわすれ、またほかの生徒は、かばんのかぎをノミとりまなこでさがしていました。もうひとりの生徒は、スケートを荷づくりするのをわすれました。つぎの生徒は、かばんがあまりいっぱいで、すくなくとも三人がその上にのらないとしまらないので、援兵をつれてきました。

最上級生は、さすがにぐっとおちついて、そんなにいそがないようにふるまっていましたが、だれも見ている者がないと、まったく小さい生徒たちとおなじように、廊下を突進しました。

午前十時ごろ、寮はもう半分からっぽになりました。おそい汽車でいく連中は、まだ相当にさわいでいましたが、移動が一段落だということは、事情をこころえた人にはもう感づかれていました。

お昼につぎの隊が、大きくひらかれた門をとおってでていきました。帽子をななめにかぶり、重いかばんを雪のなかにひきずっていきました。

数分おくれて、マチアスがあたふたとおりてきました。ウリーのところにいたため、おそくなったのです。ヨーニーが門のそばに立っていてあく手しました。

「ちびさんによく気をつけてくれたまえね！」と、マチアスはいいました。「ぼくはたびたび手紙をだすけれど。きみもごきげんよう！」

「きみもごきげんよう。」と、ヨーニー・トロッツはいいました。「ぼくはきっとよく気をつけているよ。だが、きみは宙を飛んでいかなくちゃ。ゼバスチアンは、もうさきにいったよ。」

「なかなかほねがおれるよ。」と、マッツはうめきました。「シェルフ・パン屋にもよらなくちゃ。そうしないと、汽車のなかで腹がすいてまいっちまうからね。先生たちにはじをかかせるようなことはしないよ。それはそうと、文豪くん、いったいマルチン・ターラーはどこにいる？　かれにさよならをいっていきたいんだが、どこにも見つからないんだ。あいてがいなくちゃお話にならん。かれにくれぐれもよろしく。そしてはがきをよこすようにってね。どの汽車で学校にかえるか知らしてもらうために。」

「だいじょうぶ。」と、ヨーニーがいいました。「ひきうけたよ。さあ、もう文句はうちきって、いそぎたまえ。」

マッツはかばんを左の肩にのせて、どなりました。

「おい、ぼくはパンチング・ボールをもらうんだぞ！」

そして、熟練した赤帽のようにでかけていきました。

停車場は高等中学の生徒でひしめきあっていました。北へいく者と、東へいく者と。またれている二本の列車が、短いあいだをおいて、つづいてキルヒベルクを通過するのでした。

最上級生たちは、ダンスのときのあいての令嬢たちとプラットフォームを散歩しながら、紳士ぶって雑談をしていました。またおたがいに花やお菓子をとりかわしました。美少年のテオドルはタンゴのあいての、マルビーネ・シュナイディヒとかいう令嬢から、ほんものにちかいシガレット・ケースをもらい、得意そうにほかの生徒に見せました。みんなはねたましさに顔いろをかえました。

近くにいたゼバスチアンは、一群の下級生をまわりにあつめ、上級生をしり目にしゃれをとばして、にぎやかに人気をわかしていました。

ようやくマチアスがやってきました。かれはかばんの上に腰かけて、お菓子を六きれ食べました。そこへ第一の列車がはいってきました。北へいく生徒たちは、敵の要塞を襲撃でもするように列車につめよせました。それからかれらは窓から首をだして、まだまっていなければならない者たちと、できるだけ大きな声で話しあいました。

高等科二年生が汽車のなかから厚紙をだしました。それには「あいことば、ふるさと！」と書いてありました。中等科一年生がひとり、泣き声をあげながら汽車からまたとびおりました。この小さいとんまな生徒は、かばんをプラットフォ

ームにおきわすれたのでした。それでも、かばんが見つかり、のりおくれずにすみました。

発車すると、みんな帽子をふりました。ダンスのあいてのお嬢さんたちは、小さいハンケチをふりました。ある者は「たのしいクリスマスを！」とさけび、ある者は「新年おめでとう！」とどなりました。ゼバスチアンは「よろこばしい復活祭を！」とわめきました。汽車はホームをはなれました。

そのあとも、なみなみならぬにぎやかさでした。駅長さんのほかは、みんな上きげんでした。駅長さんは、第二の汽車がでていって、そこらじゅうに高等中学生がひとりも見えなくなったとき、はじめて、ほっと息をつきました。駅長さんのたちばとしては、まったくもっともなことでした。

学校の寮はひっそりしていました。午後出発する十名あまりの生徒は、いるかいないか、まったく感づかれませんでした。

正義先生はがいとうを着て、しずかな白い校庭におりていきました。道は雪にとざされ、足あとひとつありません。さわぎもわらい声もきえてしまっていました。ヨハン・ベク先生は立ちどまって、風のため、枝からさらさらとふきおとされる雪に耳をすましました。さあこれで、いよいよ長いしずけさと孤独がはじまるぞ！

かれはわき道をまがったとき、足あとに気づきました。それは少年靴のあとでした。いまごろひとりで校庭を歩きまわっているのは、いったいだれだろう？

かれは足あとをつけました。それは九柱戯場（ボーリングの球をころがして九本の木のびんをたおすスポーツをするところ）のほうにつづいていました。正義先生はその建物の、せまいがわにそって、雪のなかをつまさきでそっと歩き、注意ぶかくかどを見まわしました。

手すりにひとりの少年が腰かけ、頭を柱によせかけて、重い雪雲にとざされている空を見あげていました。

「ハロー！」と、正義先生はさけびました。

少年はびくっとからだをすくめ、おどろいてふりむきました。それはマルチン・ターラーでした。かれは手すりからとびおりました。先生は近よりました。

「きみはここでいったいなにをしているのだい？」

「ひとりでいたかったのです。」と、少年はこたえました。

「それじゃ、じゃましてわるかったね。」と、正義先生はいいました。「でも、きみにあえたのは、まったくよかった。

いったい、なぜきみはきのうの午前、あんなにひどい読みかたをしたのだい？」

「ぼくはほかのことを考えていたんです。」と、マルチンはこまりきってこたえました。

「そんないいわけで、人をなっとくさせることができると思うかい、ええ？　それから、なぜきみは、昨晩あんなにみじめな芝居の演じかたをしたのだい？　なぜ、きのうときょう、食堂でほとんどなにも食べなかったのだい？」

「そのときも、ほかのことを考えずにはいられなかったんです、先生。」とこたえて、マルチンはすっかりはじいっていました。

「そうか。それじゃ、いったいなにを考えずにいられなかったのだい？　クリスマスのことかい？」

「ええそうです、先生。」

「だが、とくべつにクリスマスをたのしみにしているようにも見えないね。」

「ええ、とくべつというわけではありません、先生。」

「いつきみはたつのだい？　午後の汽車でかい？」

そのとき、高等科一年の首席の目から、二つぶの大きなみだがながれだしました。それから、また二つぶ。だが、かれは歯をくいしばりました。それからもうなみだはでませんでした。やっとかれはいいました。

「ぼくは家にはかえらないんです、先生。」

「おや、きみは休暇中、学校にのこるのかい？」と、正義先生はききました。

マルチンはうなずいて、手の甲で四つぶのなみだをぬぐいました。

「きみの両親は、きみのかえるのをのぞんでいないのかい？」

「そりゃ、先生、のぞんでいます。」

「そしてきみは、かえりたくないのかい？」

「そりゃ、ぼくもかえりたいんです。先生。」

「なんだって。おどろきいったね！」と、正義先生はどなりました。「いったいどうしたというんだ？　両親はきみのかえるのをのぞんでいる！　きみもかえりたい！　しかもなおきみはここにのこってる？　そりゃいったいどうしたわけなのだ？」

「それはいいたくありません、先生。」と、マルチンはこたえました。「これで失礼させていただきます。」

かれはうしろをむいて走りさろうとしました。

しかし先生が、かれをしっかりとひきとめました。

「ちょっとまった、マルチン。」と、先生はいい、少年のほうにからだをかがめ、木だちにも聞かれないように、ごく低い声でたずねました。

「きみは旅費でもないのかい？」

そういわれると、マルチンのけなげな態度も、もうまったくくずれてしまいました。かれはうなずきました。それから、雪におおわれた手すりに頭をのせて、さめざめと泣きました。悲しさが少年のうなじをつかまえ、さんざんにゆすぶりました。

正義先生は、おどろいてそばに立っていました。かれはしばらくまっていました。はやまってなぐさめをいってはならないことを、かれは知っていました。やがてかれは、ハンケチをとりだし、少年をひきよせて、顔からなみだをふきとりました。

「もうよし、もうよし。」と、かれはいいました。かれ自身すこし気が弱くなっていました。数回強くせきばらいしてから、やっとたずねました。

「いったい、いくらかかるんだね？」

「八マークです。」

正義先生は財布をポケットからだし、一まいの紙幣をとっていいました。

「それじゃ、ここに二十マークあるよ。これで、いきも、かえりもたりる。」

マルチンは気のぬけたように、お金を見つめていましたが、やがて頭をふっていいました。

「いいえ、先生、それはいけません。」

先生はお金を少年の上着のポケットにいれて、いいました。

「すなおにいうことをきくかい？　いじっぱり屋さん。」

「でも、ぼくは自分でも五マークもってるんです。」と、マルチンはつぶやきました。

「そうか、それじゃ、きみは両親に贈りものをしたくないのかい？」

「そりゃ、ぼくは大いにしたいんです。でも、……」

「それ見たまえ！」と、舎監の先生はいいました。

マルチンはもだえました。

「先生、ほんとにありがとうございます。でも、ぼくの両親はいつ先生にお金をかえすことができるか、ぼくにはわからないんです。ぼくの父は、職がないんです。ぼくは復活祭には、補習をしてやる一年生が見つかると思うんですが。それ

まで、まっていただけるでしょうか。」

「文句はぴったりやめないか。」と、ベク先生がきびしくいいました。「クリスマスの前日に贈る旅費は、かえすにはおよばない！　そのほうが気持ちがいいよ！」

先生のそばに立っているマルチン・ターラーは、どうしたらよいか、どう感謝したらよいか、わかりませんでした。とうとうかれはためらいがちに先生の手をとって、そっとにぎりしめました。

「さあ、荷じたくをしたまえ！」と、正義先生はいいました。「それからご両親によろしく。とくにおかあさんに。きみのおかあさんをぼくは知っているよ。」

少年はうなずきました。そしてこたえました。

「どうか、先生もおかあさまによろしくおっしゃってください！」

「それは残念ながらできないね。」と、ベク先生はいいました。

「ぼくの母は六年まえに死んだよ。」

マルチンはある感動をあらわしました。先生の首にだきつきたがっているように見えました。むろんかれはそうはしないで、尊敬の念をこめてあとにさがり、長いあいだ、まごころをこめて、正義先生の顔を見つめました。

「もういい。」と、ベク先生はいいました。「きみたちはぼくに禁煙先生を贈ってくれた。ぼくはかれと今晩クリスマスを祝うんだ、あそこの客車別荘のなかで。それからウリーとその両親と、ヨーニー・トロッツのこともすこしめんどうをみてやらなければならない。ひとりでいる時間はそうたいしてはないだろうね。」

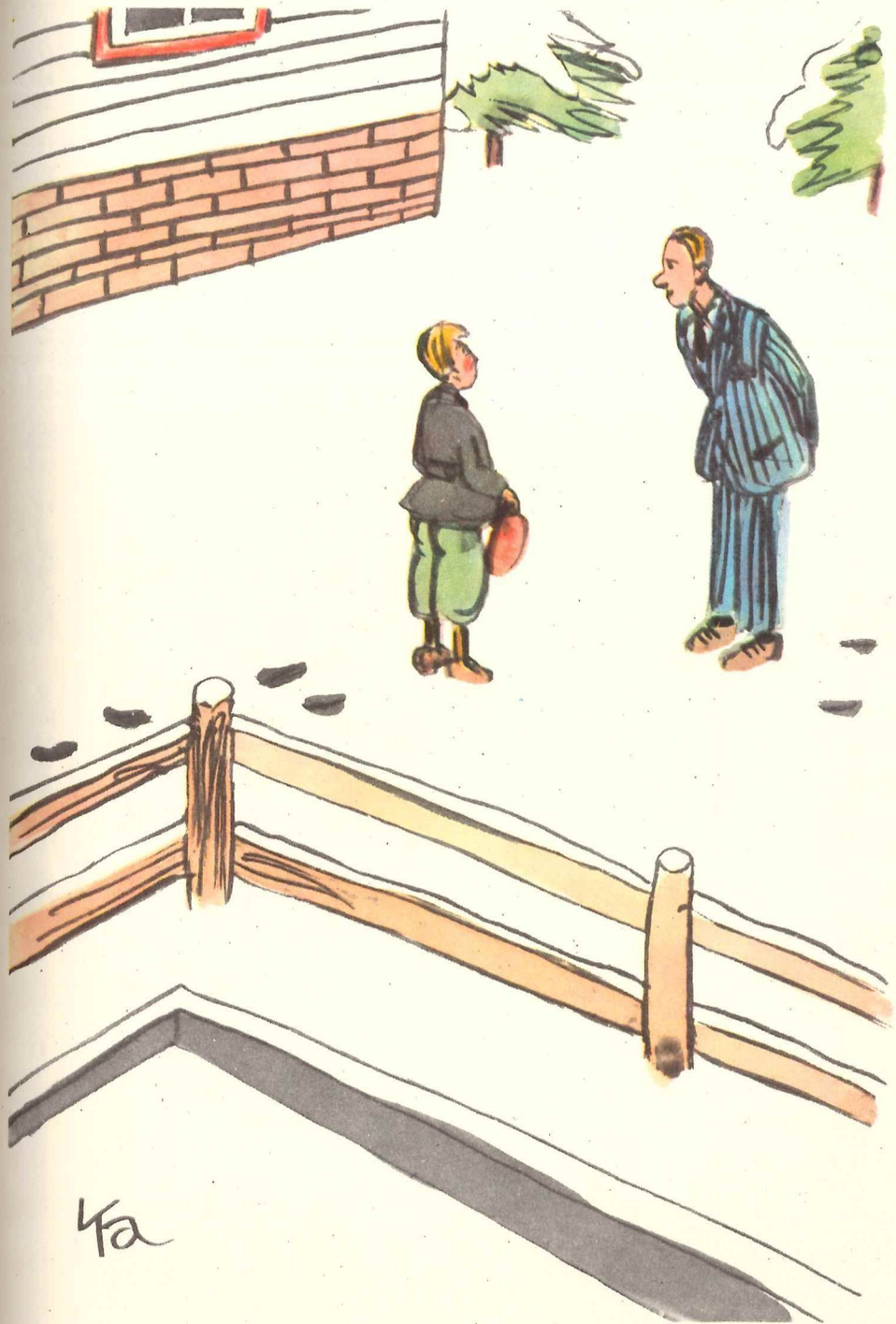
そして先生は少年の肩をたたき、やさしくうなずきました。

「ごきげんよう、マルチン！」

「かさねてお礼を申しあげます。」と、少年は低い声でいい、むきをかえて走りさりました。学校へ。更衣室へ。

正義先生は、雪にうずもれたしずかな校庭をぶらぶら歩きつづけました。かきねまで。そこで、用心ぶかく八方を見まわしてから、かつての少年のときとおなじように、かきねをのりこえました。年はとっても、まだまったくうまくいきました。「むかしとったきねづかさ。」と、かれは自分のほうをものめずらしそうに見ている寒そうなスズメにむかって、いいました。

それから禁煙先生をたずねました。禁煙先生は小さいモミ



の木を手にいれていました。それに、ふたりで、金属の細いテープと、金めっきしたクルミとをつるしました。

マルチンが荷づくりしているところへ、ヨーニーがやってきました。

「きみはここにいたのか！」と、かれはさけびました。「マッツがきみにさよならをしたがっていたよ。かれの家へ手紙で、きみはどの汽車で学校へもどるのか、知らせてくれって。」

「ああ、いいよ。」と、マルチンは満足げにいいました。

「おや、きみはようやく、あたりまえにかえりかけたようだね。」と、ヨーニーはうれしそうにいいました。「きみはてっきり気がくるったんだと思っていたよ。いったい、どうしたんだね？　ええ？」

「きかないでくれたまえ。」と、マルチンはたのみました。（というのは、わが家をもたないヨーニーには、かれは自分のなやみをよく話すことができなかったからです。）

「ぼくはただ、正義先生はふたりといないようなりっぱな人だ、といえるだけだ。」

「きみは、いまさらそれをあらたな発見だと思ってるのかい？」と、ヨーニーがたずねました。

荷づくりしているうちに、マルチンは「世すて人」の絵を手にしました。それは、かれが禁煙先生のためにかいた絵でした。

「おや、おや。」と、かれはいいました。「この絵はもうあまり意味がなくなった。かれはもう世すて人ではなくて、ぼくたちの校医なんだから。でも、これを見たら、やっぱりよろこぶかしら？」

「きっとよろこぶよ。」と、ヨーニーがいいました。「あの人にとっては、孤独な過去一年のなつかしい思い出だからね。今晩、ぼくがあの人にあげるよ。」

それからふたりは、ウリーのところへあがっていきました。ちびさんのところにはお客がいました。かれはベッドのなかで幸福そうに微笑していました。両親がかれのそばに腰かけていたのです。

「まったくおもしろい話ですな。」と、ウリーの父、フォン・ジンメルン氏はいいました。

「二どとあんなことはしませんよ。」と、マルチンが説明しました。

ウリーのおかあさんは、頭の上で両手を打ちあわせました。

「そんなこと、もうまっぴらですわ！」

「どうしてもさけられない、わるい経験というものもあるものです。」と、ヨーニー・トロッツがいいました。「ウリーくんは足をおらなかったら、きっともっとひどい病気になったでしょうよ。」

両親は目をぱちくりしてヨーニーを見つめました。

「かれは詩人なんですよ。」と、ウリーが説明しました。

「ああ、そうかい。」と、おとうさんはいいました。「それなら、もちろん、話はべつだ。」

ふたりの少年はいそいで外にでました。ウリーはマルチンに、できるだけ早くよくなると約束しました。

ヨーニーとマルチンは、校庭の門のところでわかれました。ヨーニーは、マルチンがなにかを知りたがっていながら、あえてきこうとしないでいるのを感じました。

「なにごとも、なれてしまえば、それまでだよ。」と、ヨーニーはいいました。「自分の両親をえらぶことはできないしね。ときどきぼくは、両親がぼくをむかえにここにあらわれたばあいのことを考えるが、そうすると、ぼくはひとりでここにいられるほうがどんなにたのしいかってことに、はじめて気づくんだよ。それはそうと、船長さんが一月三日にハンブルクに着いて、ぼくをたずね、二日間ベルリンにつれていってくれるって。すてきだろう。」

かれは、あいてにむかってうなずきかけました。「心配しないでくれたまえ。ぼくはひどく幸福じゃないよ。幸福だといえば、うそつきになるだろう。しかし、ひどく不幸でもないよ。」

ふたりは手をにぎりあいました。

「きみの小包には、いったいなにがはいっているのだい？」と、ヨーニーがたずねました。マルチンが、クリスマスの小包をかばんのなかにいれずに、手にもっていたからです。

「下着さ。」と、マルチンはこたえました。それはかれがきのうマチアスにしたのとおなじ返事でした。しかしかれは、自分のクリスマスの贈りものをうちへもってかえるわけを、それがヘルムスドルフの自宅のクリスマス・ツリーの下に用意されているかわりに、自分でキルヒベルクからもってかえるわけを、ヨーニーに話すことはとてもできませんでした。

町でかれはおとうさんのために、葉まきの小箱をひとつ買いました。二十五本いりで、まんなかにリボンがついているのと、ハバナのまき葉のとでした。それからメリヤス店で、おかあさんのために、一足のあたたかくあまれたスリッパを

買いました。おかあさんのはいている、ラクダの毛でできたスリッパは、もうだいぶまえからすてるばかりになっていたのですが、おかあさんはいつも、「これはまだ十年もつよ。」といっていました。こうしてマルチンは重い荷物をもって停車場へいきました。

出札口で、かれは「ヘルムスドルフいき、三等一まい。」と、いいました。

駅員が、きっぷと、おつりをくれました。

マルチンは気をつけてポケットにいれました。そして、「どうもありがとうございました。」といって、かがやかしい顔で、駅員を見ました。

「なにがそんなにうれしいの？」と、駅員はたずねました。

「クリスマスですもの。」と、少年はこたえました。

第十二章

たくさんの美しいクリスマス・ツリーと小さい松——一個二キロもあるネーブル——たくさんのなみだ——くりかえし鳴るベル——泣きわらい——新しい色鉛筆とそのつかいぞめ——ヘルムスドルフの夜間ポストと流れ星

クリスマスの前夜の午後八時ごろでした。地方気象台の公報は、中部ヨーロッパぜんたいにむかって、強い降雪のあることを予告していました。今、天は気象台のしらべのいきとどいていることを証明しました。中部ヨーロッパぜんたいにわたって、ほんとに雪がふりました。

ヘルムスドルフでも、雪がふりました。ヘルマン・ターラー氏は、客間の窓べに立っていました。へやは暗がりでした。あかりもお金がかかるからです。ターラー氏の家では、節約しなければなりませんでした。

「クリスマスにこんな大雪がふったことは、ひさしくないね。」と、ターラー氏はいいました。

安楽いすに腰かけていたターラー夫人は、うなずいただけでした。夫も、返事を期待してはいませんでした。あまりひっそりとしないように、口をきいただけでした。

「ノイマンさんのところでは、もう贈りものをしている。」と、かれはいいました。「ああ、ミルデさんのうちでは、ろうそくに火をつけたところだ！　みごとな大きな木をもっているな。もっともだ、ミルデさんはこのごろまた金がはいるからな。」

ターラー氏は往来を見わたしました。きらきらかがやく、窓のかずが、刻こくふえました。雪がチョウチョのように空中にうずまいていました。

ターラー夫人が身うごきをしたので、古いビロードの安楽いすがきしりました。

「あの子はいまごろ、なにをしてるでしょう？　あの大きな、がらんとした学校で？」と、かの女がたずねました。

夫はそっとため息をつきました。
「おまえはせつなく考えすぎるよ。第一、学校にはヨナタン・トロッツがいる。マルチンはとてもヨナタンをすいているらしい。それからもうひとり、貴族のちびさんが足をおった。きっとふたりは、ちびさんのベッドのそばでうんと陽気にやってるよ。」
「そんなこと、あなた、自分でも信じていやしないくせに。」と、妻はいいました。「マルチンが今陽気にやってなんかいないことは、わたし同様、あなたもよくごぞんじですわ。たぶん、どこかすみっこにもぐりこんで、目がつぶれるほど泣いてますよ。」
「あの子はそんなことはけっしてしていない。」と、夫はこたえました。「あれは泣かないと、約束したんだ。あれほどの子は、約束したことはまもるんだ。」
ターラー氏は、じっさいそのことについて、口でいうほど確信はありませんでしたが、そのほかになんといったらよかったでしょう？
「約束、約束ですって！」と、マルチンの母はいいました。「わたしもあの子にたしかに約束しましたよ。それにもかかわらず、わたしはあの子へ手紙を書いているうちに、もう声をだして泣いてしまいました。」
ターラー氏は、窓に背なかをむけました。きらきら光る、よそのクリスマス・ツリーが、かれの神経をいらいらさせるのでした。かれは暗いへやのなかを見つめて、「さあ、あかりをつけなさい。」といいました。
妻は立ちあがって、あかりをつけました。かの女の目は赤く泣きはらされているように見えました。
まるいテーブルの上には、ごくごく小さい松の木がたっていました。それは、くだもの市でクリスマス・ツリーを売っていた、やもめのリーデルさんがくれたのでした。
「マルチンさんにね。」と、リーデルさんはいったのでした。
それでターラー夫妻は本式のクリスマス・ツリーをもつことができました——が、マルチンはうちにいませんでした！
ターラー氏は台所にいき、そこで長いあいだ、ごとごとやっていましたが、ようやく、小さい箱をもってもどってきました。
「ここに去年のろうそくがある。半分しかもやさなかったんだよ。」と、かれはいいました。
それからかれは、半分もえさしのクリスマスろうそくを十二本、松の枝にはさみました。それでようやく小さいクリスマス・ツリーの両親はいっそう悲しくなるばかりでした。
ふたりはならんで、長いすに腰かけました。ターラー夫人は、マルチンの手紙を声をだして読みました。これで五どめでした。数か所で、かの女は間をおいて目をぬぐいました。かの女が読みおわると、ターラー氏はハンケチをだして、強く鼻をかみました。
「こんなことが、運命によってみとめられているとは！」と、かれはいいました。「あんな小さい身のうえで、もう、金がないと、どんなにみじめなものであるか、味わわなければならない。あの子は、両親がこんなにはたらきがなく、こんなに貧乏なことを責めないでくれればいいが！」
「そんなばかなことをおっしゃらないでください！」と、妻はいいました。「いったい、どうしてそんなことをお考えになるの！　マルチンはまだ子どもですけれど、はたらきのあることと、お金のあることとは、おなじじゃないということをはっきりしょうちしていますよ。」
それからかの女は、水色の馬車と六頭の馬の絵を小さい裁縫台からとってきて、ていねいに、小さいクリスマス・ツリーの下におきました。
「わたしには芸術のことはまったくわからないが」と、父親はいいました。「この絵はひどく気にいったよ。たぶんあれは、いまに有名な絵かきになるだろう！　そしたら、わたしたちも、ほんとにあれといっしょに、イタリアにいけるだろう。それともスペインにするかね？」
「たっしゃでいてくれることがなによりですよ。」と、母親がいいました。「マルチンが自分の鼻の下にかいたひげを見てごらん！」
両親は悲しそうに微笑しました。
母親はいいました。
「わたしたちがぜいたくな自動車じゃなくて、六頭だての水色の馬車にのってるところをかいてくれたのは、とてもいいと思いますわ。そのほうがずっと詩的ですもの。」
「それにこのネーブルはどうだい！」と、父親がいいました。「こんな大きなやつは、ありゃしない。ひとつがどれもすくなくとも二キロはあるね！」
「あれのむちのふりようのきようなこと。」
と、母親がいいました。
それからふたりは、またまって、「十年後」という題の絵をじっと見つめ、小さい絵かきのことを考えました。

マス・ツリーもほんとうに美しく見えました。だが、マルチンの両親はいっそう悲しくなるばかりでした。
ふたりはならんで、長いすに腰かけました。ターラー夫人は、マルチンの手紙を声をだして読みました。これで五どめでした。数か所で、かの女は間をおいて目をぬぐいました。かの女が読みおわると、ターラー氏はハンケチをだして、強く鼻をかみました。
「こんなことが、運命によってみとめられているとは！」と、かれはいいました。「あんな小さい身のうえで、もう、金がないと、どんなにみじめなものであるか、味わわなければならない。あの子は、両親がこんなにはたらきがなく、こんなに貧乏なことを責めないでくれればいいが！」
「そんなばかなことをおっしゃらないでください！」と、妻はいいました。「いったい、どうしてそんなことをお考えになるの！　マルチンはまだ子どもですけれど、はたらきのあることと、お金のあることとは、おなじじゃないということをはっきりしょうちしていますよ。」
それからかの女は、水色の馬車と六頭の馬の絵を小さい裁縫台からとってきて、ていねいに、小さいクリスマス・ツリーの下におきました。

父親はせきばらいをしました。
「十年後か！　それまでにはいろいろなことがおきるだろう。」
かれは、ポケットからマッチをだして、十二本のろうそくに火をつけ、あかりをげしました。ターラー家の客間は、クリスマスらしく、きらきらかがやきました。
「ねえ、おまえ！」と、夫は妻にむかっていいました。「こんどはおたがいになにも贈りものができない。それだけよけいにお祝いをいいあおう。」
かれは妻のほおにキスしました。
「たのしいクリスマスを！」
「たのしいクリスマスを！」と、妻もいってから、泣きました。もう泣きやむことがないかのように聞こえました。
ふたりはそうしてどのくらい長いあいだ、古いビロードの長いすに腰かけていたかわかりません。……ろうそくは、だんだん小さくなっていきました。となりの家では「きよしこの夜」をうたいました。あいかわらず雪が窓の外でうずまいていました。
とつぜん、ベルが鳴りました！
ふたりはうごきませんでした。かれらは、自分たちの悲しみを、みだされたくなかったのです。
しかし、ベルはもう一ど鳴りました、大きく、じれったそうに。
ターラー夫人は立ちあがって、ゆっくりと廊下にでました。クリスマスの前夜も、おちついていられないのかと思いました。
かの女は家のドアをあけ、数秒間こわばったまま、つっ立っていました。それから「マルチン！」と、さけびました。その声が階段にかんだかくこだましました。
マルチンだって？　どうしたというんだ？　父親はおどろいてとびあがりました。かれは廊下に走りでて、自分の目をうたがいました。
かれの妻がドアのしきいにひざをついて、両腕でマルチンをしっかりとだきしめていました。
それを見ると、さすがのターラー氏の目もなみだをとめかねました。かれはそっとなみだをぬぐい、床にほうりだされているかばんをとって、いいました。
「だが、マルチン、いったいぜんたい、おまえはどうしてかえってこられたんだい？」

かれらがおちついたへやにたどりつくまでには、かなり長い時間がたちました。母親と少年は、わらったり泣いたりしていました。父親は、すくなくとも十ぺんどもりながらいいました。
「いや、なんだね、それは！」
それからかれは、あたふたとへやの外へかけだしました。というのは、かれらはむろん、こうふんのあまり、ドアをしめるのをわすれたからです。
マルチンがさいしょに口にだしたことは、「かえりの汽車賃もぼくもってるよ。」ということばでした。
ようやく、マルチンがどうしてキルヒベルクでなく、ここにいられるかを報告することができるほどに、三人はおちつきました。
「ぼくはほんとうに、とても気をはっていたんだよ。」と、かれは語りました。「ぼくはほんとに泣かなかったよ。もっとも、たしかに泣きはしたけれど。……ぼくたちの舎監のベク先生がなにかへんだってことに気づいてね。うん、そこで先生がぼくに二十マークくださったの。校庭で。九柱戯場で。先生はそれをぼくにくださったの！　それから先生はおとうさんやおかあさんにくれぐれもよろしくって。」
「それはどうもありがとう。」と、両親は声をそろえていいました。
「そのうえ、ぼくは、贈りものもいくらか買うことができたんだよ。」と、マルチンは得意になって報告しました。そしておとうさんに、まんなかにリボンのついた葉まきとハバナのまき葉のとを贈りました。そしておかあさんには、あんだスリッパをわたしました。ふたりは、ひじょうによろこびました。
「わたしたちの贈りものは、おまえの気にいったかい？」
と、母がたずねました。
「ぼくはまだ、ぜんぜんみていないんです。」と、マルチンは正直にいいました。そしてキルヒベルクにおくってくれた小包を今はじめてひらきました。すばらしいものがはいっていました。おかあさんの手製の新しい寝まき、毛の靴下二足、チョコレートをきせた蜜入り菓子の包み、南洋に関するおもしろい本、スケッチ帳、それからいちばんすばらしい、ボール箱入りの極上の色鉛筆。
マルチンはすっかり感激して、両親にキスしました。
これいじょう、美しいクリスマスの前夜は、まったく考えられませんでした。——小さいクリスマス・ツリーのろうそ

くは、たちまち、もえつきてしまいましたが、あかりがともされました。おかあさんはコーヒーをわかし、おとうさんはクリスマスの葉まきをすいました。それからみなで、蜜入り菓子を食べ、生きていると死んでいるとを問わず、あらゆる千万長者をみんなあわせたよりも、幸福な気持ちになりました。おかあさんは、新しいスリッパをはいてみるように、すすめられました。そしてこんなすてきなスリッパは、まだはいたことがないといいました。

あとでマルチンは机にむかって、停車場で買ったふつうのはがきをポケットからとりだし、絵をかきはじめました。もちろん、新しい色鉛筆で！

両親は微笑しながら顔を見あい、それからマルチンのほうを見ました。かれは、上着の背なかから二つの大きな天使のつばさのはえている若い紳士をかきました。このふしぎな人は、雲のなかからふわりとおりてきました。下には、目から大つぶのなみだをしたたらせている少年が立っていました。つばさのある紳士は、ふくれたさつ入れを両手にもって、それを少年のほうにさしだしていました。

マルチンはうしろにもたれ、専門家らしく目を細くしてしばらく考えてから、まだいろいろのものをかきそえました。

いきました。そこでかれらは、はがきを夜間ポストにいれました。正義先生がそれをたしかにクリスマス休みのさいしょの日にうけとるように。そして三人はぶらぶら散歩しながら家へかえりました。少年はまんなかにはさまって、両親と腕ぐみしながら。

すばらしい散歩でした！　空はかぎりのない宝石店のようにきらめいていました。もう雪はふっていませんでした。どこの家にもクリスマス・ツリーがかがやいていました。

マルチンは立ちどまって空を指さしました。

「ぼくたちが今見る星の光は、数千年もまえのものです。光線がぼくたちの目にとどくまでには、そんなに長い時間がかかります。たぶんこれらの星の大多数は、キリストのお生まれになるまえに、もうきえてしまっているでしょう。しかし、その光はまだ旅をつづけています。それで、ぼくたちにとっては、まだ光っているのです。じっさいは、とっくに、つめたく暗くなっているのですけれど。」

と、かれはいいました。

「なるほど。」と、父はいいました。母も同様に感心しました。そして歩きつづけました。雪が靴の底でキュウキュウと

とりわけ、いちめんにふる雪を、それから、背景に、かざりのついたクリスマス・ツリーが機関車にはえている鉄道をかきました。列車のそばに駅長が立って、出発の合図をするため腕をあげていました。その下に少年は活字体で「クリスマスの天使、名はベク。」と書きました。

はがきのうらがわに、両親は数行の文句を書きました。

「ふかく尊敬する先生。」と、ターラー夫人は書きました。「わたくしどもの子どもが、先生を天使としてかいたのは、まったくもっともなことでございます。わたくしは絵はかけません。ことばでお礼を申しあげるだけです。先生がわたくしどもにしてくださった生きたクリスマスの贈りものにたいしてあつく感謝いたします。先生はりっぱなおかたです。先生の生徒さんがみなりっぱな人になるのはとうぜんです！永久に感謝をささげるマルガレーテ・ターラーもそうねがっております。」

父親はぶつぶついいました。

「わたしの書くところがなくなっちまうじゃないか！」

ほんとにかれは自分の名まえを書きこむことぐらいしかできませんでした。さいごにマルチンがあて名を書きました。

それから、かれらはがいとうを着て、いっしょに停車場に

声をたてました。マルチンは母と父の腕をしっかりと自分のからだにおしつけました。かれは幸福でした。

家の前で、おとうさんがドアをあけたとき、マルチンは、もう一ど空を見あげました。ちょうどそのしゅんかん、ひとつの流れ星が夜のやみからはなれて、音もなく空をすべり、地平線のほうにおちました。

少年は考えました。「ねがいごとは今だ！」と。

そして流れ星の飛ぶのを目でおいながら、すばやく考えました。

「それではぼくは、おかあさんと、おとうさんと、正義先生と、禁煙先生と、ヨーニーと、マッツと、ウリーとに、そしてゼバスチアンにも、この世でほんとにたくさんの幸福がくるよう、おねがいします！　それからぼく自身にも！」

それは、いかにもかなり長いねがいでしたが、それにもかかわらず、かれはそれがきっと実現されると思いました。流れ星のおちるあいだ、マルチンはじっとだまっていたからです。

そのときには、そうするのが、だれでも知っているとおり、かんじんなことなのです。

あとがき

バスと市電――クジャクチョウ・ゴットフリートと、エドアルトという名の小牛との、悲しい思い出
――ヨーニー・トロッツと船長にあう――正義先生と禁煙先生にくれぐれもよろしく――本のおわり

そう、これでわたしはクリスマス物語を話しおえました。これを書きはじめたとき、わたしは大きな草原に腰かけていたことをおぼえていますか。木のベンチに、小さいぐらぐらする机にむかって。あまり暑くなると、わたしは絶壁と、ツークシュピッツェ山の雪にとざされたさけめを見あげました。時間は「羽でもはえているように」すぎさります。

このあとがきを書いているとき、わたしはもうベルリンにもどっています。ここにわたしの小さい住まいがあるのです。木にかこまれた家の五階です。母はちょうどお客によばれていっています。お昼の食事に、わたしはきちんとかえらねばなりません。きょうはマカロニとハムです。これはわたしの好物のひとつです。

わたしはちょうどクルフェルステンダム通りのコーヒー店の前に腰かけています。秋になりました。風がふくと黄いろい葉と、トビ色の葉が、アスファルトの上におちます。

ゴットフリートという美しいチョウチョはどこへ飛んでいったでしょう？　五週間のあいだまい日のように午後わたしをたずねてくれたチョウは？　チョウは年よりにはなりません。ゴットフリートは死んだでしょう。親切な、人なつこいチョウでしたが。かれのなきがらがやすらかであるように！

きれいな、あめ色の小牛はなにをしているでしょう？　夕がた、いつも広い草原にわたしをむかえにきてくれ、湖のほとりのホテルの前まで道づれになってくれた小牛は？　もう雄牛になったでしょうか。それとも小牛のカツレツにされてしまったでしょうか。ああ、エドアルトはわたしに好意をよせていました。今クルフェルステンダム通りを横ぎってかけてきてくれたら。わたしのトウいすの前に立ちどまって、心をこめてわたしを見つめ、小さい角でわたしをつついてくれたら――わたしはうれしさのあまり、ヨーデル調で声をはりあげるでしょう。そして、いつまでもわたしのところにひきとるでしょう。かれはわたしのバルコニーにだって住めるでしょう。海草製の古い下じきを食べさせてやりましょう。そして夕がたは、いっしょにグルーネワルトを散歩するでしょう。……

しかし、わたしが今すわっているところには、小牛なんかとおりはしません。せいぜい、ときどき、おばかさんがとおるくらいです。

それから市電がチンチンととおります。バスがブウブウガタガタとおりすぎ、自動車が、いまにも、ころされそうな警笛を鳴らします。みんないそいでいます。ほんとうに。わたしは大都会にもどっているわけです。

ツークシュピッツェ山のふもとでは、野の花がかおっていました。ここでは自動車のタイヤとベンゾールのまぜもののにおいがします。それでも、モミの木にせよ、あるいは工場の煙突にせよ、高いビルディングにせよ、あるいは、きえることのない雪にせよ、穀物畑にせよ、あるいは地下鉄の駅にせよ、空中にうかぶクモの糸にせよ、あるいは電話線にせよ、満員の大映画館にせよ、あるいは山間の緑の湖にせよ、町にせよ、あるいはいなかにせよ、わたしはどちらもすきです。どちらも愛されるねうちがあります。いっぽうがかけたら、かたほうはどうなるでしょう。

おしまいにするまえに、いましがたベルリンの町でであった人のことについて、お話ししなければなりません。とおりすぎる大ぜいの人のなかに、商船の高級船員がいました。金モールや星のついた美しい水色の制服を着た、そうとうの年の人です。かれとならんで、高等中学の帽子をかぶった少年が、歩いていました。まちがいっこありません。それはヨナタン・トロッツと船長です。

「ヨーニー！」と、わたしはよびました。

少年はふりむき、船長は立ちどまりました。わたしはふたりのほうに歩いていき、船長の前でおじぎをしました。

「きみはキルヒベルクのヨハン・ジギスムント高等中学のヨーニー・トロッツですね。」と、わたしは少年にいいました。

「そうです。」と、少年はこたえました。

「それは愉快だ。」と、わたしもこたえました。「それからあなたは、父親がわりにヨーニーのせわをなさっている船長さんですね？」と、船員の制服を着た人にたずねました。

かれはていねいにうなずきました。わたしたちはあく手しました。

「わたしは、きみたちのことを本に書いたところです。」と、わたしは高等中学生にいいました。「きみたちが二年まえのクリスマスのころ、味わったためずらしいできごとについて。——今はきみはもう、高等科三年ですね。実業学校生がきみたちの書取帳を、エーガーラントの地下室で焼いたことを、まだおぼえていますか。」

「まだはっきりおぼえています。」と、ヨーニーはいいました。「それを書いたのですか？」

わたしはうなずきました。

「それから、ウリーが落下さん降下でけがしたことを。」

「あのことも知ってるんですか。」

と、かれはおどろいてたずねました。

「もちろん。もっともっとたくさん知ってますよ。みんなはどうしてるかしら？　マチアスはあいかわらず徹底的に食べますか。」

「食べるどころじゃありませんよ。」と、ヨーニーがいいました。「馬食しますよ！　そして一週間に二回、スポーツ学校で拳闘の教授をうけています。」

「すてきだ！　ゼバスチアンは？」

「今は、化学を研究しています。かれは電子論や、気体の運動学的理論や、量子論などに関する、おそろしくむずかしい本を読んでいます。かれは学者になって、原子のなかになにがあるかをさぐりだそうとしています。」

「それから、きみの親友はどうしてます？」

「マルチンはあいかわらず首席です。今でも、だれか不正なことをすると、かんかんにおこります。そのほかの時間には、絵をかいています。それはよくごぞんじですね。かれの絵は、とてもきれいです。美術学校の教授が、かれに画家になれって、手紙をよこしました。それからマルチンのおとうさんはまた職につきました。」

「それはほんとにうれしい。そしてウリーは？」

「ウリーはみょうなやつです。」と、ヨーニーがいいました。「かれはあいかわらずクラスでいちばんちびですが、いぜんとはすっかりかわりました。マチアスはまったくかれにおさえられています。ぼくたちも、だいたいおなじようなぐあいです。ウリーは、なるほどいつまでも小さいけれど、かれのうちには、だれもさからうことのできない力がひそんでいます。ウリーはそうするつもりはないんですけれど、かれにじっと見られると、もういけないんです。」

「ウリーは、あのとき自分自身にうちかったんです。」と、船長がしんけんにいいました。

「そうなりゃ、ほかのことはすべて小さなことです。」

「なるほどそうでしょうな。」

わたしはまたヨーニーにむかっていいました。

「そしてきみはあいかわらず創作をしていますか。」

船長は微笑しました。

「ええ、かれはおとぎ話や戯曲や詩を書いています。いつかあなたになにかおおくりして見ていただいてもいいでしょうか。おねがいできましょうか。」

「だんぜん。」と、わたしはいいました。

「だが、わたしは作品を吟味するだけで、才能を吟味することはできません。きみが書けるかどうかをしらべるだけで、きみがいつか作家になれるかどうかをしらべることはできません。それはあとになって、はじめてきまることです。」

「ぼくはいそぎません。」と、ヨーニーは低い声でいいました。

すばらしい少年だと、わたしは思いました。

「キルヒベルクにかえったら、とりわけ正義先生と禁煙先生によろしく。」

「あの先生たちも知ってるんですか。」

と、ヨナタン・トロッツはめんくらって、たずねました。

「ぼくはだれからよろしくっていわれたといえばいいんでしょう？」

「ベルリンの友だちから。」と、わたしはこたえました。「そういえば、わかります。少年たちにもよろしく！」

「かしこまりました。きっとつたえます。本が印刷されたら、おくってくださいますね。」

「ベク先生におおくりしましょう。」と、わたしはいいました。「先生がいいと思ったら、きみたちにくださるでしょう。そのほかにはマルチン・ダーラーにだけ。」

そこでわたしたちはわかれのあく手をしました。船長とその養子はわかれていきました。ヨーニーはもう一どふりむいて、手をふりました。

だが、わたしはいそいで、一番線のバスにのって家へかえります。そうしないと、マカロニがつめたくなります。

わたしの母は、わたしがヨーニー・トロッツと船長にあったといったら、大いにおどろくでしょう。

エーミールと軽わざ師

E・ケストナー
高橋健二訳

十まいの絵がまず説明する

●まえがき

これは、ほんとにおもしろい、痛快な話です。エーミールたち、元気で、なかよしで、冒険ずきで、りこうな少年たちが、悪魔のような軽わざ師から、みなしごの小さい少年をすくいだす話です。

エーミールたちは、おもしろく遊ぶことがすきで、ずいぶんいたずらをしますが、自分だけがおもしろければよい、とは考えません。こまっている人がいると、力をあわせて助けてやらずにはいられません。エーミールたちは、知恵をしぼって、うまいことを考え、しかも、それを実行する力をもっています。これは、少年少女のみなさんたちに、大いに参考になるでしょう。

しかし、これはけっして冒険の話だけではありません。母と子のしみじみとした情愛のにじんでいる話です。母ひとり、子ひとりの家で、おかあさんはエーミールと自分の将来を考えずにはおられません。エーミールも、おかあさんの心配とねがいとを考えずにはおられません。人生というものは、つくづくむずかしいものだ、ということを、みなさんも思わずにはいられないでしょう。これはおもしろい話であると同時に、考えさせる話でもあります。

なお、これは有名な『エーミールと探偵たち』の第二の話ですが、これだけ読んでも、じゅうぶん味わえます。また『エーミールと三人のふたご』というもとの題は、わかりにくいので、この本のようにわかりよくしました。

高橋健二

第一は、エーミール自身

エーミールです！　新しい水色のよそゆきを着ています。むろん長ズボンをはいて！　しかし今の調子で大きくなると、来年はこれが、短ズボンになってしまうでしょう。

かれは、いつも、すすんでものごとをする模範少年です。母ひとり子ひとりのかれは、いつもかわらずおかあさんを愛していて、いっしょに腰かけていると、よくじれったそうにいいます。

「きっとぼくは遠からずお金をたくさんもうけるようになるよ。そしたら、おかあさんはもうはたらかなくてもいいよ。」

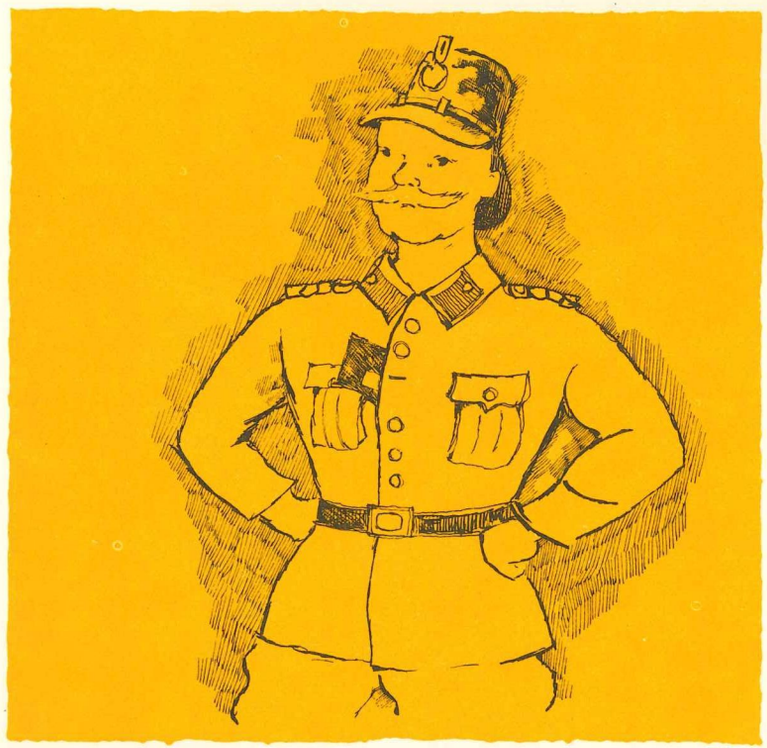
すると、おかあさんはわらって、

「ありがたいね。そしたら、ハエでもつかまえていましょう。」といいます。

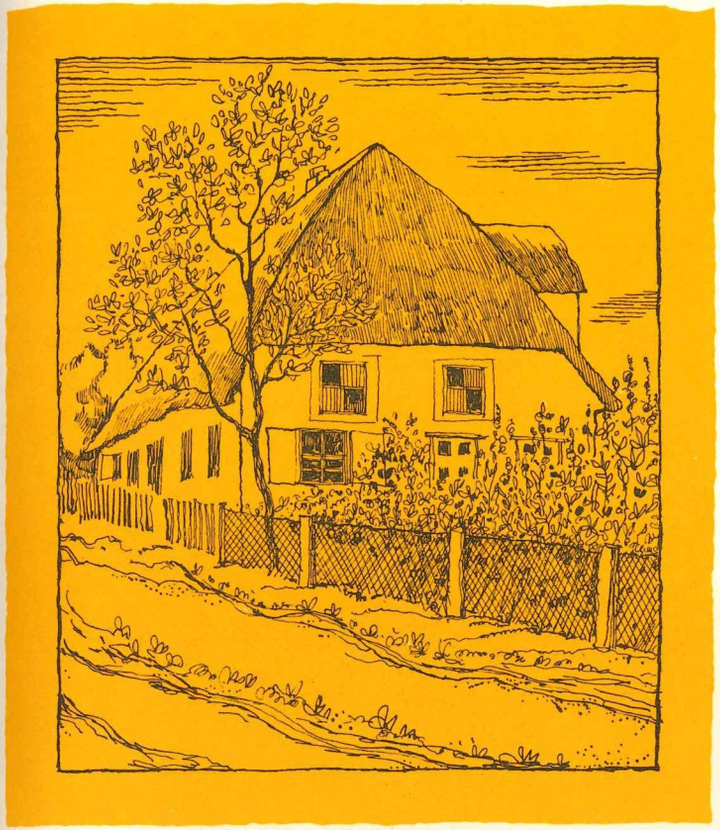
イェシュケ警部

みだしのとおりです。ノイシュタットの警部補イェシュケさんは、警部になりました。エーミールが銅像に色鉛筆でいたずらをしたことを、イェシュケさんは、とっくにわすれてしまいました。そして、おりおり非番のときなどは、テイッシュバインの家に、つまり、エーミールとそのおかあさんのところに、コーヒーを飲みにきます。そのとき、イェシュケさんはかならず、まえもって、ウィルト・パン屋で、大きなお菓子を買います。エーミールのおかあさんにパーマネントをかけてもらいにくるパン屋のおかみさんは、ついちかごろ、夫にむかっていいました。

「あなた、なにも気がつきません？」ウィルトさんが頭を横にふると、おかみさんは、「ほんとに、ぼんやりさんね！」といいました。



教授くんがうけついだ遺産



これは、ハーバーラントくん、あだ名は教授くんが、大おばさんからうけついだ家です。バルト海岸のコールスビュッテルにあります。

死んだ大おばさんは、生きているあいだ、ねっしんな園芸家でした。古い二階家のある庭は、名所といっていいくらいです。海水浴場は、すぐ近くです。海水着を着ていけます。うす暗くなるほどおいしげっている緑のハンの木の林をぬけて、三分間で——もう砂丘の上にでます。

下には、バルト海がひろがっています。沿岸航路の汽船のつく、木のさん橋は、水平線にとどくかと思うほどです。

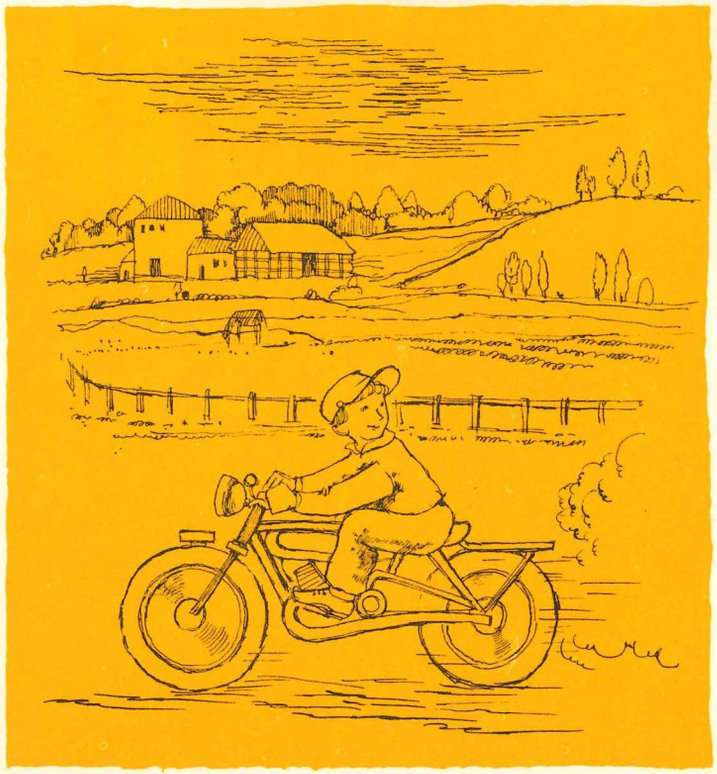
警笛のグスタフ

みなさん、ボタンをひとつ見つけて、それにあう服をつくらせた人の話を知っていますか。グスタフもおなじ調子でした。はじめ、かれは警笛しかもっていませんでした。それから、おとうさんにせがんで、とうとうオートバイを買ってもらいました。

むろんたいして大きいものではありませんが、操縦者免状がなくても、のれるやつです。それでも、グスタフのたてるやかましいもの音で、近所の人たちは、もうたくさんだ、と思っています。

かれがトレーニング服を着てとんできたり、ダダダと、かどをまがったりすると、みんな、オートバイ競走の全ドイツ優勝者がくるな、ぐらいに考えます。宿題はときどきすっぽかしです。

「ええ、くそ。」と、かれはいいます。「学校は、地上すれすれでとおすんだ。ぼくは、びりから二番。それでたくさんだ。」



ヒュートヘン嬢

男の子は十四歳になっても、まだあいかわらず、ほんとの少年です。それどころか、鼻たれ小僧です。ところが、もう女の子は、その年になると、りっぱな若い婦人です。そういうお嬢さんを、からかってはいけません！

「そんなに気どりなさんな、おねんねさん！」などといってもいけません。そんなことをすると、とんでもないめにあいます。ポニー・ヒュートヘンは、もちろんこれまで気どりやさんではありませんでした。そんなものになるには感心すぎるむすめです。でも、いぜんは、なかば男の子でした。今でも、なかばおてんばです。おばあさんは、よくかの女にいいます。

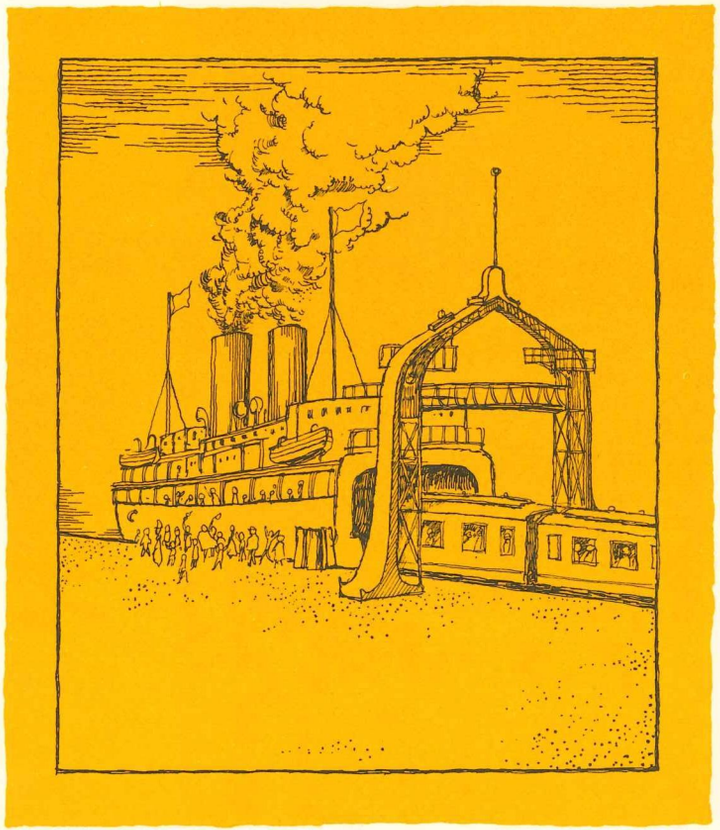
「ゆっくりやりなさいね、ゆっくり。すぐおばあさんになっちゃうよ。」

汽車をつむ汽船

みなさんは、汽車のわたし船を見たことがありますか。スウェーデンにわたるザスニッツで？　それともデンマークにわたるワルネミュンデで？　それともシュトラールズントで？

それはきみょうな汽船です。駅につくと、口をひらきます。すると、とつぜん、汽車が船にのります。船はそれをそっくりおなかにのみこんで、バルト海をわたります。デンマークまでか、リューゲン島までか、スウェーデンまで。

そこで岸につくと、列車は汽船からすべりだして、なにごともなかったかのように、陸地を走りつづけます。ちょっとすてきでしょう。汽車の旅はたのしいものです。汽船の旅もたのしいものです。汽車をのせる汽船の旅は、どんなにたのしいことでしょう！



三人のバイロン

三人のバイロンは、この物語のなかで、なかなかだいじな役わりを演じます。かれらは軽わざ師で、寄席にでています。サーカスやキャバレーにでることもあります。

ひとりのバイロンは父親で、あとのふたりはむすこです。むすこは、ジャッキーとマッキーといいます。ふたごですが、ジャッキーは、マッキーより大きいのです。バイロンおやじは、それでおこっています。だからといって、ジャッキーはどうしたらよいでしょう？　かれは大きくなります。ほかの小さい少年は、大きくなるとよろこぶのに、ジャッキー・バイロンは気が気でありません。

おなじみのピコロ

ここにごらんになるのはピコロ、つまり、ホテルの見習いボーイで、やがて一人まえのボーイになるものです。あるいはボーイがしらに、あるいは接待主任になるものです。

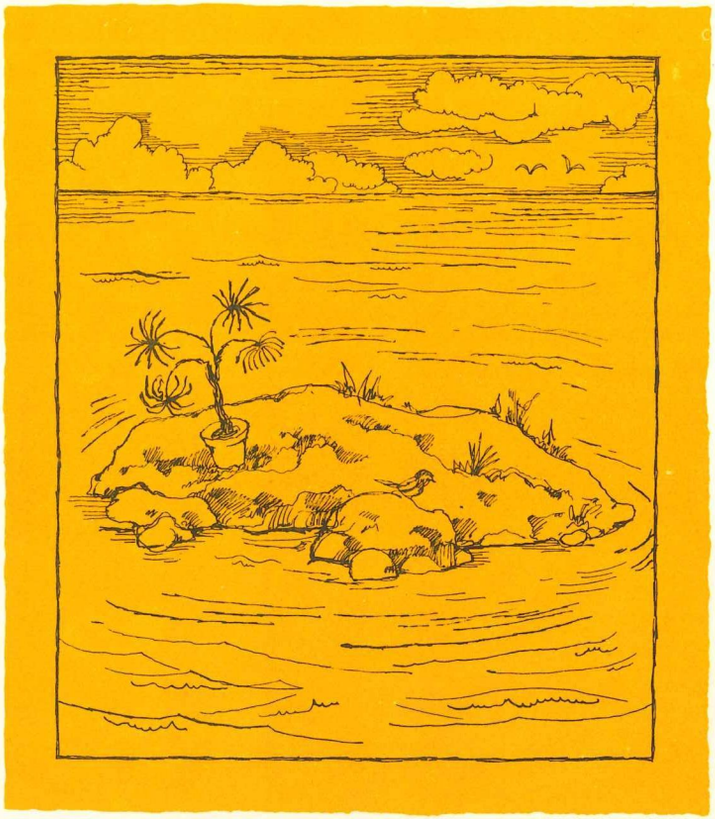
いまのところ、まだピコロで、ホテルの食卓の用意をしたり、お皿をはこんだりするてつだいをします。ピコロは、なかなかほねのおれるしごとですが、ときには、二、三時間のひまがあります。そういうとき、いそいで海水浴場にいき、砂州までおよぐことができます。あるいは歯みがきの広告のためにこしらえてある、ゴムの大きなチューブに腰かけることができます。そうすると、ベルリンの旧友にもあえ、ずっとまえのことを思いだすことだってあります。

シュマウフ船長

この紳士が、年とった船乗りだということは、千メートルはなれた風下からでも、わかります。かれは船長で、バルト海を走りまわる商船をもっています。ときには材木、ときには石炭、ときにはスウェーデンの鉄を、ときにはたくさんすぎるくらいラム酒をつみます。それもむりはありません。海の風にあたると、のどがかわくからです。

シュマウフ船長は、コールスビュッテルに小さい家をもっています。港には、かれのもち舟の、しっかりした小さいヨットがつながれています。わすれないうちにいっておきますが、ピコロはかれのおいです。世のなかには、あんがい親類がおおいものです。

ヤシの木のある島

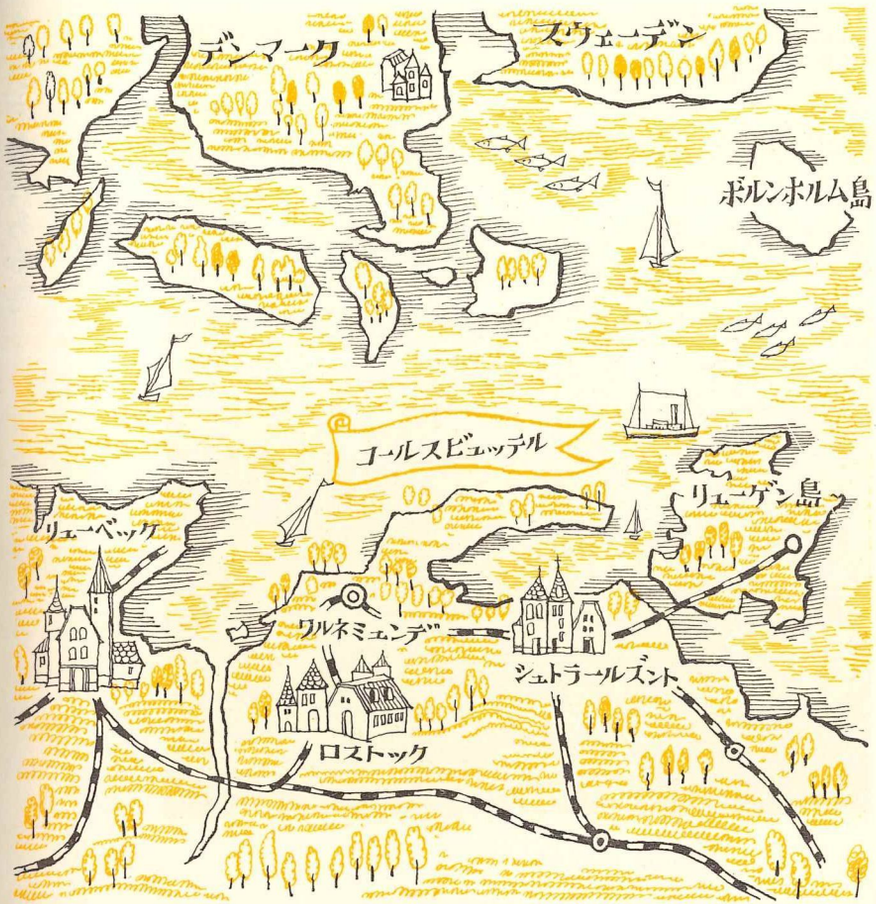


バルト海の岸から遠くない海のなかに、ごく小さな島があります。いぜん、ある漁師が、おもしろはんぶんに、鉢植えのヤシの木を、この小さい島にはこび、砂のなかに植えました。

それで、今アフリカのヤシの木が北国の砂のなかに、ハマカラスムギのあいだにたって、そうとうの幹になっています。犬がそれを見たら、ほえることでしょう。もちろん、犬がこの島にいたばあいの話ですが、ここにはなにも住んでいません。

第一に、この島は、砂ばかりでできています。第二に、住むのにはあまり小さすぎます。眠っているうちに、ベッドからころがったら、バルト海のただなかにおちてしまいます。

さて、いよいよお話がはじまります。



訳者の説明

はて、コールスビュッテルという町はどこにあったかしら、と目を皿のようにして、ドイツの地図をさがしてみましたが、見つかりません。

見つからないはずです。どうやらこれは作者がこしらえた地名のようです。しかし、そのほかの地名は、たいていいじっさいにあるバルト海の港や海水浴場です。ロストックは古い大学町ですが、ワルネミュンデは、デンマークやスウェーデンへわたる新しい港です。コールスビュッテルは、その近くにあるわけです。

第一章　イェシュケ警部さんのたのみごと

警部のイェシュケさんは、お昼から非番でした。そこで、かれはたいへんみごとなお菓子の包みをもって、エーミール・ティッシュバインの家をおとずれました。

エーミールのおかあさんが、コーヒーをいれました。ほんもののカールスバート産の味つけをそえて！　それから三人は客間のまるいテーブルをかこんで、食欲をはっきしました。

大きなお菓子鉢は、しだいにからっぽになっていきました。エーミールは、息もつがないくらいでした。イェシュケさんは、ノイシュタットの町長が、旧式な鉄道馬車をやめて、そのかわりに本式の電車をしくつもりでいる、という話をしました。ただ問題は、お金の点だけでした。

「そんなら、いっそのこと、地下鉄にすればいいのに。」と、エーミールがいいました。

「鉄道馬車がなくなったら、ノイシュタットのよさは半分くらいになってしまうな。電車なんか、じっさいどこにでもあるんだもの。」

「お金の問題なら、ノイシュタットは、いつまでも鉄道馬車にしておけばいい。」と、おかあさんはいいました。

そういわれると、エーミールはやれやれと、リンゴ入り菓子のさいごのひときれをお皿からつまみあげて、せっせと食べました。

警部さんは、タバコをすってもよいかと、ていねいにたずねました。

「どうぞ、ごえんりょなく！」

と、ティッシュバイン未亡人は申しました。そこで、お客さんは、皮のケースから、大きな黒い葉まきをとりだして、火をつけ、こい紫色の煙につつまれました。

ティッシュバイン未亡人は立ちあがって、お皿と茶わんをあつめ、台所にはこびました。もどってくると、かの女は、消毒用のシャボンを買いに薬屋までひと走りいってこなければならない、といいました。一時間のうちに、ホンブルク夫

人が髪を洗いにくるはずでした。
エーミールも立ちあがって、さいごのひと口のお菓子を飲みこみました。
「いいんだよ、エーミール。」
と、おかあさんが大きな声でいいました。
「わたしが自分でいくから。」
エーミールは、いぶかしそうに、母の顔を見つめました。
イェシュケさんは、ティッシュバイン未亡人をちらりと見ましたが、そのとたん、おもわず煙をすいこみすぎ、せきをしはじめました。
「エーミールくん。」と、かれは、せきがとまるのをまって、いいました。
「きみに話があるんだがね。男どうしといったところで。」
外で、玄関のドアが、バタンとしまりました。ティッシュバイン未亡人がでていったのでした。
「はい、どうぞ。」と、エーミールはいいました。
「ただぼくには、おかあさんがなぜきゅうにでていったのか、わからないんだけど。走り使いは、ぼくのしごとなんですから。」
警部さんは、葉まきを灰皿の上にのせ、両足をくみ、上着から灰をはらいおとしました。(ほんとうのところ、上着には灰はついていませんでした。)
「きみのおかあさんは、きっとぼくたちふたりがおちついて話しあうことのできるように、でていったんだと思うね。」
と、かれはいうと、てれかくしに天じょうを見ました。
エーミールもまたおなじように天じょうを見ましたが、そこには、べつにかわったことはありませんでした。
警部さんは、葉まきを灰皿からとって、だしぬけにたずねました。
「きみは、ほんとにぼくがすきになれませんか。」
それを聞くと、エーミールはいすからころげおちんばかりでした。
「なんだってそんなことをきくんです？　おかしな質問ですね、イェシュケさん。」
かれはちょっと思案にあまった顔をしました。
「まえには、ぼくは、たしかにあなたがこわかったんです。」
警部さんはわらいました。
「銅像にいたずらした件でかい？」
少年はうなずきました。
「ああいうばかなまねは、ぼくたちだって生徒のころは、やったものさ。」
エーミールは目を見はりました。
「ええ、あなたも？　自分で？」
警部さんはいいました。
「ぼく自身で！」
「それじゃ、ぼくはあなたがすきになりました。」と、エーミールはいいました。
それを聞くと、イェシュケさんはうれしそうな顔をしました。そしていいました。
「じつは、きみにたずねなければならない重大なことがあるんだよ。そのことについて、このまえの日曜日に、きみのおかあさんに話をした。ところが、おかあさんは、ばんじはきみの心しだいだ、というんだ。きみの同意がなくちゃ、話はいっこうすすまないのさ。」
「おやおや。」と、エーミールはいいましたが、ちょっと頭をひねってから説明しました。
「わるくとらないでください。でも、ぼくには、あなたのおっしゃることがぜんぜんわからないんです。」
警部さんは葉まきをしらべました。きえてしまっていたので、念いりに、また火をつけてからいいました。
「ぼくのいいたいことを、きみのように大きくなった少年に説明するのはむずかしいんだ。——きみはおとうさんをおぼえているかい？」
「ほとんどおぼえていません。父の死んだとき、ぼくはやっと五つだったんですから。」
警部さんはうなずきました。そして、口早にいいました。
「ぼくは、つまり、きみのおかあさんと結婚したいんだ。」
かれはしばらくつづけてせきをしました。すっかりせきがとまってから、またいいつづけました。
「ぼくは本署勤務になれるし、やがては警視にもなれる。試験にとおることはたしかだ。ぼくは、むろん実業学校にはいかなかったが、けっしてばかじゃない。警視になれば、ずいぶんいい月給がとれる。きみが希望なら、大学にだっていけるよ。」
エーミールは、はなやかな色のテーブルかけから、お菓子のくずをはらいおとしました。
「きみがいやなら。」と警部さんはいいました。
「おかあさんは、ぼくと結婚しないんだよ。」
エーミールは立ちあがって、窓のほうにいき、往来を見おろしました。それからふりむいて、小声でいいました。

「思いもしなかったことですから、まず頭をそれにならさなきゃ、ならないんです。イェシュケさん。」

「もちろんだとも。」と、あいてはこたえました。

エーミールは、また窓の外を見ました。

「こんなことがおころうとは、ぼくは夢にも思わなかった。」と、かれは、とおりすぎる貨物自動車を目でおいながら、ひとりで考えました。

「ぼくは、自分でうんとお金をもうけるつもりだった。うんとお金を。おかあさんに、はたらいてもらわなくてもいいように。そして、ぼくたちふたりは、ふたりだけで、ほかのだれもいれないで、一生いっしょに暮らしたいと思っていた。そこへ、おまわりさんがやってきて、おかあさんを妻にしようとする！」

ちょうどそのとき、おかあさんが町かどをまわり、前のほうをまっすぐ、緊張して注意ぶかく見ながら、いそぎ足で道を横ぎりました。

エーミールは自分の顔をかくすために、カーテンをひきました。「いよいよぼくは決心しなければならない。」と考えました。

「それにつけても、ぼく自身のことを考えてはならない。自分のことを考えるなんて、いかにもさもしいことだ。おかあさんは、いつも、ぼくのことしか考えていなかった……でも、おかあさんは、たしかにあの人をすいている。ぼくは、どんなことがあっても、ぼくがみじめな気持ちでいるなんてことを、気づかせてはならない。それどころか、ぼくは、とても快活そうにしていなければならない。そうでないと、おかあさんの幸福をだいなしにしてしまうだろう。」

エーミールは、ふかい息をついて、イェシュケさんのほうにむきなおり、大きな声でいいました。

「ぼくはけっこうです。イェシュケさん。」

警部さんは立ちあがって、エーミールのそばにあゆみより、その手をぎゅっとにぎりました。そのとき、もうドアがあいて、おかあさんがいそぎ足でへやにはいってきました。そして、さぐるように子どもの顔を見ました。

いなずまのように、エーミールは、快活そうにしなければならない、ともう一ど思いました。そこでかれは、イェシュケさんと腕ぐみをし、わらって、おかあさんにいいました。

「おかあさん、なんとおっしゃいます？　イェシュケさんが、今、ぼくにむかって、おかあさんに結婚の申しこみをしたところですよ。」

ホンブルク夫人が髪を洗ってもらいにきたとき、婚約したイェシュケ警部さんは、幸福そうにかえっていきました。しかし、夕食のときには、またもどってきました。ひとたばの花と、半ポンドの上等のハム類と、あまいブドウ酒をひとびんもって。

「かんぱいするために。」と、かれはいいました。

そのとおり、夕食がおわってから、かれらはお祝いのさかずきをあげました。エーミールがあらたまった演説をすると、イェシュケさんは心からわらいました。ティッシュバイン未亡人は、むすこの手をなでながら満足そうに、長いすに腰かけていました。

「わが親愛なるエーミールくん。」と、イェシュケさんはいいました。

「きみの祝辞に感謝するよ。ぼくは、なにからなにまでほんとにうれしい。今はただひとつたのみがあるだけだ。ぼくをおとうさんとよんでくれとはたのまない——そいつは、すこしへんに思われるだろう。ぼくはきっときみにたいして父親のようにふるまうだろう。だが、それは別問題で、おとうさんというよびかたは、ぼくにふさわしくない。」

こういわれると、エーミールは心ひそかにすくなからず、すくわれました。かれは大きな声でいいました。

「ええ、かしこまりました、警部さん。でも、なんてよんだらいいでしょう？　こんにちは、イェシュケさん――というのは、先ざき、すこしおかしくひびきゃしないでしょうか。」

おむこさんは立ちあがりました。

「なによりもまず、ぼくたちふたりは兄弟分のさかずきをしなけりゃならない。もう、おたがいにへだてのない口をききあうんだ。」

そこでふたりは、兄弟分のさかずきをかわしました。

「これからさき、きみがぼくの名まえをよぶ必要を感じることがあったら。」と、イェシュケさんはいいました。

「念のためいっておくけれど、ぼくの名は、ハインリヒというんだよ。わかったかい？」

「ええ、ハインリヒさん。」と、エーミールはいいました。

母がわらう声を聞くと、エーミールは幸福でした。

ハインリヒ・イェシュケさんが自分の家にかえると、ティッシュバイン家の母と子も、寝室にしりぞきました。いつものとおり、ふたりは、たがいに、お休み、とキスをしあってから床のなかにはいりました。しかし、ふたりは眠っているようなふうはしているものの、長いあいだ、目をさましていました。

エーミールは考えました。

「おかあさんはなにも気づかなかった。ぼくがみじめな気持ちでいるなどとは、おかあさんは夢にも知らない。今、おかあさんは、イェシュケさんと結婚することができて、ぼくがいつもねがっていたように、幸福になれる。あの人はとてもいい人なんだ。」

そして、エーミールのおかあさんは考えました。

「ありがたいことに、エーミールはなにも気づかなかった。わたしは、なによりもあの子とふたりだけで暮らしていたいのだということを、あの子にけっして感づかれてはならない！　だが、わたしは、自分のことを考えてはならない。いつもあの子のことだけを考えなければならない。それから、あれの将来のことを。わたしが、いつまで暮らしをたてていくことができるか、わかったものではないんだから。――それに、イェシュケさんはとてもいい人なのだから。」

第二章　ベルリンとの手紙の往復

あくる日、お昼に、エーミールが学校からかえってくると、おかあさんがかれに手紙をわたしました。

「おまえあての手紙よ、ベルリンから。」といいました。

「ポニー・ヒュートヘンから？」

「いいえ、見なれない字だよ。」

「どんなことが書いてあるの？」

「まあ、エーミール！」と、ティッシュバイン未亡人はおどろいて、さけびました。

「わたしは、おまえの手紙をあけたりなんかしやしないよ！」

エーミールはわらいました。

「いや、いつから、おたがいにひみつができたというんだろう？」

それから、かばんをもって、つぎのへやにかけこみました。「きのう、イェシュケさんがやってきてからだ！」と、ひとりで考えながら、かれはもどってくると、長いすに腰をおろし、手紙をひらいて、読みました。

親愛なるエーミールくん！

ずいぶん長いあいだ、おたがいにたよりをしなかったね。でも、きみは元気でいることと思う。ぼくのほうも、文句をいうことはないよ。ぼくの大おばさんのひとりが、数週間まえに死んだが、ぼくはほとんど知らない人だった。そういう人が死んでも、ひどく悲しくはならないさね。

だが、それがきっかけで、きょう、きみに手紙を書くことになったんだ。その大おばは、ぼくに一けんの家をのこしてくれた。バルト海岸で、コールスビュッテルというところだ。その土地のことをきみは聞いたことがあるかもしれないが、海水浴場なんだ。それに、ぼくの家は、かなり大きな、とてもきれいな庭のなかにあるんだ。

さてきみは、ぼくがなにを思いついたか、わかるかい？　まあ聞きたまえ！　夏休みはせまっている。ごしょうちの

ようにって、よくいうところだ。ぼくは家主になってから、すばらしい考えをいだいているんだ。

ぼくは、きみときみのなかまの探偵たちを、バルト海のぼくの家にぜひ招待して、夏休みをすごしてもらおうと思うのだ。

ぼくの両親はゆるしてくれた。そして大いによろこんでくれるだろう。まったくほんとうだよ。むろん両親もいっしょにいるが、それは、ぼくたちにはちっともさしさわりはないんだ。ぼくは、きみも知っているとおり、父や母と、とてもうまく暮らしているんだ。それに、その家には二階だってあるんだよ。まったく、申しぶんなしだ。

グスタフくんは、もう同意して、両親のゆるしをえた。でも、くるっていうのは、かれだけじゃないよ。いいかい——きみのいとこのポニー・ハイムボルト、またの名ヒュートヘンと、きみのおばあさんも。ぼくたちがみんな大すきなおばあさんだ。——きみがくるなら、このふたりもくるというんだ。それから、ちびの火曜日くんも——もし、かれのおかあさんが、ナウハイムの温泉にいかなくてよいようなら。もし、そちらにいくことになれば、かれもいっしょにいかなきゃならないっていうんだ。お医者しだいでね。海岸がからだにいいっていうかどうか、が問題なんだ。かれのおかあさんは、いくらか心臓がわるいんだ。

すばらしいことになるぜ。きみもふんぱつして、つきあいたまえ、いいだろう？　むかしなじみの山賊くん！　きみのおばあさんとポニーがくるんだもの、おかあさんは、きっと反対しないだろう。どうかね？　きみがベルリンにつくときには、ぼくたち駅までむかえにいくよ。また、駅をまちがえておりないようにね。そして、みんないっしょに、シュテッチン駅に自動車をとばし、バルト海いきの汽車にのろう。——ぼくの家へと。

わすれないうちにいっておくが——きみに費用はかからないよ。ぼくたちは、女中のクロチルデをつれていく。かの女は、とても料理がうまくってね、たいして金をかけなくてすむんだ。二、三人、食べる人がふえたって、たいしてかわりはないって、母がいうんだよ。

きみの旅費は、父がはらうってこと、きみにつたえるようにと、父はいっている。ぼくの大おばは、家といっしょにいくらかのお金ものこしたんだよ。だが、それは、ぼくにじゃなくて、ぼくの父になんだ。

きみはただ、くるかどうか、書いてよこせばいいんだ

よ。父がおりかえし旅費をおくる。ぼくはきみに再会できる日をまちこがれている。ぼくはお金のことを書いた点についていて、べんかいしなくちゃならない。人はお金をもっていれば、お金のことは口にしないって、きみはいったことがある。それをわすれてはいない。だが、こんどは、それにふれないわけにはいかなかった。そうでないと、きみはこられないし、ぼくは夏休みがたのしめなくなるから。バルト海ぜんたいが、いわば、おながれになるんだ。

親愛なるエーミールくん、きみの返事を心まちにまっているよ。ぼくの両親からもよろしく。

いつも、きみのテーオドル・ハーバーラント
(またの名教授)。

注意！　数か月まえ、ぼくが家をもらってからまもなく、ベルリンで、エーミールと探偵たちの映画がつくられた。ぼくはそれを見た。ほんとの話が、とつぜん映画にされると、とてもみょうなものだ。たいへんよくにてはいるが、しかも、まったくべつなものだ。ぼくの父もおなじ意見だ。この映画は、ちかいうちに封切されるはずだ。ぼくは、大いに期待している。きみもかい？　もう一ど、くれぐれもおだいじに。早く返事をくれたまえ。きみの教授に。

注意！　わすれないうちに――あいことば、エーミール！

エーミールは手紙を読みおわると、それをおかあさんにわたし、つぎのへやにいってしまいました。そこでかれはかばんをひらいて、幾何の本をとりだし、宿題をしているようなふうをしました。しかしまっすぐ前を見つめながら、頭はほかのことでいっぱいでした。

「バルト海にいくのは、ぼくにとって、とてもいいことだろう。」と、かれは考えました。

「こちらにいたいことはむろんいたいのだけれど、イェシュケさんのじゃまになるだろう。たとえ、ごくわずかにしろ。どっちみち、イェシュケさんは、きのうからおかあさんと婚約のあいだだ。おかあさんは、あの人をすいている。ぼくはむすことして、それをわすれてはならないはずだ！」

美容師のティッシュバイン未亡人は、教授くんからの手紙を見てよろこびました。エーミールは、すばらしい夏休みがおくれるだろう。

「むろん、あの子がいなければ、わたしはどこにいっても、さびしいけれど、それをあの子に気づかせてはならない。」

かの女は、むすこのいるへやにいきました。

「おかあさん、ぼくは、この招待をうけようと思うんだけれど。」と、エーミールはいいました。

「むろん、そうするんですよ。」と、おかあさんはこたえました。

「とてもたのしそうに書かれている手紙だね。でも、おまえは、あまり遠くにはおよいでいかないって、約束してくれなくちゃ、いけないよ。大きな波やうずまきだっておきるかもしれないからね。約束がないと、わたしは一分間だって安心していられないよ。」

エーミールは、あらたまって約束しました。

おかあさんはいいました。

「ただハーバーラントさんが、おまえの汽車賃をだしてくださるっていうのは、なっとくできないね。貯蓄銀行からだしましょう。そのくらいだしたって、こまりゃしないよ。」

おかあさんは、幾何の本の上にかがんでいる少年の頭をなでました。

「また宿題かい？　ごはんまえに、すこし外へでて、いい空気をすっておいで。」

「ええ、なにかとってくるものか、てつだうことがある？」と、エーミールはききました。

おかあさんは、かれをドアのほうへおしていきました。

「さあ、外にでなさい！　ごはんのしたくができたら、よんであげますよ。」

エーミールは庭にでて、洗たく場のほうにつうじる階段に腰をおろし、すりへった段だんのあいだからはえている草の葉をちぎりながら、しきりに考えこんでいました。

きゅうにかれはとびあがって、門をぬけ、町をくだり、シュポーラー小路にまがり、ウェーバー小路を走りぬけて、上市場でとまり、だれかをさがしてでもいるように、あたりを見まわしました。

かれの前には、くだもの屋や、やお屋のテントばりの店や、せともの屋の陶器類がならんでおり、肉屋や花屋の台もでていました。色とりどりの陳列物のあいだを、警部のイェシュケさんが、もったいぶったかっこうで、両手を背なかでくみあわして、ぶらぶら歩きながら、巡視をしていました。

かれは、野菜売りの女の前で立ちどまりました。かの女は手をふりました。警部さんは、上着のボタンのあいだからノ

ートをとりだして、なにか、だいじなことを書きこんでから、おもおもしい足どりで歩きつづけました。お客さんや野菜売りの女たちは、頭をよせて、ささやきあいました。

エーミールは、広場のでこぼこの石だたみを横ぎって、警部さんのそばにいきました。

「やあ、きみはぼくをさがしているのかい？」と、イェシュケさんがどなりました。

「ええ、イェシュケさん――いや、ハインリヒさんでしたね。」と、エーミールはこたえました。

「ちょっとたずねたいと思ったんです。ベルリンにいるぼくの友だちが、バルト海岸の別荘を遺産としてもらったので、休暇をそこですごすように、ぼくを招待しているんです。ぼくのおばあさんとポニー・ヒュートヘンもいきます。」

イェシュケさんは、エーミールの肩をたたきました。

「おめでとう。すてきだね。」

「ええ、そうでしょう？」

警部さんは愛情をこめて、未来のわが子を見つめました。

「きみの汽車賃をださせてくれるかい？」

エーミールは頭を強くふりました。

「自分の貯金帳があるんです。」

「それは残念！」

「いや、ハインリヒさん、ぼくは、まったくべつなことできたんですよ。」

「いったい、なんです？」

「それは、おかあさんのことです。もしあなたが、ちょうどきのう……でなかったら、ぼくは、おかあさんをおいていくことなんか、けっしてしないでしょう。あなたが、すくなくともまい日一時間、おかあさんのところにいてやると、心から約束してくださるのでなけりゃ、ぼくはいきません。そうでないと、おかあさんは――ぼくは、おかあさんの気持ちをよく知ってますから、ぼくのいないあいだ、おかあさんがさびしく感じるのじゃ、ぼくはいやなんです。」

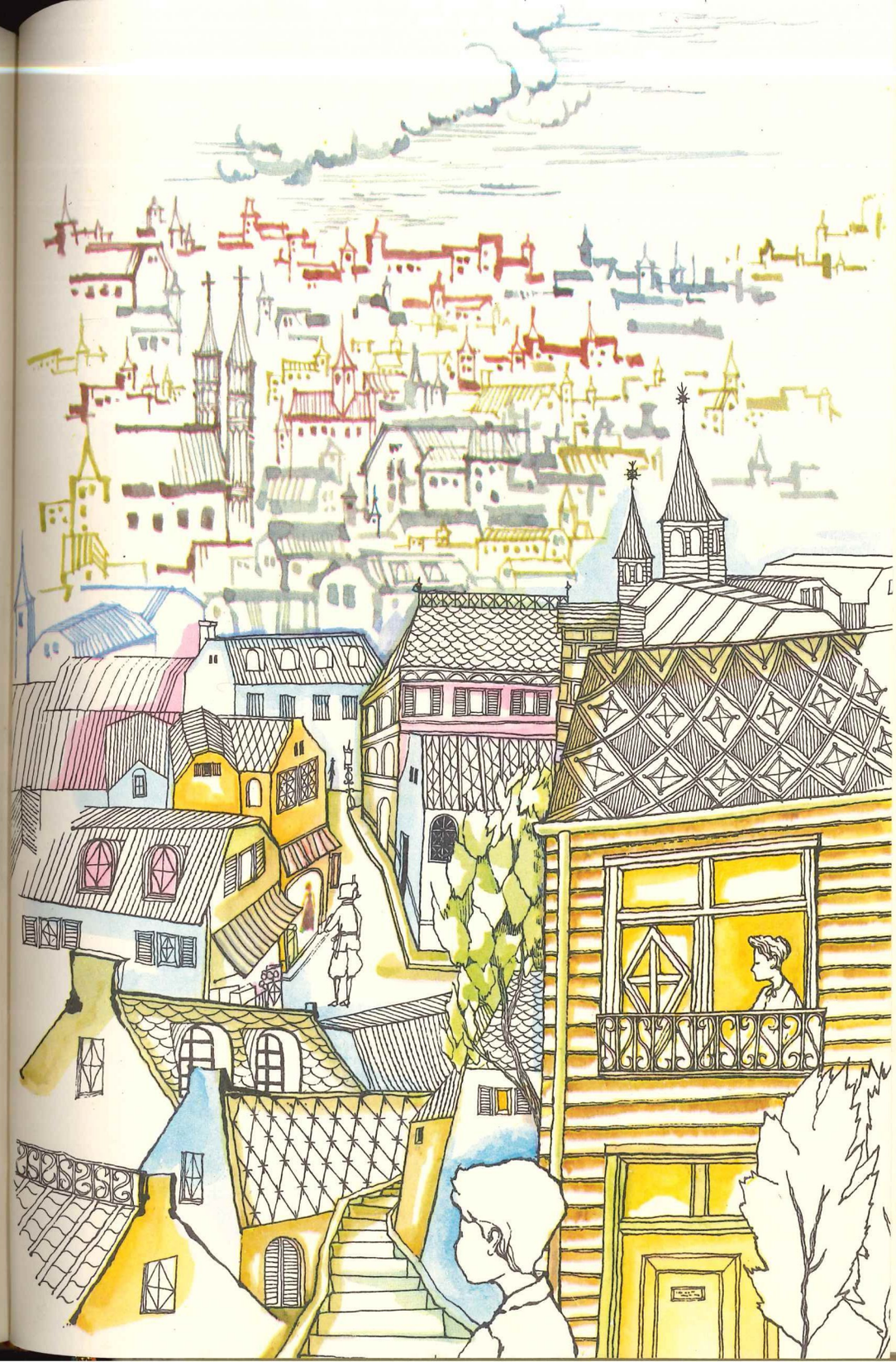
エーミールは息をつぎました。人生というものは、ほんとにつらくなることがあるものです。

「ぜひ名誉にかけて、母を見てやると約束してください。でなければ、ぼくはいきません。」

「約束するよ。名誉になんかかけなくても。だが、きみがのぞむなら、名誉にかけて。」

「それならけっこうです。」と、エーミールはいいました。

「まい日、よってくれますね。むろんぼくはたびたび手紙を



書きますが、手紙じゃ、たりませんよ、ねえ。だれか、おかあさんのすきな人がいてくれなくちゃ。ぼくは、おかあさんにみじめな思いをさせたくないんです。」

「まい日、よってみるよ。」と、イェシュケさんは約束しました。

「すくなくとも一時間、つごうがつけば、もっと長く。」

「ありがとう。」と、エーミールはいって、むきをかえ、もときた道を走ってかえりました。

庭にもどってくると、エーミールは、その場をはなれなかったように、段だんに腰かけて、段だんのあいだの草の葉をむしっていました。

五分たってから、ティッシュバイン未亡人は台所の窓から外を見て、

「さあ、おいで、お昼ごはんですよ。」と、大きな声でよびました。

エーミールは、ほほえみをうかべて見あげました。

「すぐいきます、おかあさん。」

おかあさんは、頭をひっこめました。

エーミールは、ゆっくり立ちあがって、うちのなかにはいりました。

その午後、エーミールは、おかあさんに書簡用紙をもらって、机にむかい、ベルリンのウィルマースドルフに住んでいる中学生テーオドル・ハーバーラントあてに、つぎのような手紙を書きました。

親愛なるわが教授くん！

お手紙たいへんありがとう。ぼくは、とてもうれしかったよ。きみが家の持ち主になったって！　すてきだなあ。しかも、バルト海岸の！　おめでとう！　ぼくは、バルト海にいったことはないが、メクレンブルクの湖沼やバルト海岸地方を、地理でならったばかりなので、想像はつくよ。砂丘、大きな船、れんがの教会、港、浜べのいすなど。すばらしいにちがいないね。

きみが、きみをたずねるように招待してくれたのは、なおすばらしいよ。ぼくは、きみの招待をうけいれ、きみときみのご両親にふかく感謝するよ、じっさい。きみや、グスタフや、ちびの火曜日くんにあえるのをたのしみにしている。あのときぼくを助けてくれたきみたちが、ぼくはとてもすきなんだ。ポニーとおばあさんもまねいてくれたきだよ。母は持ちものを、そりゃたいせつにするんだ。

それから、母がね、きみのおかあさんに、ていねいにうかがってくれって。シーツ類をもっていったほうがよいかどうか、タオルは何本いるか、バルト海では海水着がいるかどうか。ぼくは赤い水泳パンツしかもっていない。ハイカラな海水浴場じゃ、これではいけないことがあるからね。もひとつきくが、きみは三等でいくかい？　そうでないと、ぼくたちはおなじ客車でいけないね。二等はずっと高い。三等でいったって、つく時間にかわりはないよ。

きみの別荘で暮らすことになったら、エーミール映画のさつえいに立ちあったときのようすを、くわしく話してくれたまえ。ちかいうちに、映画館で見たいものだね、なるたけみんなでいっしょに。

母からも、きみと、ご両親にくれぐれもよろしく。かさねてありがとう。ぼくはうれしいよ。

あいことば、エーミール！

いつもきみのエーミール・ティッシュバイン

みは、まったくえらいよ。

きみの別荘にへやがたりなかったら、ぼくたちは、テントを庭にはって、砂漠のベズイン族のように暮らしてもいいよ。シーツを頭からかぶってもいい。まい晩、一時間ずつ、こうたいに見はりしなきゃならないよ。ほかの者が安眠できるように。だが、そんなことをとりきめる時間は、たっぷりある。

ぼくは、きょうのうちに、おばあさんとポニーに手紙を書くよ。駅にむかえにきてくれるのは、すてきだ。だいじょうぶ、こんどは、お金をぬすまれたりなんかしないよ。いざとなりゃ、靴のなかにでもお金をかくすよ。

きみのおとうさんが、汽車賃をだしてくださるというのには、よくお礼をいってくれたまえ。だが、ぼくは、自分の貯金からだしたいんだ。いつかもらった賞金のうち、まだ七百マークのこっている。あとの三百マークで、ぼくは母に、約束どおり、電気で髪をかわかす器械と、あたたかいがいとうを買ってあげた。それは、まだとてもきれい

第三章　エーミールの出発

わたしたちのおそれるわるい日や時は、風のような速さでやってきます。それは、あらしにかりたてられる、暗く雨をはらんだ雲のように、ちかづいてきます。

だが、ほがらかな日は、くるのに、ひまどります。まるで、歳月というものはまよい道であって、ほがらかな日は、そこからでることができずにでもいるように。とりわけ、わたしたちにむかっては。

しかし、ある日、ついに夏休みになります。きみは、いつものように朝早く目をさまし、ベッドからとびだそうとして、きょうは学校がないのだということを思いだすと、やれやれと顔を壁にむけて、また目をとじます。

休暇！　このことばは、あわたてクリームをまぜた大きな二つのアイスクリームのような感じがします。しかも暑中休暇ときては！

それから、そっと目をほそめて窓のほうを見ると、太陽がかがやいているのを知ります。空は青く、窓の外のクルミの木の葉は、まったくうごいていません。木の葉はつまさきで立って、きみのへやをのぞきこんでもいるようです。きみは、しみじみ幸福なみちたりた気持ちで、もしひどくだるくなければ、自分の鼻でもかじるでしょう。

だがとつぜん、きみは、ハチにさされでもしたように、ベッドからとびだします。たいへんだ、出発しなければならないのだ！　それなのに、まだかばんは荷づくりできていなかった！

スリッパをはくのももどかしく、寝室からかけだして、もう廊下からさけびます。

「おかあさん、いったい、何時？」

とうとうエーミールは、プラットフォームに立っていました。おかあさんは、かれの手をにぎっていました。イェシュケさんは、とくべつに一時間だけ勤務のひまをもらって、かばんとバタパンの包みをはこんできました。かれは、エーミールたちのじゃまにならないように、うしろのほうに、はなれていました。

「それから、一日おきに手紙をおくれね。」と、ティッシュバイン未亡人はたのみました。

「おまえは、あまり遠くにはおよいでいかないって約束してくれたけれど、やっぱり、わたしは心配だよ。おまえたちがおおぜいあつまったら、どんなことがおきるか、わかったもんじゃないからね。」

「だいじょうぶだよ、おかあさん。」と、エーミールはさけびました。

「わかってるくせに。ぼくは、一ど約束したらきっとまもるよ。でも、やっぱり、ぼくはおかあさんのことを心配するだろうな。そのほうがつらいよ。ぼくがいないあいだ、おかあさんは、いったいどうしてすごすの？」

「おかあさんには、することがたくさんあるんだよ。ひまができれば、散歩にでます。日曜日には、イェシュケさんと遠足します。農場か、ツグミの鳴く谷間に。もちろん、あの人が非番だったらよ。お弁当をもってね。あの人が非番でなかったら、なにかつくろいものをするわ。かけぶとんが二つともひどくなってるからね。でなきゃ、おまえに長い手紙を書くよ、ね。」

「できるだけたびたびね。」と、エーミールはいうと、おかあさんの手をにぎりしめました。

「なにかわるいことがおきたら、電報をくださいね。すぐかえってくるから。」

「いったい、どんなことがおきるっていうの？」と、未亡人がたずねました。

「そりゃ、今からはわからないよ。おかあさんがぼくに用があるといえば、ぼくはかえってきますよ。もしも汽車がだめなら、歩いてきます。ぼくは、もう子どもじゃないんです。それをわすれないでください。おかあさんが、心配でもなんでも、ぼくに内証にしないでほしいんです。」

ティッシュバイン未亡人は、あわてて、エーミールを見つめました。

「なにをおまえにかくすことがあるっていうの？」

ふたりはだまって、光る線路を見つめました。

「べつにとくべつなことをいったんじゃありませんよ。」と、少年はこたえました。

「今晩バルト海についたら、すぐおかあさんにはがきを書きます。それでも、それがおかあさんの手にとどくのは、せい

ぜいあさってでしょう。海岸じゃ、ポストが一日になんどあけられるかわからないもの。」

「じゃ、わたしはうちにかえったら、すぐ書くよ。」と、おかあさんははっきりいいました。

「そうすりゃ、わたしの生きてることがすぐわかるさね。でないと、おまえはおちつかないだろうからね。」

そこへ、ベルリンいきの汽車がそうぞうしくはいってきて、ふかいため息をついてとまると、イェシュケ警部さんは三等車のなかにかけこみ、窓ぎわの席をとり、エーミールの荷物をていねいにあみだなにのせて、エーミールが車内にはいってくるのをまっていました。

「どうもありがとう。」と、エーミールはいいました。「こんなに親切にしていただいて。」

イェシュケさんは、手をふりました。

「どういたしまして。」

それから、ポケットから財布をだして、手をいれ、五マーク銀貨を二まい、エーミールの手ににぎらせていいました。

「おこづかいのたしにしなさい。つかいみちはいくらもあるから。まあ、たのしくやりたまえ。この数週間、天気はいいということだ。すくなくとも新聞にはそう書いてあった。ぼくが市場で約束したことは、きっとまもるからね。まい日、立ちよって、おかあさんを見てあげる。——たとえ一時間でも。」

エーミールは注意ぶかく、五マーク銀貨をポケットにいれてから、警部さんとあく手しました。

「どうもありがとう、ハインリヒさん。」

「だいじょうぶだね、きみ。」

イェシュケさんは、かばんをあみだなのもっとおくのほうに、おしこもうとつとめました。

「汽車がさいしょのカーブをまがるとき、荷物がきみの頭におちるといけないからね。じゃ、退散するとしよう。」

かれは、プラットフォームにおり、ティッシュバイン未亡人のうしろにさがりました。

未亡人は、エーミールが顔をのぞかせている窓ぎわによりそい、おばあさんやポニーやそのほかの人たちに、くれぐれもよろしく、といいつけました。

「からだがほてってるのに、海にはいることはしないようにね。そうしないと、心臓まひをおこすかもしれないからね。」

「そんなことになっちゃ、感心しないね。」

と、イェシュケさんは大声でいって、てれくさそうにわらいました。

「バタパンを食べることを、わすれちゃいけないよ。そうしないと、わるくなるからね。」

と、おかあさんがいいました。

駅長さんが発車の合図をすると、汽車は、ぐいとうごきだしました。

「これからも、ぼくを愛してくださいね。」

と、少年はいいました。が、あまりそっといったので、おかあさんには聞こえませんでした。かれは、そのほうがよかったと、あとで思いました。

汽車はしずかに駅をはなれました。

「銅像をよごしちゃいけないよ。」

と、イェシュケさんがわらいながらさけびました。

今はもう、たがいに手をふるだけでした。

こんどの旅行には、夢も強盗もあらわれませんでした。

エーミールは地理の教科書をもってきていました——第一部ドイツです——リューベック湾、メクレンブルクの湖沼地帯、ボンメルン、リューゲン島、バルト海岸などのところを、くわしく勉強しなおしました。まるで、試験の勉強をしているようでした。

徹底的なのが、もともとこの少年の習慣でした。（もっとわるい習慣だってあります。）

教科書に書いてあることをすっかり、二ど読みとおすと、かれは本をとじ、汽車の通過する平和なけしきを窓からながめました。みのっている穀物畑をよく見ていると、いま読んだことがらが頭のなかで、一ダースもの粉ひき水車のようにぐるぐるまわりはじめました。

シュトラルズント包囲の失敗、ホルシュタイン・スイス、れんがのゴシック建築、ブリュッヘル元帥の生地、リューゲン島の石灰石のがけ、メクレンブルクの家畜、炭焼き、ネズの火酒、リューベックのハタンキョウ入りパン、スウェーデンのグスタフ・アドルフ王の上陸、教会のオルガンひきブックステフーデ、そんなものがごちゃごちゃにまざって、ぐるぐるまわる万華鏡をのぞくようでした。

エーミールは、心をおちつかせるために、バタパンを食べ、くずものこさずかたづけました。そして包み紙を窓からなげました。紙は音をたててとびましたが、しまいに、ふみきり番の小屋のそばのトウナス畑におちました。ふみきりのさくがおろされて、さくのうしろでは荷馬車がまっていました。御者のとなりに腰をかけている少年が、手をふりまし

た。エーミールは手をふってそれにこたえました。

ときどき人がおりたりのったりしました。ときには車掌さんが車内にはいってきて、きっぷのうらに鉛筆で太い線をつけました。

そんなことで、変化にはことかきませんでした。

列車は、二年まえのときよりも、ずっと早く、ドイツの首府に近づきました。

いつもおなじことです。ちょっとした散歩にせよ、汽車旅行にもせよ、二どめはさいしょより、いつでも短く思われるものです。（メートルやセンチではかれる距離だけの問題ではありません。）

エーミールのおばあさんとボニーは、フリードリヒ街駅の改札口をとおっていそぎました。

「そんなに走らないでおくれ。おばあさんは急行列車じゃないんだから！」

と、おばあさんはさけびました。おばあさんの黒いボンネットが、頭のかたがわにずれていました。

「エーミールが一分間のうちにつくのよ。」と、ボニーはいらいらして、こたえました。

「わたしたちは、あわてなくたって、もっと時間どおりにできたんだわ。」

おばあさんは、頭を強くふったので、ボンネットがなおいっそう、かたほうにずれてしまいました。

「時間どおりにするより時間をまもることはできないよ。三十分早すぎるのは、三十分おそすぎるのとおなじように、時間どおりじゃないんだよ。」

ボニーは反対をとなえようとしましたが、そのとき、教授くんがかの女たちを見つけ、いそいで近よりながら、帽子をとって、「こんにちは。」といって、ポニーの手から荷物をとり、ふたりのために道をあけてやりました。

「こんにちは。大地主さん。」と、おばあさんはこたえました。

教授くんはわらって、休暇のお客さんを両親のところへ案内しました。法律顧問官ハーバーラントさんは、かの女たちにあいさつし、夫人を紹介しました。ハーバーラント夫人、つまり教授くんのおかあさんは上品で美しく、自分のむすこより背が高くはありませんでした。やせて背の高い夫とならぶと、少女くらいにしか見えませんでした。

ポニーは、いくどかひざをまげておじぎをし、自分の両親

から教授くんの父母にことずかってきた、よろしくというあいさつをつたえました。かの女のおばあさんは、生まれてからまだついぞ海岸にいったことがないので、うれしくてたまらない、といいました。

それからみんなは話をやめて、エーミールをまちました。長くまつまでもありませんでした。汽車はプラットフォームに近づき、ざあっとはいってきて、とまりました。乗客がおりました。

「きっと、あの子は、また動物園前駅でおりたんだわ。」と、ポニーが泣き声をだしました。

しかしその子はもう車室をおり、かばんをひきずりながら、友だちをきょろきょろさがしていました。かれはみんなを見つけると、微笑して走りよりました。かばんを下におくと、おばあさんにキスし、教授くんの両親とあく手しました。そして、ポニーにいいました。

「おどろいたね？　きみは大きくなったね！」

さいごにかれは、教授くんにあいさつしました。ふたりの少年は、すっかりあらたまった態度でした。少年は長いあいだあわないでいると、いつでもそういったものです。（しかし、それは十分間とはつづきません。）

「グスタフは、もうけさオートバイで出発したよ。」と、教授くんが説明しました。

「ああ、そうかい？」と、エーミールはいいました。

「かれから、くれぐれもよろしくって。」

「ありがとう。」

「ちびの火曜日くんは、きのうの晩でかけた。」

「ナウハイムじゃなくて？」

「うん、お医者さんが、かれのおかあさんに海にいってもいいっていったんだ。」

「すてきだ。」と、エーミールはいいました。

「まったくだ。」

と、教授くんも同感の意を表しました。

それから、ぎごちなく話がとぎれました。しかし、ハーバーラント氏が気分をやわらげました。地面をステッキで三どコツコツとついて、法律顧問官はこういったのです。

「みなさん、傾聴。これからシュテッチン駅にいくわけですが、自動車を二台やといますから、一台にはおとな、もう一台には子どもがのってください。」

「わたしは、どうしたらいいの？」と、ポニー・ヒュートヘンがたずねました。

みんなわらいました。もちろん、ポニーはわらいませんでした。かの女は、すこしむっとしていました。

「わたしはもう子どもじゃないわ。でも、まだおとなでもないし。わたしは、いったいなんでしょう?」

「ばかなむすめだね。おまえは罰として、おとなといっしょにいきなさい。そうすれば、おまえは、まだ自分が子どもだってことがわかるでしょう。」

と、かの女のおばあさんがいいました。

けっきょく、そんなことでポニーは、おさまりました。

かれらは、シュテッチン駅の待合室でお昼を食べ、それから、バルト海いきの汽車にのりました。かれらは早くきていたので、休暇で混雑しているにもかかわらず、自分たちの車室を占領することができました。汽車はドアのところまで、子どもや、おけや、旗や、ボールや、シャベルや、オレンジの皮や、たたんだ軽便ソファーや、サクランボのふくろや、風船や、さけび声や、わらい声をいっぱいにつめこんで、マーク・ブランデンブルクの松林のあいだを、蒸気をはきながらたのしそうに走っていきました。まったく愉快な汽車でした。そうぞうしい音がひらいた窓からあふれでて、平和なけしきの上にただよいました。

松の木が、なごやかに夏の微風をうけてゆれながら、たがいにささやきあいました。

「長い休暇がはじまったんだよ。」

「どうりで。」と、ブナの老木がうなりました。

第四章　海べの別荘

コールスビュッテルは、大きな海水浴場のひとつではありません。十年まえには、停車場さえまだありませんでした。そのころは、リューベック＝シュトラールズント線の汽車から、たしか、シュツッベンハーゲンという小さな駅で下車しました。とくに運がよければ、おもおもしいメクレンブルク種の馬をつけた古風な馬車がそこにいて、でこぼこの砂地の小道をとおり、森をぬけて、コールスビュッテルへゆらゆらと海水浴客をはこんでいくのでした。

右にも左にも、低いヒースの原がひろがっていました。樹齢百年ものカシとブナの木のあいだに、ネズのやぶが緑の小人のようにたっていました。ときどき小ジカのむれがしずけさをやぶって、さっととおりました。森の草地のなかの炭焼きかまどからは、青い強い煙が夏の空気のなかにたちのぼりました。それはグリムのおとぎ話のなかのようでした。

それも、今はすっかりかわりました。直通列車でコールスビュッテルにいき、ゆうゆうと大またで駅をでて、赤帽にかばんをわたすことができます。三分間でホテルにいけ、十分間で海岸にでられます。

でも、わたしは、むかしのほうがよかったと思います。あのころは、海岸にでるまでに、いろいろの障害物をのりこえなければなりませんでした。目標にたっするまで、とちゅうにある障害物をかるく見るのはあやまりです。障害物には、それとしてよいところがあります。

コールスビュッテルの人口の半分が、休暇列車をむかえるために駅にあつまっているかと思われるくらいでした。駅の前は、四輪馬車や、二輪馬車や、三輪車や、手おし車や、荷車でいっぱいでした。お客やたくさんの荷物をまちうけているのでした。

ハーバーラント家の老女中クロチルデ・ゼーレンビンダー嬢も、改札口にもたれていました。ハーバーラント氏を見つけると、かの女は両手をふりました。主人は、汽車からなが

れだす人波の上に頭だけとびでていました。
「こっちです。」と、かの女はさけびました。「顧問官さま！　顧問官さま！」
「そんなにどなるなよ、クロチルデ。」
と、ハーバーラント氏はいって、かの女とあく手しました。
「しばらくあわなかったね。」
「たった二日ですよ、だんなさま。」と、かの女はわらいました。
「すべて、うまくいってるかい？」
「それはご安心ください。ようこそ、おくさま。おかわりございませんでしたか。わたくしがさきにきて、よござんしたわ。ああいう家じゃ、とても、用事がおおいんですよ。こんにちは、テオさん！　あなた、お顔のいろがよくないわ。どうかなさったの？　こちらは、あなたのお友だちのエーミールさんでしょう？　ね？　こんにちは、エーミールさん。あなたのことはいろいろうかがってますわ。ベッドにもシーツをしきましたよ。晩ごはんには、ビフテキとお野菜のもりあわせがございますわ。肉はここのほうがベルリンより安いんですの。おや、こちらは、エーミールさんのおいとこさんのポニー・ヒュートヘンさんね。すぐわかりますわ。なんてていらっしゃるんでしょう！　あなた、自転車をもっていらっしゃらなかったの？」
エーミールのおばあさんは両耳をおさえ、「ちょっと息をいれてちょうだい！」と、たのみました。
「ちょっと息をいれて、あんた。あんたがその調子でしゃべりつづけたら、ほんとに耳にたこができますよ。わたしは、エーミールの祖母です。こんにちは。」
「ほんとにウリ二つですわ！」
と、ハーバーラント家の女中はいいました。それから、おじぎをして、
「クロチルデ・ゼーレンビンダー（たましいをしばるもの）。」
と、名のりました。
「それは、新しい商売ですの？」と、エーミールのおばあさんがたずねました。
「いいえ、わたしの名まえです。」
「まあ、お気のどくな！　どうしてお医者さまにいかないの。先生がべつの名まえを処方してくださいますよ。」
「まじめなお話ですの？」と、クロチルデはたずねました。
「いいえ。」と、エーミールのおばあさんはこたえました。
「そうじゃないの、あんたは、おりこうなくせに。わたしはまじめになることなんか、めったにないの。まじめになるねうちのあることなんか、めずらしいんですもの。」
それから、クロチルデが運送屋のクレーガーからかりてきた手おし車にかばんや手さげをつみ、運送屋が前をひっぱり、エーミールと教授くんがあとおしをしました。こうして、ブリュッヒェル通りをくだっていきました。おとなとポニーは、あとから歩いていきました。
ふいに高い警笛の音がひびきました。オートバイが全速力で横町からまがってきました。ブレーキがかけられました。運送屋は手おし車をとめて、あたりの窓ガラスがふるえるような声でののしりました。さいわい、かれは、低ドイツのなまりでののしりました。
「そうかんかんにならないでおくれよ！」と、オートバイの乗り手はどなりました。「たいしたことじゃないよ。」
エーミールと教授くんはおどろいて、荷物のうしろからのぞき、「グスタフだ！」と歓声をあげ、運送屋の手おし車を一周して走りより、旧友にあいさつしました。
めんくらったグスタフは、道路にオートバイをねかせ、ちりよけめがねをひたいにおしあげていいました。
「すんでのところで、ぼくは、ふたりの親友をこっぱみじんにひきとばすところだった！　ぼくたちは、きみらを駅にむかえにいこうとしていたんだ。」
「運がわるいと、しようがないな。」
と、道ばたのみぞのなかから声がしました。
グスタフは、とびあがって、オートバイを見おろしました。
「ちびの火曜日くんは、いったい、どこにいったんだろう？」
と、かれはさけびました。「いままでぼくのうしろにのっていたんだが。」
かれらはみぞをのぞきました。そこに、ちびの火曜日くんがうずくまっていました。べつにけがはありませんでした。かれは宙になげだされて、みぞの底の草のなかに着陸しただけでした。かれは、友だちたちにわらいかけていいました。
「さいさきがいいぜ。」そして、すっくと立ちあがって、さけびました。
「あいことば、エーミール！」
「あいことば、エーミール！」
と、四人はさけんで、なかよく歩きだしました。
おとなたちは、ずっとうしろからついてきました。なにも気がつかないでいました。

「あれがテオさんの家です。」
と、クロチルデ・ゼーレンビンダーは正面を指さしながら、得意そうにいいました。
それは、花や、花壇や、木のたくさんある庭にかこまれた、古風なすてきな建物でした。「海べの別荘」ときりづまに書いてありました。
クロチルデはつづけました。
「左がわに大きなガラスばりのベランダが見えるでしょう。あげおろしする窓があって。あの上に日光浴をするバルコニーがあります。そのとなりのへやを、だんなさまとおくさまのために用意いたしました。申しぶんないと思いますけど、おくさま?」
「おまえのすることは、わたしにとって、なんでも申しぶんないよ。」
と、教授くんのおかあさんは親しげにいいました。
女中は顔を赤らめました。
「それから、つぎのへやが、エーミールさんのおばあさんとポニー・ヒュートヘンさんのです。ぼっちゃんたちには、一階のベランダのおくのへやをあてましょう。そのとなりのへやには、だれかひょっこりお客がいらっしゃったときのために、ソファーがあります。おりたたみ式のベッドもできます。お食事はベランダでなさいますわね。もちろん、天気のいいときはお庭でします。家の外じゃ、お料理がすぐさめますけど、でも、なにかおおいをしておくことはできますわ。」
かの女は、あたりを見まわしました。
「おや、ぼっちゃんたちはどうしたのかしら? さきにきてるはずだけれど。」
「もう寝たんでしょう。」と、エーミールのおばあさんがいいました。
「あんたが、そんなにしゃべりつづけたら、そのあいだに、子どもたちはひと眠りして、またおきるでしょう。」
クロチルデは、いぶかしげに、小さいおばあさんを見つめました。
「そんなことをおっしゃるとは、おみそれしましたわ。」
「それには、すこし修練がいるのよ。」と、ポニーが説明しました。「うちのおとうさんにいわせると、おばあさんは、みかけによらぬいたずら者だって。」
それからかの女は庭の門をあけて、家のほうに走っていきました。おとなたちはゆっくりあとからいき、運送屋に、いろいろな手さげやかばんをどこにもっていったらよいか、さしずをしました。
庭の大ぶぶんは、家のうらにありました。四人の少年は、グスタフのオートバイをしまう車庫をさがしまわっていました。教授くんはベンチに腰をかけて、足をふりながら、
「明らかに二つの可能性がある。温室にトマトとならべておくか、道具おき場にいれるか、そのどっちかだ。」といいました。
「温室じゃ暑すぎる。」と、火曜日くんは考えました。
エーミールは頭をひねりました。
「道具おき場には、ナイフや、そのほかの刃物類がころがっているにきまっている。タイヤがいたみやすいぜ。」
グスタフは庭を横ぎって、道具おき場に走っていって、のぞきこみましたが、肩をすくめました。
「子どものスクーターをおく場所もありゃしない。いわんやぼくの馬力のあるオートバイをやだ。」
教授くんはわらいました。
「馬力があるんだって?」
グスタフはむっとしました。
「これいじょうのは、操縦者免許なしじゃだめなんだぜ。ぼくには、じゅうぶんな馬力さ。もし、ぼくが、さっきブレーキをあんなにやけにしめなかったら、きみたちは、みんなこっぱみじんだったんだぜ。」
「温室の暖房をとめようじゃないか。」と、火曜日くんが提案しました。
教授くんは頭をふりました。
「そうしたら、トマトが赤くならないだろう。」
「青かろうが赤かろうが、トマト自身は気にするもんか。」と、グスタフがどなりました。「そりゃ、たいしたことじゃない。」
ちょうどそこへ、ポニーがぶらぶらやってきました。
エーミールはかの女にむかって手をふり、
「グスタフのオートバイの車庫にするところを知らない?」と、たずねました。
かの女は立ちどまり、あたりを見まわして、庭のすみを指さしました。
「あすこの建物は、なに?」
「あれは、いわゆるあずまやだ。」と、教授くんがこたえました。
「なににつかってるの?」と、少女はたずねました。

「見当がつかないな。」と、かれはこたえました。

かれらは、そのあずまやのほうにいきました。グスタフは、オートバイをあとからおして。

それは小さいガラスばりの家で、なかに白くぬったテーブルと緑色のじょうろがありました。

「すてき！」と、教授くんがさけびました。「こりゃ、車庫にはもってこいだ。」

「わたしがいなかったら、どうするの？」

と、ボニー・ヒュートヘンはいいました。かの女は、ドアをあけました。かぎが錠にささっていました。グスタフはオートバイをあずまやにおしこんで、ドアに錠をおろしました。そして、かぎをはずし、ポケットにいれました。

ほかの少年たちは、腹がすいていたので、家にもどりました。

ポニー・ヒュートヘンも、みんなについていこうとしました。グスタフがききました。

「ぼくのオートバイはどうです？」

かの女はあずまやにもどって、ガラスごしにのぞき、グスタフのオートバイをしげしげと見ました。

「さて、いかが？」と、少年はたずねました。

「中くらいのすばらしさ以下ね！」

と、かの女はいって、皇太后のように、大またで歩いていってしまいました。

グスタフは、あきれて、かの女を見おくりました。それから、うれしそうに顔をかがやかせて、オートバイにむかってうなずきましたが、ポニーのうしろすがたを見ると、むっとして、ひとりごとをいいました。

「たいしたことじゃない。」

夕食後、みんなはしばらくベランダに腰をかけて、色とりどりの花の咲いている庭をながめました。

「はて、みなさん、お食事はいかがでした？」

と、クロチルデがとうとうしびれをきらして、たずねました。

むろん、みんなおなじ意見でした。そして、エーミールのおばあさんが、銀婚式このかた、こんなおいしいビフテキは食べたことがない、というと、ゼーレンビンダー嬢はすっかり幸福になりました。

ポニーにてつだってもらいながら、クロチルデがあとかたづけをしているあいだに、エーミールは、おかあさんにはがきをかきました。グスタフもおなじように、安着を両親に知らせるたよりをだすことにしました。かれらははがきを火曜日くんにわたしました。かれの両親が観陽館という宿で、とっくからまっているので、かれはポストのそばをとおっていく約束をしました。

「とおるだけでなく、」と、エーミールはたのみました。「このはがきをいれてくれたまえ。」

火曜日くんは、みんなにわかれをつげました。

「あんまり、朝寝ぼうをしないようにね。」

といって、かれは走っていきました。

ハーバーラント氏は、ベランダの入口に立って、空をながめながら、

「日はしずんだけれど、ベッドにはいるまえに、海に、お休みをいわなくちゃならんな。」といいました。

そこで、みんなは、たそがれるハンの木のしげみのあいだを、歩いていきました。クロチルデだけは、あとにのこりました。食器を洗おうと思ったのです。

ハンの木のしげみがつきると、のぼりになり、海の見わたせる砂丘につうじていました。法律顧問官ハーバーラント氏はいいました。

「海を見たことのない人は、さきにいきなさい。」
エーミールとボニーとおばあさんが、名のりをあげました。
「わたしたちはあとからいく。」と、ハーバーラント氏はいいました。
そこで、おばあさんは、ふたりの孫と腕をくんで、さきに歩きました。数分ののち、かれらは砂丘の頂上にでました。右てには、海浜ホテルがあり、前には両がわに砂浜がひろがっており、トウいすや、旗や、砂でつくった城などがたくさんありました。
砂浜のはしから海がはじまっていました！　どちらを見ても、はてしがなく、水銀でできているようでした。はるかかなたの水平線に、一そうの船が、夕やみのなかへ走っていきました。いくつかの光がまたたいていました。空は、もうしずんでしまった太陽のバラ色の光をまだうつしていました。中空にかかっている三日月は、長い病気あがりででもあるかのように、青ざめていました。遠くの燈台のさいしょの光のおびが、パステル色の空をさっとかすめました。はるかかなたから、汽船のサイレンの音がひびいてきました。おばあさんとふたりの子どもは、すっかり心をうばわれて立っていました。かれらは、もう二どと、口をきくことなどできないような感じにつつまれて、だまって立っていました。
ジャリジャリという足音が、うしろに聞こえました。ハーバーラント氏父子とグスタフが、ゆっくりのぼってきました。
グスタフが、エーミールに近よりました。
「すばらしいじゃないか。」と、かれはいいました。
エーミールは、うなずくだけでした。
かれらはならんで、だまったまま、じっと海を見つめていました。
エーミールのおばあさんは、そっといいました。
「これで、こんなおばあさんになるまで生きてきたわけがわかったよ。」

第五章　バルト海でのめぐりあい

あくる朝、クロチルデが、少年たちの眠っているへやのドアをノックしようとすると、くすくす、わらう声が聞こえました。
「もうおめざめなの？」
と、かの女はたずねて、耳をドアにあてました。
「おめざめなんて、しっけいだぞ。」
と、教授くんがいってわらいました。
「文句をいってるのは、だれだ？」と、グスタフがするどくたずねました。
「名のりもしないで、ぼくたちにぶしつけに話しかけるのはだれだ？」
「わたしです。」と、女中はどなりました。「クロチルデですよ。」
「ああ。」と、エーミールがいいました。「ゼルプストビンダー（ネクタイ）嬢だ。」
「ゼーレンビンダー（たましいをしばるもの）ですよ。」
と、クロチルデがつっけんどんに訂正しました。
「いや、いや。」と、グスタフがいいました。
「ゼルプストビンダーのほうがずっといい。これからきみを、ゼルプストビンダーとよぶことにするよ。もし、それがふさわしくなかったら、ネクタイとよぼう！　いいですか、クロチルデ・ネクタイ嬢？」
「すばらしい名だ！」と、教授くんが断言しました。（かれはあいかわらず、判定をくだす習慣をもっていました。）
「クロチルデ、きみは、今後ネクタイ嬢とよばれるんだよ。」
「すきなようになさってください。」と、年とった女中は顔をしかめていいました。
「ああ、そうだ。朝ごはんにきていただかなくちゃならないんですよ。ほかのかたは、もうみなさん庭にでていらっしゃいます。わたしもまいります。」
「さよなら、ネクタイさん。」と、三人の少年はどなりました。それからかれは、ベランダのドアから観兵式の歩調でう

ら庭にでてきました。芝生の中央に、朝ごはんのしたくのできている、大きなまるいテーブルがおいてありました。

教授くんの両親とポニー・ヒュートヘンとおばあさんが、もう席についていました。ハーバーラント氏は新聞を読んでいました。ほかの人たちは、三人の少年の登場をあきれかえってむかえました。

夫人は、夫の肩をかるくたたきました。

「なんだね？」

と、かれはたずねながら、新聞を下におくと、おどろきのなかまいりをしました。

教授くんとグスタフは海水着を着て、エーミールはれいの赤いパンツをはいていました。しかし、それがみんなの目を見はらした点ではありませんでした。

教授くんは、おとうさんのパナマ帽をかぶり、太いステッキをふりまわしていました。エーミールは、ポニーの夏のコートをはおり、ぴかぴか光る赤いサクランボのついたボニーの黄いろいムギわら帽子をかぶり、はでなしまもようの日がさをひろげ、それをゆらゆらさせながら、つんとすまして芝生を横ぎってきました。ちょっと、キじるしの婦人というところでした。

だが、いちばんきばつなのはグスタフでした。かれは、エーミールのおばあさんのボンネットをかぶり、黒い絹のリボンを口がひらけないほど、かたくあごの下でむすんでいました。そのうえ、ちりよけめがねをかけ、かた手ではポニーのハンドバッグをしなやかにふり、かた手では重いかばんをひきずっていました。

三人の少年は、まばたきひとつしないで、だまって、トウいすに腰かけました。それから、教授くんが、スプーンでコーヒー茶わんをかるくたたくと、とつぜん三人は、声をそろえてさけびました。

「みなさん、こんばんは。」

「かわいそうに、日射病にやられたとみえる。休暇も二日めだというのに、なんたることだ。」

ハーバーラント氏はそういって、また新聞をとりあげました。

「お医者をよびましょうか。たのむわよ、わたしのハンドバッグをよごさないでよ！」と、ポニーが口をだしました。

グスタフはふりむいて、「ボーイ！」とどなりました。

「サービスしろ！　これでも料理店だというのか。それとも、そうじゃないのか。」

それから、かれはいそいでボンネットのリボンをほどきました。のどがつまりそうだったのです。

「このつぎボンネットを買うときは、あの店にはいかないぞ。」と、かれはぶつぶついいました。「ちっともあいやしない！」

クロチルデが、新しいコーヒーをいれて、うちのなかからでてきました。

「そら、でてきたぞ。」と、教授くんがいいました。

「むろんクロチルデ・ネクタイ嬢だ。いつもいつも、おなじ顔ぶれですな！」

女中は、コーヒーをつぎ、入れものをテーブルの上におき、泣きそうにたずねました。

「わたしは、ネクタイってよばれるのを、がまんしなきゃならないんですか。」

「でも、どうしてネクタイなの？」

と、ハーバーラント夫人が質問をしました。

「ゼーレンビンダーじゃ、てんで意味がないんです。」と、エーミールがいいました。

「それで、ゼルブストビンダー（ネクタイ）とよぼうというんです。」と、教授くんがいいました。「でも、それじゃ、あまりはえないらしいんです。」

「だからこそ、ネクタイと名づけたんです。」

と、グスタフは口をもぐもぐさせながら、つぶやくようにいいました。

「ほかの人なら、そういう名まえをつけられれば、よろこぶだろう。ぼくたちのスポーツの先生は、フィリップ・オクス（雄牛）っていうんです。どこかに招待されて、名を名のると、すぐにげだしちゃうんです。みんなはわらうだけなんですけど。」

「雄牛なんか、ネクタイとでもよばれたら、どんなによろこぶか、考えてごらんなさい！」と、エーミールがいいました。

クロチルデ・ゼーレンビンダーはあきらめて、だまって、うちのなかにもどっていきました。

ポニーは、むかいがわのおばあさんのほうを見ました。

「この人たち、どうかしたの？　どこかわるいとこでもあるの？」

「どういたしまして。」と、おばあさんはいいました。「ごく、ありふれた病気だよ。あれをなまいきざかりっていうのさ。」

ハーバーラント氏はうなずきました。

「その病気なら、わたしも、自分の経験で知ってるよ。自分にもおぼえがある。」

朝飯のあとで、火曜日くんがすがたをあらわし、みんなを海水浴にさそいました。ハーバーラント氏夫妻だけは、家にのこりました。が、ほかの者たちは、エーミールのおばあさんもまじえて、浜へでかけました。少年たちは、はだしのほうが健康によいといって、はだしでいくことにしました。

かれらは、砂丘の頂上でとまりました。バルト海は、きのうの夕がたと、まったくちがって見えました。緑色がかった空色にかがやいていました。ときどき、風がおこると、金色にぴかぴかとてりはえて、目をあけていられないようでした。エーミールのおばあさんは、クロチルデ・ゼーレンビンダー嬢にかりた日よけめがねをかけました。

下のほうのなぎさは、目のとどくかぎり、トウいすや、砂でつくった城や、小さい旗や、ふきながしや、人でいっぱいでした。

ときどき、波がかがみのような海面を走ると、ポニーは、

「まるで、すがたの見えない店員が、はでな絹を、はてしない売場にひろげているようだわ。」といいました。

四人の少年は、たがいに、意味ありげに顔を見あわせました。なにもいいませんでしたが、ちびの火曜日くんだけは、おさえることができなくなって、ぷっとふきだしました。

「うすのろさんたちったら！」

と、ポニーはいうと、ひとりで、水ぎわにむかって歩きました。エーミールとおばあさんは、ほほえみながら、ついていきました。すこしいくと、エーミールはふりかえって、なかまをさがしました。かれらは、すこしはなれて立ったまま、さきにすすもうとはしませんでした。

「なにをまってるのさ？」と、エーミールはさけびました。ゆっくりとかれらは歩きだしましたが、数メートルいって、またとまってしまいました。グスタフはかた足ではねながら、ひどく文句をいっていました。

おばあさんはわらいました。

「ベルリンのお友だちは、はだしで歩きつけていないので、じゃり道がいたくてたまらないんだよ。」

エーミールは走ってもどりました。グスタフが顔をしかめて、ぶつぶついいました。

「ちぇっ、このほうが健康にいいっていうのかい？」

「もうたくさんだよ。」と、教授くんもいいました。「ぼくの足は、牛の皮でできちゃいないからね。」

「もう二どと、はだしはごめんだ。」

と、火曜日くんはいいきって、もう一歩ふみだしてみようとしました。まるでニワトリが、こやしの上を歩くようなかっこうでした。

グスタフは道からはなれて、草の上を歩こうとしました。しかし、それは草ではなく、ハマカラスムギで、ふくらはぎをひどくさしたので、「いてえー!」と悲鳴をあげ、じゃり道にもどりました。

「ハマカラスムギのなかには、珪酸がたくさんあるんだよ。」と、エーミールが説明しました。

「珪酸が、あんなにひりひりするとは思わなかったよ。」

と、グスタフはいいました。「まるで、かみそりの刃のあいだを歩くようだぜ。」

エーミールは、なおもうすこし、植物の細胞の構造と、とくに砂地や海岸の植物の性質について、みんなに話しました。

「わかった、わかった。」と、教授くんはいいました。「なるほど、きみは植物通でいらっしゃいますが、ぼくはうちへ走ってかえって、運動靴をはくよ。」

そしてそのとおりにしました。グスタフと火曜日くんも、あとをおって走りました。

エーミールは、おばあさんといっしょになりました。ふたりはベンチに腰をおろして、じっと海に見いりました。小さい白い沿岸航路の汽船が、ちょうどさん橋についていました。少年は、ポニーをさがしましたが、かの女は、もうずっとさきにいっていました。

おばあさんは、かりものの日よけめがねを、しわのよったひたいにおしあげました。

「やっと、すこしのあいだ、ふたりきりで話せるようになったね。おまえはどうだい、ええ? おかあさんはどうだい?」

「ありがとう。とても元気です。」

おばあさんは、頭をいくらかかしげました。

「おまえは、あまりおしゃべりじゃないね。もうちょっと、話して聞かせなさいよ、ね。」

かれは、海を見わたしました。

「だって、おばあさん、みんな、ぼくたちの手紙で知ってるじゃないの。おかあさんは、とても用事がおおいけれど、し

ごとがなかったら、たのしくないでしょう。ぼくはっていえば、あいかわらず、クラスで一番です。」

「そうかい、そうかい。」と、老婦人はいいました。「そういい、そういえば、まことに申しぶんなさそうに聞こえるけれど。」

かの女は、少年の肩をやさしくゆすりました。

「てっとり早く話してくれないかい、ちゃめさん？　なにか思わしくないことか、わるいことがあるにちがいないんですよ！　エーミール、わたしは、自分のハンドバッグとおなじように、おまえの顔いろをよく知ってるんだよ！」

「だって、どんな思わしくないことがあるんでしょう。おばあさん。すべて、申しぶんないんです。信じてください。」

おばあさんは、立ちあがっていいました。

「おまえは、それをおばあさんには、話してくれるね！」

とうとう、みんないっしょにおよぎ場にきました。

おばあさんは砂のなかに腰をおろして、靴と靴下をぬぎ、足に日光浴をさせました。そのあいだも、かの女は、みんなのもってきたタオルの見はりをしました。

少年たちはポニーをまんなかにして手をつなぎ、わめきながら、波のなかに走りこみました。岸の近くにすわってうつらうつらしていた太った婦人が、とばっちりでしこたま水を飲み、いまにも死にそうな泣き声をあげました。

エーミールのおばあさんは、スカートをまくりあげて、数歩海にはいり、ていねいにたずねました。

「おくさまも、お若いときがございましたの？」

「もちろんですわ！」というのが返事でした。

「それじゃ、ようございますね！」と、老婦人はいいました。「それじゃ、ようございますね！」

そして、それいじょうこまかいことにはたちいらず、もどってきて、あたたかい砂のなかにすわり、はしゃいでいる子どもたちをたのしそうに見つめました。見えるのは頭ばかりで、それも見えなくなることがありました。

グスタフがいちばん速いおよぎ手で、ふかい海中に、いかりでつながれている大きな日なたぼっこ用のいかだに一番につきました。その上で、およぎ手たちは横になって休むことができました。ポニーとエーミールは、ほとんどおなじ速力でおよぎ、「上陸する」のを助けあいました。火曜日くんと教授くんとはずっとおくれてつきました。

「どうしてきみはそんなにおよげるんだい？」

と、火曜日くんがなかまといっしょに、いかだにすわると、たずねました。

「どうしてきみは、いったいテオやぼくより速くおよぐのだい？」

教授くんはわらいました。

「そんなこと気にするなよ。ぼくらは、頭脳労働者だからね。」

グスタフがいいました。

「きみたちが頭を水の上に高くだしすぎているということをのぞいては、頭には関係がないんだぜ。きみたちはクロールをおぼえなくちゃだめだ。」

かれは、いかだからころがって、しぶきをあげてバルト海にとびこみ、クロールのやりかたをしめしました。

「一時間いくらなの？」と、ポニーがたずねました。

かれはふかい息をすると、長いあいだ水のなかにもぐってから、はあはあいいながらでてきました。

「六十分！」

と、かれはこたえました。

それから、みんな岸にむかっておよぎました。グスタフは、またクロールをして見せました。みんなも、グスタフのまねをこころみました。そうしてると、教授くんは、のんびり背泳をしている人と衝突しました。

「もっと気をつけろ。」と、その人はどなりました。「きみの目は、どこにあるんだ？」

「水のなかに。」

と、教授くんはこたえ、なかまのあとから船のスクリューのように、クロールをしました。

かれらは、およげない人たちのいるところにつき、ゴム製の大きな歯みがきチューブの前に立ちました。（それは、むろん広告でした。）かれらは、それによじのぼろうとこころみましたが、てっぺんにあがるやいなや、チューブがひっくりかえったので、もんどりうって海中におち、たいへんなさわぎでした。

かれらはなぎさを見わたすと、鉄棒やそのほかの体操器械がありました。ひとりの男が鉄棒にぶらさがり、はずみをつけて、エビをやってあがり、前にからだをふり、すばらしい大車輪をやっていました。さっと両足を両腕のあいだにいれ、鉄棒の上に腰かける姿勢をとりました。それから、うしろにからだをおとし、両腕をひろげ、からだが前にふれると同時に鉄棒の上のひざをゆるめ、空中をかすめて砂のなかに

着陸しました。ひざをスマートにまげて、その練習をおえました。

「おどろいた！　こいつは、おれよりうわ手だ。」

と、グスタフがいいました。

体操の達人がわきへさがると、こんどは、ふたりの小さい少年が、鉄棒の下で身がまえをしました。ふたりはとびあがって、しずかにぶらさがっていたのち、からだをふりはじめ、ならんだままぴたりと一致して、さっきのおとなのやったむずかしい体操をひとくさりつづけてやり、おわると、おとながやったとおなじように、優雅に空中をかすめて、砂のなかに着陸しました。ひざをスマートにまげて。およぎ場の人はいっせいにはく手しました。

「気がへんになるな！」と、グスタフがさけびました。

「こんなのは見たことがない。ことに、あんな小さい子どもがやるのは！」

「あれは、三人のバイロンだよ。」と、すぐそばに、水のなかに立っていた少年がいいました。

「寄席の軽わざ師一家で、父親と、ふたごなのさ。まい晩海浜ホテルにでているよ。」

「いってみなくちゃ。」と、ポニーがいいました。

「プログラムは八時にはじまるよ。ほかのだしものもすばらしいよ。ぜひいってごらんよ。」

と、れいの見知らぬ少年がいいました。

「席はきっととれるかい？」と、火曜日くんがたずねました。

「ぼくが、テーブルをひとつとっておいてあげるよ。」と、少年はいいました。

「それじゃ、きみも軽わざ師なのかい？」

と、エーミールがたずねました。

少年は頭をふりました。

「いや、ぼくも体操はかなりうまいけれど、ぼくの本職は海浜ホテルのピコロ（見習いボーイ）さ。」

グスタフはわらいました。

「ピコロは若死にする。」

「どうして？」

と、火曜日くんがききました。

「だって、きみは、年とったピコロを見たことがあるかい？」

ポニーは、見さげるように鼻にしわをよせました。

「ばかなじょうだんは、よしてちょうだい。」

見知らぬ少年は、いいました。

「グスタフくんは、このまえあったときより、ずいぶん大きくなったね。だが、そのほかはすこしもかわらないね。」

友だちたちは、あきれて顔を見あいました。

「どうしてきみは、ぼくを知ってるのだい？」

と、グスタフがめんくらってたずねました。

「ぼくは、きみたちをみんな知ってる。」

と、ピコロは水のなかで断言しました。

「グスタフくんは、ぼくの服を着たことさえあるよ。」

グスタフは、あいた口がふさがりませんでした。

「ばかな！　ぼくは生まれてから、他人の服なんか着たことないぞ。」

「いや、ありますとも。」

と、ピコロはいいました。ほかの者たちは、どう考えたらよいか、わかりませんでした。

「あんたの名は、なんておっしゃるの？」

と、ポニーがたずねました。

「ハンス・シュマウフ。」

「聞いたことがないな。」と、グスタフがいいました。「ぼくは、シュマウフなんて人は、ひとりも知らないな。」

「きみは、ぼくのおとうさんも知ってるよ。エーミールくんだって知ってるよ。」

と、ハンス・シュマウフがいいました。

「いよいよ奇怪だね。」と、エーミールはいいました。

グスタフは水をかきわけて、ピコロのそばにいき、つかまえました。

「さあ、はっきりいえ、おい、そうしないと、一人まえのボーイになれないように、おまえの頭を、いつまでも、水のなかにつっこむぞ。」

と、おどしました。

ハンス・シュマウフはわらいました。

「ぼくは、ベルリンで、エレベーター・ボーイをしていたのさ。ノレンドルフ広場のクライト・ホテルで。あいことば、エーミール！」

それで、みんなはとどめをさされました。（エーミールのお金をぬすんだどろぼうを、みなでつかまえたとき、助けてくれたボーイだったのです。）みんなは気のくるったインディアンのように、小さいシュマウフをかこんでおどりました。塩水が高くはねあがりました。それからかれらは、骨がめきめきいうほど、ピコロとあく手しました。

「いや、そいつはうれしい！」

と、エーミールがさけびました。
「きみのおとうさんは、ホテルの玄関番で、ほんとに、ぼくに親切にしてくれた。ぼくは十マークかしてもらい、グスタフといっしょに、ホテルできみたちのへやに寝かせてもらった。」
「たしかに。息づまるようだったね、あのときは。ぼくはあれを一生わすれないよ。たとえホテルの主人になっても。それはそうと、ぼくが非番になったら、いっしょにヨットにのせてあげるよ。ぼくのおじさんは、このコールスピュッテルに住んでいて、大きな商船をもってるんだよ。」
と、ピコロがいいました。
「でも、商船で、ヨットがやれるのかい？」
と、火曜日くんがききました。
「うん、そうはいかんよ。」と、ピコロはいいました。「しかし、ぼくのおじさんは、上等なヨットをもってるんだ。おじさんは、とてもおもしろい人だよ。」
みんなは、これを聞いてよろこび、砂浜にかけあがって、小さいハンス・シュマウフを、エーミールのおばあさんに紹介しました。おばあさんもいっしょによろこびました。もっとも、みんながじゅうぶんからだをかわかしてからです。
グスタフは、ピコロを満足そうに見つめ、強くからだをタオルでこすりながら、いいました。
「ただひとつ、わからないことがあるね。」
「いったい、なに？」
と、ハンス・シュマウフはたずね、背の高いグスタフを見あげました。
グスタフは頭をふりながら、ハンスを見おろしていいました。
「あのとき、ぼくはきみの服をかりて、エレベーター・ボーイにばけ、どろぼうをさぐったが、どうしてきみの服がぼくのからだにあったのか、それだけはわからないね。」

第六章　グスタフと物理学

それから、たのしい日がつづきました。太陽は、バルト海をレンズをとおして見つめてでもいるように、かがやきました。
教授くんとそのお客にまねかれた人たちは、まずイセエビのように赤くなり、それから白人と黒人のあいの子のようにトビ色になりました。ポニー・ヒュートヘンだけは、いつまでも赤いままで、タマネギのように、皮がむけはじめました。かの女のおばあさんは、たえずかの女の背なかに、ワセリンやクルミ油や、羊毛油や日焼けどめのクリームをぬりつけてやりました。が、いっこうききめがありませんでした。
朝早くおばあさんが、
「おおきなさい、伯爵令嬢！　日がてってますよ。」
といって、ポニーをおこすと、ポニーは泣きだしそうになりました。
「なぜ、いつまでたっても雨がふらないの？」
と、かの女は絶望的にたずねるのでした。
しかし、少年たちは、上天気にすっかりむちゅうになっていました。かれらは、大ぶんの時間を水のなかか、どこかの海岸ですごしました。でなければ、さん橋の右ての港にでかけていって、シュマウフ船長のヨット「クニグンデ四世」号をほめたたえ、ピコロのさいしょの非番の日をたのしみにしました。その日に、ピコロがかれらを帆走につれていってやると、約束したからです。
それからまた、グスタフは、オートバイのうしろの荷物台に、友だちをひとりのせて、ヒースのはえている野原へつれていきました。かれは同乗者を、山林小屋か炭焼き小屋におろし、コールスピュッテルにひきかえしてつぎの人をつれていく、というふうにして、全員をはこぶまで、おなじことをくりかえしました。
あるとき、かれはエーミールのおばあさんまで説きつけて、山林小屋へつれていきました。おばあさんは荷物台からおりると、

「まあ、すてきだった。わたしは職業をまちがえましたよ。わたしは、おばあさんになるかわりに、オートバイの選手になればよかったのに。」といいました。

ときどきかれらは、両親に手紙を書き、ときおり手紙をうけとりました。ときおりハーバーラント氏がかれらの写真をとり、かれらはそれを焼きつけて、つぎの手紙でおくりました。

あるいはまた、かれらは森にいき、大きな花たばをもってかえりました。エーミールは、ほとんどすべての植物のことを知っていて、友だちたちに、その名と特長を話して聞かせました。サギスゲから、ナナカマドにいたるまで、スイバから、豆類にいたるまで、コケとそのふしぎな繁殖物から、チドリ属にいたるまで——いちいち知っているかぎりを、みんなに話して聞かせました。

そこで法律顧問官は、ロストックへいって、大学書店で、植物学綱要と植物研究の手引とを買ってきました。

ところが、その日から、だれも、花や草や低木に興味をもたなくなりました。エーミールをのぞいては。

「印刷物を見ると、いらいらする。」

と、オートバイの名手グスタフはいいました。

ある日、エーミールのおばあさんは、ノイシュタットから手紙をうけとりました。それは長い手紙で、おばあさんはそれを二ど読みました。それから、ハンドバッグのなかにいれ、「ああ！」と、ひとりごとをいいました。

しかし、エーミールには、なんにもいいませんでした。すくなくとも、そのときは。

かれらが、ベランダでお昼を食べていると、ハーバーラント氏がいいました。

「諸くん一同がいやでなければ、今晩、海浜ホテルにいって、演芸を見ようと思うんだがね。」

少年たちは、食後のあまいものもいらないくらいでした。きょうのあまいものは、ブドウ酒のジェリーで、これはクロチルデ・ネクタイ嬢のお得意の料理のひとつでしたが！

かれらは、それでも、ともかくジェリーをかたづけました。それからマラソン競走のように、海浜ホテルへかけだしました。かれらは、ホテルの入口をかこんで、だれがなかにはいって、ピコロと話をするかをきめようとしているところへ、ポニーがあらわれました。

「もしもし、なんでここにいらしった？」と、グスタフがたずねました。

「二本の足で。」と、ポニーはいいました。

「それはそうと、今晩ここにテーブルを予約しようと思うの。あなたがたは反対？」

反対はありませんでした。

そこでポニーが、ホテルにはいっていきました。

ホテルの支配人が、ポニーのほうにやってきました。

「お嬢さま、ご用むきは？」

「わたし、ピコロさんと話がしたいの。」

「シュマウフは食堂におります。」

といって、支配人はかの女に背なかをむけ、帳場にひっこんでしまいました。

ポニーは食堂を見つけ、ピコロのハンス・シュマウフを見つけました。かれは、ちょうどお皿をたくさんつんで、平均をとりながら、広間を横ぎるところでした。

「ちょっとまって、ポニーさん。またせはしませんから。」

かの女はまっていました。

すぐにかれは、いそいでもどってきて、

「なんですか。」と、たずねました。

「今晩のテーブルを予約したいんですけれど。」

「いく人？」

「ちょっとまって。勘定しなくちゃ、ハーバーラントさんと、おくさんと、おばあさんと、わたしと、クロチルデ・ネクタイ嬢と、少年が三人とで……。」

「八人。」と、ピコロがのみこんでいいました。

「こころえました。できるだけ前のほうにします。たぶん、ぼくのおじの船長もくるでしょう。ぜひ、あってください。」

ポニーは、ハンス・シュマウフとあく手して、いいました。

「それじゃ、九人分だわ。」

ピコロはおじぎをしました。

「演技は、八時ちょっとすぎにはじまります。」

「それはかまわないわ。」と、ポニーはこたえました。

「わたしたちは、どっちみちくるんだから。」

夕食後、海べの別荘の居住者は、いちばん上等のよそゆきを着て、もったいぶったかっこうで海浜ホテルへ歩いていきました。ハンス・シュマウフがかれらのため予約しておいてくれたテーブルは第一列で、舞台のまぢかでした。ハーバーラント氏は、おとなにはブドウ酒を、子どもにはオレンジジ

ュースを注文しました。
八時でしたが、演技はまだはじまっていませんでした。オーケストラは、おなじみの曲をつぎつぎに演奏しました。広間は、たのしそうな海水浴客でいっぱいになり、あいたテーブルはなくなりました。
ホテルの外には、コールスビュッテルの人がおおぜいあつまっていました。かれらは、だしものをただで見ようというのぞみをもって、めずらしそうに窓からのぞきましたが、ボーイとピコロがやってきて、カーテンをひきました。しかし、ピコロはいいかげんにひきました。かれのしめたカーテンは、かなり広くあいていました。
「あいつ話せるぜ。」と、エーミールがいいました。
「あれで、外の人がいくらか見えるよ。」
「ハンス・シュマウフは博愛家だからね。」と、教授くんがいいました。
ハーバーラント氏は、グスタフの肩をたたきました。
「きみは、いつからそんなに勉強家になったんだい？　寄席に本をもってくるなんて。」
グスタフは赤くなって、「英語の字引です。」と説明しました。
「きみはここで、単語を暗記しようというのかい？」
グスタフは頭をふりました。
「休暇なのに、とんでもない！」
ポニーはわらいました。
「この人、きっと軽わざ師のふた子と話をしようと思ってるんだわ。」
「そのとおり。少年たちの名は、バイロンというのだから、イギリス人です。もしかれらが、なにかぼくのわからないことをいったら、字引をしらべりゃいいんだ。」
と、グスタフがいいました。
「その会話を聞きたいもんですね。」
と、エーミールのおばあさんがいいました。かの女は、黒いこはく織りのドレスを着ていて、はでに見えました。
そこへまた、ひとりのお客があらわれました。背の高い太った人で、青い服に青い船長の帽子をかぶっていました。かれはとちゅうで立ちどまって、まわりを見まわしました。とつぜんピコロがかけよって、二こと三こと話すと、ハーバーラント氏のテーブルにつれてきて、
「ご紹介いたします。ぼくのおじ、シュマウフ船長です。」
と、いいました。そして、ハンスはいってしまいました。

子どもたちは立ちあがりました。ハーバーラント氏もそうしました。かれは、ピコロのおじさんとあく手し、かれらのテーブルに席をとるようにすすめました。
船長は、まわりのみんなとあく手して、いいました。
「そんなにあらたまらないでください、でないと、わたしはいってしまいますよ。」
それでみんなは、また腰かけました。新しいお客は、ボーイにラム酒を一ぱい注文しました。そしていいました。
「こんなにおおぜいの若い人が、ひとつのテーブルをかこんでるのを見るのは愉快だ。なにかきみたちの学校の話を聞かせてくれたまえ。ぼくが高校をおえてから、四十年もたつからね。だが、あのころは愉快だったね。」
少年たちは頭をひねりましたが、老船長の興味をひきそうな話を思いつきませんでした。船長は期待をもって少年たちの顔をじゅんじゅんに見ました。
「そうだ、そうだ！」と、かれはひざを打ちながらいいました。
「ぼくが、学校にいたころは、すっかりちがっていたにちがいないね。まい日なにかしら、いたずらをしたね！」
「聞きたいとおっしゃるのは、そんなことですか。」と、グスタフがさけびました。
「鐘の歌を暗誦しなくちゃならんとでも思ったのかい？」
「休暇になるまえの週に、」
と、グスタフが話しました。
「ぼくは、たいしたことをやらかしちゃってね、はじめはすぐにおっぽりだされるところだったけれど、また風むきがかわってね。」
みんなは、緊張して、耳をすましました。
「まあ、こんなわけでしたよ。」と、グスタフは語りました。
「物理の時間のまえの、長い休けいのあいだに、ぼくたちのクラスの首席で、メーネルトというやつが、校長のところへいって、ぼくたちのなかまのひとりのことをつげ口したんです。ぼくのことじゃないけれど、ぼくは、クラスの顔役でしてね、そんなことがおきると、ぼくがでなくちゃおさまらんのですよ。
そうです、メーネルトのやつ、おそれをなして、休けい時間中すがたを見せませんでした。みんなが物理教室に着席してから、はじめて、あいつがずんぐりした物理のカウル老教授といっしょにはいってきました。実験のとき、たえずカウル先生を助ける助手もいました。

電気の火花について、なにか説明があるところでした。火花の長さか、なにか、そんなことでした。カウル先生と助手が器械をくみたて、暗くして火花がよく見えるように、窓に黒いカーテンをひきました。『おい、』と、ぼくのとなりのケルテが小声でいいました。『ぜっこうの機会だぞ。やみのなかを最前列まではっていって、メーネルトの耳に一発ピシッと食わせるんだ。ちび公、いやカウル教授が、あかりをつけるまえに、とっくに席にもどってるんだ。』

この提案は、大いにわが意をえました。なにしろ、メーネルトのような卑劣なやつが、みんなの前で、音がするほどピシッと食らって、あかりがついたときには、正義そのもののほかには、だれもいないというわけなんですからね。こんなのは天のめぐみですよ。」

グスタフは聞き手をさぐるように、見まわしました。かれらは息をころして、耳をかたむけていました。

「よしきたと思いました。」と、かれはつづけました。「実験室は、地下室の石炭倉みたいにまっ暗でした。ちび公、いやカウル先生は、これから実験をはじめる、みんなは火花をよく見つめるように、といいました。そこで、みんなが器械を見つめているあいだに、ぼくは、最前列にはっていって、大きく身がまえました。メーネルトは、何年もつづけて、最前列の第一席に腰かけているから、まちがいっこありませんでした。

さっきいったように、うんと大きく身がまえて、自分の手首がめきっというほど、一撃を食わしました。」

シュマウフ船長は、ひざをたたきました。

「すてきだ！　そこできみはもとどおり着席し、だれもいなかったんだね。」

グスタフは悲しそうに頭をふりました。

「いいえ、ぼくは、もとどおり着席しませんでした。ぼくは、びっくりぎょうてんして、でくのぼうのように、つっ立っていました。」

「びっくりしてですって？」と、クロチルデがたずねました。「なんで、びっくりしたんですの？」

「それがさ、メーネルトがはげ頭だったんだよ。」

「はげ頭だって！」と、エーミールがききました。

「はげ頭だったのさ。つまり、メーネルトじゃなくて、ちび公、いやカウル教授だったのだ。」

ちょうど船長のラム酒をもってきたボーイも、両耳をたてて聞いていました。

「そうなんだよ。」と、グスタフはつづけました。

「カウル先生は、自分も実験を見たいと思って、やみのなかで、メーネルトとならんでベンチに腰かけていたんだ。ふしぎはないさ。物理学が物理の教授に、もっとも興味のあることはいうまでもない。だが、やみのなかで、先生がメーネルトの席に腰かけたってことは、ぼくには感づけなかったのだ。」

オーケストラが聞こえなくなるほど、シュマウフ船長がわらいました。そのときオーケストラは、ちょうどマーチをかなでていたのですが。クロチルデ・ゼーレンビンダー嬢は、すっかり青くなって、

「おそろしいこと！　ぞっとしちゃうわ。」

と、つぶやきました。

ハーバーラント氏は、前にのりだしました。

「それからどうした？」

グスタフは、耳のうしろをかきました。

「いや、たいしたことじゃありません。」と、かれはいいました。

「しかし、とにかく、そのときはたまらない気持ちでした。だれかがとつぜんあかりをつけました。すると、カウル先生が、メーネルトの席に腰かけて、はげ頭をかかえていたんです。頭がいたかったのに、ふしぎはありません。ぼくは、力のかぎり、先生をなぐったんです。クラスの者は、かみなりにでも打たれたように、じっとしていました。年とった助手は、黒板の前に立って、およそ、まのぬけた顔をしていました。電気はいっしょうけんめい、火花をはなちつづけていましたが、それを見ているあほうはありませんでした。

『だれだ？』と、ちび公、いや、カウル教授は、長いあいだをおいてから、たずねました。

『ぼくです。』と、ぼくはいいました。『ごめんなさい、先生。ぼくはまちがえたんです。』

『それなら、そのつもりでいるがよい。』と、先生はいいました。そして物理の時間のさいちゅうに、教室からかけだしていきました。頭がのめりはしないか、いや、ころげおちはしないかと心配してでもいるように、頭をかかえながら。」

「すばらしいわね！」と、ボニーがいいました。

「あんたは、見あげた人だわ！」

グスタフは、ちょっと考えてから、いいました。

「ぼくは、それからあとのことはどうでもよかった。ほかの者たちが、あっけにとられているあいだに、ぼくは、メーネ

ルトをひっつかまえて、きものがからだにあわなくなるほど、ぶんなぐった。かれは、三日間学校を休んだ。ぼくが首席のやつをかたづけてしまうと、小使いがやってきて、ぼくを校長のところへつれていった。ちび公は冷しっぷを背首にして、長いすに腰かけていた。

『きみが暗やみのなかで、本校の功労ある老先生に暴力をくわえたということを、わしはいま聞いた。』と、校長がいいはじめた。『われわれは、むろんきみを放校しなければならんだろう。だが、まずこのいんけんなやみうちの動機を説明してもらいたい。』そいつは、ぼくにとって、手いたい一撃だった。ぼくは、まだいんけんだといわれたことはない。そこで、ぼくはなにもかもぶちまけた。

もし、いんけんなやつがいるとしたら、それは模範生メーネルトだといった。あいつが、長い休けい時間に校長のところへこっそりつげ口にいったから、それにたいする罰のつもりで頭をなぐったのだ。物理教室にいって、すきな生徒ののびているざまを見て、なみだぐみなさい。もし、こんな劣等な人物を、ぼくよりこのむというなら、それはかれらのごずいいだ、とそんなふうにいった。」

シュマウフ船長は、腹をたてているグスタフを、やさしく見つめました。

「それから、どうなった?」

「それからカウル先生は、ぼくが終生わすれられないようなことをしました。」と、グスタフはいいました。

「いったい、どうした?」と、エーミールがたずねました。

「先生はわらった。」と、グスタフはいいました。「しっぷがおちるほどわらった。」

シュマウフ船長は、またひざを打ちました。それから、まだかれのそばに立って、話に聞きとれていたボーイのほうをむいて、どなりました。

「ボーイ、ラム酒をもう一ぱい! それから絵はがきを。いそいで!」

「きゅうに、だれにはがきを書く気になったんですの?」と、エーミールのおばあさんがたずねました。

「ぼくにはわかった。」と、エーミールがいいました。

「よし、それじゃ、だれだと思う?」と、船長がほほえみながらたずねました。

「物理のカウル先生。」

「そのとおり。」と、シュマウフ船長はいいました。「先生には、一本書くねうちがあるよ。」

第七章　コールスビュッテルの寄席

楽隊があいさつの曲をかなでました。いきなりをして、すこし気どりすぎた人が、舞台にあらわれて、おおぜいあつまってきた見物にむかって、ホテルの管理者のあいさつをつたえました。

かれは見物に、ひと晩たのしんでいただけることうけあいですといい、ちょっとばかり、しゃれをとばしましたが、それでわらったのはかれだけでした。それにはまいったらしく、さっそく、第一のだしものを、

「びわをもった名歌手フェルディナント・バートシュチューブナー。」

と、ひろうしました。

名歌手バートシュチューブナーは、太った、ごま塩頭の人で、手に低音びわをもち、小さいはでな色の学生帽をかぶっていました。

かれは、楽器の糸をビンビンとはじきながら、いろいろな歌をうたいました。おもに、大学町ハイデルベルクや、愛人や、かわいい宿のむすめや、ブドウ酒のたるや、ビールのジョッキのことなどをとりあつかった歌でした。かれの声は、当世ふうには聞こえませんでした。うたいおわって、かれが小さい帽子をふると、幕がおりました。

「むかしは、勉強する時間なんか、あまりなかったでしょうね?」

と、教授くんがおとうさんにたずねました。

「いまの歌は誇張しすぎている。」と、ハーバーラント氏がこたえました。

「われわれは、ぜんぜん勉強しなかったら、ほとんどなにもおぼえなかっただろう。」

クロチルデも、たずねたいことがありました。

「いまうたった人、ずいぶん年をとっているのに、まだ学生だなんていうことは、どうしたわけでしょう? もし、ほんとに学生だというなら、どうして、こんなところで歌なんかうたってるのでしょう?」

みんなは、たがいに顔を見あいました。しまいに、エーミールのおばあさんがいいました。

「あの人は、たぶんアルバイトの学生なんでしょう。」

「なるほど。」と、クロチルデはいいました。「それなら、むろんだわ。」

ほかの人たちは声をあげてわらいましたが、かの女には、どうしてわらったのか、のみこめませんでした。

「ぼくは、大学になんかいかないよ。」と、グスタフがいいました。「ぼくは、競走用自動車操縦者か、曲乗り飛行士になるよ。」

それから、エーミールにむかっていいました。

「きみは、大学にいくかい？」

エーミールは、ちょっと目をとじました。かれはイェシュケ警部さんのことと、イェシュケさんと話しあったこととを、考えたのでした。——

「いや、ぼくも大学なんかへはいかない。ぼくは、できるだけ早くお金をもうけ、独立したいんだ。」とこたえました。

おばあさんは、横からかれを見つめましたが、なにもいいはしませんでした。

つぎのだしものは、アクロバット・ダンサーでした。かの女は、自分を軸にして、とても速く回転したので、目が背なかにあり、つむじが顔にあるかと思うようでした。

船長は、大きな手をパンパンはげしくたたいたので、ふくらました紙ぶくろをはれつさせてでもいるような音がしました。かれは、クロチルデのほうにからだをかがめて、

「あんたも、あんなにおどれますか。」

と、たずねました。

だが、それは、おかどちがいでした。

「知らない人の前で、あんなみょうなかっこうをするなんて、わたし、はずかしいわ。」

と、クロチルデはこたえました。

「よろしい、それなら、いつかうちでやってごらん。」

と、教授くんがいいました。少年たちは、ネクタイ嬢ことゼーレンビンダー嬢が、海べの別荘のベランダで、お昼の料理をするかわりに、さか立ちをしている光景を考えて、にやにやわらいました。

そのとき、楽隊が、ダンス音楽をかなでました。数人のお客がおどりました。シュマウフ船長もそのなかにまじり、クロチルデとおどりました。そして、ハーバーラント氏は夫人とおどりました。エーミールのおばあさんは、音楽にあわせ

て頭をふり、上きげんでした。
とつぜん若い人がやってきて、ポニーにおじぎをしました。
「おあいてねがえましょうか、ご令嬢。」
と、かれはたずねました。
エーミールは、その若い人を見てわらいました。
「ご令嬢は、まだダンスがいっこうできません。」
ポニーは、立ちあがりました。
「よくごぞんじね、エーミール！　はい！」
と、かの女はいって、若い人とおどりました。まるで、これまでダンスいがいのことはなにもしないできた人のように。
「まあ、ポニー嬢を見たまえ。」と教授くんがさけびました。
「あれで、まだダンスは一ども、ならったことがないんだそうだ！」
おばあさんは説明しました。
「わたしたち若いむすめには、ダンスは生まれついてるんですよ。」
グスタフは頭をふりました。
「あんなむすめっ子のくせに！　ぼくより、年うえじゃないのに、レディー気どりで！」
つぎのおどりは、ワルツでした。
「これは、われわれ若い者むきだ。」
と、老船長はポニーにいいました。そして、かれは、ポニーとものすごいいきおいでおどりだしたので、ほかの人たちは、手も足もでなくなりました。
ときどき、かれはポニーを空中高くふりあげました。それは、すばらしい見ものでした。
おどりおわると、大かっさいでした。ボーイたちさえ、大かっさいしました。船長は、ポニーにひざをついておじぎをさせ、自分もそうしました！
そのあとで、れいの気どった人が、また舞台にあらわれました。そして、全国の有名なキャバレーで絶賛のあらしをあびた朗唱家を紹介するのは、自分のこのうえもないよろこびとするところだ、といいました。
「こいつはおかしいな。」と、シュマウフ船長がいいました。
「そんなに人気のある者が、どうして、えりにえって、コールスビュッテルになんかくるんだろう？」
そこでみんなは、幕がまたあがるのをまちうけました。
幕があいて、その有名な芸術家があらわれると、エーミールは大声でいいました。

「なんだ、あいつじゃないか！」
えらい芸術家というのは、まえぶれした当人だったのです。ただシルクハットをかぶり、ステッキをもち、一眼鏡をかけていただけです。
「ここにおめみえいたします。」と、かれはいいました。
「さいしょにまじめなのをやります。『浮世はこんなもの』という題の歌です。テーオバルト、たたいて！」（テーオバルトは、ピアニストのことで、たたくというのはピアノをさしていました。）
歌がおわると、おばあさんがいいました。
「このお調子者が、大きなキャバレーにでるというんなら、わたしは東リヒターフェルデの大公夫人だよ。」
朗唱家は、二つ陽気な歌をつづけましたが、まったくしめっぽいものでした。それからかれは、十分間の休けいを知らせました。
少年たちはホテルをでて、砂丘にのぼり、海をながめました。海はなめらかで、なまりのような色をしていました。月の反射だけが暗い水の上を細い銀色の道のように走っていました。
波は規則的な間隔をおいて、岸を打っていました。たくさんのトウいすのかげ絵が、夜の畑につみかさねたムギのたばのように、空にくっきりめだっていました。
いちめんに星のきらめく空の下は、ちょっときみのわるいほどでした。
教授くんがささやきました。
「寒いな。」
そこで、みんなはホテルにもどり、また、ボニーやおとなのそばに腰かけました。
中休みのあとで、れいの女のアクロバット・ダンサーが、またあらわれました。そのつぎには、奇術師がトランプできばつな手品をして見せました。それから、いよいよその晩のよびもの——三人のバイロンがでました。
ミスター・バイロンが、かれのふたごをあやつってやるだしものは、ほんとうと思えないくらいでした。見物人は腰かけたまま、身うごきせず、ほとんど息もしないほどでした。
ミスター・バイロンが小さい台の上に寝て両手をあげたとき、最高潮にたっしました。そこで、ふたごのうち、背の高いほうのジャッキー・バイロンが、父親の右手のてのひらの上に頭をつけてさか立ちをし、マッキー・バイロンも父親の

左手におなじようにさか立ちをしました。さいしょ、ふたりは、ミスター・バイロンの腕をつかんで、からだを安定させましたが、じきに、それをはなして、両手をまっすぐズボンの縫いめにそってのばしました。こうして、ふたりはさかさにされた小さい兵隊のように、さか立ちしていました。それからかれらはとびおり、すっと立って、なにごともなかったように、微笑しました。

ミスター・バイロンは、そのまま小さい台の上に寝ていましたが、ひざを腹にひきよせて、両足をまっすぐ空中にあげました。マッキーは、父親の足のうらに腹ばいにのりました。すると、ミスター・バイロンは、まるで自転車のペダルでもふむように、両足をうごかしはじめました。マッキーは父親の足のうらで、腹部を軸にして、もうれつなスピードで回転しはじめました。

とつぜん、かれは空中にとびあがり、ぐるぐるとまわって、バイロンの足の上におちてきましたが、また上に高くなげあげられ、こんどは、九十度の角度をえがいて、おちてき——いや、おちるのではなく、とんと、父親の両足の上に、両足で立ちました。

「わたし、もう見ていられないわ。」

と、クロチルデがふるえ声でいいました。

しかし、エーミールとグスタフと教授くんとは、感嘆して、むちゅうになっていました。

「ちびの火曜日くんがいないのは、じつにおしいな！」と、グスタフはいいました。

それからジャッキーが、小さい台の上に寝て、両腕を高くあげ、父親の両手をつかみました。あの背の高い、たくましい軽わざ師が、自分のむすこの高くのばされた腕の上で、さか立ちをやったのです！

「ジャッキーの骨がおれないのがふしぎだ。」と、エーミールはささやきました。

グスタフはうなずきました。

「そうならないのは、あらゆる物理学の法則に反してるよ。」

三人のバイロンが芸をおえると、あらしのようなはく手かっさいがおこりました。ホテルの外に立って、カーテンのすきまから見ていたコールスビュッテルの土地の人たちも、さかんにはく手したので、コウモリがこうふんして、かれらの手のまわりを飛びまわりました。十二回も幕があがって、バイロン親子はよびだされました。

グスタフは英語の字引をつかみ、思いつめたように、席か

ら立ちあがりました。「いこう！」と、かれはいって、かけだしました。エーミールと教授くんも、いそいでついていきました。

かれらは、舞台のうしろの廊下で、ふたごがでてくるまでまっていました。

「きみ、きみ。」

と、教授くんが英語でどなりました。

ふたごはふりむきました。

「ちょっと、おねがいだ。」

と、グスタフも英語でたのみました。

小さいほうのマッキーは、小走りに走って楽屋へすがたをけしました。ジャッキーは、立ちどまりました。

「きみはすばらしいね。」と、エーミールがいいました。

「ほんとにすてきだ。ぼくは、敬意を表するよ、バイロンくん。」

ジャッキー・バイロンはむきなおって、かれらのほうにやってきました。かれは汗だくだくになり、ひどくつかれているように見えました。

グスタフは字引をめくっていましたが、

「ねえ、きみ！」と、どもりながら英語でいいました。

「ぼくはきみを見ました。ぼくは、生まれて、こんな大きな印象をうけたことはありません、ちかって！　わかりますか。」

ジャッキー・バイロンは、三人の少年の顔を長いあいだ見つめました。それから、

「そんなばかなまねはやめてください。」

と、かれは声をひそめて、ドイツ語でいいました。

「ぼくは、英語はまったくわからないんです！　こんにちは、みなさん！」

三人の少年は、めんくらった顔をしました。

グスタフは、字引をパタンととじました。

「まったく、いっぱいくわされたな。ぼくは、きみはイギリス人だと思っていたよ。」

「心配ごむよう！」と、ジャッキーはいいました。

「バイロンは、ぼくたちの芸名にすぎないんだ。外国名のほうがお客をひきつけるからね。ぼくの本名は、なんというんだと思う？」

かれらは、ひたいにしわをよせて、考えました。

「あっさりいってもらったほうがいいな。」と、教授くんがいいました。

「でないと、電話帳をすっかりくって、あてなければならないよ。」

ジャッキーは、指を一本、かれのくちびるにあてました。

「むろん、だれにもいっちゃいけないよ。ぼくの名は、……いや、やっぱりいわない。」

「ぼくの名は、ティッシュバイン（テーブルの足）だ。」

と、エーミールが名のりました。「きみの名が、これよりひどくわるいことはないだろう。」

「そうともかぎらないね。」と、ジャッキーがいいました。

「じゃ、よし。ぼくの名はバウル・パハウルケで、ぼくはベルリンのテルトウ生まれだ。」

「パウル・パハウルケ（印刷屋の小僧）か。」と、グスタフはささやきました。「テルトウ生まれか。カブラの産地だね。いや、そりゃたいしたことじゃない。ぼくの名は、グスタフ。ぼくたちは、ひどく感服しちゃったので、それをきみにいいたかったのだ。まったく、きみらは特別階級だ。」

ジャッキーはこうほめられて、すっかりよろこびました。

「ほんとに愉快だ。きみたちは、あしたまた、海岸にくるかい？」

かれらは、うなずきました。

「それなら、そこであおう。」そういって、かれは、さっきかれの弟のはいっていったへやにかけこみました。

三人の友だちは、たがいに顔を見あいながら、廊下に立っていました。とうとうかれらは、わらわずにはいられなくなりました。

グスタフは字引をさげすむように、ポケットにおしこみました。そしてエーミールと教授くんと腕をくみました。

「どうだい、外国語を勉強してなにになるか、わかっただろう！」

第八章　第三のふたごの出現

そのつぎの日は、どしゃぶりの雨でした。かれらはうちにいて、手紙や絵はがきを書き、しょうぎをさし、いくども窓から外を見、晴雨計のなかのアマガエルのような気持ちになりました。さいわい、ちびの火曜日くんがたずねてきました。おとうさんのコウモリがさをさして、庭のなかに立ったかれは、まるで、キノコのように見えました。

かれらは、かれをなかにいれ、三人のバイロンとその芸当について、むちゅうになってしゃべりたてました。それから、ポニー・ヒュートヘンが、ご令嬢とよばれたことも、話しました。

「ああ、ぼくたちも年をとったもんだね。」と、火曜日くんがいいました。

ポニーは台所で、クロチルデとお料理のけいこをしていたので、少年たちは廊下を走っていって、台所のドアをバタンとあけ、

「ご令嬢、あなたのダンスのあいてが、外にきています。」

と、よびました。

すると、ほんとにポニーは、窓から外を見ました。

そこで、少年たちはわらって、ベランダにかけもどりました。教授くんはいいました。

「きみたちも、夏休みにやったことについて作文を書くのかい？」

「わかりきってるさ。」と、グスタフがいいました。

「まい年、おなじことさ。休暇中の体験で、いちばんすてきだったことと、はらはらしたことと、おもしろかったことだ！　なにか体験しようっていう気持ちが、だんだんなくなっちゃうね。」

「こんなひどい天気なら、きょうのうちにもう書いちゃおう。」と、教授くんが提案しました。「そうすりゃ、かたづいちゃうんだ。」

エーミールも賛成しましたが、グスタフと火曜日くんは反対でした。

教授くんが両方のあいだを、とりもとうとしました。
「すくなくとも、研究の準備にとりかかろう。」
教授くんは、おとうさんの本をテーブルからもってきて、めくりました。
「きっと、ここに、なにか適当なのが見つかるよ、引用なら。」
「ぼくたちの国語の先生は、引用をきらうんだ。」と、グスタフがいいました。
「先生の見解じゃ、本からうつすより、自分でなにかを思いついてもらいたいっていうんだ。本をうつすのは、となりの者のをうつすのとおなじように、排斥すべきだって。」
かれはひとりでわらいました。
「しかし、ぼくのことをいえば、となりの者のをうつしたほうがいいな。」
エーミールが、なにを読んでいるのかと、教授くんにたずねました。
「いわないから、なんの本だか、あててみたまえ。まず、よく聞きたまえ！」と、教授くんはいって、机に腰をかけて読みました。
「わたしたちのところでは、唱歌が教養の第一段です。ほかのすべてはこれにつながり、これによって、仲介されるのです。ごく単純なたのしみもおしえも、わたしたちのところでは、唱歌によって活気づけられ、心にきざみつけられます。わたしたちのつたえる信仰や道徳でさえ、唱歌によってつたえられるのです。」
教授くんは顔をあげました。
「さあ、だれが書いたものだと思う？」
「唱歌会の指揮者だろう。」と、グスタフがいいました。
教授くんは、わらいました。
「ちがう、おい、はじさらしだぞ。これはゲーテのだよ。」
火曜日くんがいいました。
「もしゲーテのなら、教授くん、フォン・ゲーテのだよ。フォンをつけなくちゃ。ゲーテは貴族だからね。」
「たいしたことじゃない。」と、グスタフがつぶやきました。
教授くんは読みつづけました。
「子どもたちの発する音声を、記号で、写字板に書くことをおしえたり、この記号をたよりにそれを発声させたり、その下に歌詞を書きこませたりして、わたしたちは、子どもの手と耳と目とを同時に発達させるようにするので、かれらは、ふつう考えられるより、早く正しく美しく書けるようになります。そして、こういうことはみな、まぎれのない尺度と、きちんときめられた数にしたがって、練習され修得されなければならないので、測量と計算のたいせつなことを、ほかのどんな方法によるより早く理解します。それゆえ、わたしたちは、あらゆるもののなかで、音楽を教育の基礎にえらびました。音楽から、あらゆる方面へなめらかな道がつうじているのですから。」
「フォン・ゲーテは、いったい学校の校長だったのかい？」と、火曜日くんがおどろいてたずねました。
「大臣だったと思うけど。」
「なにもかも、歌でか！　学校で、利息や未知数のある方程式をうたわなきゃならん、と考えてみたまえ！　感心したことじゃないね。」
と、グスタフがあきれてさけびました。
「ゲーテは、きっと低学年のことだけ考えていたんだよ。」と、エーミールがいいました。
「はじめは、どんな学科だって、ずっと密接に関連してるさ。」
そのとき、ハーバーラント氏が、ベランダへはいってきました。
「なにをいったい読んでいるんだね。」
むすこが話をしました。
「ああ、そうか。」と法律顧問官がいいました。
「『ウィルヘルム・マイスターの遍歴時代』かい。」
「ぼくは唱歌による授業にはだんぜん反対だ。」と、グスタフが宣言しました。
「ぼくは、いつも唱歌にはわるい点をとっている。生まれつき、まったく音楽の耳がないんだから。だのに、どの学科でも、授業時間でもうたわなきゃならんと考えてみたまえ！　ラテン語も数学も歴史も、——どんなことになるか、見当もつかない。」
「唱歌でやらなくったって、きみはラテン語や数学は、あまりよさそうじゃないね。」と、火曜日くんがいいました。
「そのとおりだぜ。」と、グスタフがいいました。
「じゃどうかごえんりょなく。これから、不規則動詞を四部合唱でやりたまえ。」
ハーバーラント氏は、わらいました。
「ゲーテが、『遍歴時代』にしるしている教育州は、高齢の大文学者の人文主義的な理想なんだ。大きくなったら、きみたちももっとよく理解できるだろう。」

「理解するのは、ちっともむずかしくありませんよ。」と、教授くんはいって、読みました。

「生まれのよい健全な子どもたちは、おおくのものを身につけて生まれてきます。自然は、かれらに、一生のあいだに必要なものをすべてあたえます。それを発達させるのが、わたしたちの義務です。それは、ひとりでにまかせておくと、よりよく発達することがたびたびあります。」

かれは、本をバタンととじて、友だちを見まわしました。

「さあ、わかったろう！」

「なにがさ？」と、グスタフがたずねました。

「ここにいるわれわれは、みな、生まれのよい健康な子どもらだ。それでどうしたんだ？」

教授くんは、人さし指で本をかるくたたき、

「ゲーテの考えでは……、」

「フォン・ゲーテだよ。」と、火曜日くんが訂正しました。

「ゲーテの考えによると、われわれは、一生のあいだに必要とするものをすべて、たとえかくれてはいるにせよ、もって生まれているのだ。それは、まったくひとりで発達できるものだと、ゲーテは考えている。規則や監督や採点などで、たえずわれわれに手をくわえる必要はないのだ。」

かれはおとうさんのほうを見ました。

「むろん、おとうさんのことをいってるのじゃありませんよ。だが、両親や、先生のなかには、まちがったやりかたをしているものが少なくないんですよ。」

「それは、きょくどにむずかしい問題だ。」とハーバーラント氏はいいました。

「子どもをあまり教育しすぎないことも、教育したりないことも。それは、子どもによって、いちいちちがうのだ。ある人は、生まれつきの能力をすらすらと発達させるが、ある人はそれをむりしてでもひきださなければならない。そうしないと、いつになっても、おもてにあらわれてこない。」

かれは腰かけました。

「きみたちも、父親になったら、きっと、みずから経験するだろう。」

「それを、今からたのしみにしています。」と、エーミールはいいました。

「いや。」と、法律顧問官は大きな声でいいました。

「そのため、髪の毛が白くなることもめずらしくないんだよ！」

かれは、むすこのほうを見ました。

「きみのことをいってるのじゃないことは、よくわかってるね。」

「ひとりで発達するという考えが、ぼくにもわかりかけてきた。」と、グスタフがいいました。

「書取りやいのこりや採点がなくても、きっと、ぼくはおなじくすぐれたオートバイの選手になれる。いや、そんなもののないほうが、ずっとよくなれる。練習の時間がふえるから。」

「よろしい、諸くん。」

と、ハーバーラント氏はほほえみながら、いいました。

「きみたちは、数日のあいだ、じゃまされずに、自分たちを大いに発達させてみたいと思わないかい？　したければ、できるよ。わたしは、さっき旅行案内社のそばをとおったら、あさって、コペンハーゲンいきの数日間の小旅行がはじまると、書いてあるのを見た。わたしは、長いこと、コペンハーゲンにいっていない。クランペンボルクとマリエンリストにも。それで、デンマークにいってみたい。わたしの家内と、わたしと、エーミールくんのおばあさんと、クロチルデと、ポニー・ヒュートヘンとは、あさって、ワルネミュンデから渡船列車で北方へ出発することを、わたしは提案する。」

「それで、ぼくたちはどうするんです？」と、教授くんがたずねました。

「きみたち少年だけで、コールスビュッテルにのこっているんだ。お昼は宿屋で食べられる。きみたちのために、お金をのこしていく。それが、きみたちの発達をあまりおかすことにならないと思うなら。」

「そんなことにこだわりはしませんよ。」と、グスタフがいいました。「お金は、いただいておきます。」

「だが、ほかのことは、すべてきみたち、自分でやっていかなくっちゃならないぜ。」

と、ハーバーラント氏はいいました。

「そうすりゃ、自分を発達させる機会が、のぞみどおりたっぷりえられるのだ。自分たちだけで、自分のことに責任をもち、それがたのしみであるか、重荷であるかをさとるだろう。どうかね？」

少年たちは、うれしくてむちゅうになりました。

教授くんは、おとうさんのそばにあゆみよって、得意そうにたずねました。

「ぼくのおとうさんよりよいおとうさんがありますか。」

「ない！」と、みんなわめきました。

ちびの火曜日くんは、学校でやるように、手をあげてたの

みました。
「法律顧問官さん、ぼくの両親もつれていっていただけますか。」
午後もまだ、雨がふっていました。少年たちが、コーヒーを飲んでいると、シュマウフ船長があらわれました。クロチルデは、船長のために、強い火酒をつくらなければなりませんでした。かれはひじかけいすに腰をおろして、パイプに短いタバコをつめて、青い煙をカーテンにむかってはきだしました。
「ここは、とてもいごこちがいいね。昨晩、きみたちといっしょになってから、わたしは、うちにかえっても、さびしくってね。」と、かれはいいました。
「もっとお若いうちに、結婚なさればよかったのに。」と、エーミールのおばあさんがいいました。
「いや。」と、船長はこたえました。「夫はしょっちゅう海にでて、妻はいつもうちにひとりでいるというのは、——ありゃいけませんよ。今晩も、もうわたしは、一両日の予定で、材木の荷をつみにスウェーデンの南部にいくんです。二十年も三十年もこうなんですからね。いつも、ひとりですよ！
ちびのハンスが、せめてここに住みついてくれればいいんですがね。あれも、ここのホテルで見習いをすませたら、イギリスとフランスに修業にいくんです。ボーイは、ほうぼう外国を歩いておかなくちゃいけませんからね。年とったおじさんのために、ここにしばりつけておくわけにはいきませんよ。いやまったくこうやってだんだん年をとる。そしてついにある日、もう年をとることもできなくなる。」船長はすっかりしんみりしてしまったので、少年たちは、もう一ぱい火酒をふるまいました。
だが船長は、船にのらなければなりませんでした。かれは防水マントを着て、大またで雨のなかへでていきました。スウェーデンさして。
夕食後、少年たちだけで、またベランダに腰かけていました。火曜日くんは、九時までいていいと、両親のゆるしをえていたので、まだいました。雨が、トントン屋根をたたきました。かれらは、たいくつしました。
とつぜん、ベランダの窓に顔をあてて、ガラスをかるくたたく者がありました。
四人は、さっと立ちあがりました。教授くんがドアにかけよって、あけました。
「だれですか？」
あわただしく、顔をつつんだ少年が、はいってきました。ピコロのハンス・シュマウフでした。
「おじゃまをして、ごめんなさい。」と、かれはいいました。「でも、ぼくは、きみたちの知恵がかりたいんだよ。」
かれは、ぬれたマントをぬぎすてました。
「まあ、こうなんだよ。八時ごろ軽わざ師のバイロンさんが、自分のへやにお茶をもってきてくれっていう注文なんだよ。ぼくがそれをもっていって、かえろうとすると、かれは、ぼくにききたいことがあるんだが、だれにもいっちゃいけないっていうんだ。ぼくはうなずいた。ほかにしようがないんだもの。すると、かれはこういったんだよ。
『おまえさんは、体操にかけちゃ第一流だ。わしは、おまえさんが海水浴場で鉄棒をやってるのを見た。おまえさんには、天分がある。わしがしこんだら、おまえさんはすばらしい軽わざ師になれる。なにより、おまえさんは、すてきに小さくてかるい。ちょっと、もちあげさせておくれ！』
そういって、かれはぼくをかた腕で高くもちあげ、ぐるぐるまわしたので、ぼくは目の前が暗くなってしまった。おろされると、ぼくは、
『お茶がさめますよ、バイロンさん。』
といって、へやからでようとしたのさ。ところが、かれは、ドアに立ちふさがって、ぼくに、軽わざ師になって、いっしょに舞台ではたらく気がないかってきくんだよ。
『でも、あなたには、ふたごがいるじゃありませんか。どうして、三人めが必要なんです？』
ってきくと、
『三人めはいらないんだ。ふたりめがいるんだ。』
って、かれはこたえたのさ。それから、かれはなんといったと思う？」
少年たちは、こうふんして、耳をかたむけました。
ピコロはいいつづけました。
「それからかれのいったことは、とてもへんなんだよ。しかも、とてもきみがわるいんだ。つまり、ふたごの大きいほうのジャッキーが、かれにはおもくなりすぎちゃったって、そういうのさ。」
「おもすぎるって？」と、火曜日くんがききかえしました。
「うん、ジャッキーが大きくなったんだよ。大きくなればなるほどおもくなる。あまりおもくなったので、いままでかれ

をあいてにやってきた軽わざが、いくつかできなくなったのさ。ほかの軽わざも、うまくいかないし、危険にさえなってきたんだ。ジャッキーが、この調子で大きくなっていくと、ミスター・バイロンは、かれをあいてに、芸がぜんぜんやれなくなるわけさ。」

少年たちは立ったまま、だまって聞いていました。

「そういうわけで、ミスター・バイロンはぼくとマッキーをつれてにげようと考えたのだ。」と、ピコロはつづけました。

「かれは、ジャッキーにはなにもいわないで、ぼくたちふたりをつれて、夜にげしようと考えているんだ。バイロンはね、ぼくみたいなあとがまは、そうすぐには見つからないっていったよ。」

エーミールは、自分のひたいをかるくたたき、

「そいつはたいへんだ！」と、さけびました。

「子どもが大きくなったからというだけで、自分の子どもを、バルト海岸のどっかにおいてきぼりにしていくなんてことは、人間としてできないはずだ。そんなことは、まったく気ちがいじみている！　ジャッキーは、いったいどうなるだろう？」

「かわいそうなやつ！」と、グスタフはつぶやきました。

「教授くんは、へやのなかをいったりきたりしていました。

「そいつはおもしろい。ぼくたちは、かれがそんなことをするのを、だんじてゆるすわけにはいかない。ふたごのひとりをあっさりおっぽりだして、そのかわりに、三人めのをやとうなんて。問題にもならない。」

「うちのおとなたちがデンマークに旅行にでるのは、ちょうどつごうがいい。すくなくとも、ぼくたちのじゃまにならなくて。」と、グスタフがいいました。

エーミールは、テーブルをたたきました。

「力持ちの軽わざ師のどぎもをぬいてやろうじゃないか。ぼくたちにもってこいのしごとだぞ！」

かれは、ピコロのほうをむいて、たずねました。

「かれは、いつ、にげだすつもりなんだい？」

「それは、まったくぼくしだいなのさ。」

と、ちびのハンス・シュマウフはこたえました。

「ぼくのような掘りだしものにでくわすことは、二どとないっていってるよ。」

教授くんがいいました。

「おとながでかけるのをまって、さっそく、作戦会議をひらこう。それまでは――ハンス、いいかい。それまでは、うまくいいぬけて、バイロンをひっぱっておかなくちゃいけないよ、いいかい？」

ピコロはうなずきました。火曜日くんがいいました。

「こんどは、ぼくは電話係にはならないよ。念のためにいっておくが。」

「こんどは、電話なんかぜんぜんかけない。こんどは、行動あるのみだ。」

と、グスタフが説明しました。

ハンス・シュマウフは、ぬれたマントをかぶりました。

「それじゃ、きみたちの知らせをまってるよ。」

といって、かれは、ドアのほうにいきました。

「あいことば、エーミール！」

そして、すがたをけしました。

「あいことば、エーミール！」

と、みんながうしろからどなりました。

外では、ほえる風がこたえただけでした。

とつぜん、内がわのドアがあいて、クロチルデ・ゼーレンビンダーが頭をのぞかせて、

「なにごとでしたの？」

と、たずねました。

「ネクタイさん、なにごとがあったというのだい？」

と、教授くんがききかえしました。

第九章　少年探偵たち

それから二日めの朝、おとなたちはポニーをつれて、デンマークいきの船にのるため、ワルネミュンデへ汽車でいきました。出発するまぎわにも女の人たちは、ことに、クロチルデはひどくこうふんして、家のなかのことについて、あれこれと、あわただしく、いろいろな注意を少年たちにあたえようとしました。

しかし教授くんのおとうさんは、かの女を車室においこんで、教授くんに、二十マークわたしていいました。

「お昼は、宿屋で食べるように。そのほかの必要なのは、ワルケンチェンの店で買いなさい。クロチルデの食料室には、かんづめ類のたくわえもある。夜は、家のかぎをちゃんとするのをわすれないように！　ばかなまねをしてはいけないよ！　おまえたちにしまつのできないようなことがおきたら、コペンハーゲンに電報を打ちなさい。ホテル・イギリス館にいるから。」

「電報打つ必要なんかおこらないよ。」

と、教授くんはいいはりました。

「それにこしたことはない。」と、おとうさんがこたえました。「では、愉快に、自分たちをのばしたまえ。」

そして、汽車にのりこみました。婦人たちは、窓から首をだして、うなずきました。

数分後、エーミールとグスタフと教授くんだけがあとにのこり、思いきり、自分の力で自分をのばすことができるようになりました。

かれらは別荘へもどりました。陰気な天気で、風はひやりとしました。海水浴は問題になりませんでした。

教授くんは紙と鉛筆を机からもってきて、めがねをまっすぐかけました。

「なによりもまず、」と、かれは説明しました。

「日課をきめなくちゃならない。まい日、だれかが当番になる。きょうはぼく、あすはエーミール、あさってはグスタフ。当番のしごとは、ほかの者をおこすこと、必要なお使いをすること、コーヒーをわかすこと、夕食のしたくをすること、戸じまりをすること、そのほか、必要ないっさいのことをすることだ。」

「だが、自分の歯はめいめい自分でみがくのかい？」

と、グスタフはたずねました。くすくすわらいました。それから、かれはまじめな顔をして、自分はコーヒーがわかせない、といいました。

「なに、おぼえられるよ。」と、エーミールがこたえました。

それからかれらは食料室にいき、在庫品を徹底的にしらべました。たまご、かんづめ、ソーセージ、ジャガイモ、塩づけキュウリ、リンゴ、パン、食用油、バターなどの数量を、正確に書きとめました。

「ぼくたちが、どんなにやすやすと自力でまかなったかを見せて、おとなをおどろかせてやろう。」

と、教授くんがいいました。それから、きょうはかれが当番なので、買いものかごをもって、ワルケンチェンに買い入れにでかけました。エーミールとグスタフも、ついていきました。かれらは、ワルケンチェンの店のなかを、長いあいだ見てまわりました。店の主人が、いろいろのものをすすめました。

教授くんはこまった顔をして、ふたりの友だちの顔を見てから、いいました。

「ワルケンチェンさん、おじゃましてすみませんでしたが、みんな、うちにそろっているようですから。」

そして、からの買いものかごをもって、うちにかえりました。うちにはいると、教授くんは、

「これも、やらなきゃならない経験だ。」

と、いいました。

「あはあ。」

と、グスタフはいい、リンゴをひとつとってきて、かじりつきました。

教授くんは在庫品表を手にとり、記入されているリンゴ一個をけし、

「秩序をかたくまもることが最高の法則だ。」

と、注意しました。

「たいしたことじゃない。」

と、グスタフはかじりながらつぶやきました。

お昼を食べに宿屋にでかけるというときになると、エーミールが、

「お金を節約しようじゃないか。ねえ、ぼくが料理をするから！」といいました。

「なにを料理するのさ？」と、グスタフがたずねました。

「油でいためてやる。」と、エーミールはいって、シャツのそでをまくりあげました。

「たまごとバターとソーセージがあるから、ソーセージの上に目玉焼きをつくってやる。腹をふさぐのには、パンをそえて食べればよい。あとで、イチゴのかんづめがでる。」

かれは、クロチルデの前かけをかけ、テーブルの上に、バター、たまご、ソーセージ、ナイフ、塩などをならべ、ガスこんろの上にフライパンをのせ、バターをそのなかにおとし、うすくきったソーセージをシュウシュウ音をたてる油の上におきました。それからたまごを二つ、フライパンのふちでわり、中身をきようにソーセージの上につぎ、塩をひとつまみまんべんなくふりかけました。

友だちは、興味と無言のおどろきをもって、このきぼねのおれるしぐさを見つめていました。

「たまごの黄みがこわれなかったろう。そこがいちばんむずかしいところなんだよ。」

と、エーミールは得意そうにいいました。

とつぜん、ちびの火曜日くんが、台所のあいた窓からのぞきこみました。かれは窓ぶちによじのぼり、そこに気楽そうにしゃがんで、エーミールのはたらきぶりをながめました。

「まるで、くろうとの料理人だね。」

と、かれは感心して、いいました。

「ばんじ、練習しだいさ。」と、エーミールはこたえました。

「ぼくのうちには女中がいないんだからね。母が食事どきにいそがしいと、ぼくが自分で食事のことをみるんだよ。」

火曜日くんは、教授くんのうちに数日とまって暮らしてよいというゆるしをえてきた、とつげました。友だちたちは、それはすばらしいといいました。

「だが、うちの年よりたちは、どうしても、コペンハーゲンにいかないっていうのさ。いきたくないんだって……まるで、それが正当な理由であるようなことをいうんだよ。」

「ひどくがんこだね！」

と、グスタフは腹だたしそうにいいました。

火曜日くんは肩をすくめました。

「でも、めいめい、自分で自分をのばすべきだよ！」

エーミールはガスを小さくしました。

「みんないっしょには食べられないよ。これは、グスタフの分だ。かれがいちばん大食だからね。」

みんなわらいました。グスタフだけはわらわないで、「この火ぶくろめ！」といいました。（グスタフの発明した悪口でした。）

それから教授くんが、食器だなからお皿とナイフとフォークをもってきました。エーミールは、目玉焼きをうまくお皿の上にうつし、パンを二きれ切りました。

グスタフは、調理台にむかって腰かけ、パンをちぎってたまごの上にのせ、食べはじめました。

教授くんが台所用のタオルをもってきました。みんなでそれをグスタフの首にしばりつけました。まるで、歯医者さんのところの患者のようでした。

エーミールは、ふたりめのソーセージとたまごをフライパンに入れました。

教授くんは、台所のベンチに腰をかけていいました。

「さて、いよいよ活動開始だ。エーミールとぼくが食事をして、お皿を洗っているあいだに、グスタフと火曜日くんは海浜ホテルにいき、ハンスと連絡をとるんだ。まず第一にミスター・バイロンは、まだハンスをつれてにげるつもりでいるかどうか、それをたしかめなければならない。もしそうだとすれば、ハンスは、ミスター・バイロンの意向をただして、いつにげるのか、汽車か船か、それをききださなければならない。」

「ぼくのオートバイをつかってもいいよ。」

と、グスタフがひにくたっぷりにいいました。

「だが、いったいなぜ、あいつにげだすようなまねをするのか、わからないね。あいつのところにいって、『ねえ、あんた、その手はくわないよ。あんたは、ここにちゃんととどまるか、でなきゃ、ぼくたちを敵にまわすことになるんだぞ。』

というほうが、ずっとかんたんじゃないか。」

「いや、そのほうが、かんたんじゃない。」と、エーミールが説明しました。

「そうすりゃ、かれは一日二日はここにとどまるだろうが、けっきょく、にげだすよ。ピコロをつれださないとしても、ジャッキーはこまっちゃうにきまってる。」

「そのとおりだ。きみは、ぼくの提案どおりにしなけりゃいけない。」と、教授くんがいいました。

エーミールはつけくわえました。

「それから、ハンス・シュマウフに、にげるばあいには、で

きるだけ、晩おそい時間にするように、いってくれたまえ。」
「なぜ？」と、火曜日くんがたずねました。
「そうすりゃ、ジャッキーはぐっすり寝こんで、父親の夜にげを、まるで知らずにすむからね。よく朝、目をさましたら、父親とマッキーがもどってきていて、ジャッキーはせつない思いをいっさいせずにすむからね。」
グスタフは立ちあがりました。
「こんなおいしい目玉焼きは食べたことがないよ。イチゴはのこしておいてくれたまえ。ふたりのおさんどんさん。」
かれは、ちびの火曜日くんをおして窓ぶちから庭へおろし、そのあとから自分もとびおりました。
かれらが、じゃり道を走っていく足音が聞こえました。それから、庭の戸がバタンとしまりました。

エーミールと教授くんは食事をますと、イチゴをひと皿グスタフのためにのこしておき、台所の流しにむかいました。エーミールが食器を洗い、ナイフやフォークをみがきました。教授くんがそれをふき、食器だなにしまいました。
フライパンをきれいにするのが、いちばんたいへんでしたが、しまいには、そのなかに顔がうつるほどぴかぴかになりました。
かれらは手を洗いました。
「父親ってものは、むずかしいものだね。」
と、エーミールはタオルを釘にかけながら、いいました。
「ある少年の父は、子どもをすててにげようとし、またべつの少年は、のぞんでいるわけではないのに、義理の父親をおしつけられようとしている。」
「べつの少年ってだれだい？」
と、教授くんがたずねました。エーミールが返事をしないので、教授くんはあいての顔を見つめました。とつぜん、かれは事情をさとりました。
「ああそうか。」
「ぼくは、まだだれにもそれについて話してはいないんだよ。」と、エーミールは低い声でいいました。
「母にさえいってないんだよ。いや、母にはいちばんいえないんだ。」
「ぼくはだれにもいいはしないよ。」と、教授くんがいいました。
エーミールは、フライパンをひとつの釘からべつの釘へかけなおし、水道の栓をかたくしめ、窓をとじました。

「ぼくは、だれかに話さなきゃいられないんだ。ぼくは、とてもつらい立場にいるんだよ。ぼくは、ほとんど父をおぼえていない。それから、ぼくは母とふたりきりで暮らしてきた。この状態がかわるようなことがあろうとは、ついぞ思ったこともなかった。ぼくはお金がかせげるようになったら、もっとよくなるだろうと、いつも思っていた。そしたらぼくたちは、休暇には大旅行をする。小旅行も。それから、もっと広いうちをかりて、ほんものの家具をいれ、よい本をたくさん買う。そして、派出婦を週二回たのみ、よごれものは洗たく屋にだす。まあ、ぼくは、そんなふうに心にえがいていたんだ。
ところが、ある人がとつぜんやってきて、ぼくの母に結婚を申しこむ。そうなりゃ、もっと広いうちをかりるのはだれだろう？　あの人だ！　母と旅行するのはだれだろう？　あの人だ！　派出婦をたのむのはだれだろう？　あの人だ！　あの人がお金をもうけるのだ。ぼくがいくらかお金をもうけるかどうかは、たいしたことでなくなってしまう。ぼくは、大学へいってもいいって、その人はいうんだ。だが、いつもその人がいるので、ぼくはもう母になにも話せなくなる。母は、もうそんなことに興味をもたないんだ、とぼくは考える。ぼくは、夜も眠れなくなるが、母が見にきたら、眠っていると思わせるために、ふかい息をする！　じつはぼくは一年生の子どものように、大声をあげて泣きだしそうな気持ちでいるだろう。」
エーミールは苦しそうに息をのみこみました。それから、気をとりなおしました。
「だが、どうにかなるだろう。もし、母があの人を愛しているのなら、むろんあの人と結婚しなければならない。ぼくの生活が、もうそんなにたのしくなくなったとしても、まったく問題じゃないんだ。」
「そうかもしれない。」と、教授くんがいいました。
「でも、きみのおかあさんは、いったいその人を愛してるの？」
「そりゃ、もし愛していなかったら、どうして結婚なんかするだろう？　母は、あの人を愛しているにきまっている。ほんとうにいい人だよ。ぼくとあの人は、とても理解しあっているんだ。」
エーミールは、友だちの顔を見ました。
「このことをきみはどう思う？」
教授くんはこたえました。

「きみは、自分かってすぎると思うね。きみはそう思わないかい？　きみのおかあさんだって、きみの母であるばかりでなく、女なんだからね。きみのおとうさんが死んでから、おかあさんは、きみのために、その点をわすれていたんだ。きみは、まだ小さかったから。ところが、今じゃもうきみは大きくなったんだから、おかあさんはまた自分のことを考えはじめたんだ。それは、おかあさんの当然の権利だよ。」

「ぼくは、自分に、まい日百ぺんもそういいきかせてるよ。だが、悲しくなるよ。じつにつらいね。」

「世のなかはつらいことだらけさ。」と、教授くんがいいました。

「それは、ぼくたちふたりの力じゃどうにもならない。だが、きみのおかあさんがつらい思いをするより、きみがつらい思いをするほうがずっとよくはないかい。」

「そりゃ、もちろんさ。」と、エーミールはいいました。

「だが、ぼくは、自分のなかにふたりの人間がいるような気がするんだ。ひとりはなにもかも見とおして、うなずく。もうひとりは目をとじて、そっと泣いている。わかるかい？」

「そんなのを読んだことがある。だが、ぼくはそうじゃない。ぼくはわかってしまえば、もうつらいと思いはしない。」と、教授くんが説明しました。

「それはうらやましいよ。」と、エーミールは考えこみながらいいました。

「とにかく、きみの招待がきたときは、とてもうれしかったよ。ぼくは、心にもないふうをすることはとてもできないからね。もし母が、ぼくの気持ちを見ぬいたら、いいかい、そしたら、母はすぐあの人と結婚しないと、きっぱりいっただろう。母ははじめから、ぼくが同意しなきゃ結婚しないって、あの人にいってるんだ。それであの人はまず、ぼくにきいたんだ。」

「すばらしくいいおかあさんだね。」

と、教授くんは感心していいました。

「そりゃ、ぼくのおかあさんだもの。」と、エーミールはいいました。

あとで、ふたりはマントを着て、ふたりの友をむかえにいきました。かれらは、ハンの木の木立ちのところでであいました。

「あすの晩ときまったよ。」と、グスタフが報告しました。

「あすは、ハンスの非番の日だ。ミスター・バイロンは、あ

すの晩、マッキーとハンス・シュマウフをつれてにげだそうとしてるんだ。ハンスはどうしたらいいか、おしえてくれというんだよ。あの火ぶくろのバイロンめ、どっちみち、さいごの汽船でにげる決心でいる。それだと、ジャッキーがもう寝てるからね。そして、ワルネミュンデでポーランドいきの汽車にのろうという考えなんだ。ポーランドには身内があるので、ほかの契約をむすぶまえに、新しいふたごとけいこをしようと思っているんだよ。」

火曜日くんがいいました。

「てっとりばやい方法を考えたんだがね。ぼくたちがみんなで船つき場にならんでいるのさ。そして、バイロンがきたら、ホテルにおいかえしてしまうのさ。」

教授くんが頭を横にふりました。

「その計画は単純すぎる。こういうふうにやるんだ。かれをつかまえるまえに、いちおう出発させなきゃいけない。いいぬけができないように、ある距離をにげたところでつかまえないと、ぼくらのほうが、かれにわらわれることになるよ。水上警察に急報されるかもしれない、という不安をいだかせなきゃならない。」

かれらは、観光協会のつくったベンチに腰をかけて、三十分ほど相談しました。

ようやく計画がほんぎまりにきまりました。つまりこういう計画でした。ピコロは、ミスター・バイロンに、自分はバイロンやマッキーといっしょに、コールスビュッテルで船にのるのはぐあいがわるいから、つぎの船つき場ハイデクルークで汽船にのりこむ、とはっきりいうのです。

「で、どうやってピコロは、ハイデクルークにいくんだい？」と、グスタフがききました。

「きみがそんなことをきくのか。」と、エーミールはさけびました。「むろん、きみのオートバイのうしろにのっけていくのさ。」

「わかった。」と、グスタフがいいました。

「いっぽう、ぼくたち探偵は、」と、教授くんが説明しました。

「ハンス・シュマウフのように、ハイデクルークで汽船にのらず、ミスター・バイロンとマッキーのように、コールスビュッテルでものらず、もっと手まえのグラールでのるんだ。ぼくたちは船室にはいって、コールスビュッテルで、バイロンおやじが、たしかにのりこむかどうか、見はるんだ。ハイデクルークでピコロものりこむと、ワルネミュンデにつくちょっとまえに、ぼくたちは甲板にでて、いうんだ。

『パハウルケさん、あなたのむすこのパウルはどうしました？　パウルのかわりに、どうしてピコロがあなたといっしょに旅行にでるんです？　むすこをすてて、子どもをかどわかしたかどで警察にひきわたされるのがいやだったら、あなたの費用で、汽車かタクシーにのって、ぼくたちといっしょにコールスビュッテルにもどりなさい。ジャッキーがなにも気づかないようにしてやることがかんじんです。』

っていえば、かれも手がでないだろう。」

「かれはいやおうなしに、コールスビュッテルにもどるだろう。」

と、火曜日くんが愉快そうにいいました。「ほかに、みちはありゃしない。」

「ばんじすてきだ。」と、グスタフも思いました。

「だが、きみたちは、どうやってグラールにいく？」

みんなは、かれをとがめるように、見つめました。

「わかったよ。」と、グスタフはいいました。「ぼくのオートバイで。」

「そうだ。」と、エーミールがいいました。「きみは、ぼくたち探偵をみんなはこぶまで、グラールとここのあいだを往復し、それからひとりで、グラールからコールスビュッテルとハイデクルークをへて、ワルネミュンデまで走って、いちばん近い水上警察の交番をていさつしておくんだ。バイロンが手をやかせるといけないからね。ぼくたちが船でつくころは、きみは、ぼくたちと、ぼくたちのとりことをまちうけているんだ。わかったかい？」

「ぼくは、だいじょうぶだ。」と、グスタフはこたえました。

「だが、オートバイはまだだ。」

第十章　海と陸の冒険

よく日は、火曜日でした。当番のエーミールは、朝早く戸をあけ、牛乳とパンをとりいれようとして、びっくりしてつっ立ちました。芝生のまんなかに、ピコロが腰かけて、わらいながら、

「おはよう。」といったのです。「きょうぼくは非番なんだから、うんと利用しなくちゃならないんだ。」

「どうして、ベルを鳴らさないのさ。」

「鳴らさないさ。ぼくは、ホテルではたらいているからね。ベルでおこされるのが、どんなにいやなものか知ってるんだよ。それに、この芝生は、とてもおだやかで気持ちがいいんだ。晴雨計があがってるよ。」

ふたりは台所にいき、コーヒーをわかしました。そのあいだに、エーミールはまえの晩、少年探偵たちがねった計画をハンスに説明しました。

「要点を、もう一どかいつまんでいうとね、ぼくたち探偵は、グラールで船にのる。バイロンとマッキーはここで、きみはハイデクルークでのる。グスタフは、オートバイをもってワルネミュンデの船つき場でまってるってわけさ。もしバイロンが抵抗したら、グスタフが警官をつれてくる。ぼくたちは、それまで軽わざ師をつかまえておくんだ。」

ピコロは、すばらしい計画だと思いました。ふたりは朝食のしたくをしてから、友だちをおこしました。ちびの火曜日くんは、ポニーのベッドで寝たので、ことごとに、「ご令嬢」とよばれました。

ピコロは、わきの下にナフキンをはさんで、本職の手つきでお給仕しました。

「もう、正真正銘ボーイだね。」と、グスタフが感心していいました。「ミルクをもう一ぱい、ボーイさん。」

「はい、ただいま。」

と、ハンス・シュマウフはいうと、台所にかけこみ、一ぱいのミルクをおぼんにのせて、きょうに平均をとりながらもってきて、グスタフの前におくと、たずねました。

「だんなさまは、長らくご滞在ですか。天気はよくなりそうです。こちらのホテルは、一流のサービスをいたしますんで、ご満足していただけるとぞんじます。」

「それは残念。」と、グスタフはいいました。

「わしはすぐベルリンへかえらなければならん。なにせ、きのう妻と子どもたちをたんすのなかにいれたまま、まちがえてかぎをもってきてしまった。」

「残念なことで。」と、ハンス・シュマウフはいいました。

「でなければ、金曜日にこちらの映画館で、『エーミールと少年探偵たち』をごらんになれるでしょうに。」

「なんだって？」

と、少年たちはさけんで、とびあがりました。

ピコロは新聞をポケットからだして、絵の額ぶちにはさみました。広告欄に大きな広告がでていて、つぎのような文句が書いてありました。

『エーミールと少年探偵たち』
二百人の子どもの登場する映画
事実にもとづく映画
身ぢかでしかも息づまらせる映画
もっかベルリンで上映中の映画
八歳から八十歳までの子どものための映画
金曜日から　燈台映画館で

みんなは、広告をくりかえしくりかえし読みました。グスタフは得意そうに歩きまわりながら、大きな声でいいました。

「みなさん、おはいりください。現代のもっともすばらしい少年たちが見られます。おはいりください。前半では腹がいたくなるほど、そして後半ではまた元気になるほどおわらいになるでしょう！」

教授くんはいいました。

「ぼくは初舞台にでるように、胸がどきどきするよ。映画なんだし、ぼくたちが出演したわけじゃないけど。」

「ぼくたちが見物のなかに腰かけてることを、だれも気づきやしないよ。」と、エーミールが安心させました。

「それとも、ハンス、きみはなにかしゃべったかい？」

「ひとことだって！」と、ピコロは断言しました。「きみたちは、まったくおしのびだよ。」

「でかした！」と、グスタフがいいました。

「聖霊降臨祭にかざりたててひかれていく雄牛みたいに、ぼかんと見られるのは、いやだからね。」

「そんなことはありゃしない！」と、火曜日くんがさけびました。「ぼくたちは少年で、映画の役者じゃないもの。」

とつぜん、ハンス・シュマウフが手でひたいを打ちました。

「なんてわすれっぽいんだ！　ぼくは、きみたちをヨットにつれにきたんだよ。そのために、こんなに早おきをしたんだ。いいかい？　弁当といろんなごちそうをもって、ヨットで、大じかけの遠足をするのさ。午後にはもどってくる。」

「ぼくはここにのこる。当番だから。」

と、エーミールがいいました。

「なにをばかなことを。別荘をぬすんでいくやつはいやしない。いっしょにきたまえ。」

と、グスタフがいいました。

「ヨットに席はたっぷりあるよ。船室だってある。」

と、ピコロはいいました。

エーミールは決心をかえませんでした。

「それはそうと、ぼくもいっしょにいけない。」と、火曜日くんが説明しました。

「ぼくは両親とお昼を食べなきゃならない。でないと、とてもうるさいんだよ。食事にかえらないと、ここにとまることをゆるしてくれないにきまってる。そうすりゃ、ぼくは、ミスター・バイロン追跡にくわわることができない。このまえもそれができなかった。あのときは、電話にしがみついていなきゃならなかったからね。こんどは、どうしてもくわわらなきゃ。でなきゃ、この世のおわりだ。」

グスタフはいいました。

「それならいい。三人だけでヨットにいこう。ぼくは、モーター係だ。もしモーターをつかうんなら——ぼくは帆走のことはてんで知らないから。」

「だが、ぼくが知ってる！」と、ハンス・シュマウフがこたえました。

「きみたちは、ぼくのさしずどおりすればいいんだ。」

そこでかれらは、台所にかけこみました。教授くんがピクニックの食料をわたしました。それをすっかりひとつの古い買いものかごにいれました。リンゴ、かんづめ、ソーセージ、パン、バター、ナイフ、フォーク、皿、ナフキンなど。

当番のエーミールは、それをいちいち正確に、在庫品表に記入しました。

グスタフは、いっぱいになったかごをひきうけました。
「これは、ぼくがもっていく。食料品は、注意ぶかくとりあつかわなければならないからな。」
「たいしたことじゃない。」
と、エーミールはグスタフの口調でいい、わらいました。
「食料品についちゃ、その文句はあてはまらない。」
と、グスタフはまじめくさっていいました。
「とうとぶべきものは、とうとばなくちゃいかん。」
それから、かれらは港にいきました。
「きちんとかえってきたまえ！」
と、エーミールは、モーターがカタカタ鳴りだすと、さけびました。
「きょうは、まだすることがたくさんあるんだから。」
「アホイ。」
と、グスタフはどなりました。かれはかじの柄のそばに腰かけました。
「あいつ、早くもまたリンゴを食ってるよ。」
と、火曜日くんがエーミールにいいました。それから、かれも「アホイ。」とどなりました。
ヨットは、港からすべりだしました。ハンス・シュマウフは、マストのそばに立って、大きな帆をあげました。
教授くんは、ベレー帽をかぶり、うしろをむいて手をふりました。ヨットはさん橋のとっさきをすぎて、沖へでていきました。そよ風がふいていました。
「モーターをとめたよ。」と、火曜日くんがいいました。
エーミールはうなずいて、手を目の上にかざし、友だちを見おくりました。
ハンス・シュマウフは、前の帆をはりました。ヨットは北西にむかってすべりました。
おなじころ、デンマーク旅行の一行は、コペンハーゲンで「フラスカチ」という料理店の前庭に腰かけ、朝食をとりながら、市役所の塔にある鐘のすばらしいしらべをたのしんでいました。そして、隣席の人たちの食欲に感嘆しました。
「国が小さいほど、その住民の食欲は大きいんだよ。」
と、法律顧問官ハーバーラント氏が説明しました。
エーミールのおばあさんは、となりのテーブルのデンマーク人夫婦を見つめていましたが、
「人間わざじゃありませんね。わたしたちがここにすわってから、あのふたりの食べたものを考えてみると、あの人たち

は、とっくにはれつしてなきゃならないはずなのに。」
と、いいました。
デンマーク人夫婦は、そんなことはおかまいなしでした。ボーイが、ちょうどつぎの料理をもってきたところでした。
「これじゃ、お料理する人もいそがしいことでしょうね。」
と、クロチルデ嬢は思いやりました。「わたしはおたくにいられて、しあわせですわ、おくさま。」
ハーバーラント夫人は、年とった女中にほほえみかけました。
「おたがいに、満足しあってるのは、けっこうですわ。」
クロチルデは赤くなってだまってしまいました。かの女は、ハーバーラント夫人をとても尊敬しているのでした。
ポニー・ヒュートヘンは、手まわしよく、もってきたメモ用の手帳に、かがみこんで、コペンハーゲンへきてから見たり聞いたりしたことを書きこみました。もちろん見出しのことばだけでした。
「ゲゼル、燈台船。ビベル、すばらしい夕食。ティボリ、たいへんなさかり場。アマーリエンボルク宮、クリスチアンボルク宮。旧取引所、みごとなきりづま。外国の軍艦、日本のも。港の長い散歩道。トルワルトセン美術館。」
ときどき、右がわに海が見えました。それは外海ではなく、ズントという海峡でした。海洋がよいの船が、楽隊をのせて、ズントを走っていました。
とつぜん、ポニーは、ズントのむこうがわに陸地を発見して、コロンブスのような気持ちになり、こうふんして、ハーバーラント氏のそでをひっぱり、
「あのむこうはなに？」とたずねました。
「あれは、スウェーデンだよ。」と、ハーバーラント氏はいいました。
「ああそう。」と、ポニーはいい、メモをだし、書きこみました。
「スウェーデンの海岸を見た。法律顧問官H氏は、とてもいいかただ。」
ヨット「クニグンデ四世」号は、もう数時間海上にいました。あいかわらず微風がふいていました。ピコロは教授くんとグスタフに帆のあやつりかたをおしえました。三人は、風上のがわにうずくまり、バルト海を気持ちよさそうにながしていました。弁当は、もうおなかにはいっていました。ばんじこのうえなく好調でした。太陽は、おしげもなくてっていました。風は、少年たちに好意をよせているように、トビ色に焼けた顔をなでていました。
グスタフは、小さい船室のベッドのひとつに寝て、オートバイで海上を走ってでもいるような夢を見ていました。
教授くんは、かじの柄をあやつっているピコロとならんですわり、海中を見ました。ときどき、きれいにきらきら光るクラゲや、さかながおよいでいくのが見えました。
とつぜん、ハンス・シュマウフは、
「あれはいったいなんだろう？」
とさけび、正面を指さしました。
前方に島がありました。ふたりは、それをめざしてすすみました。ピコロはいいました。
「近くでよく見なくちゃ。」
教授くんはいいました。
「砂山らしいぜ。いくらか草のはえている。」
もうすぐ、そばにきました。
「ヤシの木だ！」と、ハンス・シュマウフがさけびました。
「バルト海のまんなかに、ヤシの木なんて！　ありうることとも思えないな。」
「ぼっちゃんたちは、どうしていらっしゃるかしら？」
と、クロチルデがたずねました。法律顧問官はいいました。
「われわれから解放されてよろこんでいるよ。」
クロチルデ・ネクタイ嬢は、そうは思いませんでした。
しかし、顧問官は説明しました。
「そりゃ、わたしのほうがよくこころえている。わたしも、あんな腕白だったんだから。」
ポニーは信じられないように、顧問官を見つめました。
かれはわらっていいました。
「そうだとも、ポニー！　むろん、ずっとむかしのことだが、ときどき、つい、きのうのことだったような気がするよ。」
それからボーイをよんで、支払いをし、みんなをうながして外にでました。
ウェスタブロー通りで遊覧バスにのり、旅のイギリス人やデンマーク人やフランス人といっしょに、ゼーラント島を一周しました。道は北につうじ、どこをとおっても清潔な家や庭ばかりでした。いたるところに、赤いツルバラの花が咲いていました。とりわけ美しいところは、クランペンボルクというのでした。ポニーは、その名をいそいでメモに書きこみ

「毛ばだってるように見えるよ。」
と、教授くんが具体的にたしかめました。
「おおぎがたのヤシだよ。」
それから、ふいにドシンときました！
ハンスと教授くんは、席からころがりました。
グスタフはきゅうにおきあがって、頭を船室の天じょうにぶつけました。かれは舌うちしながら、船室からはいだして、たずねました。
「まさか沈没じゃあるまいね。」
「いや。」と、ハンスがいいました。「のりあげたんだ。」
グスタフは、そのへんを観察しました。
「まったくあきれたやつだな！　この砂山をよけることができなかったのか。リューゲン島でもあるならいざしらず！」
かれは、ヨットのふちにつかまって島にあがりました。
「バルト海のまんなかで、えりにえって、こんな小さい島にのしあげるなんて、まったくばかげてる！」
「ヤシの木を、よく見ようと思ったんだよ。」
と、ハンスはだいぶうちしおれて、いいました。
「さあ、徹底的に見るさ！」
と、グスタフはどなり、ふうがわりな植物にあゆみよりました。
「珍種だよ、自然科学者さん、植木鉢にはえているヤシだ。こいつは、植物学者エーミールむきだ！」
教授くんは、時計を見ました。
「ぐずぐずするなよ！　コールスピュッテルにひきかえさなきゃならんよ。」
かれらはそこで力をあわせ、ヨットをつっぱり、海のなかにおしもどそうとしました。顔が紫いろになるまでやりましたが、ヨットはうごこうとしません。一センチもびくともしないのです。
グスタフは、靴と靴下をぬいで、水のなかにはいり、
「それっ！」と号令をかけました。「全員、おせ！　おせ！」
とつぜん、かれは、水中にはえているつるつるする草とコケに足をすべらせて、かなりのあいだ、水面からすがたをけしてしまいました。
うかびあがると、かれは、まず一リットルほどの塩水をはきだしました。それから、かんかんにおこって、
「くそたれめ！」
と、どなりました。そして、ずぶぬれのトレーニング服をぬいで、かわかすため、いまいましそうにそれをヤシの幹にかけました。
「それみたまえ。」と、教授くんがいいました。「鉢植えの木だって、なにかの役にたつだろう。」
かれは、またヨットにとっついて、家具をかたづける人たちが、ピアノをはこびだすときのように、三十分もはたらきました。
しかし、ヨットは、ピアノとはちがいました。えんこしたところをいっこうにうごきません。
「手ごわいやつだ。」
と、ちびのシュマウフはつぶやきました。「それっ、おせ！　おせ！」
だめでした！　いくら心をこめてほねおっても、むだでした。かれらは、つかれて砂のなかに腰をおろし、息をつぎました。
「まったく、おもしろいことになるぜ。」と、グスタフがいいました。「こいつをうかすことができなかったら、いったいどうするんだ？」
シュマウフは、あおむけになって、目をとじました。
「帆をとりこんで、小さい島の住民になるんだ。かんづめをもってきたのは、しあわせだ。」
グスタフはおきあがって、服がもうかわいてきたかどうかをしらべました。かれは、それをしぼっていいました。
「いよいよ、独立で自分をのばすのに、じゃまになるものは、ひとつもなくなったぜ。電話はもとより、ポストさえ、ここにはありゃしない。まったくのロビンソンだ！」
教授くんはげんこで砂をたたき、
「ぼくたちは、もどらなきゃならない！」とどなりました。
「どうしても！　そうしなきゃ、ミスター・バイロンがにげてしまう！」
グスタフは、周囲を見まわしました。海と雲のほか、なにもありませんでした。かれはおこってわらいました。
「歩いていこうじゃないか、教授くん！」

第十一章　旅券検査

夕がた近くなりました。たそがれるのも、もう遠くはありませんでした。太陽は、雲のうしろにしずんで、ほかの雲と海に、はてしないバラ色をみなぎらせました。

エーミールとちびの火曜日くんは、一時間いじょうも、コールスビュッテルのさん橋に立って、いらいらしながら、友だちをまっていました。エーミールは、かれらのために、バタパンをつくりました。その包みを火曜日くんがもっていました。かれはひどく陽気で、きたるべき事件をたいそうたのしみにしていました。

いろいろな大きさのヨットが港にはいってきましたが、ふたりのまちうけるヨットは、いつまでたってもきませんでした。

「そらきた！」

と、火曜日くんがさけび、さん橋に近づいてきたヨットを指さしました。

しかし、そうではありませんでした。

やならない。」といいました。

ふたりは、まちつづけました。

エーミールは、ポケットから紙きれをだして、書きました。

「きみたちぬきで、ぼくらは、グラールへいく。どうかいそいで、まにあうように、ハイデクルークとワルネミュンデにいってくれたまえ。」

「ちょっとまってね、ちびさん。」

と、かれはいいそえて、港にかけおり、「クニグンデ四世」号のもやい場に、この紙きれをしっかりくくりつけて、上陸のときすぐ見えるようにしました。ピンでくいにとめたのです。（ピンのおかげで、かれは大どろぼうグルントアイスをつかまえることができたので、それからいつももっていました。）

かれは、ちびの火曜日くんのところに、走ってもどりました。

「まだかい？」

「まだだよ。」

「ごろつきだな。」と、エーミールがいいました。

「いや、もうだめだ。腰をあげるとしよう！」

そこでふたりは、グラールへでかけました。マラソン競走

エーミールはいいました。

「ねえ、きみ。なにかおこったんじゃなきゃいいがね。」

「いったい、なにがおきたというのさ？　あらしもなにもありゃしなかった。遠くにいきすぎたんで、予定よりかえりがてまどるんだよ。」

エーミールは、もどってきたヨットにむかってどなりました。

「沖で『クニグンデ四世（女王の名）』号を見ませんでしたか。」

かじをとっている男がさけびました。

「いや！　とちゅうじゃ、女の子になんかあわなかったよ！」

ヨットのなかの人たちは大きな声でわらいました。

「ばかにしてる。」

と、火曜日くんがいいました。エーミールは、

「もう三十分まっても、みんながかえらなかったら、グスタフのオートバイにのるかわりに、歩いてグラールにいかなきをしたり、歩いたりしました。火曜日くんが、バタパンの包みをもっていました。

森のなかは、しめっぽくむっとしました。沼が近くにあったのです。ヤブカが、ふたりのいそいでいる少年を食いつくさんばかりでした。ヒキガエルが、道の上をはねました。遠くで、カッコウがよんでいました。

一時間ほどしてかれは、黒と白のまだらの雌牛が、草を食べている原っぱにでました。雌牛のなかの一頭が——雄牛だったかもしれませんが——頭をさげて、ふたりのほうに力いっぱい突進してきました。ふたりはいっしょうけんめい走ってにげました。とうとう、ふたりはかきねにたどりつき、それをのりこえて、海岸道におりました。雌牛か雄牛かは、ふたりをにらんでから、ぐるりとむきをかえ、なかまのほうにもどっていきました。

「おどろいた牛だ。」と、ちびの火曜日くんがいいました。

「ひどいめにあわしやがる！　もすこしで、バタパンをなくすところだったよ。」

「あすこがグラールだ！」と、エーミールがさけびました。

「ミュリッツから、汽船がもうやってくるよ。かけ足、すすめ、すすめ！」

ちょうどそのころ、沖あいの島では教授くんが時計を見つめていました。

「いまごろ、汽船がグラールをでる。気がくるいそうだ。」

ヤシのそばにうずくまっていたハンス・シュマウフは、目になみだをうかべていました。

「なにもかも、ぼくが悪いんだ。ゆるしてくれるかい？」

「ばかな芝居はよせ。」と、グスタフがいいました。

「諸くん、苦しみのなかにおかれて、はじめて真の偉大さがあらわれるのだ！　それに、エーミールはぼくたちの好意的な協力がなくったって、ミスター・パハウルケをのしちゃうさ。エーミールと火曜日くんはまぬけじゃない。」

教授くんはいいました。

「いや、かれらはぼくらがいなくちゃ、追跡ができない。エーミールと火曜日くんだけじゃ、探偵には少なすぎる！　それに、むろんかれらは、いつまでも、コールスビュッテルの港に立って、ぼくたちをまってる。ひょっとしたら、いまごろは、ぼくらのヨットがもどらないので、水上警察に急報してるかもしれない。」

グスタフは、ちがった意見でした。

「どうして、エーミールが警察に急報なんかするだろう？　ぼくたちがどうなるっていうのだ？　ぼくたちは船室で眠れるし、食べるものはじゅうぶんある。あすのうちには、漁船か汽船が、このまのぬけた島のそばをとおるさ。」

「きみの考えそうなことだ。」と、教授くんがこたえました。

「ぼくたちが、この島にいることを、エーミールはどうして知るだろう？　かぎつけようがないじゃないか。」

グスタフは、すっかりまいってしまいました。

「ほんとだ！　むろんエーミールは知りゃしない。ゆるしてくれ、たのむ。ぼくは、ときどき、とほうもなくばかになるんだ。」

ピコロは悲しそうにいいました。

「エーミールはきっと、ぼくたちがひっくりかえって、やっと船体にしがみつき、おぼれそうになってる、と思ってるよ。」

かれは心をうたれて鼻をこすりました。

「あしたの朝は、おじさんがスウェーデンからもどってくる。」

「おい、おじさんにはりとばされるぜ！」

と、グスタフは考えこんでいました。

「むしろ、これから一生この島にいたほうがいいかもしれないぞ。どうだい？　さかなをとって、どうにか食っていけるだろう。帆で遊牧民のテントをつくることができる。このあほらしい島にだって、火打ち石はあるだろう。流木をひろいあげて、かわかして、火をつけ、さかなを焼くんだ。朝、昼、晩。ぼくの案をどう思う？」

「いかにもきみらしいよ。たぶん、いつかヤシの木に、ヤシの実がなるだろう。その皮で、カモメのたまごを焼こう。そして、ヤシの汁を朝のコーヒーにつごう。」

と、教授くんはひにくにいいました。

「コーヒーがあるのかい？」

と、グスタフがおどろいてたずねました。

「ないさ、しかし、きみは、キじるしはもってるだろう？　ハンス、飲料水はどのくらいもつかい？」

と、教授くんがどなりました。

「節約すれば、一日くらい。」と、ピコロがこたえました。

「もっと節約しよう？　二日はもたせなきゃいけない。あした雨になればよいが。そしたら、かんづめのあきかんをすえて、雨水をためる。」

と、教授くんはきっぱりといいました。

「すてきだ！」と、グスタフがさけびました。

「教授くん、きみはあいかわらず老練な作戦家だね。」

「食料は、ぼくが保管する。ぼくが配給をひきうける。」

と、教授くんはいいました。

グスタフは両耳をおさえました。

「どうか食いもののことは、いわないでくれ。」と、かれはたのみました。「でないと、ぼくはたちまち腹がへる。」

教授くんは、水ぎわにあゆみよって、海上をながめました。グスタフはピコロのわき腹をつついて、小声でたずねました。

「あすこに立ってるのは、だれににてるか、知ってるかい？」

「知らない。」

「セント・ヘレナのナポレオンといったところさ。」

と、グスタフはささやいて、しのびわらいをしました。

汽船がコールスビュッテルにつくと、エーミールと火曜日くんは、かたずをのんで船室の窓からのぞきました。火曜日くんは鼻を窓ガラスにおしつけていました。

「もし、バイロンがのりこまなかったら？」

「そしたら、なわがとかれないうちに、さっととびだして、

上陸しちゃうさ。」と、エーミールが説明しました。

「だが、あすこにもうやってきた！」

ミスター・バイロンと、ふたごの小さいほうのマッキーとが船にのりました。かれらは、大きなトランクをいくつもたずさえていました。ついにつみこみがすっかりすみました。

バイロンは手すりにあゆみより、マッキーはベンチに腰かけました。さん橋の人がなわをほどいて、水夫のひとりにむかってなげました。モーターが音をたて、船はうごきだしました。

ふたりの少年は海岸を見わたしました。コールスビュッテルの家いえの明るい窓が、だんだん小さくなりました。水が船室の窓にはねかえりました。

「ひどく石油のにおいがするね。ぼくは、あやしくなってきた。」

と、火曜日くんがささやきました。

エーミールは、窓をあけました。つめたい夜風がながれこみ、塩水がふたりの顔にしぶきました。火曜日くんは頭を窓からだして、深呼吸をしました。それから、かれはベンチに腰かけ、エーミールにむかってほほえみ、

「両親に知れたら。」といいました。

エーミールもいっしゅん、ノイシュタットにいるおかあさんと、コペンハーゲンにいるおばあさんのことを考えましたが、すぐ気をとりなおして、火曜日くんのひざをたたきました。

「きっとすべてうまくいくよ。気をつけたまえ、ちびさん。ハイデクルークでピコロが乗船するから。そしたら、ほかの者も、持ち場についていることがわかるよ。ほかのことはたいしたことじゃない。」

それは、エーミールの思いちがいでした。ハンス・シュマウフは、ハイデクルークで乗船しませんでした！

それをふしぎがったのは、エーミールと火曜日くんだけでなく、ミスター・バイロンはなおさらでした。かれは、ふたごのひとりマッキーとならんで腰かけ、頭をかいていました。むこうの岸では、ロストックの野原がすべるようにすぎていきました。

エーミールがきゅうに立ちあがったので、火曜日くんはおどろいて、ベンチからずりおちました。

「どうしたの？」と、かれはささやきました。

「もういけない。」と、エーミールはいいました。

「ほかの者たちはこない。ぼくたちだけでしまつをつけなければならない。きたまえ！」

ふたりは階段をかけあがって、甲板をさがし歩きました。煙をはいている煙突のかげに、ひとりの男と少年が、トランクにかこまれて、すわっていました。

エーミールはあゆみよりました。火曜日くんは、そのうしろにくっついていました。かれはあいかわらず、友だちにやろうと思ったバタパンの包みをもっていました。

エーミールはいいました。

「ミスター・バイロン、ぼくはあなたにお話ししなきゃなりません！」

その男は、びっくりして顔をあげました。

「なんだね？」

「ぼくは、友だちにたのまれてきたんです。」と、エーミールはいいました。

「あなたは、ピコロのハンス・シュマウフがハイデクルークでのりこむのをまちうけ、つれてにげるつもりだったんでしょう。」

ミスター・バイロンの目は、いかりにもえました。

「それで、あいつはこないんだな。このこじき小僧があいつを説きつけて、やめさしたんだな。」

「ことばをつつしんでください。ぼくだって、あなたのことをこっぴどくいってやりたいところを、がまんしてるんですよ。」

「いってやりたまえ。」と、火曜日くんがさいそくしました。

「そこにもまだひとりいるな。」と、バイロンがいいました。

「こんばんは、パハウルケさん。」と、ちびの火曜日くんがいいました。

あいての男は、腹だたしげにわらいました。

エーミールは説明しました。

「ぼくたちは、なにより、ジャッキーのためにきたんです。あなたは、かわいそうな少年をすてて夜にげして、はずかしいと思いませんか。」

「あいつは、もう役にたたないんだ！」

火曜日くんは、いきおいこんで、前にでました。

「なぜです？　ジャッキーがおもくなりすぎたからですか。ぼくたちは、なにもかも知ってるんですよ。だが、それが理由になりますか。」

「むろん理由になるさ。わしは、もうあいつと、芸ができないんだ。そのため、わしのだしものはこまってるんだ。わしは芸人だよ、ごしょうちかい？　ロンドンの大演技場にだっ

てでられるんだぞ！　あの腕白が、こんなに早く大きくなることが、二年まえにわかったら！　自分の面をはりとばしたくなる！」

と、あいての男はいいました。

エーミールはかっとなりました。

「そうしなさい！　そのじゃまはしませんよ。人間がそんなにざんこくになれるとは思いませんでしたよ。いったいジャッキーはどうなるんです？　ええ？」

「こじきでもしろっていうんですか。」と、火曜日くんがたずねました。

「それとも、バルト海にとびこめっていうんですか。それとも、孤児院にでもはいれっていうんですか。そんなこと、ぼくたちはゆるしませんよ！」

「ぼくの友人たちとぼくは、一致してきめたんです。あなたが、ぼくたちといっしょに、コールスビュッテルにかえることに。」

「そうか、そうか！」と、ミスター・バイロンは目王をぎょろっとさせました。

「それより、教科書とにらめっこでもしていろ、このなまいき小僧め！」

ミスター・バイロンは、いんけんに微笑しました。

「それで、この小僧はわしのことをくりかえし、パハウルケといってるんだな。わしは、ぜんぜんパハウルケじゃないよ！」

ふたりの少年はおどろきました。

「じゃ、いったいなんという名です？」

「アンダース（ちがう）だ。」と、かれはこたえました。

「そうか。じゃ、いったいなんというんです？」

「アンダースだよ。わしはアンダースというんだ。」

と、あいては説明しました。

「ほんとの名まえをいってください！」と、エーミールはさけびました。

「ちがう名だということは、もうなんども聞きました。」

いままでだまっていたマッキーがいいました。

「ちがうんじゃなくて、アンダースなんだよ。ミュラーとか、レーマンとかいう名の人があるのとおなじように、アンダース（ちがう）という名なんだよ。」

「ああ、そうか！」と、エーミールはさけびました。

「身分証明書をもってますか。」と、火曜日くんがたずねました。

火曜日くんはこたえました。

「ところが、休暇なんですよ、パハウルケさん！」

「ぼくらは、どんなことがあってもゆるしません。」と、エーミールがいいました。

「あなたのふたごのひとりが、小さいままでいないで、大きくなるというだけの理由で、かれを不幸につきおとすなんていうのは。――ぼくたちといっしょにもどってください。数分間で、ワルネミュンデにつきます。そこで、ぼくたちの友人たちがまちうけています。あなたが旅行をつづけようとおっしゃるなら、警察にひきわたします。」

警察といわれると、ミスター・バイロンはおもしろくない顔をしました。

「じゃ。」と、エーミールは間をおいてたずねました。

「あなたは、父親の義務をはたすんですね？　それとも捕ばくしてもらいましょうか。」

あいてはきゅうに、すっかりほっとしたように見えました。

「父親の義務だって？」と、かれはたずねました。

「そうです、パハウルケさん！」と、火曜日くんがおこってさけびました。

「あなたには、耳なれないことばでしょうね？」

「旅券をもってる。」と、ミスター・アンダースがいいました。

火曜日くんは、ていねいにたずねました。

「旅券を見せていただけますか。」

軽わざ師がしぶったので、火曜日くんはいいそえました。

「おのぞみなら、警察に見せてもいいんですよ。」

軽わざ師は、旅券をポケットからひきだしました。火曜日くんはそれをとって、税関吏が国境で検査するように、おちついてしらべました。

「人相書はあってるかい？」と、エーミールがたずねました。火曜日くんはいいました。

「名まえはあっている。ミスター・バイロン、本名はアンダース。」

それから読みあげました。「職業――軽わざ師。体格――なみはずれて大きくたくましい。顔――ふつう。髪の色――黒。特長――右腕の上部にいれずみ。」

かれは、旅券をかえしました。

「けっこうです。ありがとう。」

エーミールは、足をさらわれたように感じました。

「じゃ、あなたは、ジャッキーの父親じゃないんですか。」

「ない。」と、ミスター・アンダースはうなりました。
「わたしは、あれの父でも母でもない。ジャッキーとマッキーはふたごではない。兄弟でさえない。わしは、マッキーの父でもない。マッキーのほんとうの名は――。」
「ヨゼフ・コルテヨハン。」と、マッキーがむすびました。
「バイロンという名も、ふたごのどうのといういきさつも、商売を考えてのことだよ。ジャッキーは、むろん気のどくだよ。そりゃわかるけど、ほんとにもう役にたたないのさ。大きくなるのが不運なのさ。」
もう、ワルネミュンデの燈台の探照燈が、波と空にちらついていました。ホテルの明るい窓が親しそうにまたたいていました。
エーミールはまだ頭をなぐられたような気持ちでした。とうとうかれは、元気をふるいおこしていいました。
「それでもかわいそうな少年をすてるのは、不当だと思います。ぼくは、友人たちを代表して、ジャッキーの将来に責任を感じます。それで、ジャッキーのために、お金をわたしてもらいたいと思います。すくなくとも、ここ数週間分。」
「そんなことは考えられん。」と、ミスター・アンダースはおこってどなりました。「見も知らぬ少年に金をわたすなんて。」
エーミールは紙きれを、ポケットからだしました。
「むろん、ぼくたちのサインした受取りをあげます。」
「もし一文もださなかったら？」
と、あいてはあざけるようにたずねました。
「それはよく考えなさい。」と、エーミールはいいました。
「こぼめば、捕ばくしてもらいます。」
「だが、わしは、ジャッキーの父ではない！」と、ミスター・アンダースはさけびました。
「警察に、なんの用があるんだ？」
「それは、警察が説明してくれます。こういうことについては、警察のほうがぼくたちよりよく知っています。」
と、火曜日くんがおだやかにいいました。
エーミールは、船べりのランプの下に腰かけました。
「ぼくは、もう百マークの受取りを書きますよ。」
「気でもくるったのか。」と、あいてはたずねました。
「百マークだって？　首をねじられたいのか！」
「どういたしまして。」
と、火曜日くんがいいました。マッキーが、ことばをはさみました。

「それはおおすぎるよ。そんなにたくさんのお金はのこってないよ。」
「うそをつくのか。」と、火曜日くんがききかえしました。
「いいや。」と、マッキーがいいました。「ちかってもいいよ。」
「それじゃ、五十マークにしよう。」
と、エーミールはいい、受取りを書き、サインしました。
「さあ、ちびさん、きみもサインしたまえ！」
火曜日くんは、受取りの下に名を書きました。エーミールは、あいてに紙きれをつきつけましたが、ミスター・アンダースはおうじませんでした。
汽船は船つき場に近づきました。
「すきなようになさい。」
と、エーミールはあらたまっていいました。
汽船はとまり、つながれました。エーミールはいいました。
「よろしい。じゃ、船長をつれてくる。」
かれは、ブリッジにむかっていき、階段をあがろうとしました。
「そら！」
と、ミスター・バイロンはさけんで、まっかになりながら、紙入れを上着からひきだし、エーミールに紙幣をつきつけました。エーミールは、紙幣をとりました。五十マークでした。
「どうぞ、受取りを。」と、エーミールはいいました。
あいての男は、トランクをもちあげました。
「その紙くずをもって、うせやがれ！」
そういって、かれは上陸しました。マッキーもついていきました。かれはもう一どふりかえりました。
「ジャッキーによろしく！」
かれは、アンダースという大男のあとから、ちょこちょこ歩いていき、やがて見えなくなりました。エーミールは、受取りをズボンのポケットにいれました。
それから、まもなくかれと火曜日くんは、停車場のなかに立って、時間表をしらべていました。エーミールは、肩をすくめました。
「もう汽車がないよ、ちびさん。汽船もない。それでも、すぐコールスビュッテルにもどらなきゃならない。ほかの連中がどうなったか、知らなくちゃ。そのあいだに、ついていてくれればよいが。」
ちびの火曜日くんはいいました。
「じゃ、歩いていこうか。」

エーミールはうなずきました。
「三時間でいけると思うね。」
「じゃ、いこう！」
と、火曜日くんは、つかれた顔でいいました。
「夜の砂漠の行進開始か、外人部隊のような気がするね。」
「ぼくは、そんな気もしないね。」と、エーミールはいいました。

グスタフと教授くんとピコロが、難破したヨットのなかで眠っているあいだに、シュマウフ船長が、バルト海を走っている商船の船室で熱いポンスを味わっているあいだに、エーミールと火曜日くんがマルクグラーフェンハイデへの暗い国道を歩いているあいだに、デンマーク旅行の一行は、オペラ座むかいのコペンハーゲン・ホテルで、たのしく食事をしていました。ゼーラント島のバス遊覧や、ハムレットの墓まいりや、ヘルジンゲール城の見学のため、おなかがすきました。みんなは、愉快に話しあい、わらいました。
教授くんのおかあさん、ハーバーラント夫人だけは、ふだんよりなおいっそうしずかでした。かの女は、いつものように、微笑さえしませんでした。

「いったいどうしたの？」と、法律顧問官がたずねました。
「頭痛？」
「どうしたのかわかりませんけど、心配ですの。コールスビュッテルで、なにかぐあいのわるいことがあるような気がしますの。」
顧問官は、妻の肩に腕をのせました。
「なにをいうのさ！　おまえのやみつきの、とりこし苦労だよ。旅にでるとおまえはいつだって、いまにもれんがが子どもの頭におちやしないかと思うんだ。」と、かれはわらいました。
「少年たちは、ひとりだちでのびることに、熱中しているんだ。そのじゃまをしてはいけない。じゃまをすると、いこじになる。いや、おかあさん、陽気になりなさいよ。」
かの女はほほえみました。でも、それは、夫を安心させるためにすぎませんでした。

一時間後のことでした。ハイデクルークへの暗い国道で、一台の牛乳をはこぶ馬車が、ゆっくり歩いているふたりの少年をおいこしました。御者は、車をとめました。
「きみたちは、いったい、どこへいくんだね。」

「コールスビュッテルへ。」と、大きいほうの少年がさけびました。「すこしのせていってもらえませんか。」
「うしろにのりな！」と、御者はぶあいそうにいいました。
「でも、眠っちゃいけないぜ！　馬車からおちるからな。」
エーミールは火曜日くんをのっけてやり、自分もそのそばによじのぼりました。馬車は、さきへすすみました。一分たつと、ちびの火曜日くんは眠ってしまいました。エーミールは眠ってる友だちをしっかりだいて、暗い森のなかと星空を見あげました。かれは、一日のことを考えなおしました。
「なにか、まちがったことをしたかな。これから、ジャッキーはどうなるだろう？　グスタフと教授くんはどこにいるだろう？」
眠っている火曜日くんは、バタパンの包みをもったまま、両手をエーミールの首にまきつけました。一羽のフクロウが、音もなくこずえを飛びこしました。馬がおびえました。御者は、ぶつぶついいながら、馬をしずめ、それから、ふりかえって、少年たちになにかきこうとしましたが、エーミールの腕にだかれて、ぐっすり寝こんでいる火曜日くんを見ると、だまって、また馬のほうを見ました。
エーミールは、ひどくさびしい気持ちになりました。

第十二章　船長かえる

水曜日の早朝、シュマウフ船長は、コールスビュッテルに入港しました。荷あげする労働者たちが、もう波止場に立っていました。船長は、税関吏ときまりの手続きをすますと、上陸しました。ひやりとしたので、熱いコーヒーを飲むため、海浜ホテルにのぼっていきました。

ボーイが立ちさると、あわただしく主人があらわれ、船長にあいさつし、たずねました。

「あなたのおいごさんが、どこにいるかごぞんじですか。」

船長は大いにわらいました。

「いつも、いいごきげんですな。あの腕白をよこしてください。ことばをかけてやりたいんで。」

「ところが、ここにいないんですよ。ピコロは、きのうは非番でしたが、それっきり、もどってきません。それに、きのうの晩から、ミスター・バイロンと、ふたごのひとりが、かげも形もなくきえてしまいました。めんどうなことばかりあるもんですな！」

船長はとびあがり、

「コーヒーの注文はやめてくれ！」

と、どなりました。そして、年とった船乗りの足で、走れるだけ早く、ヨットの波止場へかけていきました。かれのヨットは、いませんでした。ひざの力が、ぬけてしまいました。かれは助けをもとめるように、あたりを見まわしました。すると、ヨットをつなぐくいに、紙きれのぶらさがっているのを見ました。

かれはひざをついて、紙きれをもぎとり、さっと読みました。それは、まえの晩のエーミールのメモでした。

船長は、やっとの思いで立ちあがり、おもい息をしながら、町へ走っていきました。ようやく、海べの別荘の前に立ち、かれは庭木戸をおしあけ、玄関のベルを鳴らしました。玄関には、かぎがかかっていたので、家のまわりを走って、ベランダの窓からのぞきました。

食卓のいすに、エーミール・ティッシュバインが腰かけてひきずってきて、ふとんをかけてやったのです。ぼくはいすに腰かけて、朝になるのをまち、水上警察に急報しよう、それからジャッキーに、できたことについて覚悟をさせ、とりあえずなぐさめとして、五十マークやろうと思ったのです。ヨットが見つからなかったら、コペンハーゲンに電報をうつつもりでした。ホテル・イギリス館に。」

かれは、肩をすくめました。

「ところが、ぼくは、うっかり寝こんじゃったんです。船長さん、どうかかんべんしてください。さて、どうしますか。」

老船長シュマウフは、ドアのほうにいきました。

「わしは、つかえるモーターボートをぜんぶかりだす！　海をくまなくさがさなくちゃならん。友だちをおこしなさい。そして、港におりてきなさい！」

かれは、いそいで走りさりました。

エーミールは、ソファーにあゆみより、火曜日くんをゆりおこしました。ふたりは、すばやく歯をみがき、さっと顔を洗い、火曜日くんが前日じゅうもって歩きまわったバタパンの包みのひもをといて、それをかじりながら家をかけだしました。

十字路で、エーミールは立ちどまりました。

壁ぎわのソファーには、ちびの火曜日くんが横になって眠っていました。ラクダの毛のかけぶとんにくるまっており、まくらから頭のてっぺんだけがのぞいていました。

ベランダのドアも、かぎがかかっていました。船長は指で窓ガラスをトントンたたきました。はじめはかるく。しかし、少年たちは目をさましませんので、だんだん強くたたきました。

とうとうエーミールが頭をおこしました。はじめはすっかり寝ぼけていましたが、きゅうに、目が生きかえりました。かれはおどろいて、ベランダを見まわしました。いろいろなことを、思いだしたらしく、くしゃくしゃになった髪に、手をつっこみ、高くとびあがって、ドアをあけました。

「ハンスはどこにいる？」

と、船長がどなりました。

エーミールは、知っていることをのこらず話しました。しまいに、こういいました。

「ぼくたちは、やっとま夜なかに、ワルネミュンデからもどったのです。火曜日くんは、ぜんぜん目をさまさなかったのです。ぼくは、かれを馬車からだきおろし、このソファーにいました。かれは腕と頭を食卓にのせて眠っていました。

「ちびさん、港に走っていきたまえ！　たぶん、船長の役にたつだろう。ぼくはジャッキーをおこして、つれていく。」

かれは、砂丘のほうにかけだしました。

三十分後、二十二そうの快速漁船と、五そうのヨットと、七そうのモーターボートが、コールスビュッテルの港をでました。さん橋のとっさきをはなれると、それらの船はおうぎの形に展開しました。となりあっている船は、たがいに見うしなわないように、申しあわせました。それで、異状があれば、なにひとつ見おとさないはずでした。

シュマウフ船長は、モーターボート「百眼の巨人」号のかじのそばに立っていました。もち主である工場主が、それをかしてくれたのでした。エーミールと火曜日くんとジャッキーとは、ベンチにひざをついて、波の上を注意ぶかく見ていました。ときどきボートはひどくかたむいて、少年たちの顔に塩水がパシャッとかかりました。

ジャッキーはいいました。

「ぼくは、きみたちにまだお礼をいっていなかったようだね。あんまりおどろいたせいだよ。じゃ、ぼくの熱い感謝をうけてくれたまえ。お金にたいしてもね。」

かれは、ふたりの手をにぎりました。

「こんどは、おじさんのことが気がかりだ。ぼくより、ずっと不安でたまらないだろうからね。」

かれは船長のそばにいき、元気よくうなずきかけ、

「心配しないようにね、船長さん。」といいました。

「なにも悪いことはおこっていませんよ。ぼくは、そんな気がします。ぼくは第六感をもってるんです。」船長は、身うごきもせずに正面を見つめていました。

ジャッキーは四方を見まわしました。左の沖のほうで、一そうの黒い漁船が波のあいだで、縦にゆれていました。ずっと右のほうには、まっ白なヨットがいました。

「船長さん、おたずねしますが、このへんには、どこか砂州か、小さい島か、なにかそんなものはありませんか。」

老船長は、一秒間かじをはなしました。船は、こまのように、波のあいだをまわりました。船長は、かじをしっかりにぎりしめました。まえよりもしっかり。

「なるほど、そいつは思いつきだ。それがあたるといいがな！」

と、かれは、すっかりこうふんしてさけびました。それいじょう、なにもいいませんでした。

しかしかれは、進路をかえました。

三人のロビンソンはたいそう早く目をさましました。ひどく寒さにふるえて、船室からはいだし、太陽が高くのぼるまで徒手体操をしました。

それからすこしばかり、水をすすり、かんづめの朝食をすませました。からになったかんは、口をあいて、砂のなかで雨水をまっていました。しかし、あいにく、雨はふりませんでした。それどころか、空はちかごろになく青く晴れていました。

「天気がよいために、こんなにそこぬけに腹のたつことがあろうとは思わなかったな。新しい経験はつきないものだね。」と、グスタフはいいました。

教授くんは、腹をたてました。

「もし、かんづめのかんがなかったら、いまごろは、どしゃぶりになっていることだろう。いつでもこうしたものさ。」

「しかし、なにごとにもとりえはあるよ。」と、グスタフがこたえました。

「休暇中いちばんおもしろかったことについて、もう作文を書いてしまっていたと思いたまえ！　考えるまでもなく、きみは、そんなノートを、むぞうさに火のなかになげこんだだろう。」

「ぼくたちは、生きているうちに、二どと作文を書くことがあるかどうか、疑問だと思うね。」

と、教授くんがゆううつそうにいいました。グスタフはさけびました。

「それだけのことなら、たいした苦痛でもないね。だが、ぼくのオートバイに二どとお目にかかれないかと思うと、気がめいるな。」

かれはなにげなく口笛をふきました。

ハンス・シュマウフは、白いシャツをぬいで、旗づなに高くひるがえしました。

「こうすりゃ、きっと見つかりやすいだろう。」と、かれはいいました。

あとで、かれらは、もう一ど「クニグンデ四世」号をうかせようとこころみました。ヨットは、びくともしませんでした。

「こいつめ、夜のうちに根をはやしてしまった。だめだ。」

と、ピコロがいいました。

三人が、また砂にうずくまると、かれはいいました。

「さあ聞いてくれたまえ！　この不幸は、ぼくの責任だ。飲み水は、あすの朝までしかもたない。きょうの午後までにさがしだされなかったら、ヨットの箱のなかにある救命ぶくろをからだにまきつけて、陸においでいってみよう。たぶん、とちゅうで、漁船か汽船をつかまえることができるだろう。」

「ぜったいにいかん！」と、グスタフがさけびました。

「だれかひとりがおよいでいくとすりゃ、むろん、ぼくにかぎる！」

「ぼくがまきおこしたことだから、ぼくがかたづけるよ。」

と、ピコロが説明しました。

「そんなことは問題にならない。」と、グスタフがいいました。「いちばんよくおよげるものがおよぐんだ。わかったかい？」

「それじゃ、ぼくだ！」と、ピコロがいいました。

「いや、ぼくだ！」と、グスタフがこたえました。

「ぼくがおよぐ！」

「いや、ぼくだ。」

ふたりはとびおきて、つかみあいをしようとしました。

すると、教授くんがめいめいの顔に、ひとにぎりの砂をぶつけました。ふたりは、はげしくつばをはき、目をぬぐいました。

「きみたちは、すっかり逆上してしまったのか。」

と、教授くんはしずかにたずねました。「それより横になって、二、三時間眠りたまえ！　そうすりゃ、飲み食いをわすれるから、食料と飲料も長くもつわけだ。」

ふたりは、おとなしく砂のなかに寝て、目をとじました。

教授くんはヨットのなかに腰をおろして、マストにもたれ、水平線を見まもりました。

モーターボート「百眼の巨人」号は、ひたむきに波をのりこえていました。ときどき少年たちは、しっかりつかまるのをわすれると、ベンチから反対がわに、もんどりをうちました。火曜日くんは、もうひたいにこぶをこしらえていました。シュマウフ船長は、かじのそばに、銅像のように立っていました。少年たちは、船長のまなざしをおって、大海原を見わたしました。

「あすこだ！」

と、とつぜん船長がさけび、遠方を指さしました。しかし、少年たちにはなにも見えませんでした。

「白い旗だ！」と、船長は感激してさけびました。「かれらだ！」

かれは、ジャッキーにむかって、うなずきました。

「さっきのきみの問いには、千金のねうちがあったよ、ジャッキー。」

「どんな問いです、船長さん？」

「ここに島はないかって、いう問いさ。かれらは、ヤシのある島にのりあげたんだ。いや、わしの腕を見せてやるよ。」

と、かれはこたえました。

少年たちは船長のそばにつめかけました。ジャッキーはいいました。

「ぼくはさいしょから、なにも心配なことはおこってないと思ったよ。」

船長は、ほっとしてわらいました。

「まったくきみは第六感をもってるよ！」

エーミールはさけびました。

「ぼくにも、なにか白いものが見えるよ！　マストも！」

「ぼくも！」とジャッキーもさけびました。

火曜日くんには、まだなにも見えませんでした。エーミールはおしえてやろうとしたとき、火曜日くんが泣いているのに気づきました。日に焼けたほおを、なみだがながれていました。

「どうしたのさ、ちびさん？」

「ぼくは、とてもうれしいんだよ。」

と、火曜日くんはささやきました。

「でも、ぼくが、グスタフや教授くんのために泣いたって、いっちゃいけないよ。そうでないと、あの大ばかどもは、また図にのるからね。」

かれは、なみだをながしながら、わらいました。

エーミールは、だまっていると約束しました。

「三人だ！」と、船長がさけびました。

「わしの『クニグンデ四世』号もいる。ちょっとまっていろ、すぐ助けてやるぞ！」

グスタフとピコロは、ホッテントットのように、小さい島の上をはねまわりました。かれらは手をふり、歓声をあげました。

教授くんは、その場をうごかずに、指で砂のなかに絵をかいていました。やがて、立ちあがると、からのかんづめのかんをひろいあげて、ひとつひとつふかい思いをこめて、海のなかになげこみました。

ピコロは、ヨットによじのぼり、白い旗にしたシャツをとりこんで、いそいで着ました。

そのとき、もうモーターボートは、わきたつあわのなかにつっこんでいました。モーターがとまりました。船長は空中になわをなげました。ハンスは、それをたくみにつかまえ、ヨットのともにむすびつけました。二そうの船は、ぴたりとくっついてならびました。

「ばんざい、あほうめ！」と、グスタフがどなりました。

シュマウフ船長は、第一に、「百眼の巨人」号から「クニグンデ四世」号にとびうつりました。

かれのおいは、おじさんの前にあゆみよっていいました。

「おじさん、みんなぼくのせいだよ！」

船長は、したたか音のするほど、おいのほおをはりとばして、どなりました。

「みんなぶじで、なによりだ！」

第十三章　応急処置

おびただしい救助船隊の帰港と難破少年の到着は、ちょっとしたお祭りになりました。さん橋や、波止場や、通路にさえ、土地の人や海水浴客がぎっしりつめかけて、手をふりました。ちょうどお昼どきだったので、およそ、二十けんの台所で料理がこげつきました。

シュマウフ船長は、少年たちをまわり道させて、海浜ホテルにやりました。かれ自身は、そうさくを助けてくれた漁師や船乗りたちをつれて、村の居酒屋にいき、そこで、ビール二たると地酒を二はいずつおごりました。船長は、ビールを飲みほうだいのお客さんたちにへんぱいし、お礼をいうと、大またで、まっすぐ海浜ホテルへいき、自分と少年たちのため、おいしい昼食を注文しました。

かれらは、自分たちだけでおちつくため、「小さなあつまりのためのへや」に腰かけて、たらふく食べました。食べながら、たがいに、自分たちの体験したことをくわしく話しあいました。ハンス・シュマウフは、じっさいはこのホテルの見習いボーイでしたが、きょうの昼食には、友だちとならんで、自分のすぐ目うえのシュミット・ボーイに、たいそうていねいにお給仕してもらいました。

食後には、バニラ・ソースのかかっている、チョコレート・プディングがでました。

「諸くんのうち、三人が味わったロビンソン物語については、だまっていてもらいたいな。」と、船長がいいました。

「あす、おとなたちが、デンマークからかえってくる。この小さいできごとについちゃ、おとなにひとことも知らせる必要はない。もしひみつにしきれないようなことがあったら、ばんじ、わしのせいにするように、諸くんにたのんでおきたい。そうすりゃ、わしがうまくやる。」

エーミールと教授くんは、とびあがりました。

船長は、手をふって、それをおさえました。

「きみたちがいおうとする気持ちは、わかっている。きみたちは、むろんほこりをもっていて、責任を自分でしょいこもうとしている。」

かれは頭をふりました。

「わしが腹痛をおこしたといえば、それでいいんだ。おとなをいじめないでくれ。大きい者は神経が弱いんだ！」

エーミールと教授くんは、また、いすに腰かけました。

「じゃ、いいね。」と、船長はやさしくいいました。

「それじゃ、シュマウフおじさんは、これから材木を売りにいく。」

かれはふりむきました。

「ボーイさん、勘定！」

食後、少年たちは港へかけおりていきました。ハンスだけは、ホテルにのこり、服を着かえ、なにごともなかったかのように、ピコロにかえりました。ほかの者たちは、ヨット「クニグンデ四世」号から、食料ののこっている買いものかごをもちだして、にぎやかに、別荘の食料室にはこびました。グスタフはもったいぶって、

「きょうは、いよいよぼくが当番をするよ！」

と、どなりました。かれは在庫表を調理台にのせて、こころえているかぎり記入しました。（あんまりよくは、こころえていませんでした。）

それからかれらは、ジャッキーをホテルにやって、トランクと七つ道具をもってこさせました。そのあいだに、かれらは、まえにクロチルデから聞いていた、つかっていない、けいたい用のベッドをかれらのへやにくみたてました。ジャッキーは、もうホテルにとまっていられないからです。

それがかたづくと、教授くんがいいました。

「じっさい、ここでうんと眠らなきゃならないところだ。」

かれは、南国のヤシの木があったにもかかわらず、島でかぜをひいたので、ひどく鼻声で話しました。

「だが、眠るのをしばらくのばして、さしあたり、ジャッキーのために、どうしたらいいかよく考えなければならない。ミスター・アンダースに五十マークはきださせたのは、まったくすてきだったが、それだけじゃ、ジャッキーは大きくなれない。かれには両親もないし、兄弟もない。いつ、新しくやとってもらえるかも、わかりゃしない。なにか案があるかい？」

ちびの火曜日くんは、手をあげました。

「さあ庭にでよう。ぼくたちは四人の探偵で、庭には四すみある。四人の探偵が、めいめいひとすみにすわって、いっし

ょうけんめい考えるんだ。五分間たったら、庭のテーブルにあつまって、四すみで思いついたことを、報告しあおう。」

この提案は、うけいれられました。かれらは庭にかけだし、めいめい、べつのすみにいって考えこみました。

天気は、おそろしく晴れわたっていました。キリギリスはマンドリンをひき、バッタは草から草へはねていました。ハンの木のやぶでは、ツグミが笛をふいていました。

五分間たつと、かれらは約束どおり、大きなまるいテーブルにあつまって、陪審官のように、しかつめらしく着席しました。エーミールがぐるりと見まわしていいました。

「ひとり欠けているような気がする。」

「グスタフだ。」と、火曜日くんがたしかめました。

三人は、グスタフのずみにかけよりました。オートバイの名人は、草のなかにのびて眠っていました。

教授くんは、強くゆすぶりました。

「おい、お若いの！」

グスタフは、やっと目をひらきました。

「なにごとだ？」

「きみは、考えなきゃいけないんだよ。」

と、ちびの火曜日くんがきびしくいいました。

グスタフは、からだをおこしました。

「じゃましちゃ、考えられんじゃないか。」

「ああ、そうか！」と、エーミールがさけびました。

「きみは考えたんだね。どんなことを思いついた？」

「なんにも！」

みんなわらいました。それから、かれをひっぱりおこして、テーブルにもどりました。

「会議をひらく。」と、教授くんが宣言しました。

「エーミールの発言。」

エーミールは立ちあがりました。

「諸くん、あさっての金曜日に、このコールスビュッテルの燈台映画館で、映画『エーミールと探偵たち』が上映される。われわれは気づかれないように、まったくふつうの見物として映画を見ることにとりきめていたが、ひみつをあかして、映画館のもち主にわれわれの名まえを知らせたら、ジャッキーを助けることができると思う。それは、なるほどわれわれの主義には反するし、われわれのこころよしとしないところだけれど、必要とあれば、背に腹はかえられない。そうすりゃ、たとえば、映画館のもち主は新聞に広告をだしてくれるだろう。あるいは、広告塔にはるプラカードに、少年探

偵たちが上映のさい、いくどか、あいさつにでるということを書いた紙きれを、はりつけさせてくれるだろう。そうすりゃ、きっと、見にくる子どももふえる。われわれのおかげで、よけいもうかるかわりに、第一回の上映の収入をジャッキーにやることができる。」

エーミールは腰をおろしました。

ほかの者は考えこみながらうなずきました。

「反対はありませんか。」と、教授くんがたずねました。

「提案はまったくすてきだ。われわれは、ジャッキーをすくうために、名のらなければならない。」

かれは息をつぎました。

「エーミールの提案は満場一致可決。ほかの方法はない。そこで、こんどはぼくが発言する。われわれのひとりが『海水浴場新聞』の編集部にいって、編集者と話をすることを、ぼくは提案する。そして、われわれのひとりの書いた記事をすぐ印刷してもらわなければならない。それには、ジャッキーがミスター・アンダースからすてられたこと、コールスビュッテルの子どもらぜんぶ、および、近くの海水浴客は、ジャッキーのために立ちあがり、金をあつめてやる義務のあることを、よくわかるように書くんだ。そして数日後に、いくら金があつまったか、報告するのだ。」

かれは着席しました。

「すばらしい！」と、グスタフがさけびました。

「反対はありませんか。なし。教授くんの提案は、可決！火曜日くんに発言をゆるします。」

ちびの火曜日くんは立ちあがりました。

「ぼくは、つぎのように提案します。グスタフが、もひとり、われわれのだれかといっしょに、きょうの午後、オートバイで海水浴場をぜんぶとびまわって、海岸にいる子どもらに、くまなく事件を知らせ、みんなで、ジャッキーをぜひ助けなければならないことを知らせる。海岸の各所に、くわしく書いたプラカードをたててもよい。そうすりゃ、みんな読んで、語りつたえる。」

かれは着席しました。

「大いによい！」と、みなさけびました。

それから、グスタフがいいました。

「ぼくが、なにも思いつかなかったのはしあわせだ。あんまり、いろいろなことを思いついたら、どうしたらよいかわからなくなる。」

かれらは、なおしばらくいろいろ話しあい、それから、べ

ランダにかけこんで、クレヨンでプラカードを八まい書きました。コールスビュッテルに一まい、グラールに一まい、ミュリッツに一まい、ハイデクルークに一まい、ワルネミュンデに一まい、ハイリゲンダムに一まい、アーレンスフープに一まい、それからブルンスハウプテンに一まい。

それから、グスタフは、オートバイをあずまやからひきだして、往来におしていきました。火曜日くんが、八まいのプラカードをもって、荷台にのりました。出発です！　エーミールと教授くんが、ふたりのうしろから手をふりました。

ジャッキーが荷物をもってくると、ふたりはかれに家の番をまかせ、かれひとりを「監督官」としてのこし、町にかけだしました。なぜ、そんなにいそいだかは、かれに話しませんでした。

エーミールが燈台映画館の事務所にはいると、映画館のもち主バルテルマン氏は、

「時間がない！　またこのつぎ！」

と、いいました。五分たっても、少年がでていかないので、かれは机から顔をおこしました。

「まだいたのか。なにごとかね？」

「ぼくは、エーミール・ティッシュバインです。」

バルテルマン氏は、いすのうしろにぐっともたれました。

「それがどうした？」

「ぼくは、エーミール・ティッシュバインです。あなたが、あさって上映する映画は、ぼくのやったことをもとにしてつくられたのです。」

「それは愉快。」と、映画館のもち主はいいました。「ほんとにうれしい。それで？」

エーミールは、少年探偵たちの計画を説明しました。

バルテルマン氏は、目を半分とじました。この人はそうしないと、ものを考えることができないのでした。それから、かれは舌を鳴らしました。新しい馬が広場にひきだされたときの馬商人のように、バルテルマン氏は、うまい取引きだとかぎつけました。

「きみたちがまもってやろうという少年のために、第一回の上映の収入をきみたちにあげる！　ただひとつの条件つきだ。きみたちは、一週間のあいだ、上映がすむごとに舞台にあらわれる義務をおわなくちゃいけない。」

「まる一週間！」と、エーミールはさけびました。

「上映がすむごとに？　ただ一回舞台にでるだけでも、ぼくたちはいやなんです。ぼくたちは道化役者じゃないんです！」

「地獄のさたも金しだいさ！」

と、バルテルマン氏は主張しました。

少年は頭をひねりました。

「よろしい。」と、それからいいました。

「ほかにしようがない。しかし、そういう義務をおうなら、ぼくたちは、さいしょの日の収入ぜんぶを要求します。つまり、はじめの三回の上映の収入を。」

バルテルマン氏は目を半分とじ、

「うでききの商人だな、ええ？」

といい、うなずきました。

「しょうちした！」

そこで、かれは契約をタイプライターで打ちました。うつしも一通。ふたりは、その二通にサインして、めいめい一通ずつしまいました。

「まちがいなしだ。」と、バルテルマン氏はいいました。「金曜日、おくれないように。」

エーミールは立ちさりました。契約書が、ポケットのなかで、カサカサ音をたてました。

映画館のもち主は、すぐに電話にむかって、「海水浴場新聞」の広告部長と連絡をとり、新しい大きな広告をたのみました。それから、バルテルマン氏は、「プラカード有限会社」に電話をかけ、コールスビュッテルとそのほかの海水浴場にかかっているプラカードに赤い横線をひいて、大きく、

「エーミールと少年探偵たち、一週間のあいだ上映ごとに登場！」

と、書くように注文しました。

そのあいだに、教授くんは「海水浴場新聞」社のへやで編集長と相談したとおり、「海水浴場の子どもたちぜんたいによびかける。」という文章を書きました。

かれは、ジャッキーの不幸と窮境とを説明し、少年軽わざ師の身のうえを、寄付金でさしあたりやすらかにしてやるようにうながし、「エーミールと少年探偵たちのために、とくべつのたのみによって、テーオドル・ハーバーラント、別名、教授。」と、サインしました。

かれは、その文章を隣室の編集長のところにもっていきました。編集長は、それをゆっくり読みとおして、給仕をよび、

「印刷所にいって、この記事をすぐ組みにまわし、第一面に

はさむようにいいなさい。ぼくもあとからいく。」
と、いいました。給仕はでていきました。
電話が鳴りました。編集長は受話器をとり、
「グラールから？」といいました。「そちらは？　火曜日くん？　ああ、そう！　うん、ちょうどきています。」
かれは、受話器をお客さんにわたしました。
「なにかかわったこと？」と、教授くんはたずねました。
「そうかい、大いにけっこう。うん、プラカードの文句はそれでいいよ。ぼくらのよびかけは、あした新聞にでる。つかれたかい？　ぼくも。うまくやりたまえ！　あいことば、エーミール！」
かれは受話器をかけました。
「なんのプラカードです？」と、編集長がたずねました。
教授くんは説明しました。
「それは、よく組織された隣人愛の模範的な例だ！」
と、編集長は感心してさけびました。
「それはそうと、きみの書いた文章はすばらしい。きみはなににになるつもりです？」
「わかりません。」と、教授くんはこたえました。
「小さいころは、建築家になるつもりでしたが、今はもう、そう思いません。今いちばん興味をもっているのは、元素の破壊、原子論、陽電子と陰電子などです。ぜんぶはわかりませんが、これは、たしかにたいしたしごとだと思います。では、ぼくはまた、友だちのところにいかねばなりません。」
かれは立ちあがって、お礼をいいました。
「こころえましたよ。」
と、編集長はいい、お客さんをドアのところまでおくりました。

おなじころ、グスタフと火曜日くんは、グラールの海岸に立っていました。オートバイと七まいのプラカードは、さん橋にたてかけてありました。八まいめのプラカードを、グスタフが、海水浴場管理事務所の掲示のでる黒い板に、びょうでとめていました。
数人の子どもらが、ものめずらしそうに立ちどまっていました。グスタフは警笛をおしました。
子どもたちの数はふえました。おとなも立ちどまり、みんなプラカードを見ようとしました。
火曜日くんは、グスタフにいいました。
「すこしうまいことをいわなくちゃいかんよ、ね？　肩ぐるまをしてくれたまえ！」
グスタフがかがむと、火曜日くんは友だちの肩によじのぼりました。それから、かれは手をあげました。しずかになりました。
火曜日くんはさけびました。
「諸くん！。ぼくたちは、きみたちの助けをかりにきました。むろん、ぼくたち自身のためではありません。ひどいめにあっているひとりの少年のためです。すこしくわしいことは、この掲示板にはったプラカードに書いておきました。もっとくわしいことは、あす『海水浴場新聞』にでます。まだ読めない人は、読んでもらってください。ぼくたちは、きょうの午後八か所の海水浴場にいきます。子どもたちは、ぼくらを見すてはしないと思います。ぼくらは、エーミールと少年探偵たちです。こういうのは、きみたちをだますのだと思われたくないからです。たぶん、諸くんは、もうぼくたちのことをお聞きになったでしょう。ぼくをかついでいるのは、警笛のグスタフです。」
グスタフがおじぎをしたので、火曜日くんは前にのめって、砂のなかにおちそうになりました。
「あんたは、たしか、ちびの火曜日くんね！」と、ひとりの少女がさけびました。「あたったでしょう？」
「そうです。だが、それはたいしたことではありません。かんじんなのは、寄付金がうまくあつまることです！　さて、ぼくらはいそいで、さきへいかなければなりません。グスタフ、おろしてくれたまえ！」
「ちょっとまった！」と、グスタフがうなりました。
「がらにないことだが、思いついたことがあるよ、聞いてくれたまえ！」と、かれはどなりました。
「きみたちは、あつめた金を貯金にいれておいてもいいよ！」
そこでかれは火曜日くんをおろしました。ふたりの探偵は七まいのプラカードをもって、オートバイにのりました。
「金曜日に、またお目にかかります。」と、火曜日くんがさけびました。
「燈台映画館で！　あいことば、エーミール！」
「あいことば、エーミール！」と、グラールの子どもらはさけびました。
オートバイは、村につうじる林道を地ひびきをたてて走りました。グスタフは、警笛を鳴らしました。ジャッキー・バイロン、別名パウルヘン・パハウルケのための宣伝ドライブは進行しました。

第十四章　まじめな話

木曜日に、コペンハーゲン旅行の人たちが、コールスビュッテルにもどってきました。デンマークの島ボルンホルムからきたのでした。クロチルデ・ゼーレンビンダー嬢は、まだかなり青い顔をしていました。かの女は汽船で酔って、まだ地面がぐらぐらするといいました。

法律顧問官は、薬箱から、カノコソウの水薬をもってきて、かの女に飲ませました。するとかの女は、

「こんなことでへこたれて、はじさらしだわ！」

といい、台所にかけこみました。そこで、かの女は少年たちの在庫表と食料室をしらべました。なにもかも、申しぶんなくととのっていました。はじめは信じようとしなかったほどです。しばらくしてかの女は、すこしふらふらしながら昼食のため、買い出しにでかけました。

ほかの人たちは船に酔いもせず、コペンハーゲンやゼーラントやボルンホルムのことをしきりに話しあいました。ポニー・ヒュートヘンは、メモのなかからいくつか見出しの文句を読みあげました。しかし、心の底では、うちにもどったのをみんなよろこんでいました。

エーミールのおばあさんは、

「ホテルのベッドは、やっぱりホテルのベッドですよ。わたしは、ひとつためしに、食事まで、自分の寝床にはいってみますよ。」

といい、ポニーといっしょに二階にあがりました。法律顧問官は、るすのまに、なにか重大な気がかりなことはおこらなかったか、とたずねました。

少年たちは、ヤシのはえた島のことを考えましたが、船長とその忠告を思いだして、まごつきながら頭を横にふりました。

「わたしの予期していたとおりだ。」

と、法律顧問官はいいました。そして、夫人が火曜日の晩、不安におそわれたことを話して聞かせ、得意そうにわらいました。

「女というものは、いつも心配性だよ。おかあさんはひどくうなされてね、きみたちが、たいへんな危険におちいっていると信じたのさ。これを見ても、敏感な女の人のなやまされる心の声なんてものに耳をかすのが、どんなにあやまりであるかということが、はっきりわかるだろう。めいった気分のまぼろしにすぎないのさ！」

少年探偵たちは、たがいに顔を見あわせましたが、用心ぶかくだまっていました。火曜日くんは、この機会を利用して、海べの別荘をひきあげることにし、寝まきと歯ブラシを隣室からもってきて、あつくもてなされたことにお礼をいい、両親のとまっている宿にかえりました。

それから教授くんは、おとうさんに、ミスター・バイロン追跡の失敗や、ジャッキーをすくうための自分たちの計画とこころみについて、あらましを話しました。

「そして、ジャッキーはゆうべから、ぼくたちのけいたい用ベッドに寝ているんです。今は、ハンスをたずねにいっています。さしつかえなかったら、とうぶん、ここにとめてやります。」

ハーバーラント氏は、しょうちしました。

「きみたちは、自分らの独立心をよく発揮した。その調子なら、われわれおとなは、すぐにも旅だてるよ。」

かれらは、小さい島でのロビンソン・クルーソーのような生活を思いだし、あまりいい気持ちはしませんでした。

グスタフは、むろんでしゃばりで、

「それでも、おとながいるのは、ときにはまったくべんりですよ。」といいました。

少年たちはおどろきました。エーミールは、グスタフの足を強くふみました。

グスタフは顔をしかめました。

「いったい、どうしたの？」

と、ハーバーラント顧問官がたずねました。

「胃がいたむんです。」

と、グスタフは急場のいいのがれをしました。

顧問官はすぐ立ちあがって、カノコソウの水薬をもってきました。グスタフはぴんぴんしていましたが、カノコソウを飲まねばなりませんでした。

ほかの者たちはいいきみだと、満月のように、口をあけてわらいました。

「それでよくならなければ」と、顧問官はいいました。「十分たって、もうひとさじ飲ましてあげる。」

「もうけっこうです！」と、グスタフはあわをくってさけびました。「もうすっかり元気です。」

顧問官はよろこび、「そうかい。」と、満足そうにいいました。「カノコソウの水薬におよぶものはないよ。」

昼食後、船長がすがたを見せました。みんなは、まだ食卓についていました。船長は、デンマーク旅行者たちにあいさつしてから、でたばかりの「海水浴場新聞」をとりだしていいました。

「少年諸くんは、思いきったことをやるね！　あのジャッキーのため、バルト海の半分を動員するんだね！　それはそうと、あの子はどこにいる？」

「ピコロのところに、あなたのおいのところに。」と、エーミールがこたえました。

船長は、新聞をおとなに見せました。少年たちは、そのうしろにまわって、みんないっしょに、教授くんのよびかけを読みました。書いた当人だけは、腰かけたままでいました。自分の文章が、どんなに印刷されているか、見たくてたまらなかったのですが。

ひきつづいて、船長は、燈台映画館の大きな広告を見せました。そこには、エーミールと少年探偵たちが、一週間のあいだ、上映ごとに登場すること、第一日の収入は、ジャッキー・バイロンにやることなどが、しるしてありました。

ポニーは感動して、

「わたし、おじぎをしにでるのに、どのきもの着たらいいでしょう？」とたずねました。

「新しいのをベルリンから、とりよせようかしら。」

「なんてふざけてるんだ！」

と、グスタフはかんかんになってどなりました。

「やりきれないな。」と教授くんもいいました。「舞台にでることを考えると、道化師みたいな気がするよ。」

「しかたがないさ。」と、エーミールがいいました。「目的は、手段を神聖にするんだから。」

ポニーは立ちあがりました。

「どこへいくの？」と、おばあさんがたずねました。

「うちへ手紙を書くの。新しいきものをたのむのに。」

「ぐずぐずしないでおかけなさい！」と、おばあさんが命令しました。「血まよっちゃいけないよ！」おばあさんは、頭を横にふりました。「女ってものは、ときどき、とてもばかになるものだよ！」

「そのとおり。」と、グスタフがいいました。「このお嬢さん、もうグレタ・ガルボにでもなったつもりでいる。」

ポニーはつぶやきました。

「たわけもの！」

グスタフは、なにも聞こえなかったようなふうをして、説明しました。

「ぼくが女の子だったら、悲しさのあまり、尼寺にはいるだろう。」

「わたしが男の子だったら。」と、ポニーがこたえました。

「あなたに二つ三つ食らわしてやるわ！」

船長が、ジャッキーと話をしにでかけたところ、ジャッキーはホテルにいないで、テニスコートにいました。船長は、そこでホテルからテニスコートにやっていき、小さな軽わざ師にあいました。ジャッキーは、テニスの球ひろいをしていました。船長を見ると、かれはうれしそうにさけびました。

「アホイ、船長さん！」

「アホイ！」と、老シュマウフ船長もこたえました。「ちょっと、きみに話があるんだが。」

ジャッキーは、プレイヤーのひとりに、二個のボールをなげ、さくのそばにおちているボールを、三つひろいあげながらいいました。

「残念ながら、今はぜったいにだめです、船長さん。ごらんのとおり、ぼくは、ここではたらいてるんです。一時間に五十ペニヒもらうんです。生きていかねばなりませんからね？それでなくても、ぼくはのらくらしてるのはきらいです。」

「わかった。」と、船長はいいました。「いつ、アルバイトはおわるんだね？」

「一時間そこそこです。それで、もうたのまれなければ。」

「じゃ、一時間もしたら、ぼくのとこにやってきたまえ。そのとき、きみがもうたのまれなければ。」

「こころえました、船長さん、アホイ！」

と、ジャッキーはさけんで、プレイヤーのひとりに、またボールを二つなげました。

「アホイ、ジャッキー。」

と、船長はこたえて、のしのしと歩いてかえりました。

そのころおばあさんは、エーミールとポニーをつれて、森のなかを散歩しました。みごとな森でした。木のあいだに、シダ、エニシダ、ヘビイチゴ、クロマメの木、ツボスミレ、

野生の三色スミレなどがはえていました。スイカズラがいちばん高いこずえまで、からみついていました。

ポニーは、ずっとおくれて、花をつんでいました。

「おかあさんには、きちんきちんと手紙をだしているかい？」と、おばあさんがたずねました。

「むろんです！　おかあさんだって、一日おきにくれます。」

ふたりは、草のなかに腰をおろしました。シラカバの枝で、ツグミがぶらんこをしていました。道の上では、セキレイがせわしそうにはねていました。

「わたしも、おかあさんに手紙を書いたんだよ。」と、おばあさんがいいました。

「コペンハーゲンから。」かの女は、一ぴきのコガネムシを見ていました。コガネムシは、草の葉の上で、羽をひろげて飛びさりました。

「おまえはイェシュケ警部さんを、ほんとうはどう思ってるの、エーミール？」

エーミールは、おどろいて顔をあげました。

「どうして、そのことを知ってるの？」

「わたしのむすめが再婚していいかって、わたしにたずねることに、おまえは反対なのかい？」

「ふたりが結婚することは、とっくにきまってることです。」

「ちっともきまっちゃいないよ。」と、おばあさんはいいました。「ちっとも、きまっちゃいない。」

そこへ、ポニー・ヒュートヘンがかけよってきました。かの女は、花たばを見せながら、大きな声でいいました。

「わたし、植木屋さんになりたいわ。」

「かってになりなさい！」と、おばあさんがいいました。

「かってに植木屋さんにおなりなさい！　先週は、おまえは看護婦になりたいっていったよ。先々週は薬屋だって。そうやっていくがいいよ、お嬢さん、そうやっていくがいいよ。でも、消防夫になることだけはゆるしませんからね。」

「適当な職業を見つけるのは、むずかしいもんだわ。」と、ポニーはいいました。

「お金持ちだったら、わたし女流飛行家になるわ。」

「おまえのおばあさんは、車輪をもっていたら、バスになるよ。」と、おばあさんは説明しました。

「さあ、その花たばを別荘にもっていって、花びんにさしなさい！　それ、美しい植木屋のおかみさん！」

ポニーは、森のなかにいたい、といいました。

「いきなさい！」と、おばあさんは、大きな声をだしました。

「エーミールとわたしは、まじめな話があるんだから。」

「わたし、まじめな話が大すきなの。」と、ポニーはいいました。

おばあさんは、孫むすめをきびしく見つめました。

ポニーは肩をすくめ、「ヨハンナ退場して、二どともどってこず。」と、芝居の文句をひきました。そして、かの女は退場しました。

エーミールは、ずっとだまっていました。ポニーが遠くでうたってるのが聞こえました。

「どうして、まだきまってないの。」と、かれはたずねました。

「それは、わたしは、はっきり知らないよ。それで、警部さんをおまえはすきなの？」

「不平はいえませんよ。」と、エーミールはこたえました。

「ぼくたちは、もう、きみ、ぼく、とよびあっているんですもの。ハインリヒという名なの。かんじんなのは、おかあさんが、あの人がすきだってことですよ。」

「そのとおりだよ。」と、おばあさんはうなずきました。

「でも、おまえはその点でおかあさんをうらんでると、わたしは思うんだがね。反対しなくてもいいよ！　おまえのように、りっぱな、親思いのむすこがいれば、夫なんかいらないんだ。と、そんなふうに、おまえは思ってるんだろう。」

「それは多少あたっています。」と、エーミールはいいました。「おばあさんは、ひどく露骨にいっただけです。」

「そうしなきゃならないんだよ、エーミール。そうしなきゃ！　いっぽうが、ことばにだしていおうとしなきゃ、他方が大げさにいうほかないんだ。」

「おかあさんには知られてはならないんです。」と、かれはいいました。

「でも、ぼくは、こんなふうになるとは思わなかった。ぼくたちは一生ふたりで、ふたりだけで、いっしょにいられると思っていた。でも、おかあさんはあの人がすきなんです。それできまったんです。ぼくはなにも気づかれないようにします。」

「ほんとうに！」と、おばあさんがたずねました。

「ときどきかがみをのぞいてごらん。ぎせいをささげる者は、ぎせいの小ヒツジのような顔をしてはならないんだよ。わたしは、近目のおばあさんだけれど、おまえの顔を見るのに、めがねなんかいらないよ。いつかはおまえ、本心をおかあさんに見ぬかれるよ。それからじゃ、まにあわないんだか

らね。」

おばあさんは、手さげぶくろのなかをかきまわして、一通の手紙とめがねをとりだしました。

「これが、おかあさんからわたしにきた手紙だよ。その一節を読んで聞かせてあげよう。そんなことをしては、いけないんだろうけど。でも、おまえには、おかあさんの心がわかっていないことをおしえてやらずにはいられないんだよ。」

かの女は、きちんとめがねをかけて読みました。

「イェシュケさんは、ほんとに親切な、かたぎな、よいかたです。わたしは結婚するとしたら、この人のほかに結婚したい人はありません。おかあさん、あなたにだけうちあけるのですけれど、わたしは、エーミールとふたりだけでいたいのです。むろん、エーミールはそんなことを感づいてはいませんし、気づくこともないでしょう。どうしたらよいでしょう？　わたしも人間のことですから、いつどんなことがあるかわかりません。そのときは、エーミールはどうなるでしょう？　また、わたしの収入がへることだってあります。じっさいは、もうへっているのです。市場で美容院が新しい店をひらきました。美容院のおかみさんが買いものをすれば、どの店のおかみさんも、しぜんとそこへいくようになりま

す。わたしはエーミールの将来を考えないわけにいきません。わたしにとって、それよりたいせつなことはないのです。わたしは、イェシュケさんのよい妻になるでしょう。そう心にちかっています。それだけのねうちのあるかたです。でもじっさいは、たったひとりのよい子エーミールだけを愛しているのです。」

おばあさんは手紙を下において、しんけんな顔で、ゆっくりめがねをはずしました。

エーミールは両腕でひざをかかえていました。青ざめた顔をして、歯を食いしばっていましたが、とつぜん、頭をひざにのせて泣きだしました。

「いいんだよ、いいんだよ。」と、おばあさんはいいました。

「いいんだよ、いいんだよ。」

それから、だまって、エーミールに泣かせておきました。しばらくして、かの女はいいました。

「おまえは、おかあさんだけを愛し、おかあさんはおまえだけを愛している。おたがいに愛していればこそ、あざむきあい、ふかく愛しあっているのに、考えちがいをしあっているのだよ。世のなかはそうしたものだよ。ほんとにそうしたものだよ。」

一羽のカケスが、わめきながら、こずえを飛びこしました。エーミールは目をぬぐって、おばあさんの顔を見つめました。

「ぼくは、もうどうしたらよいかわかりません。おばあさん！　おかあさんが、ぼくを助けるために結婚するのに同意すべきでしょうか。ぼくたちは、ふたりきりでいたがっているのに。どうしたらよいでしょう？」

「ふたつのうちひとつだよ、エーミール。うちへかえって、おかあさんに結婚しないでくれとたのめば、おまえたちはだきあって、それでひとまず、ことはかたづくのだよ。」

「それとも？」

「それとも、おかあさんにそういわないで、死ぬまでだまっているんだよ。だが、そうするなら、陽気にだまっていなければいけない。死人のように、にが虫かみつぶした顔をしてはいけない！　どっちに決心するかは、おまえ自身だけがきめられることだ。ただこれだけはつけくわえておくよ。おまえは大きくなる。おかあさんも年をとる。それは、口でいうほど、じっさいはかんたんじゃないんだよ。おまえは、二、三年のうちに、ふたり分のお金をかせぐことができるかい？できるとしたら、どこでかせぐ？　ノイシュタットでかい？

あんないなかでは、できませんよ。いつかは、おまえはうちをはなれなければならない。はなれなくてもすむとしても、はなれる義務がおきるのだよ。そのときは、おかあさんはとりのこされる。むすこもなく、夫もなく。まったくひとりぼっちで。それから、もひとつ。十年か十二年たって、おまえが結婚したら、どうなる？　おかあさんと若い妻は、おなじ屋根の下にはむかない。わたしはよく知っている。自分の経験で。一どは妻として、一どは母として。」

おばあさんの目は、森のなかではなく、過去を見つめているようでした。

「おかあさんが結婚すれば、おまえたちふたりが、たがいにぎせいをはらいあうのだ。でも、おまえが、わたしの口からおかあさんのはらうぎせいのことを聞いたなんて、おかあさんにいってはならないよ。そうすりゃ、おかあさんが、おまえのためにおう重荷は、おまえがおかあさんのためにしのぶ重荷よりは、かるくなるだろう。わかったかい、エーミール？」

かれはうなずきました。

「自分はよろこんで、しかもあいてにはだまって、いっそう大きなぎせいをはらいながら、ぎせいを感謝の心でうけいれるのは、よういなことではないよ。」

おばあさんはいいつづけました。

「それは、だれにも見られず、ほめられもしないおこないです。でも、それは、いつかあいてを幸福にするものです。それがただひとつのむくいです。」

おばあさんは立ちあがりました。

「おまえの思うようになさい！　どちらでも。よく考えなさい！　わたしはひとりでいくから。」

エーミールはとびあがりました。

「ぼくもいきます、おばあさん！　自分のなすべきことがわかりました。ぼくはだまっています！　死んでも。」

おばあさんはエーミールの目をのぞきこみました。

「えらいよ！」と、かの女はいいました。

「えらいよ！　きょう、おまえはおとなになった！　ほかの人より早くおとなになった者は、ほかの人より長くおとなでいられるのだよ——じゃ、手をかして、みぞをとびこさせておくれ！」

第十五章　上映のおわり

金曜日の朝、少年探偵たちは予告どおり、コールスビュッテルで、ジャッキーのため寄付金あつめをしました。火曜日くんと教授くんは、海岸と港を、グスタフは海水浴場を、エーミールは往来を、ボニーは駅をひきうけました。

ボニーはいいました。

「海岸じゅうどこにいっても、見わたすことのできないところまで、紙と鉛筆をもった子どもらが、ジャッキーのためお金をあつめている場面を考えてみると、胸がわくわくしてくるわ。わたしにも、早く紙と鉛筆をちょうだい。じっとして、ながめてなんか、いられないわ！」

お昼にかれらがもどってきて、お金をかぞえるためベランダにあつまると、クロチルデがかけこんできました。かの女はのぼせあがっていました。

「これで、お料理ができると思うの？」と、かの女はどなりました。

「なんどベルが鳴ったか、ごぞんじ？　二十三どよ！　そのたびに、外で子どもが、あなたがたはいないかってきき、お金をだすのよ！」

「でも、ネクタイさん。」と教授くんがいいました。「そりゃ、すばらしいじゃないか。」

「たぶん、あなたがたにとってはね。」と、かの女はおこってこたえました。

「でも、お昼ごはんにはめいわくですよ。まずミルクがこぼれ、それから野菜がとろけてしまい、あげくのはては、ヒツジの焼き肉がこげちゃったわ。わたしは、おさんどんでしてね、銀行の出店じゃないんですよ。」

「こういうことのためなら、こげついた焼き肉だって、ぼくはおいしくちょうだいするよ、ネクタイ嬢さん。」と、グスタフがいいました。

かの女はなにかぶつぶついいながら、前かけのポケットからひと山のお金をだし、テーブルの上にぶちまけました。

「さあ、三マーク九十ペニヒありますよ。複式簿記をやる時間はありませんでしたよ。」

かの女は鼻をたかくして、においをかぎました。

「たいへんだ！　また、なにかこげている！」

かの女は、台所へ突進しました。（かの女自身のお金も、五十ペニヒはいっていたことを、かの女はわざとだまっていました。見あげた性質のおさんどんでした。）

子どもたちは、ポケットからお金をとりだして、テーブルの上にばらまき、銅貨とニッケル貨と銀貨との山にわけました。おなじのをつみかさねて、かぞえると、四十三マークありました。紙に記入した金額をたしてみると、計算があいました。ちびの火曜日くんは、ふくみわらいをしながら、二十マークの札をつけたしていいました。

「ぼくの父、大きな火曜日からだよ。」

教授くんは庭にかけだし、温室で、トマトを見ていた父をつかまえ、十マークの札をもらってもどってきました。

それから、みんなは、めいめいのおこづかいをかきまわし、勘定をしなおしたあげく、ついに、テーブルの上のお金を七十五マークにして、ほっとしました。

みんな感動して、顔をかがやかせました。

火曜日くんは、きれいなハンケチをとりだして、お金をそのなかにかきよせ、ハンケチをしっかりしばりました。

「手品でもやるのかい？」

と、エーミールがたずねました。

「三までかぞえると、七十五マークがきえてなくなるのかい？」

「ぼくが、お金をもっていくよ。」と、火曜日くんがいいました。

「どうして？」と、教授くんがたずねました。

「ここにおいていきなさい！」と、ポニーはさけびました。グスタフはいいました。

「ちびさんにやらせたまえ、ぼくたちは、あのお金で、ちょっと計画があるんだよ、ぼくの思いつきなんだ。」

「おどろいたわね。」と、ポニーがさけびました。「あなたまで思いついたなんて！　まさか、あなた病気じゃないでしょうね？」

「ぼくはだいじょうぶさ。」と、かれはいい、たかだかと腕まくりしました。「さあ、こい！　あすは、きみこそ病院にお見舞いしてやるぞ。」

かれは、ポニーに肉薄しました。ポニーは、クロチルデの

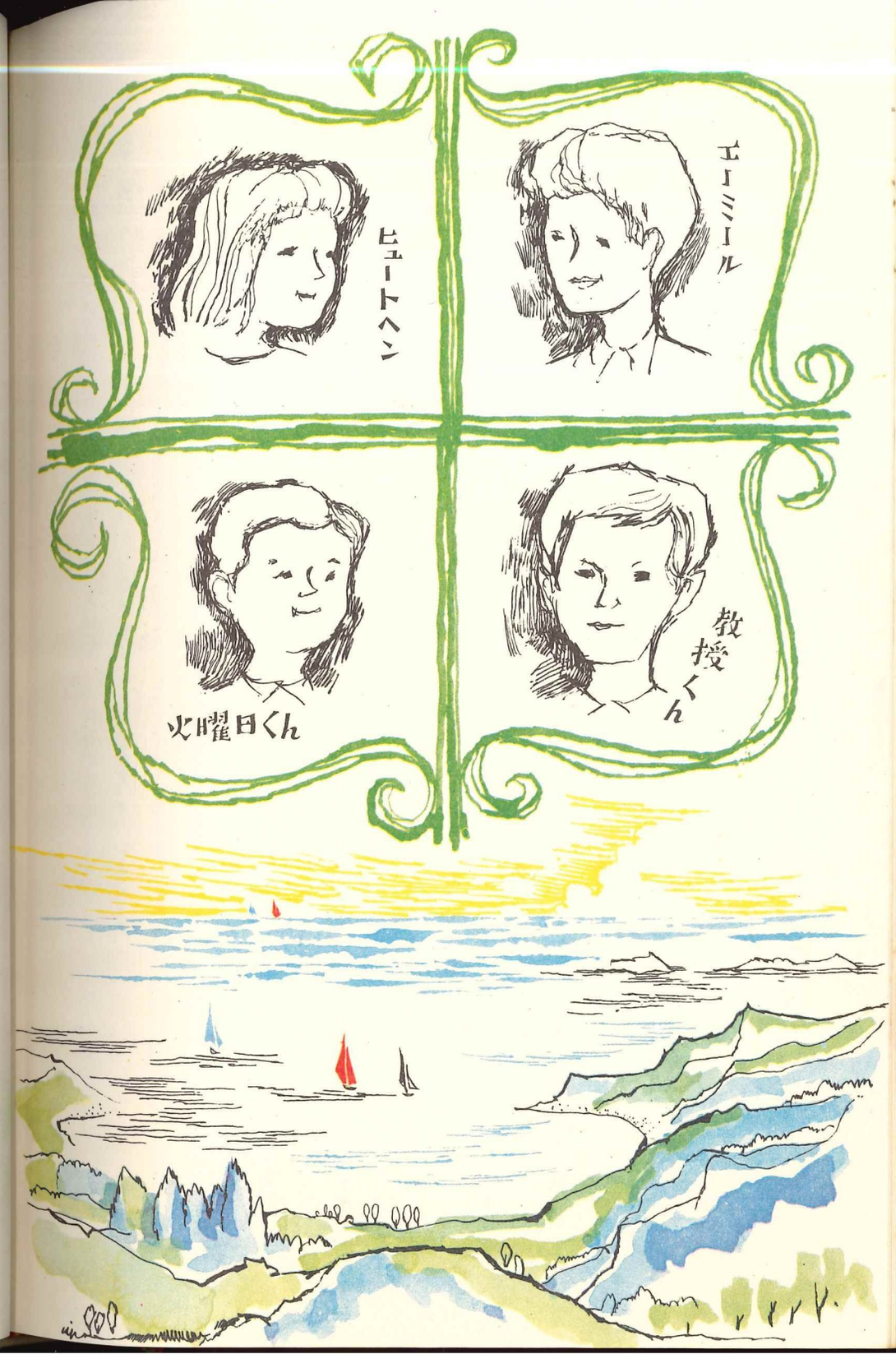
いる台所ににげこみました。
「ざまみろ。」と、グスタフはいいました。
「せっかくうまいことを思いつくと、あんな女がやってきて、まぜかえしやがる。」
「なかのよい者どうしは、よくけんかするもんだ。」と、火曜日くんは説明して、お金の包みをもってかえりました。

昼食に、ジャッキーがすがたをみせました。クロチルデが、ほんきに不平をいったにもかかわらず、焼き肉は、たいそうおいしく食べられました。みんなは、せっせと食べました。おばあさんは、寄付金あつめの話をし、ジャッキーにそれをどう思うか、とたずねました。
「ぼくは、とてもうれしいんです、おばあさん。」と、かれはいいました。
「とくに、少年たちがとても親切ですから。だが、そればかりじゃないんです。お金はいつだっていります。船長さんも、まったく、ぼくとおなじ意見です——きょうの午前中、ぼくは三時間テニスの球ひろいをしました。これも金あつめの一種です。チップをいれると、一マーク八十になりました。午後、また二時間はたらきます。そうすると、また一マークです。めんどうでも、それを一か月分計算していただくと、家具と三食つきのへやをあっさりかりられることがわかるでしょう。たぶん、バルコニーまであるへやを。」
みんなわらいました。
「ええ、そうじゃないかしら？」と、かれはいいました。
「きのう、ぼくはテニスコートでいきおいよくトンボがえりをやったんですよ。すると、テニスをやっていた人たちは、すっかりどぎもをぬかれて、ひとりの人は、古いラケットをぼくにくれました。テニスがぼくにむいたら、ぼくは、やがてテニス教師になります。そして貸しコートをやり、テニス教授をします。いつかは、ドイツの選手権をにぎり、パリとアメリカにいき、きっと世界選手権保持者になります。すくなくとも、第二位になります。そしたら、お金をかりて、ラケットとテニス用品の工場をひらきます。ぼくの名が知られているので、おおぜいの人が製品を買ってくれるでしょう。むろん、パハウルケとは、ぼくはもう名のりません。そんな名では世界一にはなれません。バイロンという名だったこともあるんです。でも、名まえなんか、やはりたいしたことはありません。」
かれはお皿におじぎをして、さかんに食べました。

「この人には、わたし心配しないよ。」と、おばあさんはいいました。
「ぼくもしません。」と、ジャッキーもいいました。「早く大きくなりすぎた軽わざ少年には、いくらだってしごとがありますよ。」

午後、さん橋に、つづいて二そうの汽船がつきました。一そうは、西のほうの海水浴場から、ほかの一そうは東からきたのでした。この二そうからは、数百人の子どもがどっとおりて、コールスビュッテルをさけび声とわらい声であふれさせました。燈台映画館の前のさわぎは、いちばんもうれつでした。（きっぷ売りの女の人は、それから二日間も、そのため病気になりました。）
かっきり四時に、「エーミールと少年探偵たち」の第一回上映がはじまりました。映画館のもち主バルテルマン氏は、満員の館内をのぞきました。館の前には、第二回めをまつ子どもたちがむらがっていました。この日の収入が、自分のものにならないことを、バルテルマン氏は心のなかで残念がりましたが、いまさらしかたがありませんでした！　かれは、事務所にあつまっている少年たちのところにいき、こまやかにさしずしました。
「ブルルルッ！　いよいよか。」
と、エーミールがいいました。グスタフは、
「道化師、わらえ！　たとえ胸がせつなくても。」
と、いいました。
そえものの映写がおわると、スクリーンの前に幕がおり、あかりがつきました。幕はふたたびあがりました。
いよいよ四人の少年とひとりの少女が、舞台にあらわれました。見物席の子どもたちは、座席の上に立ちあがりましたが、しだいにしずかになり、ついにしんとしずまりました。
エーミールは、舞台のはしにでて、大きい声でいいました。
「ぼくの友だちと、いとこと、ぼくは、みなさんがここにきてくださったことに感謝いたします。また、みなさんがジャッキーのためにお金をあつめてくださったことに感謝いたします。ジャッキーはおりがみつきの子どもです。でなかったら、ぼくらは、みなさんの助けをねがわなかったでしょう。映画のあとで、かれ自身が、みなさんにお礼を申します。これからいっしょに映画を見ましょう。きっとおもしろいと思います。」
おかあさんのひざにのっていた小さい男の子が、見物席か

らヒヨコのような声でさけびました。
「きみがエーミールなの？」
子どもたちはわらいました。
「そうです。ぼくは、エーミール・ティッシュバインです。」
と、エーミールはいいました。
ポニーは得意そうに、かれのそばにいき、ひざをかがめておじぎをしました。
「わたし、ポニー・ヒュートヘンです。エーミールのいとこです。」
つぎに教授くんが前にでました。
「ぼく、教授です。」かれの声は、すこしふるえていました。
火曜日くんは、ていねいにおじぎをしました。
「ぼくは、ちびの火曜日です。」
さいごに、グスタフの番でした。
「ぼくは警笛のグスタフですが、今はオートバイをもっています。」
そこで、かれはちょっと間をおいて、
「やい、火ぶくろども、みんないるか！」と、どなりました。
「いるぞ！」と、子どもらはわめきました。
グスタフはわらいました。
「あいことばは、なんという？」
すると、みんな停車場まで聞こえるくらいにさけびました。
「あいことばは、エーミール！」
映画館の前では馬がおどろいてにげだしました。それほど、子どもたちの声は大きかったのです。
それから、暗くなって、映写機がカタカタ、うごきだしました。
映画がおわると、見物人は数分間はく手しました。明るくなりました。ポニーのそばにすわっていた女の子が、
「あなた、ずいぶんかわったわね！」といいました。
ポニーはいいました。
「映画のなかの少女は、わたしじゃないのよ。わたしの役をやってるだけなの！」
「ああそう。それじゃ、映画のエーミールと、あなたのそばに腰かけている、ほんもののエーミールも、おなじ人じゃないの？」
「ええ。」と、ポニーはこたえました。
「ほんとうのエーミールは、わたしのいとこなの。映画のエ



ーミールは、わたしぜんぜん知らないわ。しっ、しずかに、まだあるわよ。」

ジャッキーが舞台にでてき、脚燈にあゆみよっていきました。

「みなさんは、ひとりの少年のため、お金をあつめてくれました。その少年はぼくです。みんなに心から感謝します。みなさんのやったことはすばらしいと思います。ぼくがいつか金持ちになり、みなさんのだれかが不幸になるようなことがあったら、ぼくのところに名のりでてください。どうかわすれないで！」

そこへ、グスタフも登場して、ジャッキーにいいました。

「ぼくの友だちとコールスビュッテルの子どもたちの依頼をうけて、ぼくは、この寄付の結果をきみにわたします。七十五マークの貯金通帳です。」

ジャッキーは、友だちとあく手しました。

下の見物席では、教授くんが火曜日くんにいいました。

「あれが、グスタフの思いつきかい？」

火曜日くんはたずねました。

「まずいかい？」

「すてきだよ！」と、教授くんははっきりいいました。

「まったくすてきだよ！」

グスタフは舞台から下にむかってどなりました。

「ほかの海水浴場の代表もあがってきてください！」

下のほうでは、ひどいこんざつがおこりました。

けっきょく、なお七人、少年が舞台にならびました。アーレンスフープからひとり、ブルンスハウプテンからひとり、ハイリゲンダムからひとり、ワルネミュンデからひとり、ハイデクルークからひとり、グラールからひとり、ミュリッツからひとり。そしてめいめい貯金通帳をわたしました。ジャッキーは、がんらいなみだもろいたちではありませんでしたが、目になみだをうかべていました。

グスタフは、しきりに貯金通帳をくっていました。七人の代表が、舞台からおりると、グスタフは、さけびました。

「総計六百十五マークになります。そのほか、ジャッキーは、きょうの映画の収入をもらいます。ジャッキー、こんなに財産ができておめでとう。まるまると太ってくれたまえ！」

グスタフは、舞台のうしろにかくれました。

「まったく思いがけないことでした。」と、ジャッキーはいいました。「これじゃ帳簿係がいります！」かれは上着をぬぎました。

「ぼくの年とった友だちのシュマウフ船長が、なにか芸をしてみなさんに、お目にかけろ、と申します。感謝のしるしです。いつも、あいぼうとやってるのですが、すこしはひとりだってやれます。」

かれは上着を舞台のうしろになげて、さか立ちしました。それから腕をまげて、ひじを下につけました。それから、また腕をのばして、舞台のはしからはしへ、さか立ちで歩きました。見物はかっさいしました。

ジャッキーはぴょんと立ち、かた手をついて宙がえりをしたり、両足をぺちゃんと横にのばしたり、トンボがえりをしたりしました。もひとつ、もひとつと、こんどはかた手でのくりかえし、舞台いっぱいにはねまわりました。

さいごに、もひとつトンボがえりをやり、もひとつ、もひとつと、だんだん速く、あるときは足が宙に、あるときは頭が宙にというふうに、まるで、くじびき器械の輪のように、ぐるぐる空中をまわりました。

子どもたちは、かん高い歓声をあげ、手が赤くなるほどはく手しました。おとなもひきずりこまれました。

それから幕がさあっとおりました。二回めの上映を見る子どもたちが、早くもつめかけました。地獄のかまでもひっくりかえしたようなさわぎでした。

「トンボがえりは気にいったね。」と、おばあさんがエーミールにいいました。「あした、わたしもあれを練習しなくちゃ。」

夕がた、また二そうの沿岸航路の汽船が、さん橋につきました。七つの海水浴場の子どもらが、どっとのりこみました。両親やつきそいの人たちも、うずにまきこまれたようでした。

汽船は出帆の鐘を鳴らしました。おくれた者が数人、手をふりながら、わめきわめき、ころぶようにかけてきて、甲板にどかどかとのりました。それから、さん橋の人が汽船のなわをはなすと、船はゆれました。スクリューが水をかきまぜました。モーターがうごきました。数百のハンケチがふられました。（あまりきれいでないハンケチもありましたが、もうかなり暗くなっていました。）

「あいことば、エーミール！」

と、西にいく船の子どもらががなると、

「あいことば、エーミール！」

と、東へいく汽船の子どもらもさけびました。

「あいことば、エーミール！」
と、さん橋に立っているコールスビュッテルの子どもらもどなりました。
「生まれてからこんなたのしい日はありませんでしたよ！」
と、クロチルデ嬢はいいました。
汽船の上では、色とりどりの小さいあかりがともされました。一そうは左へ、一そうは右へいきました。エーミールと少年探偵たちは、さん橋のとっさきに立って、無言で船を見おくりました。
グスタフは、せきばらいしました。それから、ならんでいる三人の少年を腕でだきよせていいました。
「ぼくたちは、いつまでも友だちでいよう。顔いちめんに、白髪が長くのびても。」
ほかの者たちは、なにもいいませんでしたが、おなじ考えでした。
そこへ、ジャッキーがかけつけてきました。
「ここにいたのか。」
と、かれはほっとしていいました。
「ほうぼうさがしたよ。」かれはあゆみよりました。「きょうのことはわすれないよ。」
と、かれはわれをわすれていいました。
「いっぺんに、あんなにたくさんのお金をもらうなんてこと、ありゃしないよ。」
「八さつの貯金通帳はどうした？」
と、火曜日くんがたずねました。
「バルテルマンさんにしまってもらうことにしたよ。事務所に金庫があるからね。どう思う？　あの人は、ね、ぼくに申し出をしたんだよ！　かれの映画館にでて、軽わざを見せろって。さしあたり一週間。」
「いくらはらうって？」
教授くんが、ぬかりなくたずねました。
「まい日、手どり五マーク。」
少年探偵たちは、よろこびました。
「きみたちがもらってくれたきょうの収入は、だいたい二百五十マークだよ。バルテルマンさんにも、まだはっきりわからない。だいたいだよ！」
ジャッキーは、かすかにわらいました。
「まだほんとうだと思えない。この調子でいくと、ぼくは、来週は、スチームのとおっている別荘が買えるよ。」
バルト海の沖には、イルミネーションをした二つの小さい

汽船がうかんでいました。海はざわめき、岸では波がくだけていました。白いあわが、暗がりのなかでかがやいていました。
「諸くん。」と、シュマウフ船長がいいました。
「わしは、ピコロに、みんなをつれてホテルにいくと、かたく約束したんだ。かれは一日じゅうはたらきづめで、映画も見られなかった。」
そこで、みんなさっそく、海浜ホテルにいくことにきめました。
「ほんとに休暇ですわね。」
と、ハーバーラント夫人はいって、顧問官の腕にすがりました。
みんな、さん橋をわたっていきました。船長とジャッキーが先頭に立って。
「きみにひとつの提案があるんだがね。」と、シュマウフ船長がいいました。
「いったいなんです、船長さん？」
「わしの家は小さいことは小さいが、わしひとりには広すぎるんだ。」と、船長は説明しました。
「ひとへやかしてください！」
と、ジャッキーはさけびました。
「そうしたいんだ。」と、船長はいいました。「いつまで、コールスビュッテルにいるつもりかい？」
「テニスコートがとじられるまで。それまでは、ここで球ひろいをします。シーズンがおわったら、トレーナーがまい日一時間、ぼくをおしえてくれます。ごく安く。たぶんただで。」
「よかったら、ひっこしてきていいよ。」と、船長はいいました。
「そうします、船長さん！　間代はいくら？」
船長はジャッキーをどやしました。
「ふざけたことをいうな！　わしはうれしいんだよ。」
「すてき。」と、少年はいいました。「ありがとう、船長さん。晩はベランダでトランプでもやりましょう。」
船長さんは、ひどくよろこびました。
それから、ジャッキーはたずねました。
「それはそうと、お金はいりませんか。ぼくは今、財産家です。あと数週間ためたら、あなたの事業に千マークだすことができます。貯金しておいたって、しようがないじゃありませんか。」

「よろしい。」と、船長はいいました。
「そうしよう。きみはわしの匿名出資者だ。きみはまい夏、コールスビュッテルのわしのところで暮らすという条件づきでね。」
「こころえた！」と、ジャッキーはさけびました。
「ぼくは、テニスの才能がなかったら、この事業にボーイとしてくわわります。」
「そのことばをわすれちゃいかんよ！」と、シュマウフ船長はいいました。
「きみに、テニスの才能がなけりゃいいがね。」
みんなわらって、ホテルにはいりました。

おばあさんとエーミールは、いちばんあとからついていきました。ふたりは、ホテルの前で立ちどまって、海をながめました。一そうの汽船は、もう見えなくなっていました。ほかの一そうは、まだ水平線にうかんでいました。光るクルミのからのように。
エーミールはいいました。
「ジャッキーは、ぼくらの助けをかりるまでもなかったでしょう！」
おばあさんはこたえました。
「親切なおこないは、けっして無意味じゃないんだよ。エーミール。」
かの女は階段に足をかけました。
「これから、おかあさんに絵はがきを書きましょう！」
「二まい書いちゃ、どう？」
「いったいだれに？」
「イェシュケ警部さんに。」
と、エーミールはいいました。おばあさんは、エーミールにキスしました。

空想男爵の冒険

G・ビュルガー
平尾浩三訳

●まえがき

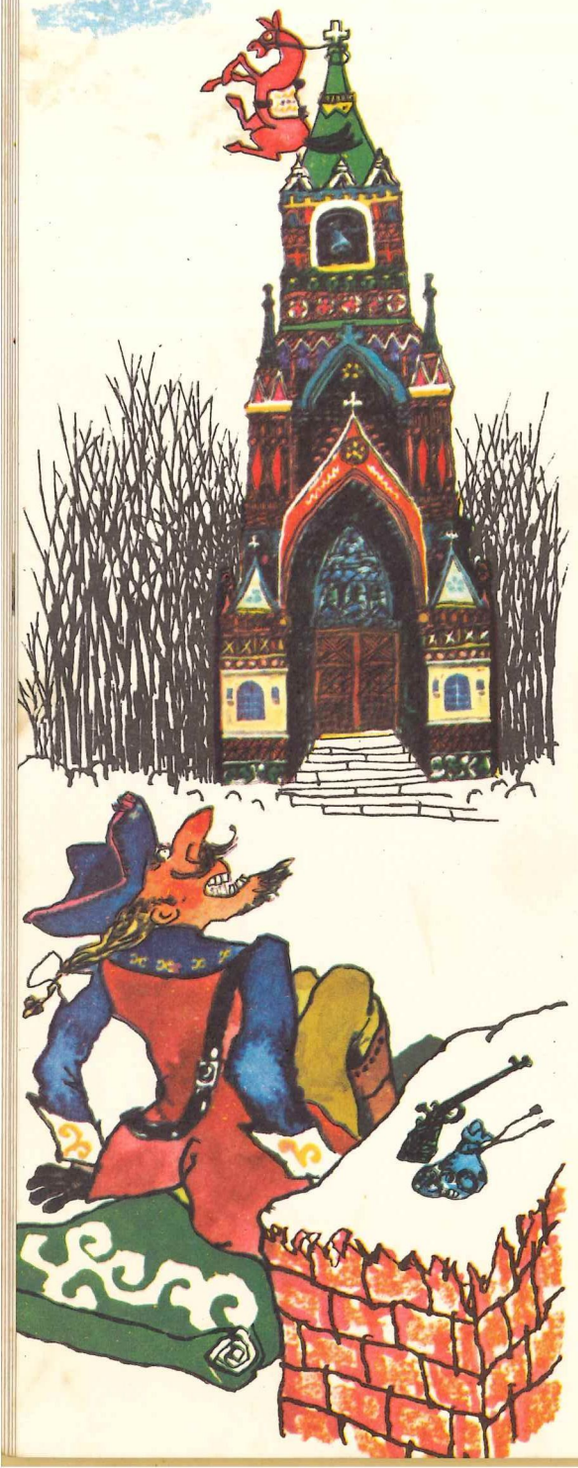
このお話の主人公、ミュンヒハウゼンは、二百年ほどまえのドイツに、ほんとうに生きていた人で、おもしろいことや奇抜なことを、まるで自分が体験したように話すのが、たいへん得意でした。もちろん、ほとんどが「ほら」なのですが、あまりに愉快な話ばかりなので、聞く人びとはついついひきこまれ、腹をかかえてわらってしまうのです。

うそをつくのは、ほめられたことではありません。けれどもミュンヒハウゼンのうそは、人を悲しませたり、きずつけたりするのではなく、悪気のない、ほがらかなうそです。ミュンヒハウゼンは、どんなにこまってもあきらめず、知恵をはたらかせて、うまくきりぬけていきます。こまかなことにはくよくよせず、のびのびと生きていきます。

オオカミにそりをひかせる話、クマのからだのなかに火打ち石をなげこむ話、大サルタンとのきみょうなやりとり……。読んでいくうちに、いかにも気分がはればれとするではありませんか。それでいて、ただおかしいだけでなく、世のなかをするどく批判するところもあることが、注意ぶかく読むにつれて、わかってくるでしょう。

大砲の弾にまたがって大空をとんでいくミュンヒハウゼンのような心を、わたしたちももちたいものですね。

平尾浩三



ロシア旅行

わがはいが故郷をでて、ロシアへの旅にのぼったのは、冬のさなかのことだった。なぜ、よりによって冬をえらんだのかと申せば、それはつまり、こういうわけじゃ。――

「北ドイツ、ポーランド、イールランド、リーフランドの道をいくことは、聖人への道をすすむより、なおむずかしい。」

と、どんな旅行記をひらいても書いてある。しかしどんなに道がわるかろうと、雪と氷におおわれる冬のあいだなら、ご親切きわまるお役所が、とくべつの費用をかけなくても、歩きよくなっているだろうじゃないか。そうしてこの考えは、みごとにあたっていた。

わがはいは、馬にのってでかけた。乗り手と馬さえよければ、これがいちばんらくなのだ。駅馬車にのると、ごていねいな駅長と、いいあらそいになることもあるし、とちゅう、飲み屋のあるたびに、酒飲みの馬方にひっぱりこまれるという心配もあるからのう。

わがはいは、それほど厚着はしていなかったのだが、北東

へすすむにつれて、これはしまったと思うようになった。

さて、ポーランドでのこと、ひとりのあわれな老人が、北東の風のふきすさぶ荒野に、とほうにくれてふるえながら、横たわっている。しかもそれが、はだかどうぜんのすがたなのじゃ。この北国の、きびしい冬のまっただなかで、老人の気持ち、だれにも想像がつこうというもの。わがはい、もう、かわいそうでかわいそうで、じっとしておれない。この寒さ、こちらにしても心臓のこおりつく思いだったが、わがはいは自分のマントをぬぎすてて、老人のからだにかけてやった。するとどうだ、とつぜん天上から、わがはいの愛のおこないをほめそやす声が、聞こえてきたではないか。——

「かけてもいいぜ、わが子よ。そのおこないのむくいは、きっとあるぞよ。」

がらのわるいような、ありがたいような、おかしな神さまの声は、それはそれで聞きながし、わがはいは道をいそいだ。

ついに、日はとっぷり暮れた。だが人里らしいもの音ひとつ聞こえないし、あたりには、あかりひとつ見えない。いちめんの雪、どこが道やら、さっぱりわからぬ。

くたくたにつかれて、わがはいはとうとう馬をおりた。そうしていちめんにふりつもった雪からつきでている、とがった棒ぐいのようなものに馬をつないで、ごろりと雪の上に横になった。だがピストルはわきにかかえておいた。それが用心というものよ。わがはいはぐっすり眠ってしまい、目ざめたときには、もうあたりはまっ昼間になっていた。

ところがたまげた。わがはいが寝ているのは、どこかの村の、どまんなか、それも教会の前の広場ではないか。はじめのあいだ、馬は、かげも形も見えぬ。しかしやがて、どこか上のほうでやつのいななく声が聞こえた。見あげると、これはしたり、やつめ、教会の塔の風見につながれて、ぶらさがっておる、ははあん、とたんにわがはいには、ばんじがのみこめた。つまり、その村は、夜じゅう雪の下にうずもれていたのじゃよ。ところが天気はきゅうにかわり、雪がどんどんとけるにしたがって、お休みあそばしているわがはいのからだも、だんだんしずんでいったのだ。そうして昨晩、暗がりで馬をつないだ棒ぐいは、じつは雪の上につきでた塔のさき、十字架であったか風見であったか、ともかくそういうわけだった。

しかし、そこはわがはい、うろたえはせぬ。ピストルを一

ちょう手にとって、やつをつないだ手づなめがけて、ドカンと一発ぶちかました。

こうして、しゅびよく馬をとりもどし、わがはいは旅をつづけていったのじゃ。

その後すべてはうまくゆき、わがはいはロシアについた。ところで、冬のさいちゅうの馬旅行は、この国ではあまりしゃれたことではない。わがはいは、日ごろから、「郷にいっては郷にしたがえ」とのおしえをまもることにしているから、そこで一頭立ての小さな馬ぞりにのりかえた。そうして聖ペテルスブルグめざして、元気よく出発した。

さて、あれはエストランドであったか、インゲルマンランドであったか、もうおぼえておらん。とにかくふかい森のどまんなかであった。冬のこととて、腹をすかせた、おそろしいオオカミが一ぴき、全速力でおいかけてくるではないか。ああ、おいつかれる、絶体絶命！　わがはいは、とっさに、そりの床にからだをふせ、馬くんよろしくやってくれ、とおまかせした。ところが、考えないではなかったが、そううまくいくとも思えなかったようなことが、たちまちにしておこったのじゃ。

オオカミは、わがはいのようなものには目もくれず、わがはいの頭上をとびこえて、くるったように馬にとびかかり、お尻をかみきって、いっぺんにのみこんでしまった。

かわいそうなは、馬のやつ、びっくりするやらいたいやら、ますますあわててかけだした。

わがはいはうまくオオカミの目をのがれたので、そおっと顔をあげて、ようすをうかがってみた。すると、たまげるではないか。オオカミめ、がつがつ食うもんだから、もうほとんど馬のからだのなかにはいりこんでしまっている。

オオカミがすっかりはいりこんだところで、わがはいは、すかさず、皮の上にピシリとひとむちくれてやった。馬のサヤをかぶったオオカミは、ふいをうたれておどろいたのなんの、とびあがってさきへさきへとかけだす。馬の死がいはバサリと地面におちる。すると、これはしたり、わがオオカミくん、そりの馬具にすっぽりはまりこんでしまったではないか。わがはいはわがはいで、ピシリピシリとむちをふるう。

こうして早がけのまま、聖ペテルスブルグにぶじご到着というわけじゃ。オオカミくんもわがはいも、こうなろうとは思わぬことだった。町の連中も、口をあけてながめておったよ。

酒飲み将軍

聖ペテルスブルグで軍隊にはいるようになるまで、まだすこし、まがあったので、わがはいは二、三か月のあいだ、その町でぶらぶらと自由に暮らしていた。そうして時間と金を、このうえもなくしゃれた方法でつかっていたのじゃ。おそくまでトランプをたのしんだこともあったし、かんぱいにつぐかんぱいで夜をすごすこともたびたびあったよ。

まじめくさったドイツにくらべれば、ロシアでは、社交的なさまざまのたのしみのなかでも、酒びんが大いにはばをきかせているのだが、それはロシアという国の寒さと、その国民のならわしによるものだろう。まったく、酒を飲むという高尚なわざにかけては、まことの達人といってもよいような連中に、わがはいはあの地でしばしば、であったものじゃ。

それにしても、あの、赤ら顔に白ひげをはやした将軍とくらべれば、ほかの者たちは、みな、まるでできそこないのように色あせて見える。

料理屋で、われわれとおなじテーブルについて食事をしていたその老将軍は、トルコ軍との戦争にでていらい、頭の骨の上半分がなくなっているのだが、新しい客がはいってくるたびに、将軍は「食事中じゃが、帽子をぬがずにいることをゆるしてくだされ。」と、いんぎんにことわるのだった。

食事のあいだに、将軍は、何本かのコニャックをからっぽにし、それからアラク酒を一本飲みほしておしまいにするか、ばあいによっては、それをまたはじめからなんどもくりかえすのがふつうであった。おどろいたことに、将軍、そんなに飲みながら、ついぞ酔っぱらったふうを見せたためしがござらんのだ。と、わがはいが申しても、諸くんは信じてはくださらんだろう。いや、かまわん、むりもない。正直申して、わがはいにも、わけがわからなかったのだ。ふしぎでたまらなかったのだ。ところが、まったくふとしたことで、そのなぞがとけたのじゃよ。

将軍は、ときどき帽子をちょっともちあげるくせがあった。それにはたびたび気づいてはいたが、べつだんおかしいとも思わなかった。とうぜん、ひたいがあつくなることもあろうし、将軍が帽子をうかせて、頭に風をいれたってふしぎはなかろう。

ところが、気をつけて見ておるうちに、わがはい、こんなことに気がついた。将軍の帽子には銀の板がはりつけてあって、これが骨のかわりに頭のふたになっておるのだが、将軍は帽子といっしょに、このふたも、もちあげている。そうして将軍の飲んだ酒の蒸気は、みんなふんわりした煙になって、そこからたちのぼってゆくではないか。さあ、これでいっぺんに、なぞはとけた。

この発見を、わがはいは何人かの、なかのいい友だちに話した。ちょうど夕刻であったから、その発見の正しいことを、わがはいはさっそく、実験で証明することにした。

わがはいは、パイプをもって、将軍のうしろにまわり、将軍が帽子をとったしゅんかんをめがけて、たちのぼる蒸気に紙きれで火をつけてみた。

さあ、めずらしくも美しいながめとはあいなった。将軍の頭からたちのぼる蒸気の柱は、いっしゅんにして火の柱にかわったのだ。帽子の毛のあいだにただよっている蒸気は、世にもきれいな青い火になってかがやいたが、それはどんな聖者の頭をつつむ後光よりも、もっとみごとであったよ。

わがはいの実験が将軍に気づかれないわけにはゆかなかったが、将軍は気をわるくするどころか、自分をけだかいすがたにするこの実験を、まだなんどもくりかえさせてくれた。

狩りの冒険

おなじようなところで経験した、ほかの愉快な場面については、ここでは話さないことにする。そのかわり、もっとめずらしく、もっとおもしろいと思われる、いろいろな狩りの話をおきかせしよう。

ある朝のこと、わがはいが寝室の窓から外をながめていると、近くの大きな池が、ノガモでいっぱいになっているではないか。それっと、鉄砲をひっつかみ、階段をかけおりたが、あまりいそぎすぎて、不注意にも戸口の柱に、いやというほどひたいをぶつけてしまった。目から火花がとびちった。わがはいはそれでも、立ちどまらずにかけだした。

ところが、さあ、鉄砲をかまえてみて、わがはいは、じだんだをふんだ。たったいま、ひたいを、したたかぶつけたとき、鉄砲の打ち金から発火石までとびだしてしまっていたのだ。どうしたらいいのだ、ぐずぐずしてはおれぬ。だが、さいわい、たったいま、目から火花がとびちったことを、わがはいは思いだした。

そこで鉄砲の火ざらのふたをあけ、鳥にねらいをつけておいて、わがはいは、自分のかたほうの目を、げんこつでなぐりつけた。こんども火花がたくさんちったので、鉄砲弾はとびだした。

こうしてわがはいは、五つがいのカモと四羽のアカクビガモ、それに一つがいのオオバンをしとめたのじゃ。

ほんとうに、おちつきこそ、男らしいはたらきにはかんじんじゃ。兵隊や船員が、それでいのちびろいすることがよくあるように、狩りうども、おちついていたおかげで成功することがよくあるものじゃよ。

あるときわがはいは、えものをさがして歩きまわっていたが、そのうち、ある湖のほとりにでた。そこには何十羽というノガモがいたが、ばらばらにへだたっておよいでいるので、一発の弾で一羽いじょうしとめることは、とうていできそうにもない。それに運わるく鉄砲のなかには、さいごの一発があるきりなのだ。だがなんとかして、やつらをみんなしとめたい。ちかいうちにおおぜいの友だちや知人をまねこうとしていたわがはいは、そう考えて首をひねった。

そのとき、わがはいは、弁当ののこりのハムのあぶらみが、えものぶくろのなかにはいっているのを思いだした。わがはいは犬のひもをときほぐし、すくなくとも四倍の長さにしておいて、それであぶらみをゆわえた。わがはいは、岸べのアシのしげみに身をかくし、あぶらみを水になげいれて、うかがっていると、しめしめ、近くにいた一羽のカモが、つつとおよいできて、あぶらみをぱくりとのみこんだ。つづいてほかのカモたちも、みんなやってきた。

ひもでゆわえた、つるつるのあぶらみは、ぜんぜん消化されないで、すぐにしりからとびだす。となりのカモがそれをのみこむ。それからそれへと、おなじことをくりかえし、けっきょく、あぶらみはひもにくっついたまま、カモたちぜんぶのからだを、通過することとあいなった。

まるで糸にとおされた真珠みたいに、カモたちはみんな、じゅずつなぎになってしまった。わがはいは、まごころこめて、カモたちを岸にひきあげ、ひもを肩や腹に六回もまきつけて、ゆうゆうと家路についたのじゃ。

ところが家までは、まだかなりの道のりがある。そんなにたくさんのカモをかつぐのは、だいぶ重荷になってきた。ちょっととりすぎたわいと、わがはいは後悔しはじめた。だがそのとき、おかしなことがおこったのだ。それで、はじめはずいぶんうろたえさせられたのだが、けっきょくは、それがおおいに役だつこととなったのじゃ。

つまり、カモたちは、まだみんな生きている。それで、さいしょのショックからたちなおると、はげしくはばたきしはじめ、わがはいもろとも空高くうかびあがったのだ。こうなるとふつうの者なら、どうにもこまりはてたであろうな。ところが、このわがはいは、それをできるだけ利用して、上着のすそでかじをとりながら、わが家をさして空中旅行としゃれこんだ。

ちょうどわが家の上空につき、けがをせぬようにおりたいだんになると、わがはいは、一羽ずつ、カモの首をねじったので、ふわりふわりとおりてきた。そうして、ちょうど煙突をとおって、料理場のかまどのまんなかにおりたった。さいわいそこには、火はまだもえていなかったが、料理人は腰をぬかすほどおどろきたまげ、感心しておったよ。

シャコの一群についてもおなじようなことがあった。新調の鉄砲のうちだめしにでかけ、もっていたわずかの弾をすっかりつかいはたしたとき、思いがけず、わがはいの足もとから、一群のシャコが飛びたった。こいつらを五、六羽つかまえて、夕食のテーブルにおでましねがいたいものだが

と、わがはいは首をひねった。すると、すばらしい考えがうかんだ。ちかって申すが、この思いつき、諸くんも、必要なばあいには、ご利用なされるものじゃ。

シャコのむれがどこにおりるかを見さだめると、わがはいは鉄砲に弾をこめた、と申しても、弾はもう品ぎれ、わがはいは、つえのいっぽうのはしを、急場しのぎにすこしけずってとがらせ、それを鉄砲にこめたのじゃ。わがはいは近づく、シャコは飛びたつ、それ、発射！　ほほう、なんということ！　七羽のシャコは、わがはいのつえに、くしざしになり、すこしはなれたところに、ふうわりふうわり、おりてきたではないか。こんなに早く、みんながいっしょになれるなんて、というような顔つきをしておったよ。

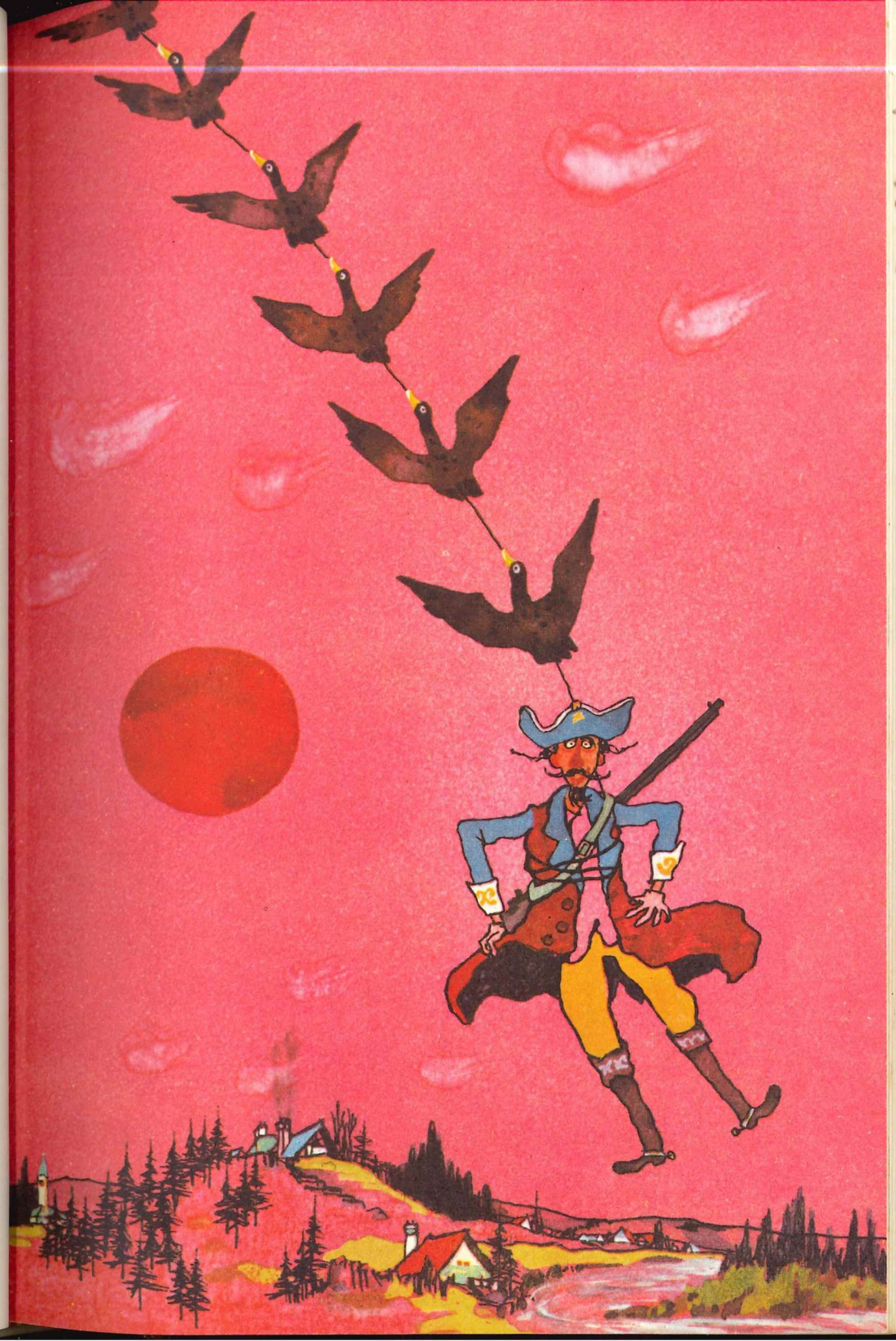
またあるとき、ロシアのふかい森のなかで、すばらしく美しい黒ギツネと、であったことがある。だが貴重な毛皮に弾をうちこんで、穴をあけてしまうのは、もったいない話じゃないか。

キツネくんのうしろには木の幹がある。とっさに、わがはいは、弾をぬきとり、かわりに大きな釘を鉄砲にこめ、ドカンとくらわしたら、みごと命中、キツネのしっぽは幹に釘づけとなった。さて、わがはいは、ゆうゆうと近づき、ナイフをとりだして、キツネの顔に十文字の切れめをいれてから、ピシリピシリ、むちをくれてやると、キツネはそのみごとな毛皮から、とびだしてしまった。いや、まったく、愉快なめずらしい見ものじゃった。

偶然と幸運が失敗をつぐなってくれることが、世間にはよくあるものだ。キツネの事件のすぐあとで、わがはいはこんな経験をした。

ふかい森のどまんなかで、イノシシの子と母イノシシが、ぴったり前後にくっついてかけてくる。わがはいは鉄砲をうったが、あたりゃしない。ところが前にいた子のほうは、ひとりで走ってにげたのに、母イノシシはたちどまって、まるで地面に釘づけにでもなったように、じっとしてうごかなくなった。よく見ると、その母イノシシはめくらなんだ。つまり、子が、母イノシシに自分のしっぽをくわえさせて、道案内をする親孝行のさいちゅうに、わがはいのうった弾が二ひきのあいだをとおったんで、しっぽは切れてしまったというわけだ。案内役がひっぱらなくなったので、母イノシシはしっぽのはしをくわえたまま、じっとしている。

そこでわがはいは、そのしっぽのもういっぽうのはしをつ



かみ、年とってなにもできない母イノシシを、苦労もなく、手むかいもうけないでひきながら、がいせんあそばしたというわけだ。

このような雌のイノシシが、とても危険なときもあるが、それよりもっとおそろしく、もっとあぶないのは、雄のイノシシだ。あるとき、わがはいは森のなかで、そんなやつとであったことがあるが、運のわるいことに、それはちょうど、わがはいに、せめる用意もまもる用意もできていないときであった。

たけりくるったイノシシは、力まかせの横打ちをくわせてきた。わがはいは、あわやというところで一本の木のうしろににげたのだが、いきおいあまったイノシシは、きばで木の幹をつきぬいてしまい、すぐにぬきとることも、つぎの攻撃をしかけることもできないありさまじゃ。

「ははあ、こうなれば、こちらのものだ。」

わがはいはいそいで石をひろい、それできばをなぐって形をかえてしまった。こいつめ、もう、にげられん。わがはいが近くの村から、荷車とつなをとってくるまで、イノシシはおとなしくまっていなければならなかった。

ばんじめでたく、わがはいの思いどおりにはこんで、イノシシめ、無傷でいけどりというわけじゃ。

諸くんはきっと、聖者で、狩りうどや鉄砲うちのまもり神、聖フーベルトゥスのことを聞かれたことがあろう。また、フーベルトゥスがあるとき、森でであった、角のあいだに十字架のあるりっぱなシカの話を聞かれたこともあろう。

この聖者にはわがはいも、まい年なかまといっしょにそなえものをささげておるし、シカのすがたももうかぞえきれぬぐらい、教会の絵や、騎士のよろいのしゅうでお目にかかっているので、そのような十字架をたてたシカが、むかしはいなかったとか、今日ではいるとかということを、りっぱな狩りうどの名誉と良心にかけて、いいきることはできぬ。だが、それはともかく、わがはいは、自分がこの目で見たことをお話するから、聞いてくれい。

あるとき、わがはいは、またとあろうかと思われるようなみごとなシカに、思いがけなくもでくわしたが、もう弾はぜんぶうちつくし、のこっていない。

シカのやつ、それを知りぬいているように、へいきのへいざでこちらを見ている。

とっさに、わがはいは、火薬を鉄砲につめこみ、早わざで

種だけにしたサクランボをひとにぎり、その上にいれた。そうして、シカのひたいめがけて、角の、あいだへ、ズドンとくらわしてやったのじゃ。シカのやつ、ふらふら、よろよろしおったが、それでもにげていってしまった。

一年か二年たって、わがはいはおなじ森で狩りをしておった。すると、これはどうだ。一ぴきの大ジカがあらわれたが、三メートルいじょうもあるみごとなサクラの木が、角のあいだにはえているではないか。

わがはいは、すぐにいぜんの冒険を思いだし、「じゃあ、こいつは、とっくのむかしから、わがはいのものだったんだ。」と考えて、一発でうちとめた。いちどきに焼き肉とサクランボのかけ汁が、手にはいったというわけだ。と申すのは、木にはサクランボが鈴なりで、それはまだ食べたことがないぐらい、うまいもんであった。

こういうこともあるから、聖フーベルトゥスのシカにしても、だれか信心ぶかい狩りうどか、狩りずきな修道院長か、僧正さまが、わがはいがサクランボでやったみたいに、十字架を、シカの角のあいだにうちこんだのかもしれんて。やむをえないときとか、のるかそるかのばあいには、——りっぱな狩りうどは、よくそんなめにあうものだが——チャンスをのがすことのないよう、なんでもいいからひっつかみ、なんでもいいからためすものだ。わがはいにしても、よくそういうばあいにであったものよ。

たとえば、つぎのばあいについて、諸くんはなんとおっしゃるか？　あるとき、ポーランドの森でのこと。日はくれる、火薬はなくなる。わがはいは家路をたどっていた。すると、ものすごいクマがあらわれ、大口をあけて、いまにもわがはいをのみこもうと、とびかかってくるではないか。

わがはいはあわてふためいて、ポケットというポケットをさぐってはみたが、火薬もなければ弾もない。あるのは用意のためにもっている二つの火打ち石だけ。わがはいはその一個を、大グマのひらいた口のなかへ、のどのおくめがけて力まかせになげこんだ。

クマめ、あまりいい気分ではなかったらしい。くるりとまわれ右をしおったので、わがはいはすかさず、もうひとつの火打ち石をとって、お尻の入口からエイヤとなげいれてやった。

これがもののみごとに成功した。石はからだのなかにはいっただけではない。前からきたもうひとつの石と、はげしくぶつかったので、大爆発がおこり、クマのやつ、こっぱみじんにとんでしまったわ。

まあそのときは、なんとか、かすりきずひとつうけずにすんだが、あれとおなじことを二どとくりかえすのは、もういやじゃ、ごめんじゃ、ほかになにか身をまもる方法がなければ、クマとあらそうのはまっぴらじゃ。

ところが、こちらのつごうのわるいときにかぎって、いちばん危険なものにおそわれるのは、わがはいの運命とでも申そうか。わがはいがどうにもできぬときを、けもののやつら、本能でかぎつけるみたいじゃ。

あるとき、わがはいは鉄砲の発火石をすこしとがらそうと、ネジをはずして、といでおった。するととつぜん、おそろしい、ばけものみたいなクマが、うなり声をあげて、とびかかってきたではないか。

わがはいは、いのちからがら、一本の木によじのぼってにげた。そうして、木の上で身をまもることを考えようとしたのだが、のぼっているあいだに、ええい、ちくしょうめ、つかっていたナイフがつるりとすべりおちてしまった。ナイフがなければ、ネジをしめることはできない。木の下には、クマがいて、いまにものぼってこようとしている。

まえにやったように、目をなぐって火をつけることは、もうやりたくなかった。というのは、あの実験は、ほかの障害は考えないとしても、ひどく目をいため、まだそれがすっかりなおってはいなかったからだ。

見おろすと、はるか下の雪の上に、ナイフはまっすぐつったっているが、いくら見おろしていても、どうにもならん。ところが、ついに、ある考えがうかんだ。まことに名案、そして珍案。

だれだって、おそろしいめにあったときには、からだの下のほうからとびだしそうになるあの噴水を、わがはいはうまくとばして、それがちょうどナイフの柄に、じゃあじゃあかかるようにした。ところが、なにしろ寒いときじゃろう。水はすぐにこおりつく。それで、あっというまにナイフの上には氷の柱ができて、にょきにょきとのび、それが木のいちばん下の枝までとどいた。わがはいはその柱をつかんで、苦もなく、しかし、そおっと気をつけながら、ナイフをひきあげたのじゃ。そのナイフで発火石のネジをしめおわったかおわらぬかに、クマの大将がのそのそのぼってきおった。

ほんとうに、チャンスをうまくつかむには、クマのようにかしこくなければならんわ、と考えながら、まごころこめて一発ごちそうしてやると、クマの大将、永久に木のぼりをわすれてしまったのじゃ。

おなじようなしだいで、またあるときは、おそろしいオオカミが一ぴき、あっというまに、とびかかってきたが、それがあまり近かったので、わがはいはどうすることもできず、ただ本能的に、げんこつをオオカミのひらいた口のなかへつっこんでしまった。もう、なんとか助かりたいいっしんで、わがはいは、ぐいぐい腕をつっこむ。腕はほとんど、オオカミの肩にまでとどいた。

さてどうしたらいいのか？

このまずいかっこうが、わがはいの気にいったなどとは申さん。——そうであろう、オオカミと、ひたいをあわせて、にらめっこ。——おたがいに、あまりあいそのいいめくばせはしなかったな。しかし、わがはいが腕をひきぬけば、オオカミはますますおこって、わがはいにとびかかるにちがいない。どうもそんな目のいろだった。

それからどうなったか、かんたんに話そう。わがはいは、つっこんだ手でオオカミのはらわたをつかみ、ぐいとひっぱったら、ちょうど、手ぶくろをぬぐときのようなぐあいで、オオカミのうらとおもてがひっくりかえってしまった。わがはいは、オオカミを地面にほうりだして、さっさとかえってきたのじゃ。

すばらしい犬と馬

諸くん、こんなばあいにわがはいがうまく、しかし危機一髪のところで、いのちびろいをしたのは、たしかにぐうぜんのおかげだ。しかもそのぐうぜんをうまく利用できたのは、わがはいの勇気とおちつきがあってこそ、というわけだ。

だれでも知っているように、これらがそろわなければ、いい狩りうどや、船乗りや、兵士ではないのだ。だがもしぐうぜんと幸運だけをたよりにし、必要なわざをみがくこともせず、成功を生む道具をそなえようともせぬ者があれば、いくらそれが狩猟家といわれようが、海軍大将、陸軍大将といわれようが、まったく用心のたりない、欠点のある者であろう。

しかし、わがはいは、そんな文句をつけられるものではござらぬ。と申すのは、わがはいの馬も犬も鉄砲も、それらをあやつるわがはいのわざも、なかなか有名なもんじゃったので、森や野原に、わがはいの名はじゅうぶんにとどろきわたったと自慢いたしてもよろしかろう。

わがはいのうまや、犬小屋、鉄砲置場のことを、今、こま

ごまと話そうとは思わぬ。しかし、わがはいの犬たちのなかでも、とくべつ手がらをたてた二ひきのことを、わがはいはわすれることができぬ。ここでは、その話をかんたんにいたそう。

その一ぴきはシャコ狩り用のポインターであったが、こいつ、よくはたらく、かんがいい、用心ぶかい、見るものはみんなうらやましがったものじゃった。昼でも夜でも、よく役にたってくれた。夜も、こいつのしっぽにちょうちんをぶらさげると、昼間とおなじに、いや、昼間いじょうに、狩りはうまくいったものじゃ。

わがはいが結婚してまもないあるとき、妻ののぞみで狩りにでかけることとなった。わがはいは馬にのり、えものをさがしに、さきに出発した。

しばらくすると、わが愛犬は、何百羽というシャコの大群を見つけた。妻は、わがはいのでたすぐあと、副官と馬方と三人で、いっしょに出発したはずなのだ。わがはいは、かれらがいまにもおいついてくるかとまっていた。ところが、だれもいっこうにやってこない。とうとうわがはいは心配になって、まわれ右をした。

道を半分ほどもどったとき、ひどく悲しげな泣き声が聞こえてきた。かなり近いようだが、そこらじゅう、どこを見まわしても、人の子ひとり見あたらない。

はてな、とわがはいは馬をおり、地面に耳をくっつけた。ようく注意してみると、その泣き声は地面の下から聞こえてくる。しかもその声の主は、まちがいもなく、妻と副官と馬方ではないか。

そのとき、石炭掘りの穴が、わがはいのすぐそばに口をひらいているのに気がついた。連れのふたりといっしょに、妻がこの穴におちこんだということは、残念ながら、もうまちがいない。

わがはいは大いそぎで、近くの村へいき、坑夫をよびあつめてきた。そうして、この坑夫たちが長時間、ひっしにはたらいてくれたおかげで、災難にあった三人を百五十メートルもある穴のそこから助けだすことができた。

さいしょにでてきたのが、馬方、それからその馬、つぎに副官、それから、その馬、それからわがはいの妻、そうしておしまいに、妻のトルコ産のやせ馬、というぐあいであったが、おどろいたのは、そんなにふかいところへ墜落しておりながら、人も馬も、ほんのわずか、手足をくじいただけだったということだ。

それだけにショックは大きかった。諸くんもわかってくださろうが、もう狩りどころではない。ところで、墜落の話がながくなったが、どこかでシャコをねらっておるはずのわがはいの犬がどうなったか、諸くんは考えてくださったかな。え、わすれておった？　そうであろう。であれば、わがはいもそのさわぎで、犬のことをわすれてしまったとしても、諸くん、わるくは思いなさるまい。

のっぴきならぬ役めがあって、わがはいは、あくる朝すぐに旅にでた。かえってきたのは、二週間後じゃ。家にかえってきて、何時間かたったとき、わがはいは愛犬ディアーナのすがたが見えぬことに気がついた。家の連中は、犬はわがはいの旅についていったのだろうぐらいに考えて、べつだん気にしなかったのよ。さあ、心配なことに、どこをさがしてもディアーナのすがたが見えんではないか。

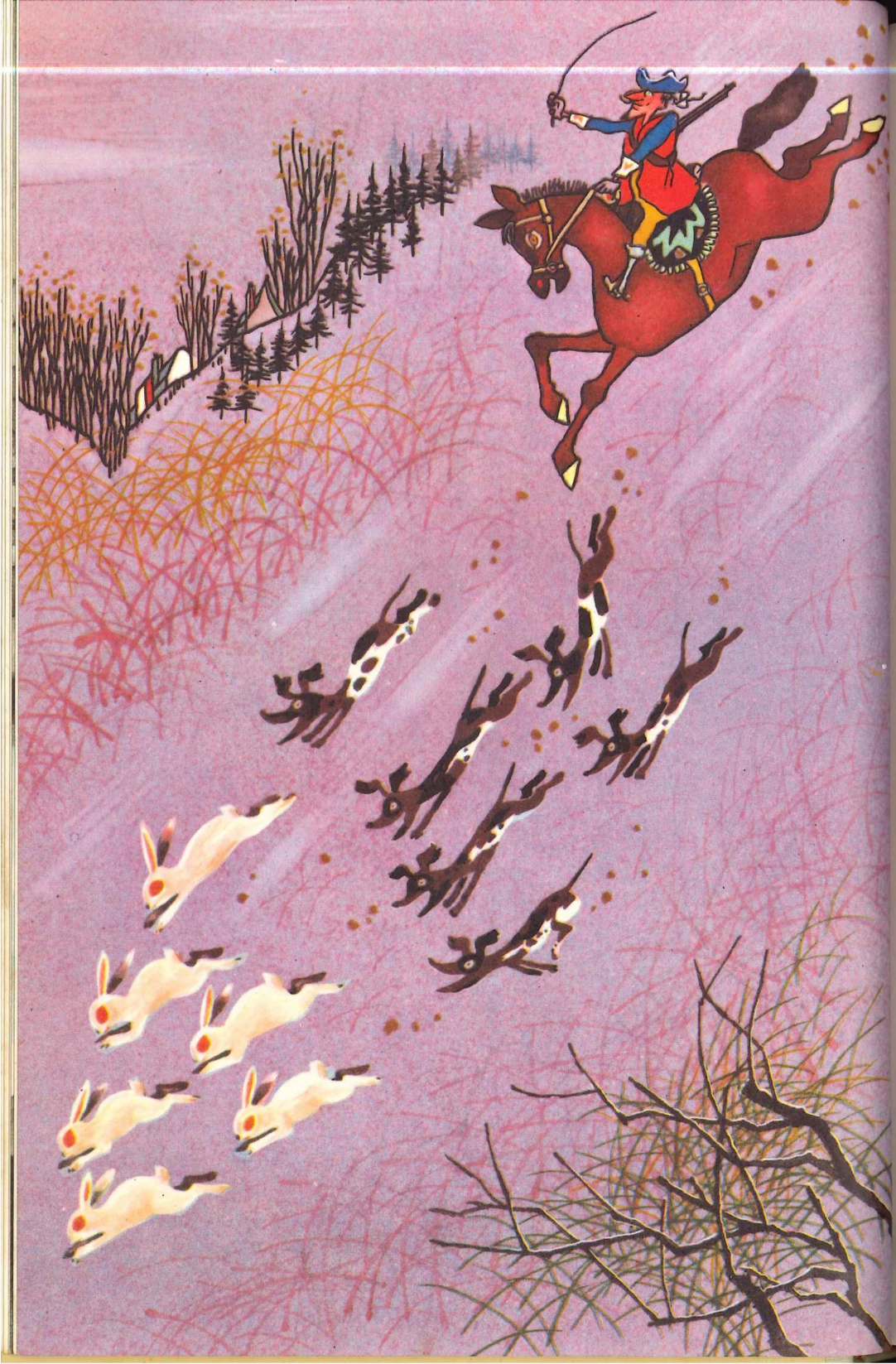
そして、さいごにひらめいた考えは、「ひょっとしたら、まだシャコを見はっているのではないか。」ということじゃ。期待と心配にじっとしておれず、わがはいはあの場所にかけつけた。すると、おお、なんということ、犬は二週間まえとおなじ場所に、じっとしているではないか。

わがはい、もう、うれしくてうれしくてたまらない。「ピール」とさけぶ。犬がとびかかる。わがはいはたった一発で二十五羽もやっつけた。しかし、かわいそうに、腹ぺこにやつれて、犬のやつ、わがはいのそばへ、はってもこれないぐらいだった。家へつれもどるためには、わがはいがやっといっしょに馬にのるほかはなかった。しょうしょうきゅうくつではあったが、こいつのためならよろこんで、という気持であったよ。わかってくださろうが。

二、三日ていねいにせわしてやると、やつめ、もとどおり元気になり、何週間かのちには、もしやつがいなければ永久にとけなかったようなぞを、わがはいはとくことにあいなった。

と申すのはこういうわけじゃ。わがはいは二日間ものあいだ、一ぴきのウサギをおいまわした。犬のやつ、なんどもウサギをわがはいのほうへおってくるのだが、どうしてもわがはい、ねらいをさだめることができない。

魔法を信ずるのは、わがはいのがらではない。そんなものを信ずるには、わがはいはあまりにもなみはずれたことを体験している。だがこのときばかりは、なんとも理屈で説明のしようがなかった。しかし、とうとうさいごに、ウサギはわ



がはいの近くまできたので、わがはいはそれを鉄砲でうちとめた。ウサギはたおれたが、わがはいがそこになにを見たと諸くんは思われるか。

そのウサギには、腹の下に四本の足があるばかりではなく、背なかにも四本足がくっついているのじゃ。四本が走りつかれると、ちょうど平泳ぎも背泳ぎもつかいわけられる水泳選手のように、くるりとうらがえしになって、べつの四本で、スピードアップして走りだすというわけなのじゃ。

こんなウサギは、その後、二どとお目にかかったことがござらんが、そいつにしても、もしわがはいの犬があんなにすばらしいものでなかったなら、しとめることはむりだったであろう。

こいつはほかの犬よりずっとずっとすぐれていたから、わがはいはほとんど問題なく、それに「ナンバーワン」とあだなをつけたいところだが、じつは、それと一位をあらそう強敵が、もう一ぴきいるのじゃ。

それは、わがはいのもっていたグレイハウンドで、そのすがたよりも、足の速さがとびぬけていた。諸くんのお目にかけたなら、きっと感心してくださったであろう。そうして、わがはいがそいつをかわいがり、しじゅう狩りにつれていったことを理解してくださったであろう。

わがはいの手下として、じつに速く、じつにたびたび、じつに長いあいだ、走ってくれたので、足はだんだんすりきれて、腹が地面にくっつくほどになった。それで、そいつの晩年にはもう、細長い穴にとびこんで、アナグマをくわえてくるのにしかつかえなくなったのだが、こうなってからも、まだかなり長いあいだ、わがはいの役には、たってくれたものじゃ。

まだ足の長かったころ、このグレイハウンドは——申しおくれたが、これは雌犬じゃよ——一ぴきのきみょうに太ったウサギをおいかけた。かわいそうに犬のやつ、腹に子どもをかかえて、いまにも生まれそうだというのに、いつものとおりのフルスピードでかけていく。わがはいは、ひっしになって馬でおったが、だいぶおくれをとった。

ところが、とつぜん、ひとむれの犬がいるような、鳴き声が聞こえてきた。ただその声はよわよわしく、やさしく、なにごとがおこったのか、さっぱりわからない。

わがはいは、近づいていった。すると、おお、なんというふしぎ。走っているさいちゅうに、ウサギが子を生み、わが

愛犬もまた、そのそばで子を生んだのだ。しかもウサギの子も、犬の子もおなじ数だけ生まれている。生まれたウサギの子は、本能でにげつづける。生まれた犬の子も、本能でおいかけつづけ、とっつかまえる。

それで、たった一ぴきの犬ではじめた狩りのおわりには、六ぴきのウサギと六ぴきの犬が、わがはいのところに、いちじにころがりこんだというわけじゃ。

このすばらしい雌犬とおなじぐらい、思いだしてもたのしいのは、リトアニア産の馬のこと、こいつ、いくら金をつんでも買えるしろものではござらん。

こいつを手にいれたのは、まったくのぐうぜんで、わがはいは、たまたま乗馬のわざを、おおぜいの人に見せることとなったのだが、それが、わがはいの名声を、少なからず、たかめたものだ。

つまりあるとき、わがはいはリトアニアのプルゾボフスキー伯爵のりっぱな別荘にいて、客間でご婦人がたとお茶をいただいておった。紳士諸くんは、そのあいだに、たったいま養馬場からとどいたばかりの血すじのいい若馬を見ようと、中庭におりていった。

するととつぜん、「助けてくれ――。」とよぶ声が聞こえてきた。いそいで階段をかけおりると、その馬がめちゃくちゃにあばれていて、だれも近づくことも、とびのることもできないのだ。日ごろは勇かんな乗り手も、ただおどろきうろたえているだけなのだ。みんな不安な、心配そうな顔をしている。

わがはいはひととびで、馬の背にまたがった。馬はふいをつかれ、わがはいが、うでによりをかけてあやつると、まったくおとなしくなった。

このありさまをご婦人がたに、もっとよく見せてさしあげ、安心していただこうと、わがはいは客間のひらいた窓から、馬もろともおどりこんだ。そして、なみ足、速足、かけ足と、なんどもへやじゅうをのりまわし、さいごにはテーブルの上にのりあげた。そうして馬術の型をひととおり、室内サイズで、もののみごとに見せてさしあげると、ご婦人がたは、ほんとに見とれておられたわ。

この馬はまことにじょうずにやってのけ、テーブルの上を走りながらコーヒーポットひとつ、茶わんひとつけとばしたりはしなかった。

このことがあって、わがはいはご婦人がたや、伯爵に、おおいに気にいられることになったのだ。伯爵は、わがはいに、いつものていちょうさで、つぎのようにたのんでこられた。

「この若馬を、わしからの贈りものとしてうけとってほしい。ちかいうち、ミュンニヒ伯爵の指揮のもとにトルコせいばつがおこなわれるというが、そのときには、ひとつこれにのって出陣し、おおいに勝ちどきをあげてくれよ。」

こんなうれしい贈りものは、またとあるまい。兵士としてのさいしょの運だめしともなる、トルコ軍せいばつをひかえて、こいつはさいさきがいいぞと思った。

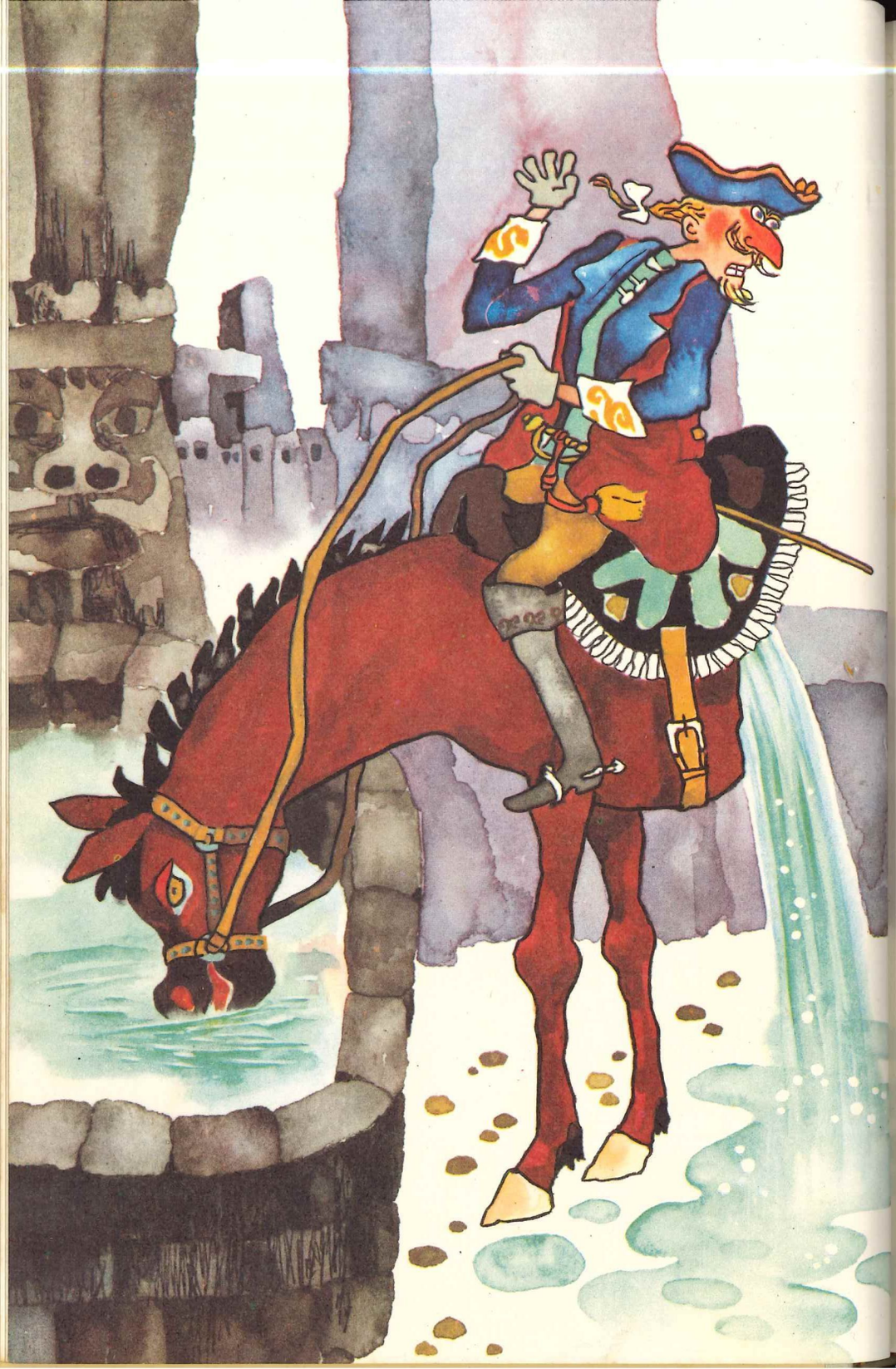
おとなしくて、勇かんで、火のようにはげしくもなるこの馬、子ヒツジのようにもなれば、あらしをもまきおこすこの馬を見ていると、勇かんな兵士としての義務をけっしておろそかにできなかったし、若いアレキサンダー大王が戦場でやったようなめざましいおこないを、わがはいもつねづね考えねばならなかった。

トルコ軍との戦争

ペーター大帝にひきいられた戦争のさい、プルート川のほとりですこしばかりきずついたロシア軍の名誉をとりもどそうというのが、どうやらわれわれの遠征の第一の目的であったらしい。さきにのべた大将軍ミュンニヒ伯爵の指揮のもとに、われわれがいくたびか苦しい、しかしはずかしくないくさをしたおかげで、その名誉はじゅうぶんにとりもどされたのじゃ。

あるとき、トルコ軍をオチャコフという町においつめたが、第一線では、はげしい戦いがくりひろげられておった。そしてわがはいのリトアニア名馬は、すんでのところでわがはいを地獄におとすところであった。と申すのはこういうわけじゃ。

わがはいは、味方をかなりではずれて、見はりをしていた。すると、敵が砂けむりをたてて、わがはいに近づいてきた。だが、なにしろはげしい砂けむり、敵の数も、敵の作戦も、わがはいにはさっぱりわからん。そんなとき、わがはいもお



なじような砂けむりをあげて走りだすことは（もっとも、うしろへむかってじゃが）、なんでもないことであったろう。

だがそんなことをしても、いっこうにひきたちはせぬし、それに、なんのために見はりにでていたのか、意味もなかろう。それで、兵隊をさっと左右にちらばらせ、できるだけ砂けむりをあげさせておいて、わがはい自身はようすを見るために、一直線に敵軍めがけて突進した。

それがうまくいった。敵は立ちどまって、しばらくはてむかったが、左右にちらばったわがはいの部下たちのことが恐ろしく、うき足だってにげだした。

「それっ！　突撃！　みんな、すすめ！」

われわれは敵をけちらし、おいちらし、敵は総くずれの敗走。われわれは敵を要塞においこんだばかりではない。勝利、勝利、かんぜんな大勝利、勇かんなわれわれが予期していたいじょうの大成功をおさめたのじゃ。

ところで、わがリトアニア名馬の足の速いこと、わがはいは先頭をきって追撃していった。敵はうまく、要塞のむこうの門からにげだしていく。それを見とどけ、わがはいは広場にひとまずとどまって、集合ラッパをふかせたほうがよかろうと考えた。

わがはいは馬をとめた。ところが諸くん、おどろいたではないか。わがはいのそばには、ラッパふきもいなければ、けらいの軽騎兵ひとりのすがたも見えないのだ。

「べつの道をとばしているのかな。それともどうなったのかな？」

と、わがはいは考えた。

それにしても、あまり遠くはなれたはずはない。すぐにおいついてくるだろうとたかをくくって、息をはずませているわがはいのリトアニア名馬を、広場の泉にのりつけ、水を飲ませた。

ゴクンゴクンとやつは飲んだ。いつまでもいつまでも飲みつづけるが、かわきはとまらぬ。ところがそれもとうぜんなのじゃ。部下はまだかと、わがはいがふりむいたとき、わがはいが、そこになにを見たと諸くんはお考えかな。

あわれな馬のうしろ半分、つまり腰とお尻がないのじゃ。まるですっぽり切りとられたようじゃ。だから前からはいった水は、そのままうしろからざあざあでていく。いくら飲んでも、馬のたしにも力にもならんわけじゃ。

どうしてこういうことになったのか、わがはいには合点がゆかぬ。しかし、とうとうわがはいの馬方が、ぜんぜん反対

の方角から大あわてに走ってきた。そして勝利をいわって、いっしょうけんめいしゃべりまくりながらも、はげしくのしって、わがはいにつぎのような説明をしたのである——。

つまり、わがはいが、にげる敵とくんずほぐれつしながら、要塞につっこんだとき、とつぜん、つり門がおろされた。それでわがはいの馬は、うしろ半分を切りとられてしまったのじゃ。

はじめのうちは、そのうしろ半分は、門のところへひっしになってにげこんでくる敵兵のあいだを走りまわり、大いに敵をこらしめた。それからかれは意気ようようと、近くの牧場へ歩いていった。というわけだから、かれはまだ牧場にいるにちがいない。——これが馬方の話であった。

わがはいは、すぐにまわれ右をした。すると、わがはいのてもとにのこっている愛馬の前半分は、ふしぎなぐらいの速さで、わがはいを牧場へはこんでいった。やれやれ、うれしいことに、そこにはもうかたっぽうがいて、なかまの馬たちといっしょに、牧場をかけまわっているではないか。

馬のどちらの半分とも、生きているということを、こうしてたしかめたので、わがはいはすぐに、獣医をよびつけた。獣医はためらいもせず、その両方を、ちょうどもちあわせていたゲッケイジュの若枝でぬいあわせてくれた。

きずはうまくなおったが、話はこれでおわりではない。このような名馬なりゃこそというような、あることがおこったのだ。と申すのは、ゲッケイジュの若枝は、馬の腹に根をはり、芽はぐんぐんと生長して、わがはいが馬にまたがると、頭上には枝のおおいが、しげることとなった。おかげでその後、わがはいと愛馬共有のゲッケイジュがなげかける、美しい木かげにすわったまま、わがはいは、どうどうと、馬をのりまわすこととなったのである。

このいくさでは、もうひとつ、ちょっとしたやっかいがあったが、それもついでにお話しよう。

わがはいが、あまりにはげしく、あまりにながいあいだ、たゆまず、敵をうちこらしたため、敵のすがたはもうとっくに見えなくなったのに、ひとりでに腕が剣をふりおろす運動は、とまらなくなってしまった。わがはい自身のからだや、近くにきた部下たちのからだを、わけもなくきずつけることのないように、わがはいはそれから一週間ほどのあいだ、腕にほうたいをまきつけておかねばならなかった。まるで腕が半分切りおとされたようなかっこうじゃった。

わがリトアニア名馬のごとき馬をのりこなせる男に、もっとほかの、かわった曲乗りができたとしても、諸くん、ふしぎには思われるまい。ただこの曲乗り、すこしばかり、うそのようにひびくかもしれんが。

つまり、われわれはある町をとりかこんでおった。町の名は、もうおぼえてはおらん。ところが元帥閣下は要塞のなかがどうなっているのか、正確に知りたいと、ほんにしつこく、のぞまれるのじゃ。

せっこうや、見はりや、城壁をきりぬけて、要塞のなかへはいることは、はなはだむずかしい。いや、ほとんどむりなことであろう。そんなことをうまくやってくれそうな、うできききはだれもいなかったのだ。

勇気まんまん、お役にたちたいとねがっていたわがはいは、すこし早まりすぎたのかもしれんが、ちょうど敵の要塞にむかって、火ぶたをきっているいちばん大きな大砲のそばに立ち、とびだした弾丸に、さっととびのった。こうすれば要塞のなかへはいっていけると、考えたのじゃ。しかし、道のなかほどまで空中をとんだとき、いろいろなことが、たいへん心配になってきた。

「はて、」と、わがはいは考えた。「はいれることははいれるが、すぐにでようったって、どうすりゃいいのか。それに要塞のなかではどんなめにあうことか。すぐにスパイだと見やぶられ、絞首台おくりにちがいない。そんな名誉の戦死はまっぴらじゃ。」

こういうふうに考えて、わがはいは、てっとりばやく決心した。ちょうど要塞からうちだされた弾丸が、わがはいのすぐそばを、味方めがけてとんでいく。このチャンス、のがすものかと、わがはいはひらりと弾をのりかえた。ていさつの役めこそはたせはしなかったが、ぶじになつかしい味方の陣地にご帰還というわけじゃよ。

とんだりはねたりすることに、身がるでたっしゃなことにかけては、のり手のわがはいにもまけず、わが愛馬もまた、みごとじゃった。堀も、かきねも、ものともせず、いつも一直線につきすすんでいった。

ある日のこと、わがはいは、こいつにのって、ウサギをおいかけた。ウサギは野原をよこぎって、国道をこえてにげていく。そこへちょうど、ふたりの貴婦人ののった馬車がやってきて、ウサギとわがはいのあいだを、とおりかかったのじゃ。

すると、わが愛馬は早わざで、するりと、あいたままの馬車の窓から馬車をくぐりぬけてすすんだ。そのすばやいこと、わがはいが帽子をとり、ご婦人たちに「失礼ごめん！」と、ていちょうにおわびをする、いとまもないくらいであった。

それから、こんなこともあった。わがはいは、どろ沼をとびこえようとした。はじめはそうとも思えなかったのだが、とびあがってから見ると、こいつなかなか、でかい。わがはいはとびながら、空中でむきをかえて岸にもどり、じゅうぶんにいきおいをつけて、もういちど、とびなおした。

ところが、またまたとどかず、むこう岸からほど遠くないところで、首までずぶずぶと、どろ沼にはまりこんでしまった。わがはいの腕の力が強くなかったら、わがはいは、きっと、ここでおだぶつしていただろう。

しかし、そこはわがはい、腕で自分のえりがみをつかみ、ひざのあいだにぐっとはさんだ馬もろとも、からだをひっぱりあげたのじゃ。

トルコ軍の捕虜になる

どんなに、わがはいに勇気と知恵があり、わがはいの馬といっしょにどんなにすばやく、敏速に、しかも雄々しくやりとげたといっても、このトルコ軍との戦いでは、いつも、思いどおりにいったわけではなかった。

それどころか、わがはいは不幸にも、大軍にうちまかされて、捕虜となってしまった。さらにわるいことには、トルコではあたりまえの話なんだが、わがはい、どれいに売られてしまったのである！

このあわれなわがはいのやったしごとというのが、つらくきびしいというより、むしろ、ちょっとふうがわりで、めんどうくさいやつだった。つまり、トルコ皇帝サルタン殿お気にいりのミツバチをまい朝、野にはなっては、一日じゅう、そこで見はりをし、夕がたになってまた、巣箱にあつめるというわけだ。

ある日の夕がた、わがはいは、ハチを一ぴき見うしなってしまった。が、すぐに二ひきのクマがハチをおそい、いまにもひきさいて蜜をとろうとしているのに気がついた。そのとき、わがはいは、一本の銀のおのよりほかに、なにも武器らしいものを手にもっていなかった。

銀のおのというのは、サルタンの庭師や農夫のしるしなのだが、わがはいは、ただおどしておっぱらうつもりで、二ひきのどろぼうグマめがけて、それをなげつけた。

おかげで、かわいそうなハチのやつを、にがしてやることができた。が、まずいことには、わがはいがあまり強く腕をふりあげたので、おのは空にまいあがり、どんどんどんどん、のぼっていくではないか。とうとう月までとどいてしまった。

「どうやって、とりもどしたらいいだろう？　いったい、どんなはしごをつかって、ひっぱりおろそう？」

と、わがはいは、思案にくれた。

とつぜんわがはいは、トルコマメがひじょうにはやく、しかもまったくおどろくべき高さまでそだつことを、思いだした。そこですぐに、一本のマメの木をうえると、マメはほんとにずんずんのびて、つるは、しぜんに三日月のかたほうのはしにからみついたのである。

わがはいは、意気ようようとよじのぼり、ぶじ、月にいき

ついた。しかしなにしろ、みんなおなじように銀色に光っているところだから、わがはいの銀のおのをさがしだすのは、かなり、やっかいだったわい。

だが、とうとうわがはいは、山となったモミがらと、きりわらの上にのっかっているおのを、見つけることができた。さて、かえろうとしたが、さあ、たいへん！　太陽の光が、わがトルコマメを、からからにかわかしてしまって、それにつたわっておりることが、まったくできなくなっているではないか！

「さてどうしたものか？」

またまた、首をひねったのだった。

わがはいは、きりわらで、できるだけ長くなわをあんだ。そしてこれを三日月のいっぽうのはしに、しっかりとむすびつけてから、わがはいはなわをつたっておりはじめた。

右手でしっかりと、なわにつかまり、左手におのをもって、ひと区切りすべりおりては、上のいらなくなったぶぶんを切り、下にむすびたすというふうにして、だいぶさきまでおりてきた。

ところが、このようになんども切ったり、むすびたしたりしたのでは、なわにいいはずがなく、ぶじにサルタンの領地でなめるものだから、棒はのどから胃をとおり、腹をとおって、とうとうそのさきは、お尻からでてきた。

クマ公が、すっかり棒をなめつくしてしまったとみるや、わがはいはかけよって、クマ公のお尻から顔をだしたかじ棒のさきの穴に、一本の長い木釘をうちこんだのじゃ。おかげでこの食いしんぼう、あともどりできない。わがはいはクマ公めを、あくる朝までそのままにしておいたので、ぐうぜん、そばをおとおりになった大サルタンは、このいたずらをごらんになって、大わらいなさったわ。

ドイツへのかえり道

それからまもなく、トルコはロシアと講和して、わがはいは、ほかの戦争捕虜といっしょに、また聖ペテルスブルグにしゃくほうされた。

しかし、わがはいは軍人をやめて、ロシアをさることにした。それは、まだ、ゆりかごのなかだった皇帝と、その父母、ブラウンシュバイク公、ミュンニヒ元帥そのほかたくさんの人びとが、シベリアにながされた大革命のころのことである。

ちょうどヨーロッパじゅうを、いままでにないようなきびしい冬がおそっていた。とうとう太陽にしもやけみたいなものができてしまって、それからというもの、いまにいたるまで、太陽はずっとわずらっているくらいだ。それでわがはいは故郷ドイツへのかえり道には、いきに経験したよりも、もっともっと苦しいめにあったのだった。

わが愛するリトアニア馬を、トルコにおいてきてしまったので、わがはいは駅馬車で旅をせねばならなかった。高いイにおりられるかどうかも、あやしくなってきた。

まだ三、四キロ上空、雲のなかだっただろうか、なわがぷっつり切れ、わがはいは、ものすごいいきおいで地上におち、気をうしなってしまった。こんなに高いところからおちたのだから、からだの重みで、わがはいは地中ふかく、すくなくとも十五メートルはめりこんでしまったんじゃよ。ようやく正気にもどりはしたが、さてこんどは、どうやってはいだしたらいいかわからない。

だが人間、せっぱつまればいい知恵がうかぶもの。わがはいは四十年も切っていないつめで、どうやら階段を掘り、ぶじ、あかるみにでたのである。

このにがい経験におしえられ、それからというもの、ミツバチや巣箱におってはたかるクマ公よけの、もっといい方法を考えついた。

わがはいは畑でつかう車のかじ棒に、蜜をぬっておいて、夜になると、そこからあまりはなれていないところで、まちぶせしていた。

すると、思ったとおりだ！　一ぴきの巨大なクマが、蜜のかおりにおびきよせられて、やってきた。そうして棒のさきをぺろぺろなめはじめたのじゃ。ところが、あまりむちゅう

バラのいけがきにはさまれたくぼんだ山道に、馬車はたまたまさしかかった。

なにしろせまいとおり道、「ここらでラッパをふいておかぬと、むこうからも乗物がくれば、はちあわせするぜ。」

わがはいは馬方にそういってやった。馬方のやつ、さっそくラッパを口にあて、力いっぱいふいてみたが、だめなのだ。ラッパはピーともいわないのである。

われわれはまったく首をかしげて、ふしぎがっていたが、ふしぎどころか、じっさい、やっかいなことになってきたのだ。と申すのは、そのうち、一台の馬車がむこうからやってきて、われわれとすれちがおうとした。が、道がせまくて、まるでとおれないのだ。

わがはいは車からとびおり、まず馬を車からはずした。それから車を、四輪のついたまま、荷物ごと肩にかつぎ、いけがきを、えいっとばかり三メートルも高くとびこえて、むこう側の野原へでた。馬車の重さから申しても、まったく、らくなことじゃなかったわい。そうして、あいての馬車のそばをとおりすぎてから、かえりとびをし、わがはいは道にもどった。いそいで馬のところへひきかえし、両わきに一ぴきずつかかえて、おなじようなやりかたで、つまり、もう一ど、むこうがわへとんであいての馬車をおいこし、それからこちらへ、ぴょんと舞いもどって、ぶじに馬を馬車につなぎ、一日の旅をおえて宿に到着したのだった。

だがそのまえに、もうひとつ、二ひきの馬のうち、まだ四歳にもなっていないひじょうにかっぱつなやつが、たいへんなろうぜきをはたらこうとしたことを、申しあげねばなるまい。わがはいがいけがきをとびこえて、二どめのちょうやくをしたとき、やつは、このはげしい運動をあからさまにいやがって、ヒヒンといなないたり、ばたばた大あばれしたりしだした。それでわがはいは、そいつのうしろ足を上着のポケットにつっこんで、さわぎをやめさせた。

宿について、われわれは、冒険のつかれをやすめた。馬方はラッパをかまどのそばの釘にかけ、わがはいはかれにむかいあって腰をかけた。

ところが諸くん、おかしなことがおこった。とつぜん、「トテー、トテー、トテ　トテ　トテ」という音が聞こえた。われわれは目を皿のようにしたが、きゅうに、なぜ馬方のラッパがさきほど鳴らなかったか、という理由がわかった。音はラッパのなかにこおりついていたのだ。そうして、いま、とけるにつれて、きれいな、すんだ音がでてきたというわけだ。

馬方はおおいに名誉を回復した。と申すのは、この律義者、ラッパに口をつけもしないで、しばらくのあいだ、まことにみごとな調子でわれわれをたのしませてくれたのだ。

はじめはプロシャの行進曲だった。「愛もなく、酒もなく」「われさらし場で」「ゆうべ、いとこのミヘルがきたよ」そのほか、たくさんの曲が、つぎからつぎへとでてきた。

そしてさいごに「森はしずかに」という夕べの歌があって、このしずくのオルゴールもおしまいになった。というわけで、わがはいのロシア旅行の話もおしまいとするか。

旅びとのなかには、ほんとうにであったことにいろいろと、おひれをつけていう人がある。だから、読み手や聞き手が、すこしばかり首をかしげるとしても、それにふしぎはない。しかし、もし諸くんのなかに、わがはいの話すことがほんとうかどうか、うたがう人がおられるのなら、まことにうたがいぶかいお人じゃと、心から同情いたさねばならぬし、わがはいが船旅の冒険談をはじめるまえに、むしろおかえりなさるよう、おねがい申さねばならぬ。船旅の冒険、これはいままでのものより、もっとふしぎじゃが、いままでのとおなじくらいに、ほんとうの話なのじゃ。

島のあらしとキュウリつみ

いままで話してきた珍奇なじけんは、みんなロシア旅行で体験したものであるが、わがはいが生まれてはじめておこなった旅はなんであったかと申せば、それは、ロシア旅行よりずっといぜんのこと、ある船旅である。

わがはいのくちばしがまだ黄いろかったころから、旅にでることはわがはいのただひとつの夢であった。ともかく世界を見たい、まんぞくさせてもらいたい、いや、まんぞくをかちとりたいという、どうしようもない欲望をしずめるために、わがはいは、あるチャンス、ないチャンス、どんなチャンスにも手をだした。だが、どうも、うまくいかない。父の城壁をほんのすこしでもやぶることに成功したとおもうと、母と伯母は、ますますはげしい反撃をしかけてくる。わがはいのたくみな攻撃でおとしいれたものも、あっというまにとりもどされるというわけだった。

だが、母かたの親せきにあたるひとりの男が、あるとき、たまたまたずねてきたのだが、この男はやがて、わがはいが

大すきになり、いつも「かわいい、げんきのいいぼうずだ。」といって、かわいがってくれた。そうして、わがはいのののぞむことなら、できるだけのことはしてやろうといってくれるのだった。その男の弁舌は、わがはいのより、ずっときめがあったので、せめてはかえし、ひいてはおしよせ、いい負かされてはいい負かしするうちに、とうとうわがはいの念願がかない、その男についてセイロン島までいってもよいということになったのじゃ。セイロン島ではその男のおじが、もう何年も知事をしている。わがはいは、ほんに、天にものぼる心地であったわ。

われわれはオランダ王家の重大な任務をもって、アムステルダムから出帆した。船旅はおだやかにすすんだが、ただいちどだけ、おそろしいあらしにであったことがある。ところがそのあらし、おどろくべき結果をのこしたので、ここに、かんたんにふれておこう。

あらしはちょうど、われわれがある島にいかりをおろして、薪や水をつみこんでいた、そのときにおこった。まったく、その荒れくるいようのすごいこと、とてつもなく太くて高い木々を、無数に、根こそぎひきぬいて、空中にふきとばした。これらの木々のなかには、重さ数万キロのものもあったのに、なにしろ高くとばされたので——すくなくとも地上七、八キロにはあがっただろう——それらは、ときに、空中をふわふわ飛んでいる鳥の羽ぐらいの大きさにしか見えぬのだった。

だが、あらしがしずまると、木はまっすぐにもとの位置へおちてきて、また根をはったので、あらしのあとは、ほとんどのこらなかった。

ただ、いちばん大きな木だけは例外だった。とつぜんのあらしで、こいつが地面からひきぬかれたとき、その枝のあいだには、ちょうど、ひとりの男とその妻がすわって、キュウリをもいでいるさいちゅうであった。うん、この地方では、キュウリは木の上になるんじゃよ。

正直者の夫婦は、がまんづよく空中旅行をいたしておったが、ふたりの重みのために、木はもととはちがった位置に、水平になっておちてきた。

ところで、この島の王さまも、大ぶぶんの住民とおなじように、家がくずれて下じきになるといかんというので、住まいをとびだしていた。

その王さまが、また庭園をとおって、もどろうとしていたとき、そこへ、ふたりののった大木がゴーッと音をたてながらおちてきた。そして、幸運にも、王さまはその場でおだぶつというわけじゃ。

——幸運にも、だって？——

そうよ、「幸運にも」よ。諸くん、その王さまはな、はっきり申せば、世にもにくい暴くんであったのじゃよ。王さまのお気にいりや女友だちもふくめて、この島の住民ほどあわれな者は、世界にまたと、おらなかったわ。

王さまの倉には食べものがくさっているのに、しぼりとられたけらいたちは飢え死にしそうだったんじゃからな。

その島は、外敵の攻撃をうける心配はなかったのに、王さまは、若い男なら、だれでもかりあつめ、おんみずからむちでたたいて強い兵隊にきたえあげ、数がそろうと、いちばん高値で買ってくれる近くの国の王に売りつけていた。こうして、父からうけついだ何百万という財産を、また何倍にもふやしておったのだ。

聞くところによれば、王さまは、北国旅行をしたときのおみやげに、このとほうもない主義をもってかえってきたというのだが、北国ドイツからきたわれわれが、愛国心にもえていくらがんばっても、このうわさをくつがえすことはできなかった。

なぜと申すに、まず北国旅行と申しても、あいてはなにしろ島国の住人、カナリヤ諸島にいったのか、グリーンランドへいったのかもわからない。それに、とやかくこの点をつつくことは、われわれとしても、いささか気のすすまぬところもあったのじゃ。

キュウリつみが、ぐうぜんとはいえ、なかまにたいしてたてたこのてがらによって、ふたりは死んだ王さまのかわりに、王座にすわることとなった。この善良なふたりは、空中をとぶあいだに、世界をてらす光のみなもとにあまり近づいたので、視力をうしない、それに心の光である知恵のほうも、すこしばかり弱っておったのだが、それでもふたりは、まともな政治をしたので、わがはいがのちに聞いたところでは、島の人びとはキュウリを食べるごとに、「王さま万歳！」とさけんだということである。

セイロン島のライオンとワニ

あらしでかなりいためつけられた船を修理し、新しい王さま、女王さまからわかれをつげたわれわれは、追い風にのって出帆した。そうして六か月後には、ぶじセイロン島に到着したのじゃ。

われわれがついてから、およそ二週間もたったころであろうか、知事の長男が、いっしょに狩りにいかないかとさそってきたので、わがはいも、よしきたとばかり、でかけていった。

これは力の強い大男で、その国の暑い気候にも、もう、へっちゃらになれている。ところが、わがはいはとくると、それほど歩きもせぬうちに、すぐ、ぐったりとなってしまった。そういうわけで、森にはいったときには、わがはいはかれよりずうっとおくれてしまっていたのだ。

急流がしぶきをあげてながれていた。しばらくまえから、それはわがはいの注意をひいていたのだが、ひとつ岸べに腰をおろして休もうかとわがはいが思った、そのとき、ふいに、いま歩いてきた道のほうで、なにかガサゴソというものの音が聞こえた。

ふりかえったわがはいは、あまりのおどろきに、ほとんど化石になるところであった。大きなライオンが、今まさに、わがはいにむかってくるのだ。わがはいにはなんの相談もなく、おなさけぶかくも、わがはいのこのからだを朝めしにしようと考えているようすが、ありありと見てとれる。

わがはいの鉄砲にはいっているのは、ウサギうちの散弾だけだ。考えをねる時間もないし、あわててしまってそれどころではない。だがともかく、ライオンめがけてうとうと思った。びっくりしてにげるかもしれぬし、ひょっとしたら、負傷ぐらいさせるかもしれぬ。

だが、おそろしさにあがってしまい、ライオンがじゅうぶんに近づくまえにうってしまったので、たけりくるったライオンは、ものすごいいきおいで、わがはいにとびかかってきた。

頭をはたらかせて、というより、とっさに、わがはいはむりなことをくわだてた。——つまり、にげることだ。

わがはいは、きびすをかえした。すると——ああ、いまでも思いだすごとに、ぞっとひや汗がながれる——すぐ目の前には、身の毛もよだつ大ワニが口をあけて、わがはいをのみこもうとしているではないか。

諸くん、進退きわまったわがはいのたちば、考えてもみてくだされ。うしろにライオン、前には大ワニ、左に急流、右には絶壁、その下には、あとで聞いたことじゃが、毒ヘビがうようよしておるんじゃよ。

くらくらくらっとなって、わがはいは地面にたおれた。こんなめにあったら、ギリシアの勇士ヘラクレスだって、わがはいとおなじことだろうよ。

たけりくるった猛獣のきばか、けづめが、いまにもわがはいの首すじにひやりとさわるか、それとも、ワニの大口にくわえられるか、わがはいはただ、そのことばかりを考えていた。

しかし、数秒もたたぬうちに、はげしいもの音が聞こえてきた。しかしそのもの音、わがはいがまだとんと聞いたことのないもの音だ。

わがはいは、ようやく、そおっと頭をあげて、あたりを見まわした。すると、

——おお、諸くん、おどろいてはいかん。——

うれしいことにライオンは、ワニの口のなかにもぐりこんでいるではないか！　ライオンがすごいいきおいでとびかかってきたのと、わがはいが地面にたおれたのがまったく同時だったので、ライオンはわがはいのからだの上をとびこえて、ワニの口にとびこんでしまったのだ。

ライオンの頭は、ワニののどにつかえている。二ひきともはなれようと、けんめいにもがいている。チャンスをにがさず、わがはいはとびおきて、刀をぬき、ライオンの頭をすっぱり切った。胴体だけが、わがはいの足もとにころがってぴくぴくしている。

ついで、鉄砲の台じりで、ライオンの頭をなぐり、ワニののどふかくおしこむと、ワニは苦しみもがいたあげく、息がつまって死んでしまったわ。

いつまでたってもわがはいがおいつかぬのに心配した友人が、もどってきたのは、わがはいがこの二ひきの猛獣をやっつけて、しばらくたってからであった。たがいにおめでとうをいいあってから、ワニの大きさをはかってみると、まさに、十二メートル三十七センチもあったわ。

このとてつもない冒険を、われわれは知事に物語った。すぐに知事は、一台の車に何人か人をつけて森におくり、二ひきのけものをとってこさせた。

わがはいはその地の毛皮屋に命じて、ライオンの皮からはタバコぶくろをつくらせ、そのいくつかをセイロンの知人への贈りものにした。のこりは、オランダにかえったとき、市長さんたちに贈ったのだが、まことによろこばれ、かわりに千ドゥカーテンのお金をくださろうといわれる。わがはい、なんとかそれはおことわり申しあげておいたよ。

ワニの皮は、ふつうのやりかたで、はくせいにされ、今ではアムステルダム博物館、最大の名物のひとつだ。案内人はどの客にも、ながながとワニのゆらいを話してきかせる。だが案内人のつねとして、いつもいくらかつけたしをするのだが、それらはいろいろな点で、じじつともぜんぜんくいちがっているし、まったく、ほんとうらしくも聞こえない。

たとえば、案内人はいつもこういうのだ。

「ライオンめは、ワニの腹をもとおりぬけ、うら口からにげようとしました。ところがそこは、世界に名のとどろく男爵殿(これ、わがはいのことじゃよ)、でてきたとたんにその首をばっさり切っておとされたのでありまあす。」

案内人は、まだ話をつづけることもある。

「ところがそのとき、男爵殿、ワニのしっぽを一メートルばかり、いっしょに切りとばされたのでありまして、ワニのやつめのおこったのなんの、男爵殿の手から刀をうばいとり、それをのみこんでしまったのであります。ところがワニめ、あんまりいきおいよく、のみこみましたので、刀はワニの心臓につきささり、ワニはその場におだぶつというわけでございまあす。」

諸くん、いまさら申すまでもあるまいが、この案内人のずうずうしさ、わがはいには不愉快せんばんである。なんでもうたがってかかる世のなか、そんなみえすいたうそをきかされて、わがはいをごぞんじないかたはなんと思われようか。わがはいがじっさいにやったことにまで、うたがいをかけられることとあいなろう。だがそれは、名声ある騎士をおびたしく侮辱し、その気分を害するものであるぞ。

五人のけらい

諸くん、あと一本、ブドウ酒を飲む時間がありそうじゃから、おおいにふしぎなできごとを、もうひとつお話しいたそう。わがはいがヨーロッパへもどってくる、二、三か月まえのことじゃ。

ローマ帝国大使、ロシア帝国大使、フランス大使といったかたがたにおひきあわせいただいた大トルコ大サルタンから、わがはいはある重大な大用件を大カイロでかたづけるという大任をおおせつかった。これがとにかく、大の重大秘密、いつまでもぜったいに、他人に知られてはならぬだいじなのじゃ。

わがはいは、おびただしいけらいをひきつれて、陸路はなやかに出発した。それにとちゅう、たいへん役にたつけらいが数人、くわわることになったのじゃ。

つまり、コンスタンチノープルをでて、数キロも歩いたかどうかというころ、やせっぽちの小男がひとり、すごい速さで野原を横ぎってかけてくる。だがその男、両足にひとつが二十キロもあろうかという、鉛のおもりをぶらさげている。みょうなやつだと思って、わがはいは声をかけてたずねた。

「おい、きみよ、そんなにいそいでどこへいくのか。それにおもりなどを足にぶらさげているのは、どういうわけか。走りにくかろうに。」

走っている男はこたえた。

「わたくしは三十分まえに、ウィーンをでたところでございます。ウィーンでは、けっこうなお屋敷でご奉公いたしておりましたが、きょう、おいとまをいただきました。コンスタンチノープルにまいりまして、つぎのしごとをさがすつもりでございます。いそぐこともございませんので、おもりを足にぶらさげて、すこしスピードをおさえているのでございます。『いそがばまわれ』と、わたくしのもとの師匠は、いつも申しておりました。」

このいだてん男、なかなか、わがはいの気にいった。けらいにくわわる気はないかとたずねると、その男、よろこんでしょうちした。そうして、われわれはいくつもの町や国をとおって、旅をつづけていったのじゃ。

道から遠くないきれいな草地の上に、ひとりの男が、まるで眠っているように、もの音ひとつたてないで横たわっている。だがじつは眠っているどころか、その男、緊張して地面に耳をつけているのだ。地獄の底の住人の声をうかがっているみたいだ。

「おい、きみ。そこでなにを聞いているのかね。」

「へい、たいくつなもんで、草の音を聞いていますだよ。草ののびるのが聞こえますだ。」

「そんなことができるのかね。」

「なんでもありませんだよ。」

「それでは、きみ、わがはいのけらいになれ。聞いてもらわねばならぬことが、ないともかぎらぬ。」

その男はとびおきて、ついてきた。

そこからほど遠くない丘の上で、ひとりの狩りうどが、鉄砲をかまえている。そしてなにもいない青い空に、ズドンと一発ぶっぱなした。

「うまいぞ、うまいぞ、山の大将！　だが、なにをうってるのかね。わがはいに見えるのは青空だけじゃが。」

「いや、この新しいクーヘンロイター式鉄砲のためしうちをしただけでございます。そら、あそこ、二千キロむこうのシュトラースブルク寺院の塔の上にスズメが一羽とまっていましたのを、いま、うちおとしたのでございますよ。」

わがはいの狩りきちがいをごぞんじのかたは、このずばぬけた鉄砲うちの首に、わがはいがその場ですがりついたことを、べつだんふしぎとは思われるまい。その男をけらいにするためには、金をおしまなかったこと、申すまでもない。

いくつもの町をとおり、いくつもの国をこえて、われわれは旅をつづけた。そしてとうとう、リバノン山のふもとにさしかかった。すると、杉の木の大きな森のまえに、ごつい、ずんぐりした男がいて、その森ぜんたいにぐるりとまいたつなをひっぱっていた。

「おい、きみ。そこでなにをひいているのかね。」

と、わがはいはたずねた。

「いや、なに。材木をとってこいといわれたんじゃが、おのを家にわすれたんで、なんとかせにゃあ。」

といいながら、男はぐいとつなをひっぱった。すると、二百ヘクタールもあろう森は、まるでアシのしげみのように、わがはいの目の前で、ばっさりたおれた。

わがはいがどうしたか、おわかりじゃろう。大使としてのわがはいの給金ぜんぶがふっとんでしまおうとも、この男をけらいにせんというてはない。

さらに前進し、とうとう、エジプトの大地をふんだとき、

ものすごいあらしがまきおこった。わがはいは、車や馬やけらいもろとも、いまにもふきたおされて、空中にほうりあげられるかと思った。

道の左てには、七台の風車が、一列にならんでたっていたが、そのつばさは、いちばん速い糸つむぎ女の糸まきつみとおなじぐらいにはやく、ブンブン、まわっていた。

そこからほど遠くない右てには、中世イギリスのジョン・フォールスタッフ卿のような太っちょが立っていて、人さし指で、鼻の右の穴をおさえていた。われわれがあらしにまきこまれて、こまりきっているのを見て、その太っちょは、こちらをむき、わがはいにたいして、まるで連隊長の前で兵士がするように、うやうやしく、帽子をとった。

すると、どうだ。きゅうにそよとの風もふかなくなり、風車は七台とも、ぱったり、とまってしまったではないか。

これはふしぎだ。ただごとではない。

わがはいは、その怪物にむかってさけんだ。

「どうしたというのだ。おまえのからだのなかには悪魔がいるのか。それともおまえが悪魔そのものか。」

「おそれながら、閣下！」

と、その男はこたえたよ。

「わたくしは、ここで、主人の粉屋の風車のために、すこしばかり風をおこしているのであります。しかし、七つの風車がたおれるといけませんので、かたほうの鼻をふさいでいたのであります。」

（ほほう、すばらしい男だな）と、わがはいは心ひそかに考えた。（いずれ、わがはいが国にもどって、陸路、水路の旅でであった珍談、奇談を話すときがあろう。そのとき、息がきれたりすれば、この男、役にたってくれよう。）

たちまちにして、取引きは成立、風ふき男は風車をあとにして、わがはいについてきた。

このようにして大カイロについたわがはいは、大サルタンからおおせつかった任務を、おもうぞんぶんにはたした。それから、むようのけらいたちはおはらいばこにして、新しくできた、役にたつけらいたちだけをつれて、美しいナイル河をのんびりと舟でかえっていった。

とちゅう、ナイル河のはんらんという、おそろしいめにはあったが、なんとか、コンスタンチノープルにかえりつくと、大サルタンは大よろこびなされて、わがはい、それはそれはけっこうなおもてなしをうけたのじゃ。

では諸くん、今夜はこれでおしまい。お休みなされ。

大サルタンとのかけ

エジプト旅行の話をしおわると、ミュンヒハウゼン男爵は、席をたって寝にいこうとした。ところが、大サルタンからどんなもてなしをうけたのか、もっと話してほしいと聞き手があまりたのむので、男爵もことわりきれず、また席について、大サルタンにおつかえしていたころのおもしろい話を、すこしばかりつけくわえたのだった。——

エジプト旅行のあとというもの、大サルタンはわがはいを、このうえもなくご信任じゃ。もう、わがはいなしには、夜も日もあけぬ、というわけじゃて。

昼も晩も、わがはいは食事ごとに大サルタンのおそばによばれ、いっしょにちょうだいいたすこととあいなった。

正直に申すのじゃが、どんな王さまとくらべようが、世のなかでトルコ大サルタンほど、ぜいたくな食事をするおかたは、またとおられぬ。だが、それは食べ物のことであって、飲み物のことではござらぬ。

と申すのは、諸くんもごぞんじのとおり、回教の信者は酒を飲んではならぬ、というきまりがある。だからいっぱいやることは、トルコのおおやけの席では、あきらめるほかないのじゃ。

だが、おおっぴらにはおこなわれないことが、うらではおこなわれるということは、めずらしくない。禁じられてはいるけれども、いい酒の味を、ドイツのえらい坊さんとどうようにちゃんと知っているトルコ人も、少なくはないのじゃ。

トルコ大サルタンも、そのおひとりじゃった。おおやけの席には、ふつう、回教の法律をつかさどるムフチという坊さんもおられて、いっしょに食事をめしあがられる。そうして食前には「アラーの神様」というお祈り、食後には感謝のお祈りがささげられる。そういうわけだから、酒の話など、薬にしたくもできないのだが、食事がおわると、大サルタンのお居間には、ふつう、一本のけっこうなブドウ酒がおまち申しているというすんぽうじゃ。

あるとき大サルタンは、わがはいにそっと目くばせなさったので、おへやまでついていった。ドアをしめて、ふたりきりになると、大サルタンは戸だなから、一本のビンをだしてこられた。

「ミュンヒハウゼンよ。そのほうら、キリスト教徒は、よいブドウ酒のことをよく知っておるそうな。ここにトカイ酒という、ハンガリー産のブドウ酒が一本だけのこっている。こんなうまい酒は、そのほうなど、まだいちども、飲んだことがなかろう。」

と、申されて、大サルタンはご自身とわがはいに、なみなみとつがれ、ふたりでかんぱいした。

「え、どうじゃ？　うまいであろう。まことに特級品じゃな。」

「わるくはございませぬな。大サルタン陛下。しかし——。」

と、わがはいはこたえた。

「おそれながら、申しあげます。ウィーンにて、さきの皇帝カール六世さまのおそばでいただきましたものは、これより、だいぶうえでございましたな、ほんに、まあ、あれをいちどおあがりなさらねば。」

「かわいいミュンヒハウゼンよ、そのほうは、まじめに申しておるのであろうが、しかし、これにまさるトカイ酒が、あるはずはない。これをわがはいにささげたのは、あるハンガリーの騎士であったが、またとない貴重なものだということと、なんどもなんどもくりかえして申しておったぞ。」

「ごじょうだんを。大サルタン陛下！　ひとくちにトカイ酒と申しましても、いいものもあれば、わるいものもございまする。けちんぼのハンガリー人がいたす贈りもので、けっこうすぎるなどということは、けっして、けっしてござらぬもの。それでは、かけをいたしましょう。わがはい一時間のうちに、ウィーンの皇帝の酒倉から、トカイ酒を一本、とりよせてごらんにいれまする。これより、ずっとずっとうまいやつを。」

「ミュンヒハウゼンよ。思うに、そのほう、でたらめを申しおる。」

「でたらめではござりませぬ。ウィーンの皇帝の酒倉から、一時間のうちに、トカイ酒を一本、とりよせてお目にかけまする。こんな、のどのひりひりするようなのとは、ちがったやつを。」

「ミュンヒハウゼン、ミュンヒハウゼン。わしをからかいおるとゆるさぬぞ。そのほうを、正直そのものの男と思っておったが、——だが、今はどうも、ほらをふいておるようであるぞよ。」

「これは、意外なおことば。陛下、『ものはためし』と申しまする。もしわがはい、お約束をまもりませなんだら、ほらをふくのは大きらいのわがはい、すっぱり、この首をさしあ

げましょうぞ。しかし、たったひとつのこの首を、かけると申すのでございますから、陛下はいったい、なにをおかけくださりましょうか。」

「よかろう、あとでぐずぐず申すなよ、時計が四つを打ったとき、トカイ酒がとどいていなかったら、そのほうの首をちょうだいいたす。どんなだいじな友人でも、わがはいをからかうことはゆるされぬのじゃ。しかし、そのほうの、約束どおりになるならば、わがはいの宝倉から、金でも、銀でも、真珠でも、どんな宝石でもよい、世界一の力持ちにかつげるだけもちだしてかまわぬわ。」

「わるい話ではございませぬな。」

と、こたえて、わがはいはすぐ、ペンとインクをおかりした。そうして女帝マリア・テレジアさまへ、さらさらと一筆はしらせたのじゃ。

「なくなられたお父上のただひとりのご相続人として、あなたさまは、あの酒倉をもおうけつぎなさりましたのでございましょう。つきましては、わたくしめがよく、お父上のおそばでいただきましたトカイ酒をば一本、この手紙持参の者におことづけくださりたくぞんじます。ただし、特級酒をおねがい申しあげます。わたくしめ、かけをいたしておるのでござりますから。またお役にたつことがございましたら、ご恩がえしをいたしましょう。心からおねがい申しあげます。」

書きおえたときには、もう三時を五分まわっている。わがはいがその手紙をふうもせずに、けらいのいだてん男にわたすと、いだてん男め、足のおもりをはずして、ウィーンめざしてとびだしていった。

それから大サルタンとわがはいは、特級酒の到着をまちながら、トカイ酒ののこりをぜんぶ、飲んでしまった。

三時十五分、三時半、三時四十五分。だが、いだてん男はかげも形もあらわさぬ。はぐじょういたすが、わがはい、だんだん、首のまわりがこそばゆくなってきた。気のせいか、大サルタン陛下、首切り役人をよぶ鈴のひものほうを、ときどき、ごらんになっているような——。

おゆるしをいただいて、新しい空気をすうために庭へでてはみたが、大サルタンのけらいが二、三人、かげのようにあとをつけてくる。

もう、わがはい、心配でたまらぬ。時計は、ああ、四時五分前。わがはいはいそいで、れいの聞き耳男と鉄砲男をよびにやった。ふたりはすぐにやってきた。いだてん男がそろそろつくのではないか、と、聞き耳男は、地面にふせて、耳をずりしてお飲みになる。そうしておっしゃる。

「ミュンヒハウゼンよ。このブドウ酒、わしだけのものにするが、わるく思うなよ。ウィーンでは、そのほう、わしよりも、うけがよいのじゃから、もっと手にいれることも、きっとあるじゃろう。」

大サルタンは、ビンを戸だなにしまいこみ、戸だなのかぎはズボンのポケットにしまって、会計係をよぶ鈴をならされた。おお、その鈴の音、なんときれいにひびいたことか。

「さて、そのほうに、かけをはらわねばならぬ——そら。」

と、大サルタンはへやにはいってきた会計係にいわれた。

「わしの友人ミュンヒハウゼンに世界一の力持ちがもてるだけ、宝倉からはこびださせてやれ。」

会計係は、鼻が地につくほど頭をさげた。大サルタンは心をこめてわがはいの手をおにぎりになった。そして会計係とわがはいはおへやから、でていった。

さて、諸くんのそうぞうなさるとおり、約束の宝物をすぐにいただこうというわけで、けらいの力持ちに、長いアサなわをもってこさせ、宝倉へはいっていった。そこでわがはいのけらいの、力持ちは大包をつくったが、あとにのこったものといえば、諸くんも、まあ、もっていこうという気にはなります。

ところがおどろいた。あのなまけ者のいだてん男は、どこか遠いところで、ガーガーいびきをかいて、眠っているというではないか。

それを聞いて、けなげな鉄砲男、すぐに、テラスにかけのぼり、背のびして見わたして、さけんだ。

「これはたまげました。あのなまけ者、ベルグラードの町はずれにある、一本のカシの木の下で、気持ちよさそうに眠っております。ビンはちゃんとそばにおいてございます。おまちください、くすぐってやりましょう。」

鉄砲男は、すかさず、クーヘンロイター式鉄砲をかまえ、そのカシの木のしげみのなかへ、ズドンとぶっぱなした。ドングリや枝や葉っぱがばらばらと、眠っているいだてん男にふりかかる。

「これは寝すぎた、しくじった。」とばかり、いだてん男ははねおきた。それから、トカイ酒のビンと、女帝マリア・テレジアさまご自身でお書きくださったお手紙とをかかえて、いちもくさん。大サルタンのおへやに、かけつけたのは、なんと、三時五十九分三十秒。

ばんざあーい。おお、口のおごった大サルタン殿、舌なめ

らぬだろうよな。

このぶんどり品をもって、われわれはまっすぐに港へいそいだ。そこで、できるだけ大きな貨物船を一せき、うばいとり、荷物をしっかりつみ、けらいをみんなつれて、出帆した。なにか、じゃまのはいらぬうちに、ぶんどり品を安全なところへ、もっていこうとしたのじゃ。

この心配はむだではなかった。会計係は、宝倉のとびらをしめもしないで——もっとも、いまとなっては、しめる必要もなかったが——尻をさかさに大サルタンのところへとんでいき、なんとみごとにわがはいが約束の品をいただいてしまったかを、報告した。

大サルタン陛下はすくなからずおどろかれ、やがて、かるはずみな約束を後悔なさった。それで、すぐに、海軍大将に命令をくだされて、艦隊ぜんぶでわがはいのあとをおいかけさせ、そういう意味のかけではなかったと説明させようとなさったのじゃ。

わがはいがまだ港を三キロも、はなれぬうちに、どうどうとしたトルコ艦隊が、帆に風をはらんで、おいついてくるではないか。正直申して、ようやくおちついたわがはいの首が、またぐらつきはじめた気持ちであったよ。

だが、けらいの風ふき男だけはおちついて、

「閣下、ご心配はいりません。」

と、いいおった。風ふき男は、船の後甲板にでて、鼻のいっぽうの穴をトルコ艦隊に、もういっぽうの穴をこちらの船の帆にむけて、たっぷりと風をおこすと、トルコ艦隊は、マストや帆や、つなをさんざんいためつけられ、港へおしもどされてしまった。それだけではない。数時間とたたぬまに、こちらの船もぶじイタリアへふきよせられたのじゃ。

ところで、手にいれた宝物は、わがはいにはなんの役にもたたなかった。と申すのは、イタリアには貧乏人とこじきがおおいし、警察の力は、はなはだ弱い。そこへもってきて、このわがはい、ちょっと、きまえがよすぎるので、宝物はほとんどぜんぶ、街のこじきにばらまいてしまった。そうしてのこりは、ローマへいくとちゅう、マリアさまの家があるという、ありがたいロレットの野で、おいはぎの一団にうばわれてしまった。

だが、このおいはぎどもは、それほど良心のいたみを感じなかったかもしれぬ。のこりとは申せ、おいはぎたちのえものは、やはりそうとうなもの、その千分の一をつかっただけで、あのふだを——ごぞんじであろう、免罪符と申す、罪をけしてくれるあの、ふだをじゃ——、ローマ法王さまご自身の手から買うことができたはずじゃからな。そうすれば、このしたたか者の一団、本人たちは申すにおよばず、あとつぎたちのやらかす古今東西の罪は、なにからなにまでちょうけしになるというわけじゃて。うまくできておるわ。

ところで、諸くん、わがはいほんにもう眠らねばならん。ではお休みなされ。

男爵の失敗

この冒険を話しおわると、男爵はもうなんといってもひきとめられず、席をたって、上きげんでていった。

のこった人たちは、たったいま聞いたことについて、てんでに感想をいいあったのだが、なかにひとり、男爵のなかまで、トルコ旅行についていった男がいた。その男はつぎのように話しだした——。

コンスタンチノープルから遠くないところに、一台のとてつもなく大きな大砲がございますが、それのことを、フランスの外交官トット男爵は、最近出版した回想録のなかで、——わたくしがおぼえているところでは——つぎのように書いておられます。

「トルコ人は、都からほど遠からぬところ、有名なシモイス川の岸べの要塞に、巨大な大砲をそなえつけていた。それはぜんぶ、銅でできていて、すくなくとも五百キロの大理石の弾をうちだすのであった。

わたくしは、そのはたらきをみて、ねうちをただしく判断

するために、一発、発射したく思ったのであるが、それを聞いたぐるりの者は、みんな、わなわなとふるえだした。そんなことをすれば、城も都も、こなごなにくずれおちてしまうというのである。だが、人びとの心配を、どうにかすこしはなだめ、わたしは、大砲をうつゆるしをもらった。一発うつのには百五十キロいじょうの火薬が必要であった。そうして弾は、さきほど申したとおり、五百キロもあったのである。砲手が火なわをもってくると、わたしをとりまいていた群衆は、いちもくさんににげだした。

心配してやってきた長官に、危険はないから、びくびくしなくてもよいと説明するのが、まったく、たいへんなしごとであった。わたくしのさしずどおりに発射することになっている砲手でさえ、おそろしくて、心臓がとびだしそうにどきどきしている。わたしは大砲のうしろのとりでのなかに席をさだめ、発砲の合図をした。するとあたりは、まるで地震のようにガラガラとゆれた。五百メートルほどはなれたところで、弾は三つにはれつした。それらは海峡をこえてとんでいき、海面にはねかえって、むこう岸の山脈にぶつかった。さすがの広い海峡も、しぶきでいっぱいになった。」

みなさん、わたくしのおぼえているところでは、世界に知られているいちばん大きな大砲のことを、トット男爵はこう報告しておられます。

ところで、ミュンヒハウゼン男爵とわたくしとが、あの地にまいりましたとき、トット男爵がこの巨砲をおうちになったということが、勇かんこのうえもないおこないとして、どこでも話題になっているのでございました。

ところが、フランス人にさきをこされるのが、がまんできないミュンヒハウゼンさまは、この大砲を肩にかつがれ、それをもとの水平の状態になさってから、さっと海にとびこまれ、むこう岸へ泳いでいかれたのでございます。

むこう岸から男爵さまは、大砲をもとの位置へ、なげかえそうとなさったのですが、ああ、これがまずかった。はい、そうです、まずかったのでございます。と申しますのは、男爵さまが大砲をなげようとなさって、手をふりあげられましたとき、大砲がつるりと手からすべったために、大砲は海峡のまんなかにドブンとおちてしまいました。

今でも大砲はそこにしずんだままでございますし、おそらく、この世のおわりまで、そのままでございましょう。

ほんとうのところ、みなさま、大サルタンと男爵さまとの仲がまずくなりました。その理由は、これだったのでござい

ます。男爵さまはさきほど、れいの宝物のことで、大サルタンさまのごきげんがわるくなったのだとお話になりましたが、そんなこと、大サルタンさまは、もうとっくに、おわすれになっていたのです。じっさい、大サルタンさまはたくさん収入がおありになりますので、宝倉はすぐまた、いっぱいになったのでございますからねえ。

げんに、男爵さまは、ついこのあいだも、大サルタンさまがご自分でお書きになった招待状をおうけになり、トルコにいってこられたばかりなのです。そうして、この有名な大砲を、おなくしになり、おそろしい大サルタンさまを、おこらせておしまいにならなかったとしたら、男爵さまはいまでも、トルコにいらっしゃることでございましょう。ところがこの大砲のことがあって、大サルタンさまは『もうがまんならぬ、男爵の首を切れ。』と、きつくご命令なさったのでございます。

ところが、男爵さまをたいへんかわいがっておられた、ある女サルタンは、男爵さまのおいのちがねらわれていることをすぐにお知らせくださいました。

そればかりではございませぬ。お首をはねるようにとの命令をうけた将校がけらいをつれて、男爵さまをさがしまわっているあいだじゅう、その女サルタンはご自分のおへやのなかに、男爵さまをかくまってくださったのでございます。

そうして、そのつぎの夜、わたくしどもは、いまにもベニスにむかって、出帆しようとしていた船ににげこみ、ぶじにその場をのがれたのでございました。

この事件、男爵さまはあまり話したがられないのでございます。なんと申しても失敗談でございますし、それにおいのちまであぶなかったのでございますものねえ。

けれども、これが知れたところで、男爵さまの名誉にきずがつくというわけでもございませんでしょう。それでわたくしは男爵さまには内証で、おりおり、このお話をいたすことにしているのでございます。

ジブラルタル海峡

おもしろいし、聞く人のためにもなる冒険の話をもっときかせてほしいと、ミュンヒハウゼン男爵がしじゅうたのまれたのは、あたりまえのことである。

だが、このたのみは、ながいあいだ、聞きとどけられなかった。というのも、男爵は、気のすすまぬことはなにもせぬという、りっぱな習慣をもっているし、それに、その習慣をあらためることなど思いもよらぬという、ますますりっぱな習慣も、もっているからである。

だが、とうとう、ある晩のこと、みんながさかんにたのみこむと、男爵はたのしそうにほほえんだ。ありゃ、こいつはいいぞ、きょうは気分がのっているな。まちにまった話のつづきが聞けるかもしれぬ。しーっ、しずかに、しずかに……とみんなの思ううちに、やわらかい安楽いすに腰をかけたミュンヒハウゼン男爵は話しはじめたのである。——

イギリスの領地であるジブラルタル要塞を、フランスとスペインの軍隊が包囲したついこのあいだ、わがはいはロドニー卿の指揮される、食料補給船隊にのって、その要塞をおとずれた。

この要塞をりっぱにまもりとおして、永遠にかがやくてがらをたてたエリオット将軍は、わがはいの古くからの友だちなのだが、そのエリオット将軍をたずねようと思ったのだ。

むかしなじみがひさしぶりにあったのだ。だきあってよろこんだが、そのこうふんがすこしさめると、守備隊のようす、敵のありさまなどをしらべるために、わがはいは将軍といっしょに要塞のなかを歩きまわった。

ところでわがはいは、ロンドンで望遠鏡づくりの名人ドロンドから買った、すばらしい反射望遠鏡をもってきていたが、それをのぞいてみると、ああっ、あぶない！　敵がわれわれの立っている場所へむけて十六キロ砲弾を、ちょうどいま、うちだそうとしているではないか。将軍にそういってやると、かれも双眼鏡をのぞいて、「たしかに。」とうなずいた。

わがはいは将軍のゆるしをもらって、すぐに二十一キロ砲を近くの砲台からとりよせ、めいちゅうまちがいなしといえるように、正確にねらいをあわせたのじゃ。と申すのも、わがはい、砲術にかけては、自慢ではないが、だれにも負けはいたさぬ。

わがはいは敵のうごきをじっと見ている。やがて敵は、大砲の点火口に火なわをいれた。それっ！　とわがはいの合図、こちらの大砲も火をふく。

両方の大砲からとびだした弾丸は、道すじのまんなかあたりまできて、おそろしいいきおいでぶつかりあった。

みごとな結果とは、あいなった。敵弾ははげしくはじきかえされ、たったいま、それをうった兵隊の首をちぎりとっただけではない、それからアフリカ海岸へとんでいくとちゅう、じゃまになった十六人の首をはねとばしてしまった。

弾はアフリカのバーバリ地方にむかったが、そのとちゅう、港に一列にならんでいる三そうの船の大マストをひきちぎり、それからさらに三百キロもとんで陸地につき、とうとう一けんの百姓屋の屋根をやぶってとびこんで、口をあけて眠っていたばあさんの、わずかにのこっていた歯をへしおって、気のどくなばあさんののどに、すっぽりはまりこんでしまった。

やがてかえってきたじいさん、弾をひきぬこうとはするが、びくともしない。じいさん、えいとばかり、金づちでなぐりこむと、弾はおなかをすどおりして、ばあさんのお尻からころりとおちたとさ。

こちらからうった弾はどうなったか。——

これまた、すごいてがらをたてたのだ。敵の弾を、いま話したように、はねかえしただけではない。わがはいの見こんだとおり、弾はとびつづけ、たったいまこちらをねらった、こしゃくな敵の大砲を台からえぐりとって、一そうの船の船艙に、それをものすごいいきおいで、たたきこんだのだ。

船の底には大穴があき、水がながれこんで、のっていた千人ものスペイン人水夫と、おおぜいの兵隊もろとも、ブクブクとしずんでしまったわ。

たしかに、とびぬけたはたらきであった。しかし、それがわがはいひとりのてがらだ、などとは申さぬ。この作戦をたてたのは、わがはいの頭のよさだが、ぐうぜんもすこしは、役にたってくれたのじゃ。

つまり、あとになってわかったことじゃが、わが軍の二十一キロ砲には、まちがって、二回分の火薬がつまっていたのよ。まさにそのおかげで、思っても見なかったほどの、効果があがったのじゃ。なかでも、敵弾をはじきかえした、あのはげしさは、火薬の量をまちがっていたおかげじゃった。

エリオット将軍はわがはいに、とびぬけたてがらのほうびとして、将校の位をくれようとした。だが、わがはいはそれ

をきっぱりとことわり、将軍がその日の夕食のときに、将校全員のいるところで、わがはいに感謝のことばをのべ、わがはいの名誉はおおいにたかめられた、というそれだけで、わがはいは満足したのじゃ。

イギリス人はたしかにりっぱな国民じゃ。わがはいはイギリス人が大すきじゃ。そういうわけで、もうひとつてがらをたてるまでは、わがはい、この要塞をさるまいと決心した。ところが、およそ三週間もたったころ、いい機会がやってきた。

わがはいは、カトリック教の坊主の衣を着て、午前一時にこっそりと要塞をぬけだし、まもりげんじゅうな敵の前線をうまいこと、とおりぬけて、敵陣のどまんなかについた。そうしてフランス将軍アルトア伯爵が、司令長官や、ほかの将校たちといっしょに、あくる朝、イギリス軍要塞を攻撃する作戦をねっているテントのなかへ、わがはいは、ゆうゆうとはいっていった。坊主のきものを着ているから、だれにもあやしまれない。それで、話のようすを、ぜんぶ聞きとることができたのじゃ。

とうとうかれらは寝にいった。陣地ぜんたいは、番兵たちをうちあわせて火をだし、それを火なわにともして、大砲の山に火をつけた。申しわすれておったが、あらかじめ、軍用品の車はぜんぶ、その山の上になげあげておいたのじゃ。

わがはいは頭をはたらかせて、いちばんもえやすいものを、いちばん下にいれておいたので、あっというまに、めらめらとほのおがあがった。

あやしまれなくてすむように、わがはいはだれよりさきに、火事だ、火事だとはやしたててやった。想像してくださろうが、さあ、陣地じゅうは上を下への大さわぎ。だがけっきょく、この打撃は、番兵が買収されたためであり、かれらの大砲をこんなに全滅させるためには、要塞守備軍の七、八連隊がきてはたらいたのであろうという推定がくだされたようじゃ。

ドリンクウォーター氏は「ジブラルタル包囲戦史」のなかで、敵軍は陣中に火災をおこし、大損害をこうむったと書いてはいるが、その火事の原因については、ひとことものべてはいない。

だが、それもそのはず、ジブラルタルを救ったのは、じつは、ひとえにわがはいのはたらきによるのじゃが、あの夜わがはいが、なにをしたかということ、まだだれにも、エリオット将軍にさえも、話してはおらぬのじゃ。

敵の将軍、アルトア伯爵はどうしたかと申せば、「それ火事だ。」ときくやいなや、部下といっしょにあわてふためいてにげだし、いちども休まずに十四日間、とうとうパリまで走りつづけた。

そうして火事のときのあまりのショックに、三か月間というもの、水一滴ものどをとおらず、仙人のように、かすみをくって生きておったとさ。

わがはいがこのてがらをたててから、二か月ほどたったある朝、わがはいはエリオット将軍と朝食をとっていた。

するととつぜん、一発の爆弾がへやのなかにとびこんできて、テーブルの上におちた。将軍は——こういうときには、ほとんどだれでもおなじことだろうが——あっというまにへやからにげだしていった。ところがわがはい、その爆弾をはれつせぬうちにひっつかみ、岩山の上まで、かけあがった。

見わたすと、敵陣からほど遠くない海岸の丘の上に、かなりおおぜいの人があつまっている。だが、なにをしようとしているのかは、肉眼では見てとれぬ。

わがはい愛用の望遠鏡でのぞくと、おやおや、味方の将校さえも、みんな、寝しずまってしまった。さあ、わがはいはしごとをはじめた。

わがはいは三百門をこえる敵の大砲を、二十一キロ砲から七・五キロ砲にいたるまで、ひとつのこらず、台からひきずりおろし、海のなか、五キロも沖へなげこんだ。

てつだう者ひとりいるわけではないから、これはわがはいが、いままでにやったしごとのなかで、いちばんむずかしいものじゃった。

もっとも、ひとつだけ、例外はあるがな。どうやら、わがはいの知人のひとりが、最近、わしのおらぬまに話しおったらしいが、つまり、わしはトット男爵が書いておられる、巨大なトルコの大砲をかついで、海のむこう岸までおよいでわたったことがあるんじゃよ。だが、まあ、それはべつとしてじゃ。

大砲を海へなげこんでしまうと、わがはいはすぐに、大砲の台や車を、みんな陣地のまんなかまで、ひきずってきた。車がガラガラ音をたててはいけないから、両わきに一個ずつ、かかえてはこんだのじゃ。すると、すごい山ができた。すくなくとも、ジブラルタルの岩山ぐらいの高さになった。

それから、わがはいは二十一キロ砲弾の鉄のかけらと小石

がふたり、敵につかまって、いまにも首つりにされようとしているではないか。このふたりのうち、ひとりは大将、もうひとりは大佐で、前の晩もわがはいといっしょにすごした連中だ。ふたりはスパイとして、夜なかにこっそり、スペイン軍陣地へしのびこんでいたのだった。

こんなに遠くては、爆弾を素手でなげつけるのはむりだ。だが、さいわいにも、わがはいは、石弓をポケットにいれていることに気がついた。わがはいは爆弾をそれにはめて、人だかりのどまんなかめがけて、すぐに発射した。

爆弾はおちて大爆発。ぐるりにいた連中は、みんなすっとんでしまった。だが、ふたりのイギリス将校だけは生きのこったのじゃ。と申すのは、爆弾のおちたしゅんかんには、運よく首つりのなわがひかれ、ふたりは空中に高だかとぶらさがっていたからじゃ。

爆弾のひとかけらは首つり台の柱にもとびちったので、首つり台はたおれてしまい、ふたりの味方は大地におりたった。おや、おや、これはどうしたことか、と見まわすと、番兵も、首切り役人も、だれもかれも、おさきにくたばるというはめにおちいっているではないか。

ふたりはそれに気づくと、自分たちの首にまきついている、気持ちのわるいひもをおたがいにほどきあって、海岸へむかっていちもくさん、スペインのボートにとびのった。そうしてなかにいたふたりの男をおどかして、味方の船までこぎよせさせたのであった。

五、六分もせぬうちに、ちょうどわがはいが、エリオット将軍にことのしだいを話しておると、ふたりがぶじにかえりついた。われわれはおたがいに説明しあったり、おめでとうをいいあったりしてから、この記念すべき日を、まことにたのしくお祝いしたのであった。

エトナ火山

ふしぎな体験のお話をするうちに、わがはいは、だいぶ、くたびれてきたが、諸くんはますます目をかがやかして、耳をかたむけてくださる。これはうれしいことだ。もうそろそろこのへんで、おしまいにしようと思ってはいたのだが、諸くんがおいやでなければ、もうひとつだけ、つけくわえよう。それは、たったいまお話ししたのとおなじくらいに、ほんとうであるが、めずらしさ、ふしぎさにかけては、いままでのいじょうかもしれぬ。

わがはいは、ブライドンという探険家の書いた「シシリー島旅行記」を読んだが、それがとてもおもしろかったので、ひとつ、自分もエトナ火山にいってみたくなった。

ぶじ、エトナ火山についたわがはいは、たとえ死んでも、あの有名な「火なべ」のなかがどうなっているか、さぐってやろうと決心して、ある朝早く、ふもとの小屋を出発した。三時間も苦労してよじのぼり、わがはいは頂上についた。火山はここ三週間、あれつづけている。

わがはいは、火口のまわりを三どまわってみた。火口とはひじょうに大きなじょうごの形だとお考えになるといい。だが、そんなことをいくらしていても、いっこうにようすがわからんので、いっそおもいきって、とびこむことにした。

えいととびこむと、あたりはむしぶろのような暑さ。まっかに焼けた石炭がたえまなくとびだしてくるので、かわいそうなのは、わがはいのからだ、あちちち、いててて、というわけで、いや、ひどいめにあったよ。

火のたまのふきあげられる力も強いが、わがはいのからだのおちていく重さのほうがずっと強い。そういうわけで、わがはいはどんどん、どんどん落下していった。——スピードはしだいに速くなっていく。あまりのおそろしさに、わがはいはとうとう、気をうしなってしまった。

とつぜん、わがはいは正気にもどった。

日の光をあびてかがやく、はてしもない海のどまんなかにわがはいは、はいっている。

わがはいは子どものころから水泳が得意で、水中の曲芸なら、なんでもできる。わがはいは、水にもどったさかなのように、ゆうゆうとおよぎはじめた。

ぐるりを見まわしたが、こまったことに、あたりは、水、

水、水。水のほかにはなにもない。それに、いまとおってきた火山のなかとくらべれば、気候もだいぶつめたい。だが、とうとう、日がいまにもしずむというころ、一せきの船が近づいてきた。わがはいがよぶと、むこうはオランダ語でこたえた。わがはいは船のところまでおよいでいき、ひきあげてもらった。

「ここはどこなのか。」とたずねると、「南太平洋だ。」とこたえるではないか。それできゅうに、なぞがとけたよ。つまり、わがはいはエトナ火山から地球のまんなかをとおりぬけて、うらがわの南太平洋まで、墜落したというわけなのだ。

これは、なんとしても、ぐるっと世界をまわるより、みじかい道すじだ。まだわがはいいがいのだれも、やっていないが、こんどとおるときには、もっとくわしく観察しておこうと思う。

わがはいは、元気をつけるものをすこしばかりもらって、ベッドにはいった。

それにしてもオランダ人とは、ぶさほうな国民だ。わがはいはこの冒険のことを、士官たちに話してやった。いましたとおりに、正直に、尾ひれもつけずに話してやったのだが、諸くん、かれらの何人かは——なかでも船長のやつは——、「ほんとうかなあ。」というような顔つきをするではないか。だが、やつらに船へひきあげてもらったのだし、やつらのおかげで生きているには、ちがいないのだから、いずれにしろ、文句はいわぬことにしておいた。

さかなのおばけの腹のなか

われわれが三日も航海したとき、あたりの海の色はまっ黒になった。そうして数時間もするうちに、たくさんのクジラや、とてつもなく大きい、おばけのようなさかながぐるりにあらわれたが、そのうちの一ぴきなど、われわれの望遠鏡では、頭のはしからしっぽのはしまで見わたすことができなかった。こまったことに、われわれがそのさかなの怪物に気づいたときは、もう距離がなく、あっというまに、船は帆をいっぱいにはったまま、歯のあいだをとおってさかなの口にすいこまれてしまった。

どんなに大きな軍艦のマストだって、その歯にくらべれば、棒切れ一本ぐらいの大きさにしか見えない。

船はしばらくのあいだ、口のなかにとまっていたが、やがてさかなは口をわんぐりとあけて、がぶがぶと水を飲んだので、ご想像くださろうが、船はさーっとおしながされて、胃ぶくろのなかに、はいってしまった。そうして、まるでしずかななぎにいかりをおろすように、船は胃ぶくろのなかにじっとしていた。正直申して、空気はなまあたたかくて、気持ちがわるかったよ。

あたりには、この怪物がのみこんだいかりや、つなや、小舟や、おびただしい数の船があった。船には荷をつんだのも、つんでないのもある。

ここでは、なにをするにも、たいまつをともさねばならなかった。頭上には太陽もなければ、月も星もないのだ。船はふつう、一日に二ど水の上にうかび、二ど底についた。怪物が水を飲むと満潮になり、水をはきだすと、潮がひくというわけだ。ひかえめにみつもっても、怪物の飲む水の量は、ぐるりが五十キロもあるジュネーブ湖の水よりも、おおいようだった。

このまっ暗やみの世界にとじこめられて二日め、潮がひいて（つまり怪物が水をはきだしたときのことだが）、船が底についたとき、わがはいは船長やいく人かの士官たちといっしょに、勇気をふるって、見まわりにでた。もちろんわれわれはみんな、たいまつをもっていたのだが、さまざまな国からきたおよそ一万人もの人びとと、であったのだ。その人たちはちょうど、いったいどうしたら、また外へでられるか、相談しようとしているところだった。そのなかのいく人か

は、もう何年ものあいだ、怪物の胃のなかでくらしているのであった。

ちょうど議長が、きょうの議題について説明しようとしたとき、いまいましい怪物はのどがかわいたとみえ、水を飲みはじめた。水はたきのようにながれこんできたので、われわれは、おぼれてはたいへんと、大あわてに船にもどった。やっとおよいで助かった人たちもいた。

何時間かののちには、もっとうまくいった。怪物が水をはきだしてしまうと、われわれはすぐにまた、あつまった。わがはいは議長にえらばれた。それでいちばん大きい帆柱を二本つぎたして、怪物が口をあけたときに、これをつっかい棒にし、口をとじられないようにしようという提案をしてみた。

「えらいぞ、議長！」

「名案だ！」

「さんせい！」

というわけで、その作業をするのに、百人もの力のある男たちがえらばれた。

二本の帆柱の用意ができたと思うと、それをつかうチャンスがおとずれた。怪物があくびをしたのだ。それっ、と、つぎたした帆柱をたてると、いっぽうのはしは舌をつらぬいて下あごに、もういっぽうのはしは上あごにつかえた。そのために怪物は、ほんとうに口がしめられなくなったのだ。この名案なら、たとえ帆柱がもっと弱いものであっても、うまくいったであろう。

胃ぶくろのなかのすべてが水にうかぶようになると、われわれはいくそうかの小舟に船員をのりくませ、外界へむかってこぎだした。

およそ二週間もとじこめられたあとで見る日光は、いやはや、なんともいえず、けっこうなものじゃったよ。

われわれがひとりのこらず、このだだっぴろい怪物魚の胃ぶくろからおさらばすると、いろいろな国ぐにの三十五せきの船で一艦隊をつくった。れいの帆柱は怪物の口にたてたままにしておいた。そうしておけば、暗やみと汚物の、おそろしい穴倉に、もうだれもとじこめられなくてすむわけだ。

われわれがさいしょにしたいと考えたのは、今世界のどのぶぶんにいるのかを、たしかめることであった。だがはじめのうちは、それがぜんぜんつかめない。しかしわがはいは、いぜんに観察しておったことととてらしあわせて、そこがカスピ海であることをたしかめた。

だが、カスピ海といえば、陸にとりかこまれていて、ほかの大海とはなんのつながりもない。であれば、いったいどうして、南太平洋にいたわれわれがカスピ海にいるのか、わけがわからない。

だが、いっしょにいたある男が、いかにももっともな説明をしてくれた。その男のいうには、つまり、われわれが胃ぶくろにとじこめられていたあいだに、怪物は、どこかの地下の道をとおって、陸にかこまれたカスピ海までおよいできたというのだ。

が、議論はともかく、われわれがいるのはカスピ海だった。そうして、それはうれしいことだった。

われわれは全速力で岸にむかい、意気たからかに、上陸したのじゃ。

さて、きょうのところはこれでおしまい。では諸くん、ゆっくりお休みなされ。

●解説

ケストナーと少年たち

生野幸吉

「いちばん価値のあるのは、たのしいにせよ、悲しいにせよ、幼年時代だ。」

と、ケストナーはいっています。事実ケストナーは子どもをたいせつにし、子どもの心をたいせつにし、かれ自身もいつまでも童心をうしなわない人です。

そうはいっても、もちろん子どもは、おとなになってから思いだすために、子どもの生活をしているわけではありません。たのしいばあいでも、つらいばあいでも、子どもらしく、いっしょうけんめいに生きていれば、そのことがその人の一生を支えるし、おりにふれてよみがえってくる思い出も、とりかえしがつかないという感傷的な気持ちではなく、いきいきとしたものになるのです。

ケストナーがべつに書いている少年時代の思い出のなかのかれ自身のすがたは、元気で、がんばり屋で、学校もよくできるが、いたずらもさかんな、親にめちゃくちゃにかわいがられ、自分も親思いだが、おとなの生活をちゃんと見ている少年のようです。『飛ぶ教室』や『エーミールと軽わざ師』にでてくる少年たちは、主人公のマルチンやエーミールにかぎらず、どの子もみんな、いわばケストナーの分身といえましょう。

災難や悲劇に負けず、それを一変させて、すばらしいできごとにかえてしまう勇気が、そして機知

少年時代の思い出
ケストナーの自伝『わたしが子どもだったころ』(ALS ICH EIN KLEINER JUNGE WAR 1957) に書かれている。

飛ぶ教室
原題『DAS FLIEGENDE KLASSENZIMMER』
一九三三年に発表された。ケストナー自身の少年時代の気持ちをもとにして書かれた作品。

エーミールと軽わざ師
原題『EMIL UND DIE DREI ZWILLINGE』
一九三四年にスイスで発表された。ケストナーが子どものために書いた最初の本『エーミールと探偵たち』(一九二八年) の第二話になっている。

やユーモアや明るいひにくが、この子たちの持ちまえです。気の弱い、ちびすけのウリーだって、さいごには落下さん降下という、とてつもない肝だめしをしてみせます。

しかし、ケストナーが子どもをたいせつにしたり、童心をなくさないでいるということは、かれがいつも思い出をおいかけているとか、おとなになっても子どもっぽいということではありません。

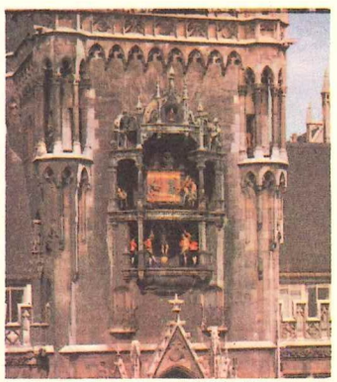
子どもは、おとなたちが考えるようにセンチメンタルなものではありません。子どもの心にはけがれがないということは、子どもを天使に祭りあげることではありません。子どもには子どもの、にげることのできない現実があります。それに負けないために、知恵が必要です。そして、どんなできごとでも、それをまったく新しい眼、新しい気持ちでうけとることが必要です。そうすれば、ネコなで声をだすおとなたちの世界のいろんなまちがいや、インチキをちゃんと見ぬくこともできます。自分がおとなになってからも、みんながそうした気持ちをもちつづけたら、どんなに気持ちのよい世界ができることでしょう。すぐれた芸術家や発明家には、そういう意味で童心があるのです。

もちろん子どもの世界だからといって、この物語のなかでのように、すべてがめでたし、めでたしでおわるわけはありません。むしろ作者は、やりきれないおとなたちの世界にたいして、この物語のなかで、こうあってほしいという、かれの夢を書いているのです。

それに、これらの物語が書かれたころ、ドイツではヒトラーが政権をにぎり、かれが書いたおとなむきの詩や小説は、ドイツ民族をはかいする非道徳な本だということになり、ナチの手によって、ほかのおおくのすぐれた作家の本といっしょに、公衆の前で焼かれてしまいました。『エーミールと軽わざ師』は、しかたなくてスイスで出版されたのです。その後ケストナーは、戦争のあいだじゅうドイツにふみとどまりましたが、ナチの手からのがれて国外に亡命した文学者たちから、ドイツにのこりながらなかまあつかいをうけたのは、かれだけだったということです。

エーリッヒ・ケストナー

ゴットフリード・ビュルガー



ミュンヘンの市庁舎

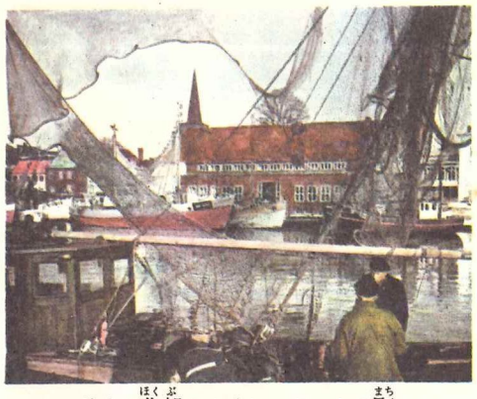
かれがくもらぬ眼で見ぬいたとおりに、祖国ドイツが野蛮なナチズムの手であらされていくとき、それからにげもせず、負けもせずに生きていくには、ほんとうにエーミールやマルチンたちのような、いわば子どもの心がもついきいきした現実性や計略が必要だったことでしょう。

十年ほどまえに、わたしがたずねたときのケストナーのすがたも、そういえばゆだんのない少年の心をもって人生をきりぬけてきた人のそれでした。自分で書いているように、ケストナーは一メートル六十八センチしかなくて、ドイツ人としてはちびのほうでしょう。しかし、機械体操やハイキングが大すきだったというかれは、すばしこそうで、そのするどい眼には、苦しいこと、いやなこともちゃんと見つめ、それをぴりっとしたひにくや愉快なユーモアにかえそうな、いたずらっぽいものがかくされていたようです。

ケストナーのおとうさんは、エーミールといって、——伯父さんたちは馬の売買で大もうけをしましたが、——りちぎで古風な、損ばかりしている名人かたぎの皮細工師だったのですが、かれ自身にも、そういう職人のような、職が身についたしっかりした感じがありました。

ケストナー
Erich kästner
（一八九九年～　）

ドイツのドレースデンで生まれ、雑誌や新聞の記者をしていたが、子どものための小説『エーミールと探偵たち』（一九二八年）や、おとなのために書いた小説『ファビアン』（一九三一年）や、後に『ドクトル・ケストナーの家庭薬局』（一九三六年）という詩集に集められたしゃれた詩などで作家としてみとめられ、おとなのためにも子どものためにも、たくさんの詩や小説を発表した。



ドイツ北部のノイシュタットの町

ツークシュピッツェの山頂

中世の面影をのこすドイツ南部の城

そのときケストナーが住んでいたのはミュンヘンの郊外の、大きくはないがきれいでさっぱりとした家でしたが、『飛ぶ教室』のまえがきやあとがきにでてくるツークシュピッツェという山は、ミュンヘンから列車でほんの二時間ほどのところにある、三千メートルにちかい、ドイツではいちばん高い山です。物語を読みかえしながら、わたしは、その山のまんなかのさけめにのこっている雪や、あのあたりにおおい湖のようすを思いだしました。

おとうさんのことを書いたついでにおかあさんのことを書きましょう。かの女はとてもはたらき者で、のちにはエーミールのおかあさんのように自宅で美容師をしていましたが、むすこといっしょにドイツじゅうの山を一日に四十キロも五十キロも歩きまわる元気な人でした。母思いのケストナーの気持ちは、物語のなかでも主人公の気持ちとして感動的にえがかれています。

少年少女
世界の文学
20
飛ぶ教室
エーミールと軽わざ師
空想男爵の冒険

定価 590 円

昭和41年9月5日 印刷
昭和41年9月10日 発行

訳者 高橋健二
平尾浩三
発行者 河出朋久
印刷者 山田三郎太
装幀者 沢田弘

印刷 凸版印刷
製本 凸版印刷
製函 加藤製函印刷
本文用紙 国策パルプ工業
代理店 東日本紙工業
クロース 邦クロス
表紙函貼 美集堂印刷

N. D. C 908
Printed in Japan
© 1966年
発行所 東京都千代田区神田小川町3—6 河出書房新社
電話 東京(292)3711(大代表) 振替東京 10802

落丁本・乱丁本はおとりかえ致します

ミュンヒハウゼン男爵
（一七二〇〜一七九七）
北ドイツの貴族。旅行ずきで、三十歳ごろまでにロシア、トルコなどを旅行して歩き、その後は家にいたが、近所の知り合いや友人に、奇想天外な話をしてよろこばれ、「うそつき男爵」とあだ名をつけられていた。

ビュルガー
Gottfried August Bürger
（一七四七〜一七九四）
十八世紀ドイツの代表的な詩人。北欧の伝説をもとにつくった詩『レオノーレ』が有名。

『空想男爵の冒険』は、わたしも幼ないころに、なつかしい、赤い背の、児童文庫で読んだおぼえがあります。この空想物語は、実在した人物であるミュンヒハウゼン男爵の奇想天外なほら話を、ラスペという人が、亡命中のイギリスであつめて出版し、それを一七八六年にビュルガーが、ドイツ語に訳しなおし、自分でもいろいろと話をつけたしたものです。

この話は、ケストナーのものとはちがって、まったくかって気ままな、信じがたいような大ぼらふきの物語です。ここには、日本の民話にもよくあるような、いかにもくったくのない、あいてを煙にまいてやろうという、悪気のないユーモアがあふれています。こまかいつじつまをあわせようとせず、もっぱらとほうもない空想をくりひろげて人をあっといわせようとするところに、健康なわらいのもとがあるといえましょう。諸くんはそれにのせられて、大いにわらってもいいし、はてなと思ってもいい。こういう古いユーモア物語には、読者がどんな態度をとってもへいきな大きいところがあります。

大きいといえば、空や海や海底を征服していく精神は、いかにも当時のヨーロッパ人らしいスケールの大きい、積極的なものですし、また、でたらめの背後にいつも人間らしい合理的な心がはたらいていることも見のがせません。

こんな話を読みながら、ドイツやイギリスの貴族の館の、狩猟のあとの夕べや、居酒屋でほら話に聞きほれる当時の民衆のすがたを空想できれば、いっそうおもしろいことでしょう。

少年少女 世界の文学　全 24 巻・別巻 2 巻　河出書房　定価 590 円

責任編集／福原麟太郎・川端康成・阿部知二・桑原武夫・犬養道子

1 ギリシア神話　福原麟太郎訳
イソップ物語　福原麟太郎訳
北欧神話　山室　静訳

2 聖書物語　犬養道子著

3 アラビアン・ナイト　大場正史訳
西遊記　駒田信二訳

4 宝島　西村孝次訳
ロビンソン・クルーソー　吉田健一訳

5 ガリバー旅行記　阿部知二訳
ふしぎの国のアリス　吉田健一訳
フランダースの犬　村岡花子訳

6 ロビン・フッドの冒険　神宮輝夫訳
ジャングル・ブック　大久保康雄訳
オリバー・ツウィスト　中野好夫訳

7 宇宙戦争　荒　正人訳
ホームズの冒険　阿部知二訳

8 クリスマス・キャロル　村岡花子訳
メアリー・ポピンズ　岸田衿子訳
ピーター・パン　中山知子訳

9 小公子　川端康成訳
小公女　川端康成訳

10 トム・ソーヤーの冒険　光吉夏弥訳
ハックルベリイの冒険　小島信夫訳

11 仔鹿物語　吉田甲子太郎訳
アンクル・トムの小屋　丸谷才一訳

12 若草物語　安藤一郎訳
赤毛のアン　曽野綾子訳

13 ドリトル先生航海記　飯沢　匡訳
あしながおじさん　谷川俊太郎訳
オズの魔法つかい　高杉一郎訳

14 ジャン・バルジャン物語　井上究一郎訳
モンテ・クリスト伯　中村真一郎訳

15 三銃士　宮崎嶺雄訳
鉄仮面　小林　正訳

16 家なき子　福永武彦訳
にんじん　岸田国士訳

17 十五少年漂流記　石川　湧訳
八十日間世界一周　江口　清訳

18 ジャン・クリストフ　新庄嘉章訳
風の騎手たち　安東次男訳

19 アルプスの山の少女　植田敏郎訳
みつばちマーヤの冒険　生野幸吉訳

20 飛ぶ教室他　高橋健二訳
空想男爵の冒険　平尾浩三訳

21 愛の一家　石丸静雄訳
少年だけの町　大塚勇三訳

22 金星探険　袋　一平訳
深紅の帆　原　卓也訳

23 アンデルセン童話集　平林・山室訳

24 グリム童話集　手塚富雄訳
クオレ　杉浦明平訳
ピノッキオ　米川良夫訳

別巻 1 動物記　林　寿郎訳
別巻 2 昆虫記　交　渉　中

●世界名作の宝庫　●良心的編集　●清新な訳文　●カラーさし絵入り

白ヌキ番号は既刊です